社会福祉士養成校教員研修プログラム基盤構築事業
２００２年度研究事業報告書

社会福祉・医療事業団

（長寿社会福祉基金）助成事業

２００３年3月

社団法人　日本社会福祉士養成校協会・研修委員会

はじめに

社団法人日本社会福祉士養成校協会では、新たな教育課程における教授法の明確化や養成校教員の教育力の向上をめざし、研修システムの構築と研修プログラムおよび教材の開発を図ることにしている。当面は全国レベルでの研修システムを立ち上げ、次に、ブロックごとの研修システムの整備を図りたい。こうした意図から、社団法人日本社会福祉士養成校協会に設置された研修委員会では、社会福祉・医療事業団の助成金を得て、『社会福祉士養成校教員研修プログラム基盤構築事業』を実施することになった。

本報告書は、その2002年度研究事業報告書である。

研修委員会は、全国レベル研修の委員6名と、各ブロックの研修委員7名の計13名から成る。ブロックによっては研修委員の選出が遅れたこと、また、全国レベル研修委員とブロック研修委員との位置づけや役割の明確化に手間取ったことなどにより、事業実施が予定より遅れた。だが、予定した「社会福祉援助技術演習」に関する4つの調査および資料分析は、滞りなく実施でき、来年度（2003年度）の本事業の課題を明確化させることができた。その課題を遂行すべく、次年度は、全国レベルの研修プログラムを少なくとも2回は実施する予定である。

今後、地域ブロックごとの研修基盤の整備や研修プログラムの開発等に関しても鋭意、検討を重ねていきたいと考えている。そのためにも、本報告書を手がかりに、関係各方面の方々から忌憚のない率直なご意見やご要望をお寄せいただければ幸いである。

なお、各章は、いずれも冒頭に本事業の目的を記載している。煩わしいとお思いになる方もいらっしゃるであろうが、どの章から読んでいただいても本事業と各調査の目的や意図を関連させながら理解していただけるよう、あえて削除していない。御寛容の程、よろしく御願いしたい。

2003年3月

社団法人日本社会福祉士養成校協会　研修委員会
委員長　副田　あけみ

目次

はじめに

1章　『社会福祉士養成校教員研修プログラム基盤構築事業』の目的と方法 …… 1
1節　事業計画 …… 1
2節　事業実施方法 …… 2

2章　「社会福祉援助技術演習」の科目設定状況 …… 5
1節　調査の概要 …… 5
2節　調査の結果 …… 6

3章　「社会福祉援助技術演習」教育の実態と要望に関するヒアリング調査 …… 29
1節　ヒアリング調査の背景と目的 …… 29
2節　ヒアリング調査の方法 …… 30
3節　ヒアリング調査の結果 …… 32
4節　まとめと考察 …… 35

4章　「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発ニーズ調査結果 …… 39
1節　調査の目的および方法 …… 39
2節　アンケート調査回答者の特徴 …… 41
3節　「社会福祉援助技術演習」開講形式 …… 49
4節　「社会福祉援助技術演習」授業 …… 52
5節　「社会福祉援助技術演習」教授上で困っていること …… 69
6節　希望する研修内容 …… 70
7節　希望する教材 …… 76
8節　まとめと考察 …… 82

5章　「社会福祉援助技術演習」テキスト分析 …… 87
1節　テキスト分析の意義と目的 …… 87
2節　分析の対象 …… 90
3節　分析の視点及び方法 …… 91
4節　分析結果及び考察 …… 96
5節　まとめと課題 …… 101

６章　まとめと課題 ……103
１節　各調査・資料分析結果のまとめ ……103
２節　今後の課題と当面の課題 ……106

資料１　「社会福祉援助技術演習」の科目設定状況調査　技術演習以外の科目 ……111
資料２　「社会福祉援助技術演習」教育の実態と要望に関するヒアリング調査結果　ブロック別 ……181
関東信越ブロック ……181
東海北陸ブロック ……205
近畿ブロック ……213
中四国ブロック ……217
九州ブロック ……248
「社会福祉援助技術演習に関するヒアリング」を通しての私見 ……282
資料３「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発要望（ニーズ）調査　自由記述一覧 ……284
資料４「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発要望（ニーズ）調査票 ……306

研修委員会開催経過 ……313
研修委員会委員名簿 ……314

1章　『社会福祉士養成校教員研修プログラム基盤構築事業』の目的と方法

1節　事業計画

1　事業の目的

社会福祉基礎構造改革によって、利用者の「選択」と利用者の権利擁護を基盤とした社会福祉の仕組みが整備されつつある。この仕組みの下では、「利用者本位」の援助、対等な関係にもとづく生活支援、地域における総合的な支援、サービスの質の向上などの原則にもとづいた援助活動が強調される。こうした援助活動が実際に行えるかどうか、社会福祉士の専門性や社会福祉士養成教育のあり方が問われることになる。社会福祉士養成教育課程の枠組みの見直しが行われたのも当然といえよう。

社会福祉士養成校は、近年、新設、改組が著しく進んだ。社会福祉士受験資格を得るための各科目に関しては、厚生労働省が示すシラバスが存在するものの、各教科の講義・演習のあり方は、各養成校および担当教員に任されており、必ずしも共通の基盤が確立しているわけではない。

しかし、社会福祉士の専門性が問われる今日、一定の共通基盤を確立し、それに基づいた教育を行う必要性は高い。そのためには、新たな教育課程における教授法の明確化、教員の養成力の強化、およびそれを修得するための研修プログラムの体系化が求められている。とくに、大学院修了の若手教員や社会福祉現場の実務家から転出した教員にとって、養成力や教授法の修得の機会は十分には確保されておらず、その必要性は高いと想像される。

研修プログラムの体系化がいち早く求められるのは、新たな教育課程において時間数もふえ強化されている社会福祉援助技術演習科目の教授法であろう。教員の個性と能力がもっとも反映しやすい科目であるとともに、学生の意欲や力をもっとも引き出しやすい科目であるゆえに、その教授内容と教授法は重要となる。

こうした認識のもとに、本事業では、社会福祉士養成校教員の養成力向上のために、社会福祉援助技術演習の教授法に関する研修プログラムの作成を通して、研修実施の基盤構築を図ることとした。

2　事業内容

研修委員会を設置し、以下の事業を行うこととした。

① 社会福祉士養成教育の実態と教員の要望に関する調査
② ①を踏まえた研修プログラムの骨子の作成
③ 社会福祉士養成カリキュラムの教授法の明確化
④ 教材の開発

⑤ 研修プログラムの試行的実施
⑥ ⑤の評価と研修プログラムの提案
⑦ 研修プログラム基盤構築に向けての提案

2002年度は、このうちの①の実施と、②、④の準備作業を行った。本報告書はその結果を報告するものである。

2節　事業実施方法

1　社会福祉士養成教育の実態と教員の要望に関する調査の方法

今回は、社会福祉援助技術演習の教育実態と、担当教員の研修等に関する要望に焦点をあてて調査を行った。

調査は、①社会福祉援助技術演習担当者に対する実態と研修ニーズ等に関するヒアリング調査、②社会福祉援助技術演習担当教員を対象とした研修・教材開発要望（ニーズ）に関する質問紙調査、③社会福祉援助技術演習の科目設定状況調査の３つである。

当初は、予備調査としてグループインタビューを実施し、その結果を踏まえて、援助技術演習の教育実態と担当教員の研修・教材に関する要望を明らかにする質問紙調査を実施する予定であった。しかし、２回のグループインタビューによって、教育実態のありようが養成校によってあまりにも異なるため、質問紙調査では実態を正確に把握することがきわめて困難であるということがわかった。そこで、質問紙調査は要望に関する質問項目を中心に構成することにし、教育実態に関しては、グループインタビューを日本社会福祉士養成校協会のブロックごとに実施して、その多様な実態の一端を把握することにした。グループインタビューにおいても要望等を尋ねているが、量的には教育実態を明らかにする質問と回答が多くなっている。それは、こうした事情による。ヒアリング調査と質問紙調査の具体的な方法については、3 章、４章で記述している。

社会福祉援助技術演習の科目設定状況調査は、ヒアリング調査や質問紙調査を補う目的と、その２つの調査では把握できない実態を押さえる目的のために実施した。その具体的な分析方法は２章で記述している。

2　教材開発の準備

社会福祉援助技術演習の教材開発にあたっては、演習担当教員がどのような教材を欲しているのかを知ることも必要であるが、まず、この科目で何を教授すべきかという点を確認することが必須となる。そのうえで、このテーマについてはどのような教材が望ましいのか、選択幅をもたせるだけの教材をどのよ

このような認識から、まず手始めに、これまでに刊行された社会福祉援助技術演習のテキストの内容を分析することにした。その具体的な分析方法は、5章に記述してある。

4　調査の方法

郵送法による。会員校各校の社養協担当教員（または職員）宛に研修委員長名の文書（アンケート調査と合わせて作成）により、各会員校の「教育課程設定のわかる資料（『履修要綱』『授業要覧』『履修の手引き』等）の提示」を依頼し、同封の返信用封筒により返送を求めた。

※　返信用封筒には、一定額（２７０円分）の切手を添付したところですが、ご協力いだいた一部会員校には、これを超過する分のご負担をおかけいたしましたこと、お詫び申し上げます。

5　調査の項目

調査の項目としては、各会員校より提示された『履修要綱』『授業要覧』『履修の手引き』等に記載されていると想定される「教育課程表」、「社会福祉士受検資格に関して説明されている箇所」等から、社会福祉士受検資格に係る指定科目の設定状況（読み替え科目名称、設定単位数、開講時期等）について整理することが第一点であった。第二には、これらから、「社会福祉援助技術演習」のシラバスがどのように明示されているのかを整理することであった。

２節　調査の結果

1　回収結果

２０７校中１０３校（４９．８％）からの何らかの資料提示を得ることができた。会員校の種別毎の回収数等は下表のとおりである。

表２－１　回収結果

	対象数	回収数	回収率
社会福祉士一般養成施設	３７	１５	４０．５％
大学	１２５	６７	５３．６％
大学院	１	１	１００．０％
短期大学	２２	１２	５４．５％
専門学校	２２	８	３６．７％
計	２０７	１０３	４９．８％

2　指定科目「社会福祉援助技術演習」の設定状況等

（1）報告にあたって

各会員校の指定科目の設定状況については、提示をいただいた資料の中から、「教育課程表」あるいは「社会福祉士受検資格に関して説明されている箇所」等から、指定科目に相当する開講科目名称、設定単位数、開講時期等について整理した（結果の一覧表を、「社会福祉援助技術演習」については本章末に、他科目については巻末に、それぞれ記載した。）。

本報告書では、次項以降、当面の研修プログラム策定の課題である指定科目「社会福祉援助技術演習」に絞ってその要点を報告するが、本報告にあたっては、次のような留意事項を指摘しておく。

まず、依頼文書において、「貴校の教育課程設定のわかる資料（『履修要綱』『授業要覧』『履修の手引き』等）の提示」と記したほかは、留意事項として「貴校の現行教育課程（課程変更等により教育課程を複数運用中の場合は最新課程）が分かるものをお送りください。」としか記さなかったため、章末記載の表のとおり、冊子となった資料の複写のみ、しかも教育課程表のみの提示という学校が一部見られた。この場合、当方で、法令に基づく読み替えの範囲の中から、教育課程表記載科目から検索し、整理した（章末記載の表の「主な資料」欄の「・・・から検索」が該当）。

次に、各校の教育課程や社会福祉士受検資格の説明の仕方は実に多種多様であった。例えば、社会福祉士受験資格に対応する科目の明示方法についても、教育課程表記載の科目に記号を付す等して一カ所を見れば分かる大学がある一方で、教育課程表はあくまで学則別表として科目名称等最低限の内容しか記載せず、資格対応科目は別項の受検資格に関する記載を確認しなければならない学校もあった。このため、後者の例の整理にあたっては、複数箇所を確認することになったが、教育課程表の記載内容と受検資格に係る項目での記載内容との間に相違がある学校も見られた。この場合、原則として受検資格について説明の項の記載内容を採用した。

また、各種資料における表記方法も多様であった。例えば、「２年～３年」という表記は、ある学校では「２年次または３年次に履修」と理解され、ある学校では「２年次から３年次にかけて履修」と理解される。「２・３年」の表記も同様である。これらは、設定単位数（時間数）等から類推した。

学校によっては、同一学部内の複数学科あるいは同一学科内の複数専攻で受検資格取得が可能であるが、学科専攻により異なった科目設定をしている学校が見受けられた。これらは、可能な限り注記等により記載するようにした。

以上のような状況から、提示資料では「指定科目に相当する科目の開講科目名称」、「設定単位数」、「履修年次」等が読みとれない部分については、不明とした。

（２）指定科目「社会福祉援助技術演習」に相当する科目の開講科目名称（読み替え状況）等

表２－２のとおり、「社会福祉援助技術演習」の名称をそのまま用いて、１科目で対応している学校が５２校（５０．５％）を占めている。以下、２科目で対応が３７校（うち、「社会福祉援助技術演習」にⅠ・Ⅱなどを付して読み替えている学校が３５校）、３科目で対応が２校（いずれも「社会福祉援助技術演習」にⅠ・Ⅱ・Ⅲを付して読み替え）、４科目で対応が１２校（うち、「社会福祉援助技術演習」にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳなどを付して読み替えている学校が１１校）であった。

表２－２　指定科目「社会福祉援助技術演習」に相当する科目の開講科目名称（読み替え状況）

	養成施設	大学	短期大学	専門学校	大学院	計
「社会福祉援助技術」そのままで１科目	１５	２７	４	６		５２
「社会福祉援助技術Ⅰ」と「同Ⅱ」等「社会福祉援助技術演習」を使用して２科目に分割		２９	３	２	１	３５
「社会福祉援助技術演習」以外の名称を使用または他の名称と合わせて２科目に分割		２				２
「社会福祉援助技術Ⅰ」「同Ⅱ」及び「同Ⅲ」の３科目に分割			２			２
「社会福祉援助技術Ⅰ」「同Ⅱ」「同Ⅲ」及び「同Ⅳ」等「社会福祉援助技術演習」を使用して４科目に分割		８	３			１１
「社会福祉援助技術演習」以外の名称で４科目に分割		１				１
計	１５	６７	１２	８	１	１０３

特徴的な点は、まず、学校形態別に見た時に、養成施設のすべてと専門学校の大半が「社会福祉援助技術演習」そのままの名称を用い１科目で対応しているのに対し、大学と短期大学は、半数以上が２～４科目で設定していることである。

また、複数科目で指定科目「社会福祉援助技術演習」に対応するにしても、他の科目名称で読み替え（または「社会福祉援助技術演習」と合わせて読み替え）は、大学の３校にすぎず、本報告書ではスペースの都合もあり資料提示のみであるが、指定科目「社会福祉原論」等一部指定科目が多様な形で読み替えられているのとは対照的である。

（３）指定科目「社会福祉援助技術演習」の設定単位数

「社会福祉援助技術演習」の設定単位数の状況を示したものが表２－３であ

表２－３　指定科目「社会福祉援助技術演習」の設定単位数

	養成施設	大学	短期大学	専門学校	大学院	計
２単位（１科目）		6				6
２単位（１単位×２科目）		1				1
３単位（１科目）		1				1
４単位（１科目）	1	１７	4	2		２４
４単位（２単位×２科目）		２０	3		1	２４
４単位（１単位×４科目）		1	2			3
４単位（その他）			1	1		2
６単位（１科目）		1				1
８単位（１科目）	2	1				3
８単位（４単位×２科目）		１０				１０
８単位（２単位×４科目）		9				9
８単位（その他）			1			1
６０時間				1		1
１２０時間（１科目）	3			2		5
１２０時間（６０時間×２）				2		2
スクーリング時間等明示	8					8
不明	1		1			2
計	１５	６７	１２	8	1	１０３

る。２単位での設定が７校（２単位１科目が６校、１単位２科目が１校）、３単位が１校、４単位が５３校（４単位１科目が２４校、２単位２科目が２４校、１単位４科目が３校、その他２校）、６単位１校、８単位２３校（８単位１科目が３校、４単位２科目が１０校、２単位４科目が９校、その他１校）、時間数を明示が１６校（６０時間１科目が１校、１２０時間１科目が５校、６０時間２科目が２校、スクーリング時間と自己学習時間を明示が８校）であった。

特徴的な点は、養成施設と専門学校で時間数での明示が多い点である。特に、今回資料をいただいた１５校中９校が通信課程であった一般養成施設は、提示された資料に明示のなかった１校を除く８校が、スクーリング時間と自己学習時間（法令による最低時間はそれぞれ１２時間以上、３２４時間以上）を明示していた。

これに対して、大学と短大は、前記の多様な開講科目設定を反映し、多様な形で単位数が設定されている。

なお、前記のとおり、今回ご協力をいただいた資料で、各校の指定科目の設定状況を完全に把握しきれたとは言い難い学校もある。また、いただいた資料で学則や学修規則を確認することのできた学校も少数であるため一概には言えないが、単位数そのものの設定において、養成施設の指定規則に明示されている本科目の時間数１２０時間を単位換算すれば、演習科目を３０時間１単位とすれば４単位以上、１５時間１単位とすれば８単位以上となると思われるが、これを下回っての設定が一部見受けられるのは気になる点である。

（４）指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次（時期）

「社会福祉援助技術演習」の履修年次（時期）は、修業年限によって異なると考えられるため、学校形態別（大学については科目数ごと）に示した（表２－４～表２－９）。

①　社会福祉士一般養成施設

表２－４は、法令上、修業年限が１年以上とされ、通常昼間課程で１年、通信課程では１年半程度の期間での養成が実施されている社会福祉士一般養成施設の履修時期で、前記のとおり、今回資料提示が得られた１５校中９校が通信課程ということもあってか１０校が在学全期間をかけて履修する形をとっている。

表２－４　指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次～①養成施設

在学期間中の全期間かけて履修	１０
在学期間中の後半に実施	3
その他	2
計	１５

② 大学

次いで、大学における履修年次を、指定科目「社会福祉援助技術演習」に対応する科目の設定数ごとに整理したものが表２－５～表２－７である。

１科目で設定の２７校中「３年次に履修する」、「３年次履修が標準」、「３年次までに履修完了」と理解できるものが１６校となっている。２科目設定、４科目設定の学校では、最初の演習を２年次に履修し（２科目設定３１校中１６校、４科目設定９校中４校）、最後の演習は３年次（２科目設定３１校中１９校、４科目設定９校中４校）というケースが多くなっている。

ここから、複数科目で設定した場合は２年次から履修が開始されるケースも多いが、３年次がこの科目の履修時期の中心となっているものと考えられる。但し、この時期がどのような意味を持つものかについては、各校が他の指定科目、特に関連の強いと考えられる「社会福祉援助技術論」、「社会福祉援助技術現場実習指導」、「社会福祉援助技術現場実習」に相当する科目をどのように設定し、どのように体系づけた履修を計画しているのか等と兼ね合わせた検討を今後進めていく必要がある。また、３年次が中心として、ここ１０年ほどの新設校を中心に、学則定員を明示しての３年次編入の制度を導入する大学が増えているが、これへの対応をどのようにしているのかということについての検討も今後の課題である。

表２－５　指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次～②大学１科目設定

２年	3
３年	１０
４年	1
２年以降	4
３年以降	3
２～３年	3
３～４年	1
不明	2
計	２７

表２－６　指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次～③大学２科目設定

１年、２年	2
２年、２年	1
２年、３年	１４
３年、３年	4
３年、４年	8
２または３年、３または４年	1
不明	1
計	３１

表２－７　指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次～④大学４科目設定

１年、２年、３年、３年	1
２年、２年、２年、３年	1
２年、２年、３年、３年	1
２年、２年、３年、４年	1
２年、３年、３年、４年	1
３年、３年、３年、３年	2
不明または年次配当なし	2
計	9

③　短期大学

次に、表２－８は、短期大学における指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次を示したものである。

修業年限が２年となることから、在学期間中をかけての段階的履修が１２校中８校となっている。

④　専門学校

表２－９は、専門学校における指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次を整理したものである。

こちらも短大同様に、修業年限が２年（３年）であることから、在学期間中のすべてまたは後半２年間をかけての履修が中心となっている。

短大も含め、大学の項にも記したとおり、この科目のみについてだけで履修年次（時期）についての検討をすることは難しいと考えられるので、今後の課題としたい。

表２－８　指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次～⑤短期大学

１科目　１年	1
１科目　２年	1
１科目　１～２年	1
２科目　１年、２年	3
３科目　１年、１年、２年	1
３科目　１～２年、２年、２年	1
４科目　１年、１年、２年、２年	2
不明	2
計	１２

表２－９　指定科目「社会福祉援助技術演習」の履修年次～⑥専門学校

１科目　２年	1
１科目　１～２年	1
１科目　１～３年	1
１科目　２～３年	2
２科目　１年、２年	1
２科目　２年、３年	1
不明	1
計	8

３　指定科目「社会福祉援助技術演習」のシラバス

今回の資料調査のもう一つの目的は、各校が指定科目「社会福祉援助技術演習」に該当する授業科目のシラバスをどのように学生に明示しているのかを把握し、可能ならばヒアリング調査からの課題を確認するため、その内容の分析を行うことであった。

しかしながら、前記のとおり、資料請求時に「貴校の教育課程設定のわかる資料（『履修要綱』『授業要覧』『履修の手引き』等）の提示」としか依頼をしなかった拙さもあり、教育課程表のコピー資料だけの学校、『履修の手引き』等履修指導用の資料とシラバス集が別冊になっているにもかかわらず、前者の資料のみ送付の学校などもあり、「シラバスそのものを得られなかった」「得られたとしても、達成目標（課題）、スケジュールや内容、課題と評価方法、教材等の詳細項目の記載がなく概要程度」というケースが多くなってしまった。

これに、新設や課程変更等の年次進行中で該当科目のすべてのシラバスが未

整備、複数クラス開講で担当者個々人がシラバスを作成しているためどれが学校のスタンダードか読みとれない等を除いていくと、３０校程度の資料しか抽出できず、十分な資料収集に至らなかった。

従って、今回は、これらを概観して、一口にシラバスと言っても、各校により多種多様な形式での取り組みがなされている中で、「社会福祉援助技術演習」のシラバスもまた、法令による目標、内容の通知はあるものの、多様な形で明示されており、特に、複数クラス開講で担当者ごとにシラバス記載内容に相違があるという現状は、この演習科目に係る共通基盤の未形成を示唆していると考えられることのみ指摘しておきたい。

４　まとめ

以上、資料調査からの指定科目「社会福祉援助技術演習」の設定状況等について概観してきた。

指定科目「社会福祉援助技術演習」の科目設定状況については、以下のように整理できる。

①　科目名称について、１科目で対応している学校のすべてが「社会福祉援助技術演習」をそのまま用いている。複数科目で対応している学校も「Ⅰ」「Ⅱ」などを付すだけで、ほとんどが「社会福祉援助技術演習」を使用している。大学３校だけが別の科目名称を採用し、読み替えていたにすぎない。

②　上記に対応する設定科目数を併せて見ると、養成施設と専門学校が、養成施設の指定規則に例示されたとおりの科目名称の１科目という傾向があるのに対し、大学と短大は、半数以上が科目を分割して独自の設定をする傾向にあることがわかった。

③　単位数（時間数）の設定においても、上記②とほぼ同様の傾向であった。

④　履修年次（時期）については、修業年限の短い養成施設、短大等が在学期間全体の中で履修を進めていくケースが多いのに対し、４年の修業年限を持つ大学では、３年次が履修時期の中心となっていた。

ただし、これらのことをどう捉え、今後の本事業に反映させていくかにあたっては、履修年次の項にも記したとおり、各校の養成教育全体との関連性の検討が必要であり、今後の課題と考えられる。

また、演習の内容については、表面的にシラバスを見るという形でしかできず、詳細分析は今後の課題ではあるものの、内容設定にあたってのスタンダードの提示の検討が必要と思われる。

参考資料　社会福祉援助技術演習の科目設定状況

※　資料一覧の見方

1　左の列から、学校ごとに、①養成校の種別、②各校での指定科目「社会福祉援助技術演習」に相当する開講科目名称、③設定単位数（時間数）、④履修年次（時期）、⑤備考、⑥整理作業時の主な資料を記載した。

2　養成校の種別は、「1」が養成施設、「2」が大学、「3」が短期大学、「4」が専門学校、「5」が大学院である。

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	不明	1期～2期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会福祉援助技術演習」	8	1年後期～2年前期まで		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング12時間、自己学習324時間	3期～4期、連続	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング12時間、自己学習324時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「社会福祉援助技術演習」	120時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「社会福祉援助技術演習」	120時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング12時間、自己学習324時	1期～4期、連続	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
		間			
1	「社会福祉援助技術演習」	8	3～6	８学期制	『学生便覧』（２００２年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング１２時間、自己学習３２４時間	前期～後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング１２時間、自己学習３２４時間	１～４学期	４学期制（１～２学期－１年目、３～４学期－２年目）	『学習のしおり』（２００２年度）
1	「社会福祉援助技術演習」	4	通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング１２時間、自己学習３２４時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『入学案内』（２００３～２００４年度）課程表より
1	「社会福祉援助技術演習」	１２０時間	通年		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング１２時間、自己学習３２４時間	１～２年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術演習」	スクーリング１２時間、自己学習３２４時間	前期～後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「ソーシャルワーク演習Ⅰ」、「ソーシャルワーク演習Ⅱ」、「ソーシャルワーク演習Ⅲ」及び「ソーシャルワーク演習Ⅳ」	各２、計８	「Ⅰ」－２年前期、「Ⅱ」－２年後期、Ⅲ－３年前期、Ⅳ－４年前期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術演習」ＩＡ、「社会福祉援助技術演習ＩＢ」、「社会福祉援助技術演習ⅡＡ」及び「社会福祉援助技術演習ⅡＢ」	各２、計８	いずれも３年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習」	4	４年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年後期、「Ⅱ」－３年前期		『履修案内』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	6	３年通年		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各２、計８	「Ⅰ」～「Ⅲ」－２年、「Ⅳ」－３年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計８	「Ⅰ」－２年後期、「Ⅱ」－３年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ａ」及び「社会福祉援助技術演習Ｂ」	各４、計８	「Ａ」－３年前期、「Ｂ」－３年後期		『学生ハンドブック』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	３～４年通年		『学生便覧』（２００２年度）「社会福祉士試験」の項より２０００年度以降入学生課程
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各４、計８	「Ⅰ」－２年、「Ⅱ」－３年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各１、計２	「Ⅰ」－３年後期、「Ⅱ」－４年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	8	３年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	2	３年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各４、計８（一部学科は一括８単位科目）	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習」	4	2年以降		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習A」及び「社会福祉援助技術演習B」	各4、計8	「A」－3年通年、「B」－4年通年		『学習便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各4計8	「Ⅰ」－3年通年、「Ⅱ」－4年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各2、計4	いずれも3年通年		『履修要項』の課程表より
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年または年通年、「Ⅱ」－3年または4年、前後期は不明		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習A」及び「社会福祉援助技術演習B」	各4、計8	いずれも3年通年		『履修要覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各２、計８	「Ⅰ」－２年前期、「Ⅱ」－２年後期、「Ⅲ」－３年前期、「Ⅳ」－３年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	３年通年		『履修要覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	不明		コピー資料より検索
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」３年通年		『キャンパスライフ』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各４、計８	「Ⅰ」－１年通年、「Ⅱ」－２年通年		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』(2002 年度)
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年		『授業ガイド』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	３年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習Ａ」、「社会福祉援助技術演習Ｂ」、「社会福祉援助技術演習Ｃ」及び「社会福祉援助技術演習Ｄ」	各１、計４	セメスター制度のため年次配当なし。先修条件あり	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	2	２年以降通年		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	いずれも３年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	３年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（２００２年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習」	4	３年以降通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	２年通年		『学生便覧』『授業概要』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」及び「社会福祉学演習Ⅲ」	各４、計８	「社会福祉援助技術演習」－３年、「演習Ⅲ」－４年	学期不明	『履修要項』（２００２年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年、「Ⅱ」－３年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年後期、「Ⅱ」－３年	「Ⅱ」－学期不明	コピー資料

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習」	2	2年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－３年通年、「Ⅱ」－４年通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年前期、「Ⅱ」－３年前後期		『履修要綱』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年後期、「Ⅱ」－２年前期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年		『履修申告の手引』（２００２年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習」	4	3年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも２００２年度）
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	3年通年		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「社会福祉援助技術演習」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習」	2	3年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（２００２年度版）
2	「社会福祉援助技術演習」	2	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	4	3年または4年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各２、計８	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年、Ⅲ－３年通年、Ⅳ－３年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習Ａ」及び「社会福祉援助技術演習Ｂ」	各２、計４	「Ａ」－2年通年、「Ｂ」－3年通年		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各２、計８	いずれも３年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各２、計８	「Ⅰ」－2年後期、「Ⅱ」－3年前期、「Ⅲ」－3年後期、「Ⅳ」－4年前期		『授業概要』（２００２年度）課程表より検索

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各４、計８	「Ⅰ」－３年通年、「Ⅱ」－４年通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	4	２年通年		『履修要覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会福祉方法演習１」及び「社会福祉方法演習２」	各２、計４	「１」－３年、「２」－４年	学期不明	『履修要項』（２００２年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	4	３年	学期不明	『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	3	３年通年		『専門科目講義案内』（２００２年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	４（基礎２＋応用２に分割実施）	いずれも２年以降通年		『履修要項』（２００２年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術演習」	2	２年前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術演習」	4	２年～３年通年		コピー資料の課程表等より
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各２、計８	年次不明		コピー資料の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各４、計８	「Ⅰ」－３年通年、「Ⅱ」－４年通年		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術演習」	4	２年～３年連続、通年		『キャンパスガイド』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－１年通年、「Ⅱ」－２年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術演習」	4	２年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術演習」	4	１年～２年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅲ」	「Ⅰ」及び「Ⅱ」－各１、「Ⅲ」－２、計４	「Ⅰ」－１年前期、「Ⅱ」－１年後期、「Ⅲ」－２年通年		『講義要項』（２００２年度）の課程表より検索
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各１、計４	「Ⅰ」－１年前期、「Ⅱ」－１年後期、「Ⅲ」－２年前期、「Ⅳ」－２年後期		『履修要項　授業計画』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－１年通年、「Ⅱ」－２年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	各１、計４	「Ⅰ」－１年前期、「Ⅱ」－１年後期、「Ⅲ」－２年前期、「Ⅳ」－２年後期		『学園生活』（２００２年度）の課程表より
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」、「社会福祉援助技術演習Ⅲ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅳ」	不明	不明		コピー資料
3	「社会福祉援助技術演習」	4	２年通年		『履修要項』（２００２年度）の課程表
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－１年、「Ⅱ」－２年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会福祉援助技術演習」	4	１年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」、「社会福祉援助技術演習Ⅱ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅲ」	「Ⅰ」－４、「Ⅱ」及び「Ⅲ」２、計８	「Ⅰ」－１～２年通年、「Ⅱ」－２年半期、「Ⅲ」－２年通年		『授業科目履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（３年課程）	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各６０時間、計１２０時間	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術演習	単位数	年次	備考	主な資料
4	「社会福祉援助技術演習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ」	各６０時間、計１２０時間	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術演習」	4	1年～3年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術演習」	１２０時間	2年後期～3年後期		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術演習」	６０時間	2年通年	別科目と組み合わせての該当と思われる。	『２００２年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術演習」	１２０時間	2年前期～3年前期		『講義要項』（２００２年度）の課程表
4	「社会福祉援助技術演習」	4（1＋1＋2に分割認定と思われる）	「先の1単位分」－1年前期、「後の1単位分」－1年後期、「2単位分」－2年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会福祉援助技術演習」	4（１２０時間）	不明		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
5	「社会福祉援助技術演習A」及び「社会福祉援助技術演習B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（２００２年度）の課程表より検索

3章　「社会福祉援助技術演習」教育の実態と要望に関するヒアリング調査

1節　ヒアリング調査の背景と目的

まず、研修委員会がヒアリング調査を実施するに至ったその背景と調査の目的について簡単に説明しておく。近年、社会福祉士養成校の新設、改組が急速に進んでおり、2002年現在、社団法人日本社会福祉士養成校協会(以下、社養協とする)の加盟校は、大学、短大、専門学校等をあわせると、すでに200校を超えている。その一方で、社会福祉士関連の各科目、中でも社会福祉援助技術演習の講義・演習内容のあり方は、各養成校及び教員に実質的には任されており、共通基盤が確立されていないのが現状である。この課題を解決するためには、最低限の共通基盤であるミニマムスタンダードの確立と、新たな教育課程における教授法の明確化、教員の養成力の強化及びそれを修得するための研修プログラムの体系化が必要である。そこで、社養協の5つの専門委員会の一つとして研修委員会が2002年度より設置され、その中心的な事業として研修プログラム基盤構築事業が置かれ、さらに、中心的な事業内容の一つとして実態調査が計画されることになったのである。

上述したように、社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の位置づけ、講義内容や教授法、授業で使用している教材等については、各加盟校あるいは各教員によって異なると予想されるが、何が違い、どの程度違うのか、実態そのものが十分に把握されていないのが現状である。そこで、本ヒアリング調査では、各加盟校の社会福祉援助技術演習担当の教員に対してグループ・インタビューを行い、社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の問題や課題、教授法の具体的な内容、教材、さらに教員の研修ニーズなどを明確化することを目的とする。

なお、今回のヒアリング調査の実施にあたっては、調査協力者に対する調査依頼が協力者が所属する本務校を直接通したものが少なく、むしろ教員同士の個人レベルでのつながりを通して依頼したことが多かったために、各調査対象者の回答が彼らの本務校を代表した回答とはなってはいないことを予め断っておきたい。従って、本報告書では、社会福祉援助技術演習の実態把握のために必要な一般的な情報を紹介するだけにとどめ、加盟校の個別状況については、学校名や個人名をあげないこととする。また、ヒアリングのテープ起こしをし、そ

の記録を資料２ヒアリング結果として添付するが、そこでも個別の学校名や個人名を使わないで、匿名で記述していることも予め断っておきたい。なお、九州ブロック研修委員によるヒアリングを通しての私見も、九州ブロックヒアリング結果資料の後に添付してある。

第２節　ヒアリング調査の方法

１　調査方法の概要

ヒアリング調査は、調査計画を設定した当初は、社養協の７つの各ブロック(北海道、東北、関東甲信越、中部・東海、近畿、中四国、九州)において実施する予定であったが、ブロックによって加盟校数に差があることや、ブロック担当の研修委員をはじめ、演習担当教員の日程を調整することが困難であったブロックもあったために、実際には、関東、中部、近畿、中四国、九州の５つのブロックにおいて、ヒアリング調査を実施することとなった。なお、関東ブロックでは短大へのヒアリングを含め、３回のヒアリング調査を行った。調査時期は、2002 年 9 月から 2003 年 1 月にかけてである。

(1)調査対象者

調査対象者は、教授法での課題や研修ニーズの実態把握という本調査の主旨から、社養協の加盟校において社会福祉援助技術演習を現に担当している比較的若手の教員を中心とした。各ブロックとも５，６名のグループで行うことを計画していたが、これも調査協力者の都合などから、１名から９名と調査グループのサイズには若干差があった。なお、対象者の選定については、各加盟校に直接依頼したり、また、社会福祉援助技術演習担当の若手教員を名簿等で抽出することが困難であったために、研修委員や各ブロック担当者が持っている個別的なネットワークを用いることとした。従って、上述したように、対象者を選ぶ際には、調査協力を個別的に依頼した場合が多いので、対象者が加盟校の中でも大学教員に偏っているために、必ずしも加盟校全体を代表している訳ではなく、また、結果についても多少偏りがあることも断っておきたい。

(2)調査方法

ヒアリング調査方法としては、フォーカスグループ・インタビューを用いた。フォーカスグループ・インタビューとは、対象者が自由に

意見を述べるのではなく、ファシリテーターがある課題を提示し、それに焦点をあててグループインタビューする方法である。今回の調査では、主として、各ブロック担当の研修委員がリーダーになって司会をし、進めた。

(3)調査の日時

ヒアリング調査は5つのブロックにおいて9回に分けて行われ、合計33名(33学校)の協力があった。各ブロックにおける調査日時、対象者数は以下の通りである。なお、対象者の内訳をみると、4年制大学から30名、短大から2名、通信課程から1名であった。

関東信越ブロック
第1回：2002年9月11日(水)：9名
第2回：2002年9月12日(木)：5名
第3回：2002年12月20日(金)：1名(短大)
東海北陸ブロック
第1回：2002年11月30日(土)：2名
第2回：2002年12月19日(木)：2名
近畿ブロック
第1回：2003年1月18日(土)：6名
中四国ブロック
第1回：2003年1月7日(火)：2名
第2回：2003年1月9日(木)：1名
九州ブロック
第1回：2002年11月30日(土)：5名

(4)調査内容及び項目

調査方法としては、社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の位置づけ、教授法、教材など、いくつかの調査項目に焦点をあてて、それらの項目について自由に意見を交換してもらった。

具体的な調査項目としては、以下の通りである。
＊社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の位置づけ
＊各担当科目び教授法の具体的な内容、その問題点や課題
＊使用している教材
＊担当科目シラバス
＊担当科目の教授法に関する研修ニーズ

3節　ヒアリング調査の結果

1　「社会福祉援助技術演習」のカリキュラム上の位置づけ
－「社会福祉援助技術演習」と現場実習との関係－

まず、社会福祉援助技術演習に関するヒアリング調査を行う上で、互いの共通理解のために必要な前提条件として、社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の位置づけがある。特に、社会福祉援助技術演習と現場実習や現場実習指導とのカリキュラム上の関係は、演習の授業内容や授業方法、教材等とも非常に関連しているので、まず、この点について各調査協力者に尋ねてみた。

結果として、社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の位置づけは、大きく次の２つに分けることができた。まず、演習を実習の際に必要なスキルを獲得するための科目として位置づけている立場である。この場合、講義内容としては、コミュニケーション、傾聴、自己覚知などを含めた基本的な対人関係スキルが多いようである。もう一つは、演習をあくまでも社会福祉援助技術に関するものとして位置づけ、実習とは関係ないものと考える立場である。この場合、演習の内容は、ケースワーク、グループワークなどの基本的な技術はじめてとし、エンパワメントモデルやエコシステムなどの最新の理論も含まれることになる。

今回の調査では、調査対象の 33 校のうち、８校については、この位置づけについて明確な回答を得ることができなかった。分析可能であった残りの 25 校のうち、18 校(7 割強)は、社会福祉援助技術演習を現場実習とのセットとして位置づけをしており、6 校は演習と実習とを切り離して位置づけているという結果が得られた。最後の１校はどちらにも位置づけることのできないものであった。以上のように、現状では、援助技術演習を現場実習と関連づけている学校が多いことがわかった。

2　担当教員数と担当学生人数

次に、援助技術演習の担当教員数と担当学生数についてであるが、１学年の学生定員は、当然のことながら、各学校の規模により大きく異なっていた。今回の調査対象者の場合、学科あるいはコースの１学年の定員で一番多かったのは 100 名前後であり、少ないところでは 15 名ほど、多いところでは 700 名程度であった。しかし、学生定員については大きな差があるものの、一人の担当教員あたりの担当学生数

は、ほとんどの学校が約15名から25名程度の範囲の中で収まり、それほど大きな差がみられなかった。なお、最も担当学生数が少ないのは10名前後、逆に最も多いのは90名ほどである。90名というのはわずか1校であり、例外的なものであった。これらの結果から、演習担当の教員に対する学生数については、20名という厚生労働省の通知がかなり浸透していることがわかる。

ただし、一人あたりの学生数を20名前後とするためには、実習担当教員数を増やさざるを得ないという問題があり、その結果、専任だけではカバーできないために、非常勤講師によって対応していると答えた学校が多かった。さらに、非常勤講師を多く採用すると、教員間で授業内容の差が生じるのではないかという質問をしたが、演習担当教員が10名以上いる学校のほとんどは、統一するのがむずかしいために、演習の授業内容については、各教員に任せているのが現状であるとの回答が多かった。

3　配置年次

社会福祉援助技術演習の配置年次については、各学校のカリキュラムのあり方によって異なるが、3年次に配置している学校が最も多く、次に2年次が続き、これらで全体の9割以上を占めていた。1年次に置いているのは、実質的には短大のみである。また、4年次に配置しているところもわずかながらあった。

しかし、4年次に配置している学校も、演習のカリキュラム改訂で授業時間が120時間と延長されたために、今後、4年次での配置だけでは対応できないのではという意見がみられた。また、2年次、3年次に置いている他の学校も同じように、カリキュラム改正が課題となっており、そのために、演習をⅠとⅡに分けて、それぞれ2年次と3年次、あるいは3年次と4年次、場合によっては2年次から4年次の間にと、複数年にわたって配置している、あるいは次年度から配置する予定であるという回答が比較的多かった。

4　授業内容

演習の授業内容については、1のカリキュラム上の位置づけでも述べたことであるが、演習の位置づけによって異なっているようである。今回の調査の結果、カリキュラム上、演習と実習とを一体に考えている学校が多かったが、それらの学校のシラバスをみると、授業内容としては、実習で必要とされるコミュニケーションスキル、面接技

法、対人関係の視点、自己覚知、自己理解と他者理解、事例検討などの基本的な対人援助関係のものが共通して多かった。その他に、比較的多くあげられたのは、価値観や倫理、援助の視点、ケースワーク、グループワークなどであった。

演習と実習とを切り離して位置づけている学校では、上記以外の内容として、エンパワメント、エコモデル、ケアマネジメント、システム論、生活モデル、介入方法、効果測定などがあり、基本的な対人関係技術というよりは、よりソーシャルワーク的なものであった。

授業内容の詳細については、各学校のシラバスをさらに検討しなければならないが、いずれにせよ、現状では、各学校あるいは各教員によって異なることは間違いない。

5　授業方法

ヒアリング調査を行った加盟校あるいは教員のほとんどが授業方法としては、ロールプレイを用いるなど、具体的な演習方法を採用している。ただし、何か共通した演習方法を用いているというよりは、各教員によって様々な創意工夫がなされているのが現状である。

授業方法については、教員による創意工夫がある反面、複数の演習担当教員がいる学校では、教員によって方法が異なるために、学生に対して共通した方法で教えることができないというデメリットもある。ほんのわずかであるが、ゼミ方式あるいはディスカッション方式を採用している学校もあった。

6　教材

教材については、調査場所によっては、時間の関係上、十分に聞き取ることができないところもあった。演習担当教員が実際に使用している教科書やビデオなどの教材は、授業内容とも密接に関連するが、授業内容が各教員の裁量に委ねられていることもあり、教員によって大きく異なるのが現状である。全く教材を使用していなかったり、その場その場で考えている教員もいれば、多くの教材を使用している教員もいた。

4節　まとめと考察

最後に、以上の調査結果をまとめ、それらに関して若干の考察と今後の課題を加えてみたい。

1）まず、社会福祉援助技術演習のカリキュラム上の位置づけについて、今回のヒアリング調査では、演習と現場実習とを体系的に学習させるよう配慮している学校が比較的多いことがわかった。一方で、演習と実習とを必ずしも関連づけていない学校も少なからずあった。演習の位置づけは、各養成校の方針に委ねられているが現状である。しかし、厚生労働省の通知によれば、演習は、講義および現場実習と関連させながら指導することになっている。実際、演習は実習と関連させながら実施することで、学習効果が上がるという側面をもっている。今後、社養協としても、演習と実習との関連について、何らかの指針や具体策等を示す必要があるとのではなかろうか。ただし、各学校の自治やアドミニストレーションとも関連するため、今後、十分検討を深め、慎重に進める必要がある。

2）演習の担当教員数と学生数については、ヒアリング調査の結果、厚生労働省の通知の通り、ほとんどの養成校が 20～25 名前後に押さえようと努力している様子が伺えた。演習については、少人数教育が徐々に浸透しており、この点では、ミニマムスタンダードがある程度確立されていることがわかった。なお、例外的に 1 人の教員で 80 名の学生を担当している学校もあったが、これも大学の経営・運営方針に関わることなので慎重になりつつも、何らかの方向性をそのような大学にも示していく必要があるのではなかろうか？

3）演習の配置年次については、演習時間が 120 時間と変更されたことを受け、多くの学校がそれに対応するために、カリキュラムを変更しているのが現状である。これらの変更によって、どのように配置年次が変わるのか、もう少し時間をかけて検討する必要があるだろう。

4）演習の授業内容については、コミュニケーションスキル、自己覚知、自己理解と他者理解、事例研究など、基本的な内容をシラバスに入れている教員が比較的多かった。しかし、実際には、各養成校の

間に内容の差があるだけはなく、同じ学校内でも演習担当教員に内容が委ねられているために統一したものがなく、担当教員の間にも差があることがわかった。つまり、演習で学生に何を教えるかその内容については、厚生労働省通知はあるものの、実質的には教員任せであり、バラバラであることがわかった。ヒアリング調査の結果をみると、担当教員も演習で何を教えたらよいのか、その基準が無いために、悩んでいる人が多いようであった。従って、この授業内容に関するミニマムスタンダード確立のニーズは高いように思える。それほど多い意見ではないが、授業内容についての研修もあればよいとの意見もあった。

5）授業方法については、ほとんどの教員がロールプレイや事例検討を取り入れており、この点では、授業方法がかなり共通したものとなってきているという印象を受けた。ただし、その一方では、どのようにロールプレイをすればよいのか、具体的な教え方を学びたいという声もいくらか見られた。現状では、授業方法についても、各教員が創意工夫、あるいは暗中模索しながら、学生に教えているようである。

6）最後に、教材については、今回の調査では、調査の時間の制約上、十分に聞き取ることができなかった。しかし、添付資料の各ブロックごとの調査記録にあるように、非常に多くの教材が使われているようである。しかし、これも何が良い教材であるか、その判断が難しいこともあり、教員にとって適切な教材選びが重要な課題となっている。なお、社養協や日本社会事業学校連盟などが標準的な教材の開発を行った方がよいとの意見がいくつかあり、これは今後の検討課題といえる。

以上、ヒアリング調査の結果をまとめたが、予想していた通り、社会福祉援助技術演習のカリキュラム、授業方法、教材など、基本的な要素についてはバラバラで、教員の自由裁量に委ねられているということがわかった。さらに、これらの点については、社養協や日本社会事業学校連盟などが何らかの基準を示すべきだという意見も少なくはなかった。これらの結果を踏まえると、今後、社養協としても、各養成校が演習において達成すべき最低限のライン(ミニマムスタンダード)の確立に向けて検討を始めるべきではなかろうか。

最後に、今回の調査対象は、4年制大学が主であり、その意味では、

４年制大学の意見が大きく反映されたものといえる。今回の結果については、ある程度偏ったものであることと、限界があることを改めて指摘しておきたい。今後、演習のカリキュラムや体制が４年制大学とは大きく異なる、短大・専門学校や通信課程などの養成施設からもヒアリング調査を行い、データを集めて、それらの結果を反映させることも課題である。

４章　「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発ニーズ調査結果

１節　調査の目的および方法

１　目的

本調査は、日本社会福祉士養成校協会「社会福祉士養成校教員研修プログラム基盤構築事業」の一環として、本事業の目的に則り、日本社会福祉士養成校協会に加盟する全養成校を対象に、以下の４点について明らかにすることを目的とする。

(1)各養成校における「社会福祉援助技術演習」実施形式および教授している援助技術項目について調査し、社会福祉士養成における援助技術演習授業の実態を明らかにする

(2)「社会福祉援助技術演習」担当者の教授内容に関する達成度（感）を明らかにする。さらに各担当者が、自らの実践・臨床(社会福祉・医療)現場経験をどの様に授業に活用しているかについて明らかにする。

(3)援助技術・技法の研修ニーズの実態を明らかにする。

(4)「社会福祉援助技術演習」授業展開における教材ニーズについて明らかにする。

２　調査方法

(1)調査対象

日本社会福祉士養成校協会加盟校187校(正会員校183校および賛助会員校４校)を対象に、「社会福祉援助技術演習」を担当する専任教員全員とする。

ただし、担当教員数は把握できておらず、各校５票の調査票を送付(郵送数935通：187校×5名)した。したがって、正確な回収率の算定は不可能である。

(2)調査方法

郵送法による全数調査

(3)調査期間

2002年10月20日～12月２日

(4)回収結果

回答数：３３０票

有効回答数：３２４票（有効回答率98.2%）

(5)調査項目について

調査項目は、５事項19問とした。問いの設定については、各養成校の

「社会福祉援助技術演習」授業の実態と、各担当教員の研修および教材に関するニーズが区別できるように配慮した。また、調査の実施に当っては、プライバシーの保護について十分に配慮し、データはＩＤナンバーで処理し、個人情報が流出することのないように留意した。

調査項目の概要は次の通りである。

1)各校の「社会福祉援助技術演習」開講形式について　３問

各養成校の開講年次、１クラスの学生数および教員の担当方法について問う。

2)社会福祉援助技術演習」授業について　３問

「社会福祉援助技術演習」で展開する項目を「技法」および「課題・テーマ」の２分野 24 項目提示し、担当教員個人の教授内容および教授達成度について５段階評価で問う。

また、担当教員の実践・臨床経験を「社会福祉援助技術演習」授業展開上でどの様に生かされているかについて問う。

さらに、授業展開上で困っていることについて問うた。

3)研修ニーズについて　２問

援助技術・技法および教授法の研修ニーズについて問う。

4)教材ニーズについて　１問

授業を進めるに当り、現在求めている教材についてツールおよびそれらの具体的な内容について記述形式で問う。

5)あなた自身について　９問

年齢、性別、社会福祉分野における教育経験年数、実践・臨床経験年数等の基本的属性の他、社会福祉関連の資格、専門分野について問う。

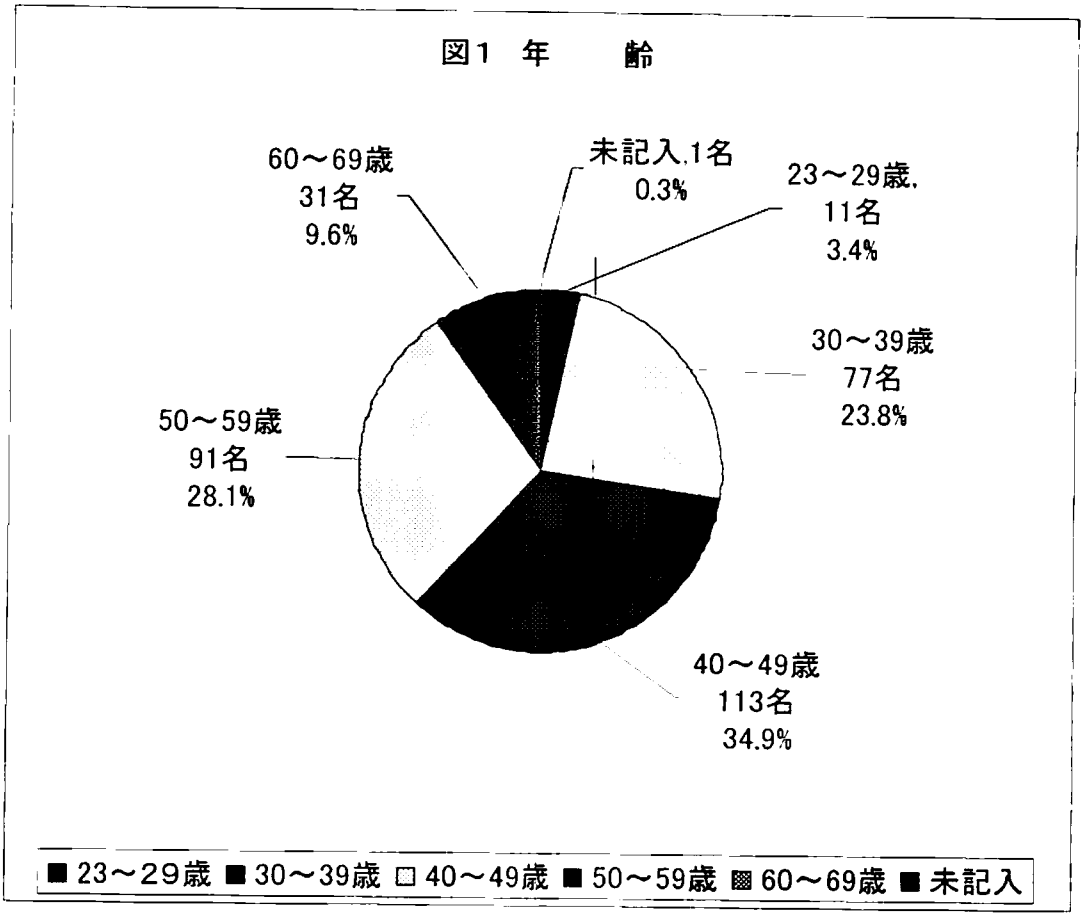
6)自由記述　１問

本調査に関する意見、感想について自由記述とする。

2節　アンケート調査回答者の特徴

1　年齢

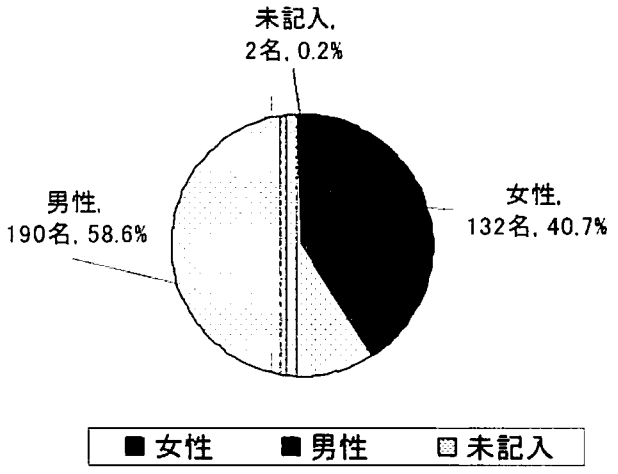
年齢の分布状態（図１）を眺めると、40 代が 34.9%と最も高く、次いで 50 代の 28.1%、次に 30 代（23.8%）、60 代（9.6%）、20 代（3.40%）と続いている。30 歳～55 歳が約８割（76.4%）を占め、平均年齢は 45 歳であった。



2　性別

性別のアンケート回答状況（図２）をみると、女性 40.7%、男性 58.6%である。(不明 0.2%)

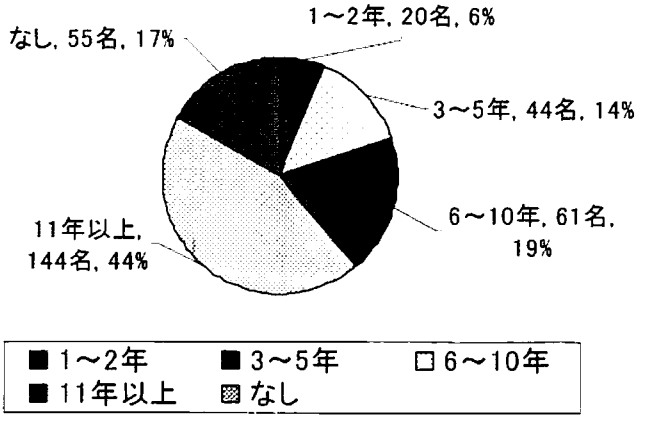
図2　性　　別



3　実践・臨床(社会福祉・医療等)現場経験の通算年数

社会福祉・医療等の現場経験通算年数（図３）は、11 年以上が 44.4%で最も高く、次いで６～10 年が 18.8%、次に現場経験なし(17.0%)３～５年(13.6%)、１～２年（6.2%）と続いている。

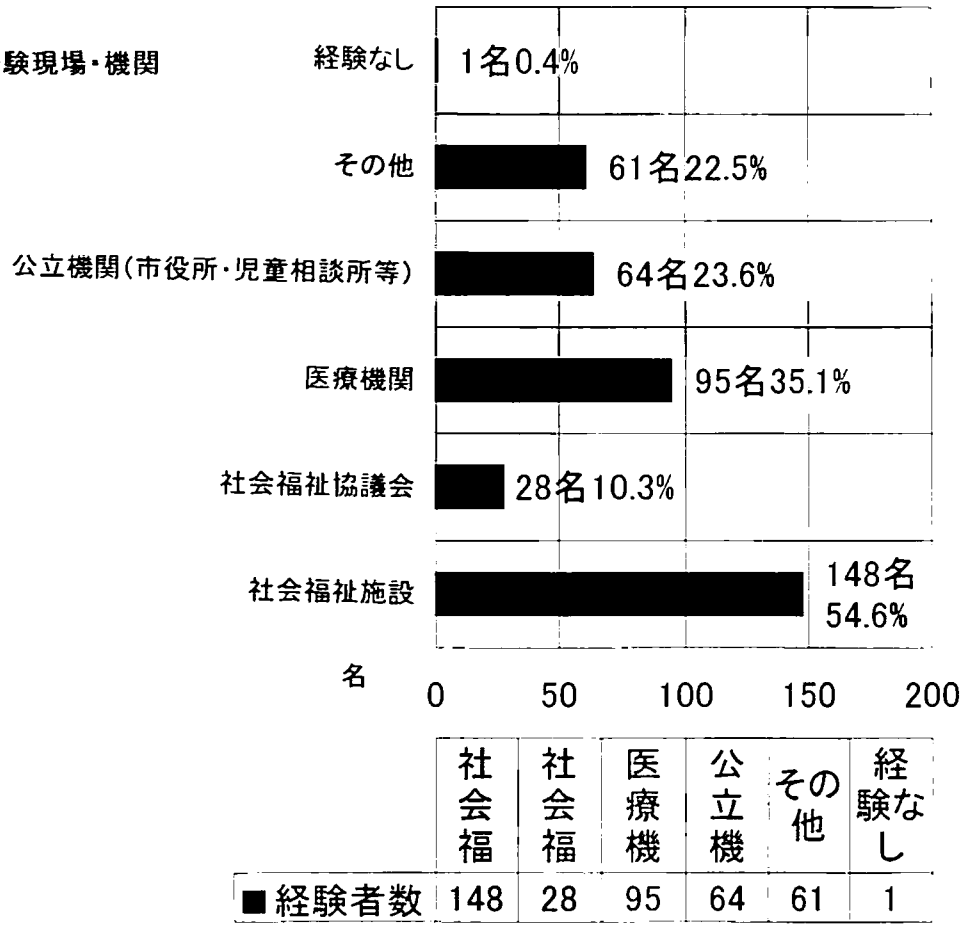
図3　実践･臨床現場経験年数



4　実践・臨床(社会福祉・医療等)経験した現場・機関

社会福祉・医療等の経験現場・機関状況（図４：複数回答可）をみると、社会福祉施設が54.6％と最も多く、次いで医療機関が35.1％、次に公的機関（市役所・児童相談所等）が 23.6％、社会福祉協議会（10.3％）、その他（22.5％）と続いている。

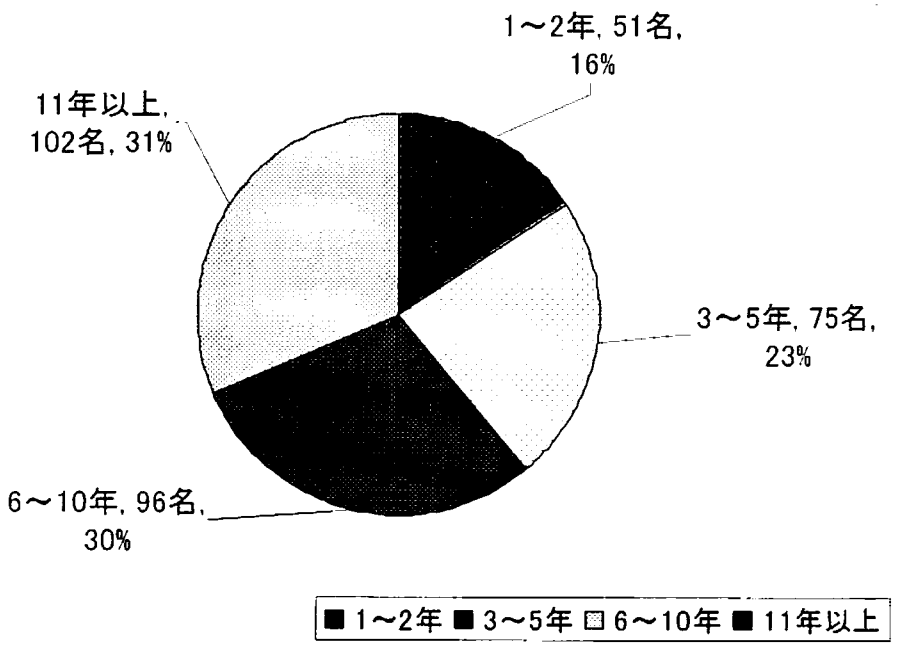
図4　実践・臨床経験現場
（複数回答可）



5　社会福祉分野教育の経験通算年数

社会福祉分野における教育経験年数（図５）は、11 年以上が 31.5％と最も多く、次いで６～10 年が 29.6％、次に３～５年（23.1％）、１～２年（15.7％）と続いている。

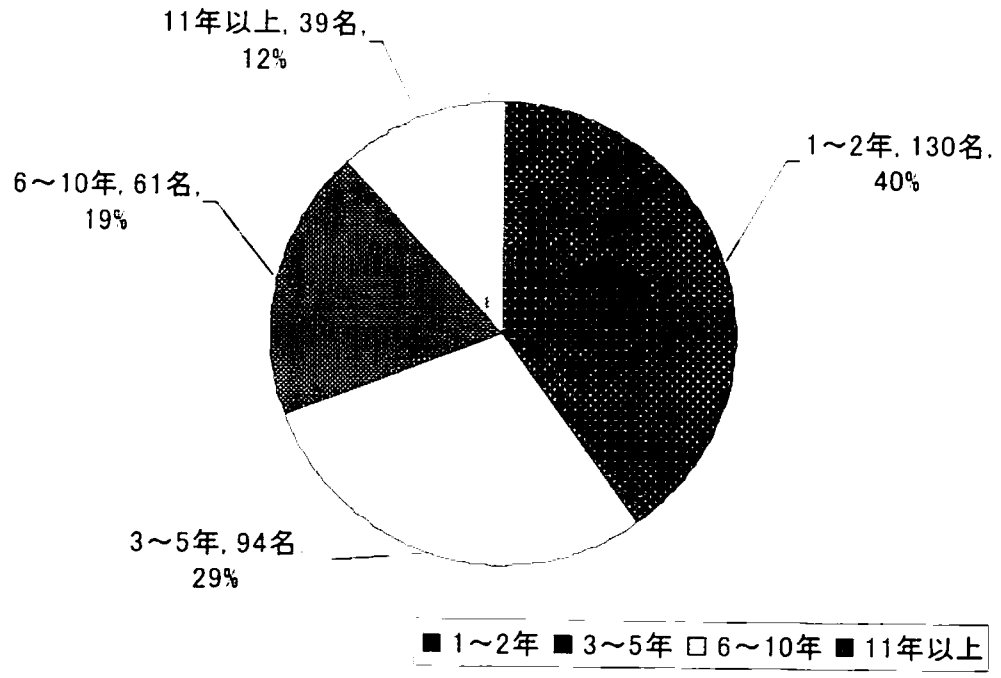
図5　社会福祉分野教育経験年数



6　「社会福祉援助技術演習」を担当した年数

教育経験年数のうち、「社会福祉援助技術演習」を担当した年数(図６)は、１～２年が40.1%と最も高く、次いで３～５年が29.0%、次に６～10年(18.8%)、11年以上（12.0%）となっている。

図6　社会福祉援助技術演習担当年数



臨床経験と教育経験年数は11年以上が多いにもかかわらず、「社会福祉援助技術演習」担当経験年数は１～２年もしくは３～５年という経験年数の短い者が約７割を占めている。

7　大学または大学院で専攻した専門分野について

専攻分野（図７）は、社会福祉学が71.6％で最も多く、これ以外の専攻分野は、すべて10％を下回っている。

約７割の演習担当教員が、「社会福祉学」を学問的な基盤に置いて教育にあたっていることがわかった。

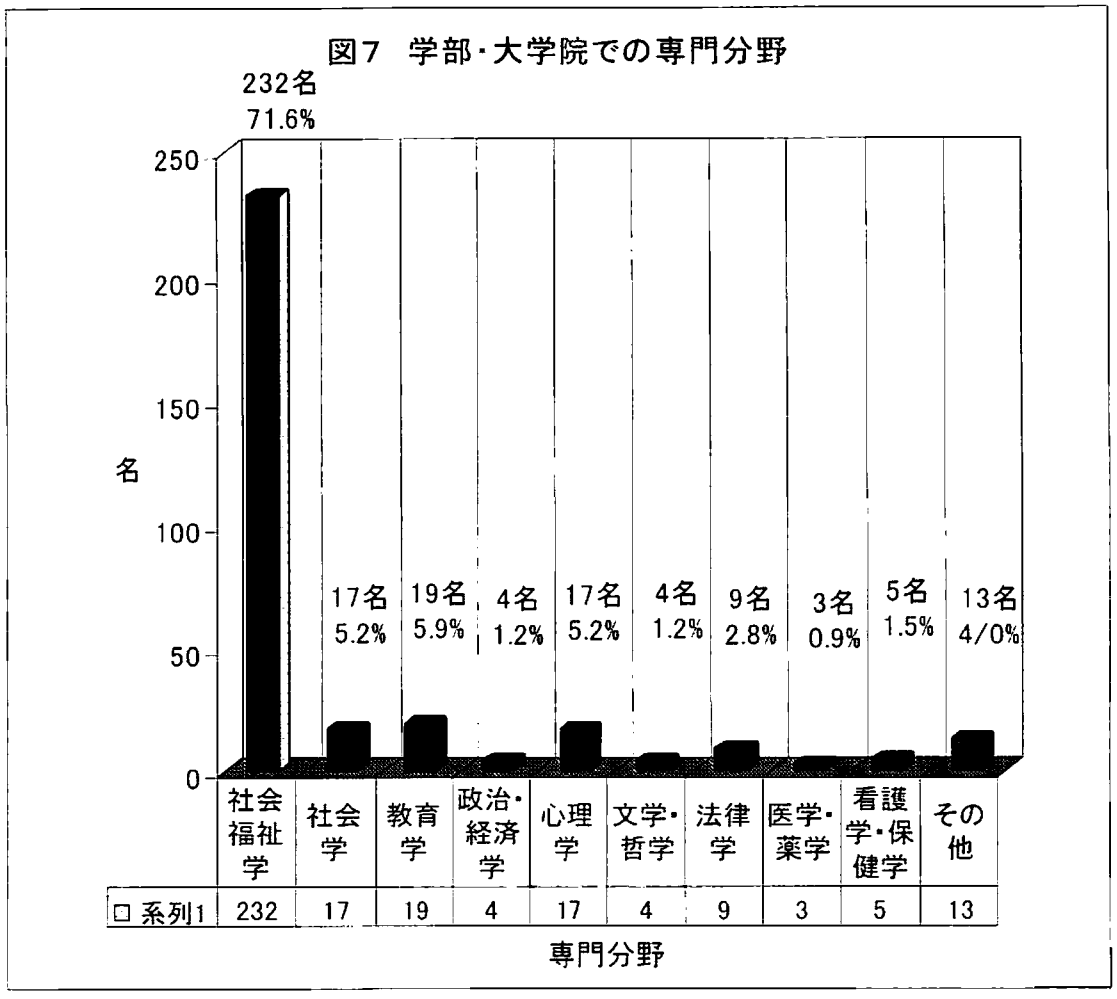


図7　学部・大学院での専門分野

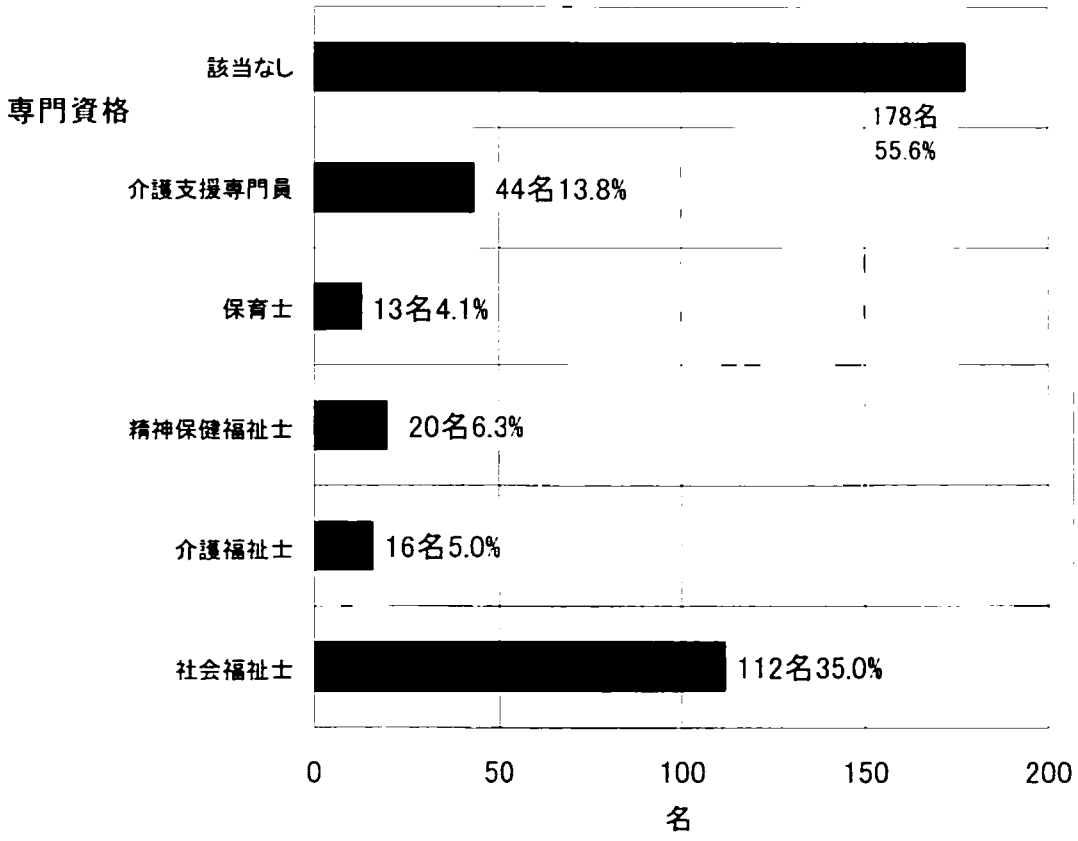
8　取得している社会福祉関連の専門資格について

社会福祉関係の国家資格取得状況（図８：複数回答可）をみると、該当するものがない（55.6%）が最も多いが、これを別とした場合、社会福祉士が35.0%　と最も高く、次いで介護支援専門員が13.8%、次に精神保健福祉士（6.3%）、介護福祉士（5.0%）、保育士（4.1%）となっている。

「社会福祉援助技術演習」教育に携わる教員の約半数近くが、何らかの「社会福祉関連の専門資格」を有していることがわかった。

これらの結果は、担当教員のうち実践・臨床経験者が83%を占めるためであると考えられる。

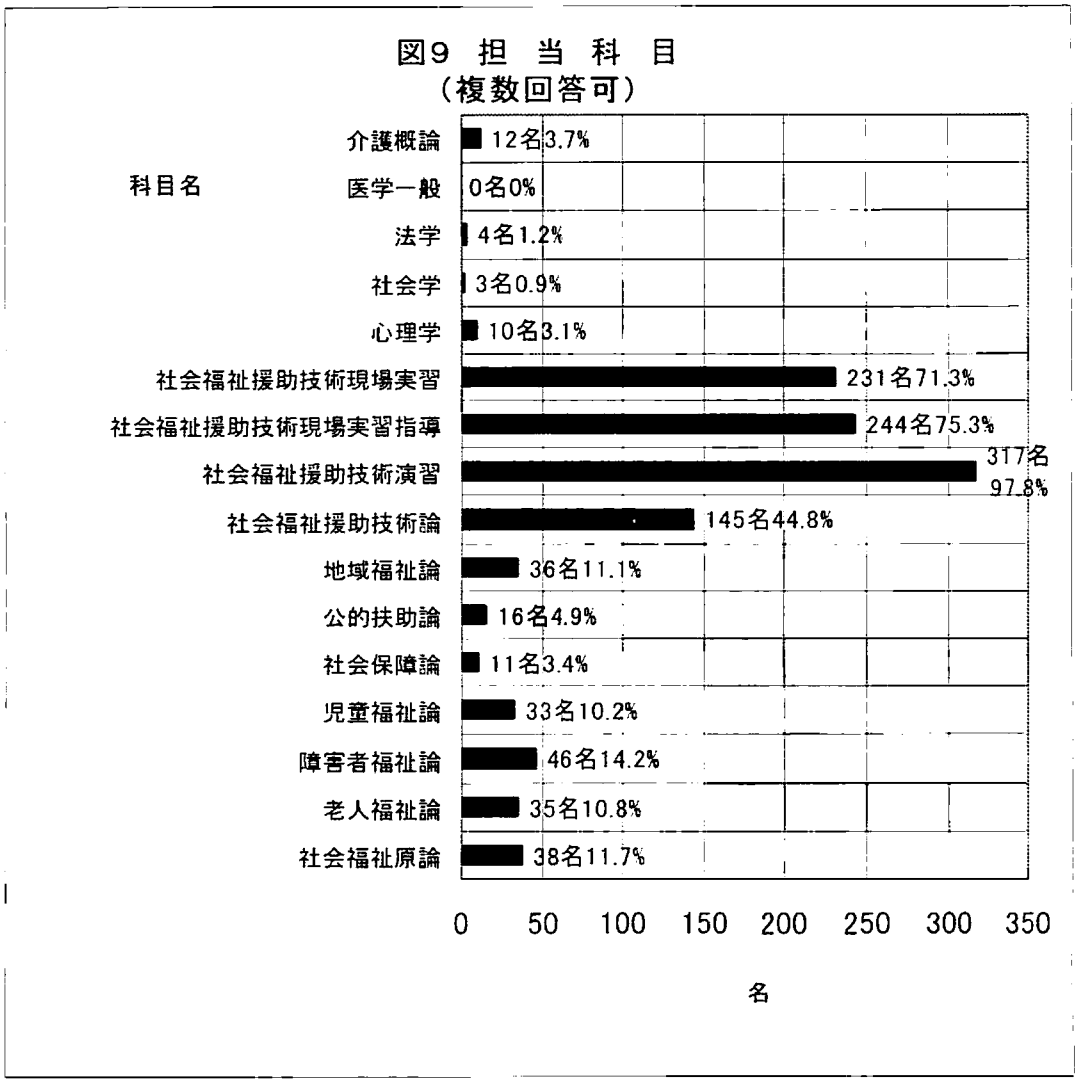
図8　取得している社会福祉関連専門資格



9　現在の勤務先における社会福祉士国家試験指定科目担当について

勤務先における社会福祉士国家試験指定科目担当状況（図９：複数回答可）については、「社会福祉援助技術演習」が 97.8%と最も高く、次いで「社会福祉援助技術現場実習指導」担当が 75.3%、「社会福祉援助技術現場実習」(71.3%)、「社会福祉援助技術論」と（44.8%）続いている。

社会福祉・医療における実践・臨床経験を反映するためか、「社会福祉援助技術現場実習指導」「社会福祉援助技術現場実習」担当者が各７割強であった。「社会福祉援助技術演習」とこれらの科目の関連性は非常に高く、教授方法に関する悩みや研修ニーズ等が反映されている可能性は高いと考えられる。



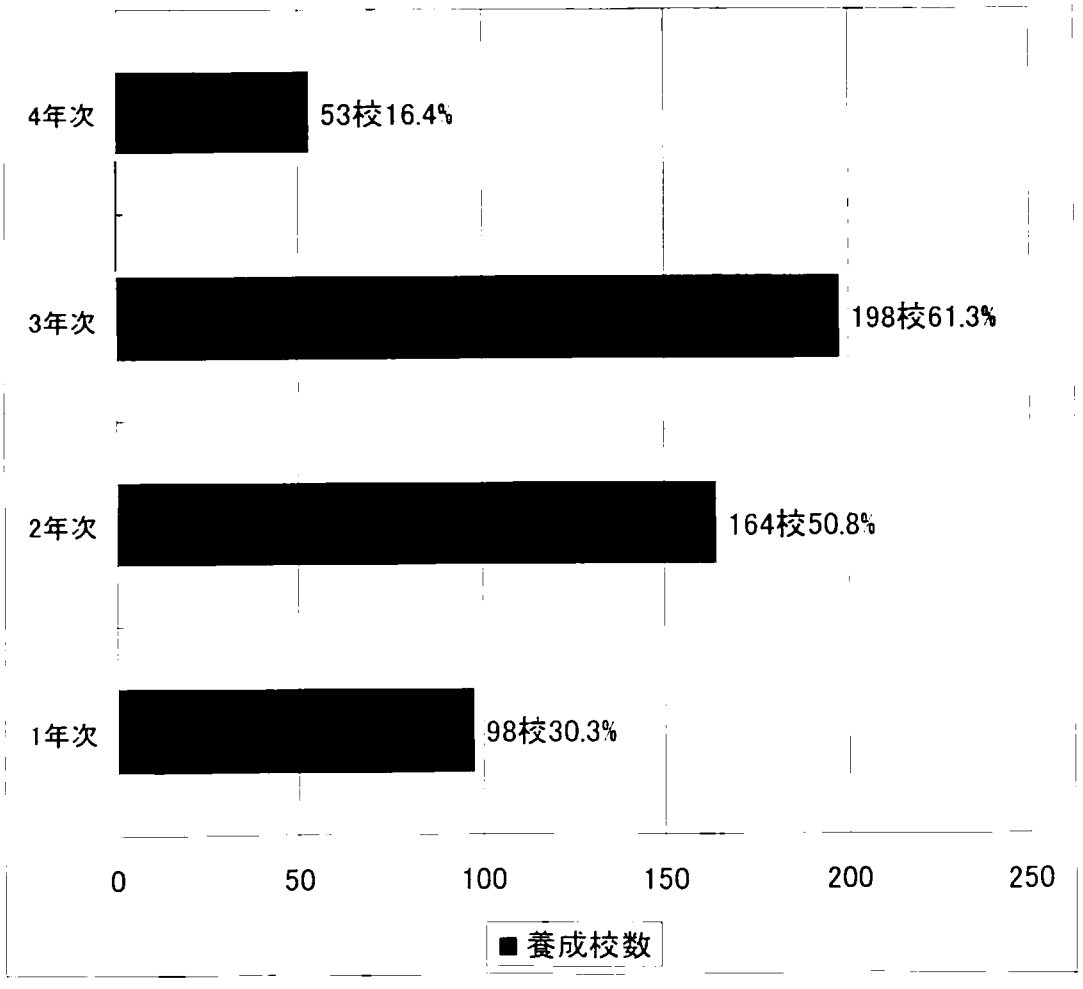
3節　「社会福祉援助技術演習」開講形式

1　平成14年度「社会福祉援助技術演習」の開講学年

「社会福祉援助技術演習」の開講学年（図 10：複数回答可）は、「3年次開講」が61.3%と最も多く、次いで「2年次開講」が50.8%である。次は「1年開講」(30.3%)、「4年次開講」(16.4%) となっている。

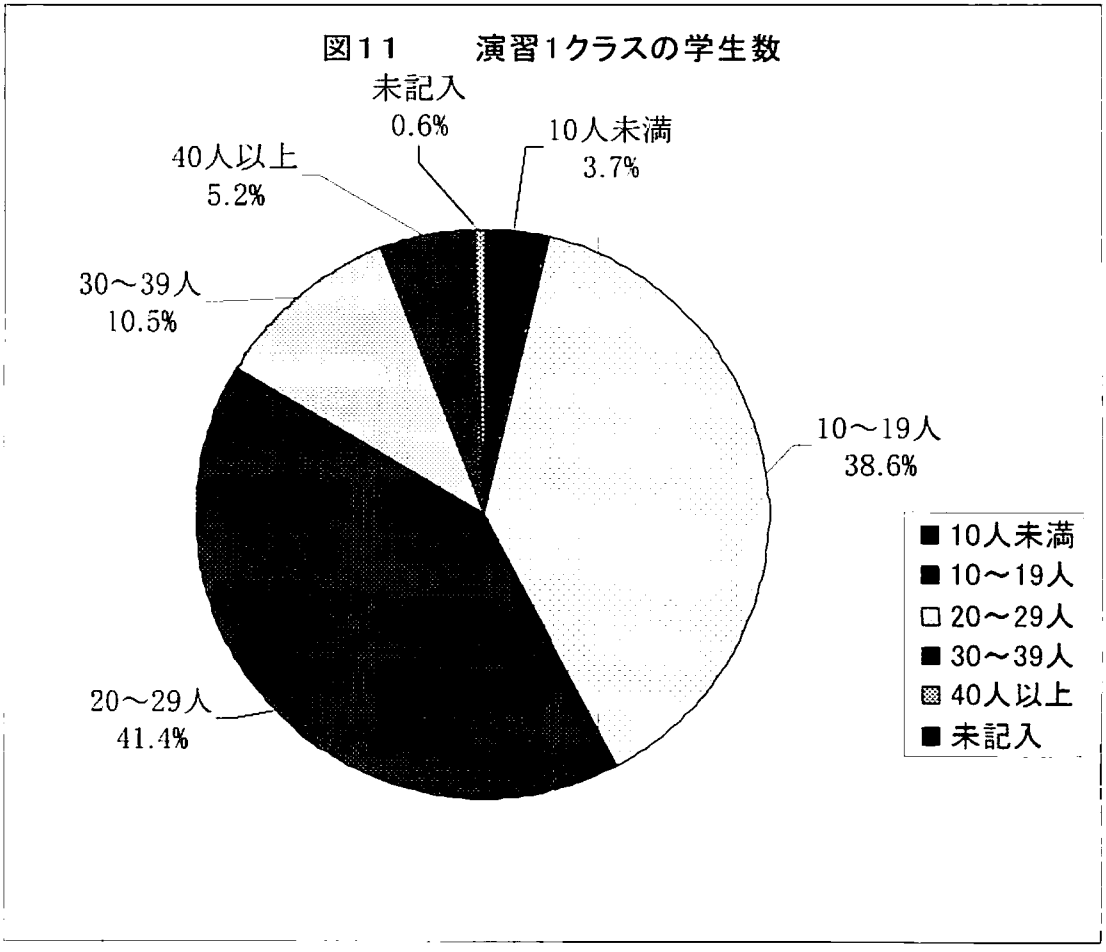
これらの養成校によっては、2年次～3年次、もしくは1年次～3年次と複数年に設定し、学生の援助技術の習得・学習効果を考慮している養成校もあった。

図10　平成14年度「社会福祉援助技術演習」開講学年
（複数回答可）



2　「社会福祉援助技術演習」１クラスの学生数

一人の教員が担当する学生の平均人数（図11）は、「20人～29人」の群が41.4％と最も多く、次いで「10人～１９人」の群が38.6％と、合わせて８割という結果であった。次に「30人～39人」が10.5％であり、「40人以上」の群が5.2％と続いた。



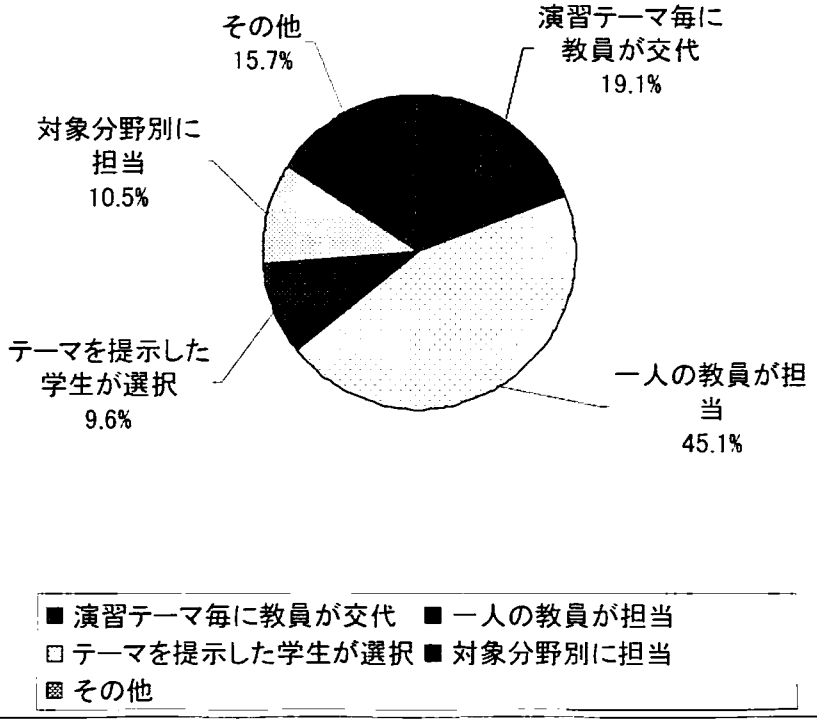
3　演習担当方法

各養成校の「社会福祉援助技術演習」授業の担当方法（図 12）は、「一人の教員が全ての演習テーマについて教授する」が 45.1％と最も高く、次いで「演習テーマごとに教員が交代する」19.1％、次に「その他」(15.7％)「演習と実習を関連させ対象分野別に担当」(10.5％)、「教員が特定の演習テーマを提示し、学生個人が関心あるテーマのクラスを選択する」(9.6％) と続いている。

「その他」の具体的な方法としては、「全ての教員が演習テーマについて話し合い、方向付けをしている」「教員が特定の援助技術を提示し、学生全員が全ての援助技術を受けられるようにローテンションを行う」「２名(あるいは３名）の教員がテーマを決めて半期ずつ担当する」等が提示された。

演習担当方法としては、約半数近い（45.1％）養成校で、一人の教員がマルチに対応する形で援助技術の教授を行っていることが明らかになった。これらの結果が、教授項目に反映している可能性もあるのではないだろうか。

図12　演習担当方法



4節　「社会福祉援助技術演習」授業

1　教授内容達成度（感）に関する自己評価

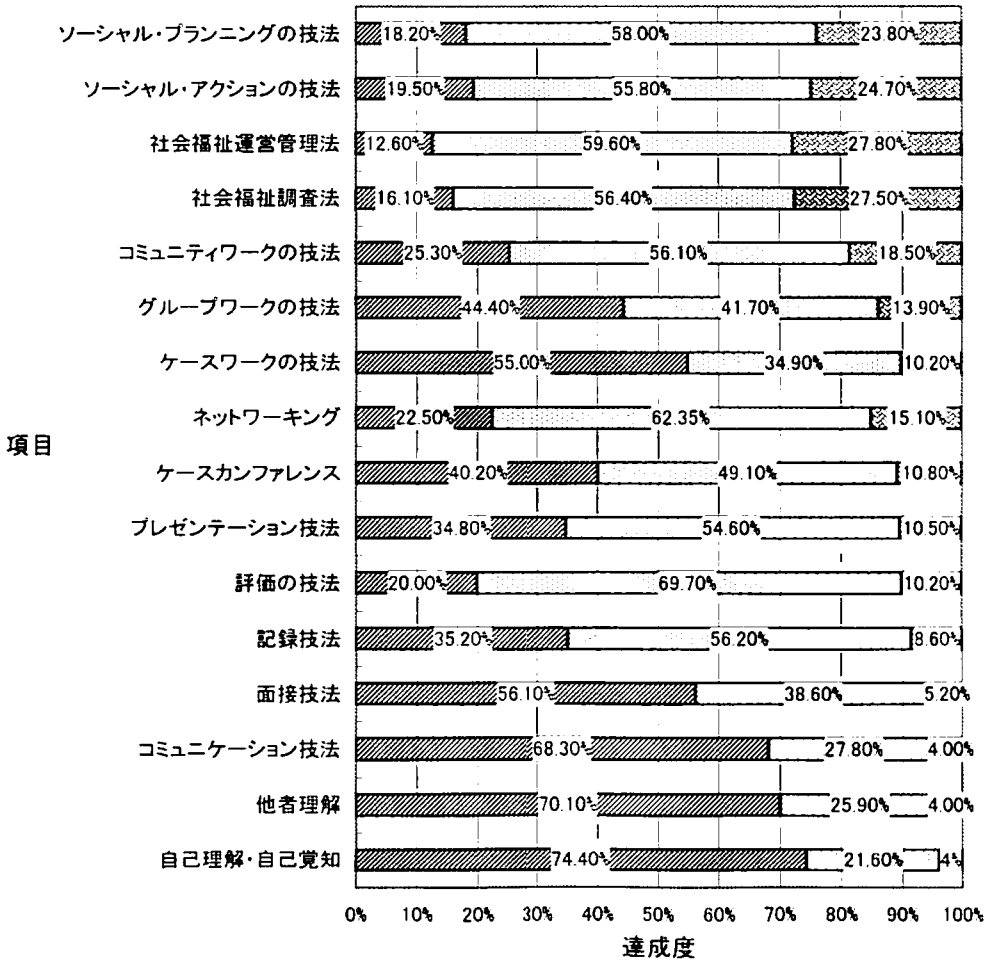
「社会福祉援助技術演習」で展開する項目を「技法」および「課題・テーマ」の2分野24項目に関し、各項目について担当教員個人の教授達成度について5段階評価（「良く出来ている」「出来ている」「あまり出来ていない」「出来ていない」「分担に入っていない」）で実施した。

「出来ている」および「良く出来ている」を「出来ている」群とし、「あまり出来ていない」および「出来てない」を「出来ていない」群、その他「分担に入っていない」「未記入」群として、各項目について分析を行った。

各項目の詳細は下記の通りである。

<技法>

図13　社会福祉援助技術演習達成度〈技法〉



(1)自己理解・自己覚知

自己理解・自己覚知については、「できている」が 61.7%と最も高く、「良く出来ている」と評価した 12.7%を加えると、7割以上（74.4%）が自らの演習の授業では、達成感を感じていると自己評価していることがわかった。

一方、「あまり出来ていない」は 17.9%で、「出来ていない」は 3.7%であった。約2割（21.6%）が達成感を感じていないと自己評価していることがわかった。

また、「分担に入っていない」も 4.0%であった。

問4－＜技法＞(1). 社会福祉援助技術演習（自己理解・自己覚知）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	41	12.7	12.7	12.7
	出来ている	200	61.7	61.7	74.4
	あまり出来ていない	58	17.9	17.9	92.3
	出来ていない	12	3.7	3.7	96.0
	分担に入っていない	13	4.0	4.0	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(2)他者理解

他者理解については、「出来ている」と自己評価したものが 60.8%と最も高く、「良く出来ている」と回答した 9.3%を加えると、約7割（70.1%）が達成度（感）を強く抱いていることがわかった。

一方、「あまり出来ていない」は 22.8%、「出来ていない」は 3.1%であった。

また、「分担に入っていない」は 3.7%であった。

問4－＜技法＞(2). 社会福祉援助技術演習（他者理解）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	30	9.3	9.3	9.3
	出来ている	197	60.8	60.8	70.1
	あまり出来ていない	74	22.8	22.8	92.9
	出来ていない	10	3.1	3.1	96.0
	分担に入っていない	12	3.7	3.7	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(3)コミュニケーション技法

コミュニケーション技法については、「出来ている」が 59.0%と最も高く、「良く出来ている」の 9.3%を加えると、68.3%が達成感を感じていることがわかった。

一方、「あまり出来ていない」が 25.0%、「出来ていない」の 2.8%を加えると、約３割（27.8%）が達成感を感じていないことがわかった。

また、「分担に入っていない」は 4.0%であった。

問4－＜技法＞(3). 社会福祉援助技術演習（コミュニケーション技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	30	9.3	9.3	9.3
	出来ている	191	59.0	59.0	68.2
	あまり出来ていない	81	25.0	25.0	93.2
	出来ていない	9	2.8	2.8	96.0
	分担に入っていない	13	4.0	4.0	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(4)面接技法

面接技法については、「出来ている」が 48.1%と最も高く、「良く出来ている」の 8.0%を加えると、約 5.5 割（56.1%）が達成感を感じていると自己評価していることがわかった。

しかし一方で、「あまり出来ていない」が 34.0%と、「出来ている」に次いで高く、「出来ていない」の 4.6%を加えると、約４割（38.6%）が達成感を感じていないことがわかった。

また、「分担に入っていない」は 4.6%であった。

問4－＜技法＞(4). 社会福祉援助技術演習（面接技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	26	8.0	8.0	8.0
	出来ている	156	48.1	48.1	56.2
	あまり出来ていない	110	34.0	34.0	90.1
	出来ていない	15	4.6	4.6	94.8
	分担に入っていない	15	4.6	4.6	99.4
	未記入	2	.6	.6	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(5)記録技法

記録技法については、「あまり出来ていない」が42.6%と最も高く、「出来てない」の13.6%を加えると、約5.5割（56.2%）が、達成感の無さを表明していることがわかった。

一方、「出来ている」は32.1%、「良く出来ている」の1.5%を加えると、約3割（33.6%）が達成感を感じていることがわかった。

また、「分担に入っていない」が8.6%であった。

問4－<技法>(5). 社会福祉援助技術演習（記録技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	10	3.1	3.1	3.1
	出来ている	104	32.1	32.1	35.2
	あまり出来ていない	138	42.6	42.6	77.8
	出来ていない	44	13.6	13.6	91.4
	分担に入っていない	28	8.6	8.6	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(6)評価技法

評価技法については、「あまり出来ていない」が47.8%と最も高く、次いで「出来てない」が21.9%となっている。約7割（69.8%）が、達成感について自信の無さを表明している。

一方、「出来ている」と回答したものは18.5%であり、「良く出来ている」の1.5%を加えても、達成感を感じているものは2割（20.0%）であることがわかった。

さらに、「分担に入っていない」が10.2%であった。

問4－<技法>(6). 社会福祉援助技術演習（評価の技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	5	1.5	1.5	1.5
	出来ている	60	18.5	18.5	20.1
	あまり出来ていない	155	47.8	47.8	67.9
	出来ていない	71	21.9	21.9	89.8
	分担に入っていない	33	10.2	10.2	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(7)プレゼンテーション技法

プレゼンテーション技法については、「あまり出来ていない」が 40.7%と最も多く、「出来ていない」の 13.9%を加えると、約 5.5 割 (54.6%) が達成感の無さを表明していることがわかった。

一方、「出来ている」は 29.6%であり、「良く出来ている」(5.2%) を加えると、約 3.5 割(34.8%)が達成感を感じていることがわかった。

また、「分担に入っていない」は 10.5%であった。

問4－<技法>(7). 社会福祉援助技術演習(プレゼンテーション技法)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	17	5.2	5.2	5.2
	出来ている	96	29.6	29.6	34.9
	あまり出来ていない	132	40.7	40.7	75.6
	出来ていない	45	13.9	13.9	89.5
	分担に入っていない	34	10.5	10.5	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(8)ケースカンファレンス

ケースカンファレンスについては、「あまり出来ていない」が 34.9%と最も高く、「出来てない」の 14.2%を加えると、約 5 割 (49.1%) が達成感の低さを示していることがわかった。

一方、「出来ている」と回答したものは 34.0%であり、「良く出来ている」の 6.2%を加え、約 4 割 (40.2%) が達成感を感じているという結果であった。

また、「分担に入っていない」は 10.8%であった。

問4－<技法>(8). 社会福祉援助技術演習(ケースカンファレンス)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	20	6.2	6.2	6.2
	出来ている	110	34.0	34.0	40.1
	あまり出来ていない	113	34.9	34.9	75.0
	出来ていない	46	14.2	14.2	89.2
	分担に入っていない	35	10.8	10.8	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(9)ネットワーキング

ネットワーキングについては、「あまり出来ていない」が 43.8%と最も高く、「出来てない」の 18.5%を加えると、約6割（62.3%）を占めており、担当教員の達成感の低さを表明した結果となった。

一方、「出来ている」は 19.1%であり、「良く出来ている」の 3.4%を加えても、達成感を感じているものは約2割（22.5%）であることがわかった。

また、「分担に入っていない」は 15.5%であった。

問4－<技法>(9). 社会福祉援助技術演習（ネットワーキング）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	11	3.4	3.4	3.4
	出来ている	62	19.1	19.1	22.5
	あまり出来ていない	142	43.8	43.8	66.4
	出来ていない	60	18.5	18.5	84.9
	分担に入っていない	49	15.1	15.1	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(10)ケースワークの技法

ケースワークの技法については、「出来ている」が 46.0%と最も高く、「良く出来ている」の 9.0%を加えると、5.5割（55.0%）であった。

一方、「あまり出来ていない」は 29.3%、「出来ていない」が 5.6%であり、約3.5割（34.9%）が達成感を感じていないことがわかった。

また、「分担に入っていない」は 9.9%であった。

問4－<技法>(10). 社会福祉援助技術演習（ケースワークの技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	29	9.0	9.0	9.0
	出来ている	149	46.0	46.0	54.9
	あまり出来ていない	95	29.3	29.3	84.3
	出来ていない	18	5.6	5.6	89.8
	分担に入っていない	32	9.9	9.9	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(11)グループワークの技法

グループワークの技法については、「出来ている」が35.8%と最も高く、「良く出来ている」は8.6%であり、約4.5割（44.4%）が達成感を感じていることが表明された。

一方、「あまり出来ていない」が30.9%を占め、「出来ていない」10.8%を加え、約4割（41.7%）が達成感を感じていないことがわかった。達成感の意思表明としては、明確な傾向を特定できない。

また、「分担に入っていない」は13.6%であった。

問4－<技法>(11). 社会福祉援助技術演習（グループワークの技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	28	8.6	8.6	8.6
	出来ている	116	35.8	35.8	44.4
	あまり出来ていない	100	30.9	30.9	75.3
	出来ていない	35	10.8	10.8	86.1
	分担に入っていない	44	13.6	13.6	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(12)コミュニティ・ワークの技法

コミュニティ・ワークの技法については、「あまり出来ていない」が37.3%と最も高く、「出来ていない」18.8%を加えると、達成感を感じていないものが、約5.5割（56.1%）を占めている。

一方、「出来ている」と感じているものは20.7%であり、「良く出来ている」(4.6%）を加え、達成感を感じているものは約2.5割（25.3%）にとどまった。

さらに、「分担に入っていない」としたものは18.2%であった。

問4－<技法>(12). 社会福祉援助技術演習（コミュニティーワークの技法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	15	4.6	4.6	4.6
	出来ている	67	20.7	20.7	25.3
	あまり出来ていない	121	37.3	37.3	62.7
	出来ていない	61	18.8	18.8	81.5
	分担に入っていない	59	18.2	18.2	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(13)社会福祉調査法

社会福祉調査法については、「あまり出来ていない」が 33.3%と最も多く、次に「出来ていない」が 23.1%と続いている。約 5.5 割（56.4%）が達成感を感じていないことを表明している。

一方、「出来ている」は 13.6%であり、「良く出来ている」2.5%を加え、約 1.5 割（16.1%）が達成感を感じていると回答している。

さらに、「分担に入っていない」は 27.5%であり、社会福祉援助技術演習の教授項目として位置づけていない、あるいは他に科目を設定しているなどの状況が考えられる。

問4－<技法>(13). 社会福祉援助技術演習（社会福祉調査法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	8	2.5	2.5	2.5
	出来ている	44	13.6	13.6	16.0
	あまり出来ていない	108	33.3	33.3	49.4
	出来ていない	75	23.1	23.1	72.5
	分担に入っていない	89	27.5	27.5	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(14)社会福祉運営管理法

社会福祉運営管理法については、「あまり出来ていない」が 31.8%と最も高く、次いで「出来ていない」が 27.8%と続いている。約 6 割（59.6%）が達成感を感じていないことがわかる。

一方、「出来ている」（11.1%）および「良く出来ている」（1.5%）と感じているものは約 1 割（12.6%）であり、圧倒的に達成感を感じていないことが表明された。

また、「分担に入っていない」は 27.5%であり、社会福祉援助技術演習の教授項目として位置づけていない、あるいは他に科目を設定しているなどの状況が考えられる。

問4－<技法>(14). 社会福祉援助技術演習（社会福祉運営管理法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	5	1.5	1.5	1.5
	出来ている	36	11.1	11.1	12.7
	あまり出来ていない	103	31.8	31.8	44.4
	出来ていない	90	27.8	27.8	72.2
	分担に入っていない	89	27.5	27.5	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(15)ソーシャル・アクションの技法

ソーシャル・アクションの技法については、「あまり出来ていない」が29.6%と最も高く、次いで「出来ていない」26.2%と続いている。達成感を感じていないと表明しているものが、約5.5割（55.8%）を占める結果であった。

一方、「出来ている」は17.3%、「良く出来ている」は2.2%であり、達成感を感じているものは2割に満たない（19.5%）状況であった。

さらに、「分担に入っていない」が24.4%であり、社会福祉援助技術演習の教授項目として位置づけていない、あるいは他に科目を設定しているなどの状況が考えられる。

問4－<技法>(15). 社会福祉援助技術演習(ソーシャル・アクションの技法)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	7	2.2	2.2	2.2
	出来ている	56	17.3	17.3	19.4
	あまり出来ていない	96	29.6	29.6	49.1
	出来ていない	85	26.2	26.2	75.3
	分担に入っていない	79	24.4	24.4	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(16)ソーシャル・プランニングの技法

ソーシャル・プランニングの技法については、「あまり出来ていない」が31.8%と最も多く、次に「出来ていない」(26.2%）が続いている。約6割（58.0%）が教授内容として達成感を感じていないことがわかった。

一方、「出来ている」と回答したものは16.0%であり、「良く出来ている」の2.2%を加えても、達成感を感じているものは2割に満たない（18.2%）という結果であった。

ソーシャル・プランニングについては、教授「出来ていない」という達成感の希薄さ示された。

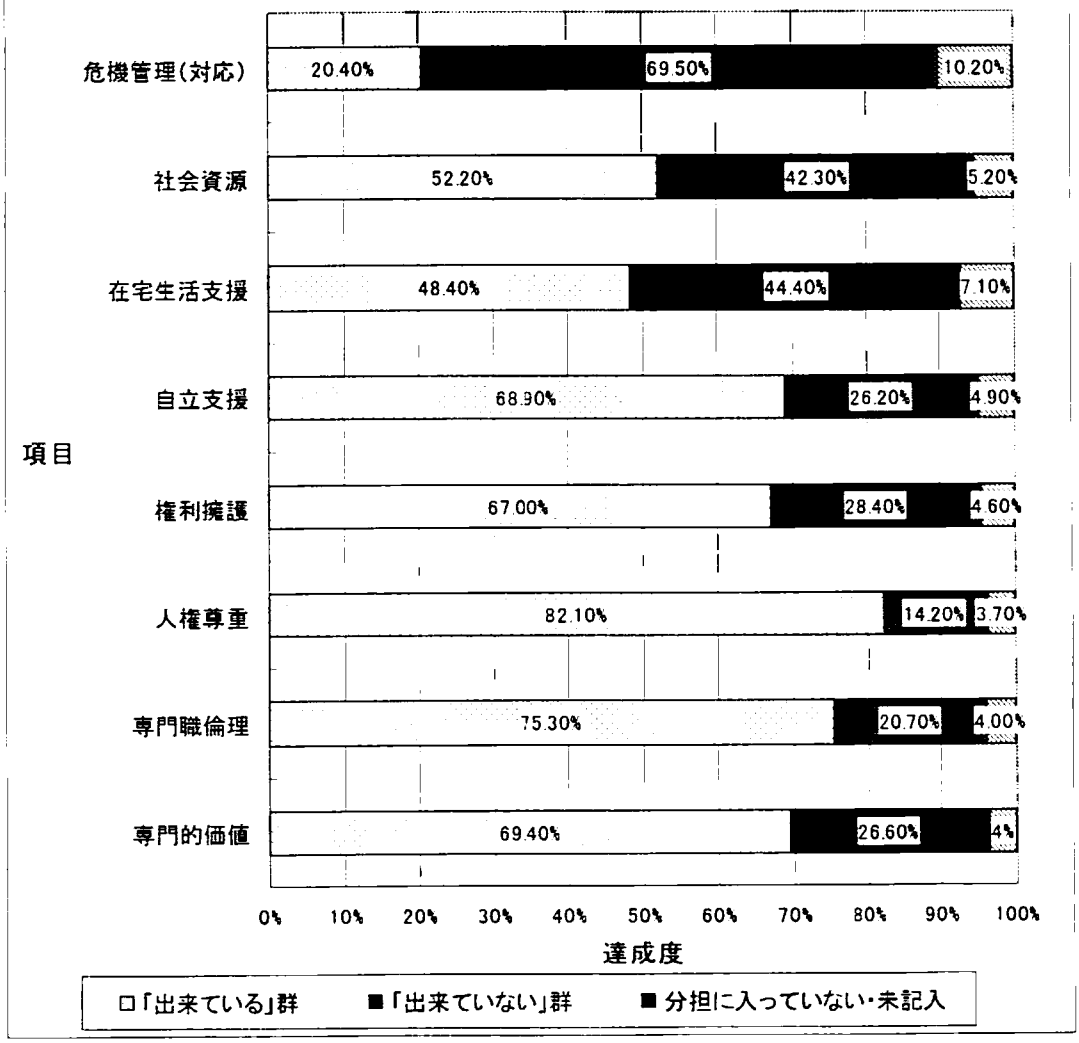
さらに、「分担に入っていない」が23.8%を占めた。

問4－<技法>(16). 社会福祉援助技術演習(ソーシャル・プランニングの技法)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	7	2.2	2.2	2.2
	出来ている	52	16.0	16.0	18.2
	あまり出来ていない	103	31.8	31.8	50.0
	出来ていない	85	26.2	26.2	76.2
	分担に入っていない	77	23.8	23.8	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

<課題・テーマ>

図14 社会福祉援助技術演習達成度〈課題・テーマ〉



(1)専門的価値観

専門的価値観については、「出来ている」が57.1%と最も高く、「良く出来ている」の12.3%を加えると、約7割（69.4%）が達成感を感じているという結果であった。

一方、「あまり出来ていない」は23.8%と「出来ている」に次いで高く、「出来ていない」2.8%を加え、約2.5割（26.6%）が達成感の希薄さを表明していることがわかった。

また、「分担に入っていない」は3.7%であった。

問4－＜課題・テーマ＞(1). 社会福祉援助技術演習（専門的価値）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	40	12.3	12.3	12.3
	出来ている	185	57.1	57.1	69.4
	あまり出来ていない	77	23.8	23.8	93.2
	出来ていない	9	2.8	2.8	96.0
	分担に入っていない	12	3.7	3.7	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(2)専門職倫理

専門職倫理については、「出来ている」58.3%と最も高く、「よく出来ている」(17.0%）を加え、約7.5割（75.3%）が達成感を表明する結果であった。

一方、「あまり出来ていない」が17.9%であり、「出来ていない」(2.8%）を加え、約2割(20.7%)が達成感を感じていない。

また、「分担に入っていない」が4.0%を占めた。

問4－＜課題・テーマ＞(2). 社会福祉援助技術演習（専門職倫理）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	55	17.0	17.0	17.0
	出来ている	189	58.3	58.3	75.3
	あまり出来ていない	58	17.9	17.9	93.2
	出来ていない	9	2.8	2.8	96.0
	分担に入っていない	13	4.0	4.0	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(3)人権尊重

人権尊重については、「出来ている」が61.1%と最も高く、次いで「良く出来ている」が21.0%と続いている。約8割（82.1%）が達成感を表明した結果であった。

一方、「あまり出来ていない」が11.7%であり、「出来ていない」2.5%であった。

また、「分担に入っていない」は3.7%であった。

問4－<課題・テーマ>(3). 社会福祉援助技術演習（人権尊重）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	68	21.0	21.0	21.0
	出来ている	198	61.1	61.1	82.1
	あまり出来ていない	38	11.7	11.7	93.8
	出来ていない	8	2.5	2.5	96.3
	分担に入っていない	12	3.7	3.7	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(4)権利擁護

権利擁護については、「出来ている」49.4%であり、「良く出来ている」（17.6%）を加え、約7割（67.0%）が達成感を感じているという結果であった。

一方、「あまり出来ていない」は24.1%、「出来ていない」が4.3%であり、約3割（28.4%）が達成感の希薄さを表明した。

また、「分担に入っていない」が4.6%を占めた。

問4－<課題・テーマ>(4). 社会福祉援助技術演習（権利擁護）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	57	17.6	17.6	17.6
	出来ている	160	49.4	49.4	67.0
	あまり出来ていない	78	24.1	24.1	91.0
	出来ていない	14	4.3	4.3	95.4
	分担に入っていない	15	4.6	4.6	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(5)自立支援

自立支援については、「出来ている」は55.6%と最も多く、「良く出来ている」(13.3%)を加え、約7割(68.9%)が達成感を感じているという結果であった。

一方、「あまり出来ていない」は21.9%を占め、「出来ていない」が4.3%であった。約2.5割(26.2%)が教授内容に達せ感を感じていないことがわかった。

また、「分担に入っていない」は4.9%を占めた。

問4－<課題・テーマ>(5). 社会福祉援助技術演習(自立支援)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	43	13.3	13.3	13.3
	出来ている	180	55.6	55.6	68.8
	あまり出来ていない	71	21.9	21.9	90.7
	出来ていない	14	4.3	4.3	95.1
	分担に入っていない	16	4.9	4.9	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(6)在宅生活支援

在宅生活支援については、「出来ている」が40.7%と最も多く、「良く出来ている」(7.7%)を加え、約5割(48.4%)が達成感を表明した。

一方、「あまり出来ていない」も37.0%であり、「出来ていない」(7.4%)を加えると、約4.5割(44.4%)が達成感を感じていないことがわかった。

「出来ている」と感じているものと、「出来ていない」と感じているもの割合が拮抗していることがわかる。

また、「分担に入っていない」が7.1%であった。

問4－<課題・テーマ>(6). 社会福祉援助技術演習(在宅生活支援)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	25	7.7	7.7	7.7
	出来ている	132	40.7	40.7	48.5
	あまり出来ていない	120	37.0	37.0	85.5
	出来ていない	24	7.4	7.4	92.9
	分担に入っていない	23	7.1	7.1	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(7)社会資源

社会資源については、「出来ている」が44.8%と最も高く、「良く出来ている」の7.4%を加えると、達成感を表明したものが約5割（52.2%）を超える結果であった。

一方、「あまり出来ていない」と感じているものが36,4%を占め、「出来ていない」(5.9%)を加えると、約4割(42.3%)という結果であった。

また、「分担に入っていない」は5.2%であった。

問4－<課題・テーマ>(7). 社会福祉援助技術演習(社会資源)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	24	7.4	7.4	7.4
	出来ている	145	44.8	44.8	52.2
	あまり出来ていない	118	36.4	36.4	88.6
	出来ていない	19	5.9	5.9	94.4
	分担に入っていない	17	5.2	5.2	99.7
	未記入	1	.3	.3	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

(8)危機管理（対応）

危機管理（対応）については、「あまり出来ていない」が49.1%と半数を占め、次いで「出来ていない」が20.4%と続いている。教授内容として達成感を感じていないものが約7割（69.5%）を占めた。

一方、「出来ている」は17.6%であり、「良く出来ている」(2.8%）を加えても、達成感を感じているものは約2割（20.4%）にとどまった。

また、「分担に入っていない」は10.2%を占めた。

問4－<課題・テーマ>(8). 社会福祉援助技術演習(危機管理対応)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	良く出来ている	9	2.8	2.8	2.8
	出来ている	57	17.6	17.6	20.4
	あまり出来ていない	159	49.1	49.1	69.4
	出来ていない	66	20.4	20.4	89.8
	分担に入っていない	33	10.2	10.2	100.0
	合計	324	100.0	100.0	

以上、2分野24項目の結果について詳細を示した。

「援助技法」16 項目のうち、達成感を表明した「出来ている」群（「出来ている」「良く出来ている」）が上位を示した項目は、4項目にとどまる結果となった。また、達成感の希薄さを表明した「出来ていない」群（「あまり出来ていない」「出来ていない」）が上位を示した項目は、10項目であった。さらに「出来ている」群および「出来ていない」群が拮抗している項目は2項目であった。

「演習課題・テーマ」の8項目のうち、達成感を表明した「出来ている」群が上位を示した項目は5項目であり、達成感の希薄さを示した「出来ていない」群が上位を示した項目は1項目であった。さらに「出来ている」群および「出来ていない」群が拮抗している項目は、2項目あった。

これからの結果から、次の2点について指摘することができる。

第1点目は、各項目の「出来ている」群および「出来ていない」群の比較から、「技法」の16項目に比べ、「演習課題・テーマ」の8項目に対する「出来ている」群が上位を占める割合が高いことが示された。

すなわち、「社会福祉援助技術演習」において、具体的な技法の伝達より、社会福祉専門職としての倫理観等の伝達に力点をおいていると捉えることができよう。

あるいは、個人を対象とした具体的な対人援助技術および関係は、教室で教授可能であるが、グループや教室を超えた、技法・テーマは、体験化しづらく、提示する事例も具体性に欠ける傾向があるからと推測することができる。

次に、第2点目としては、「援助技法」に示した、「社会福祉調査法」「社会福祉運営管理法」「ソーシャル・アクション」「ソーシャル・プランニング」、いわゆる間接援助技術に位置づけられている項目は、「分担に入っていない」とするものが2.5割前後を占める結果であった。

それらの理由としては、時間的制約、あるいはこれらの教授内容については他に専門科目を設定し、「社会福祉援助技術演習」という科目内では取り扱わないとしているなどである。また、開講年次との関連から、専門分野の導入期として対人援助の基礎伝達、あるいは社会福祉援助技術現場実習と関連づけていると推測することができる。

しかし、社会福祉援助技術は個人や家族というミクロを対象とした場面だけで活用される技術ではなく、実践・臨床現場では、例えば地域社会への働きかけや施設管理・運営等のマクロを対象として活用する技術であることは言うまでもない。今後の課題としてグローバルな視点を持ち、ジェネリックな技術として「社会福祉援助技術」を実践できるよう、教授する必要性があるのではないかと考える。

2　実践・臨床(社会福祉・医療等)経験の演習教授への反映

実践・臨床（社会福祉・医療等）経験の演習教授への反映については、演習担当者 324 名のうち 269 名（83.0%）が何らかの現場経験を経た後に援助技術演習の教育に携わり、さらにそれらの経験を演習教授に反映していると答えている。(図 15)

現場経験を演習教授に生かしている内容（複数回答可）としては、「現場における自己の経験内容を語ることができる」が 93.1%と最も高く、次いで「臨場感（リアリテイ）をともなう事例を提示することができる」(78.3%)、「ロールプレイの状況設定を具体的に工夫・展開することができる」(67.8%)と続いている。以下、「基本的人権に基づいた事例を提示できる」(56.9%)、「現場実践家の講師を招聘するネットワークとして活用」(41.7%)となっている。(図 16)

図15　演習での実践・臨床現場経験の活用状況

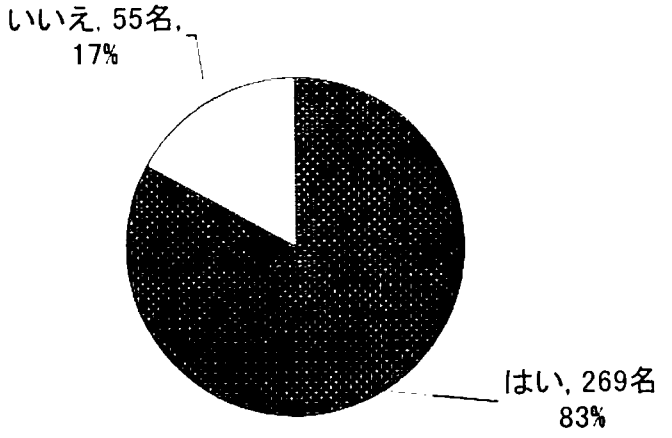
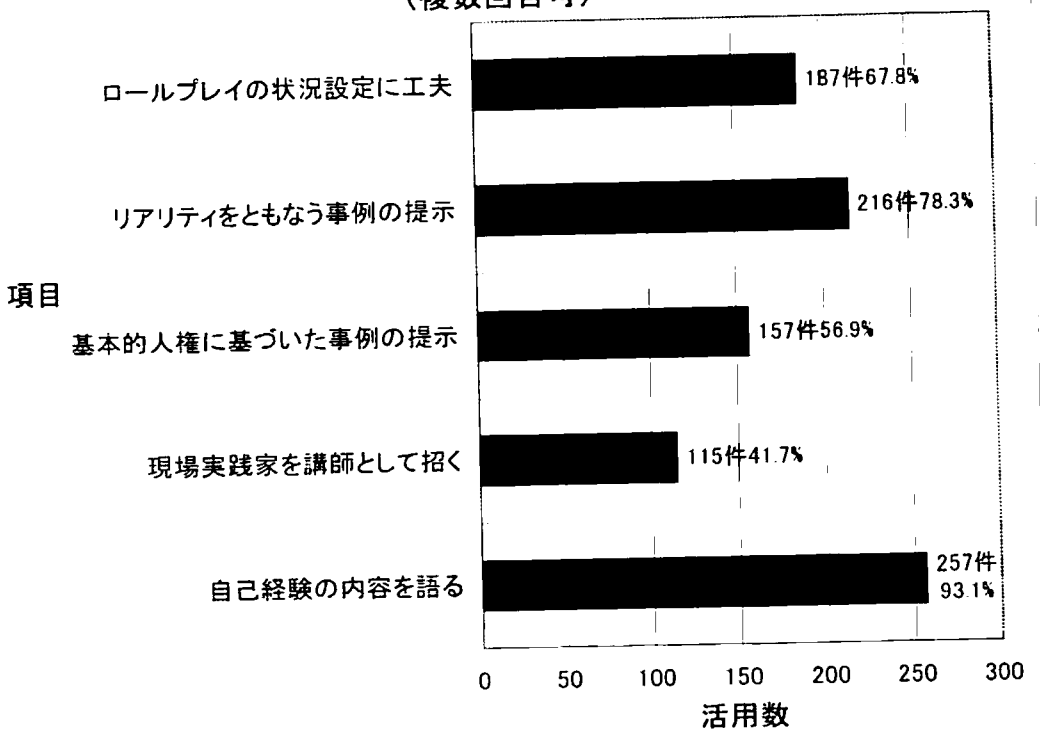


図16　演習展開上で実践・臨床経験を活かしている内容
（複数回答可）

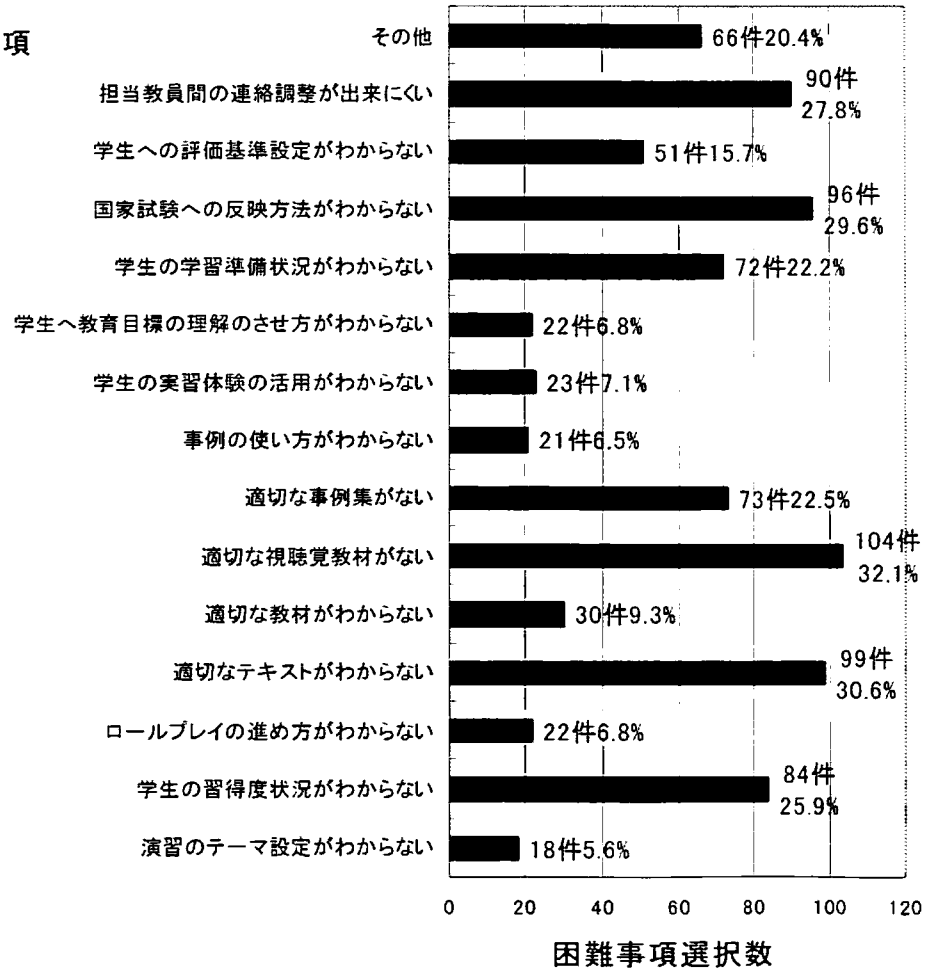


5節　「社会福祉援助技術演習」教授上で困っていること

「社会福祉援助技術演習」を展開する上で困っていること（図17：複数回答可）については、「視聴覚教材（ビデオ等）がない」が32.1％と最も多く、次いで「適切なテキスト（教科書）がない」（30.6％）、「国家試験をどのように演習内容に反映すべきかわからない」（29.6％）、「演習担当者間の進捗状況等の連絡調整ができにくい」（27.8％）、「学生の援助技術習得度がわからない」（25.9％）と続いている。

以下、「演習の展開に適切な事例集がない」（22.5％）、「学生の準備状況（他の科目の学習内容・進捗状況）が分らない」（22.2％）等となっている。

図17　演習展開上で困っていること
（複数回答可）



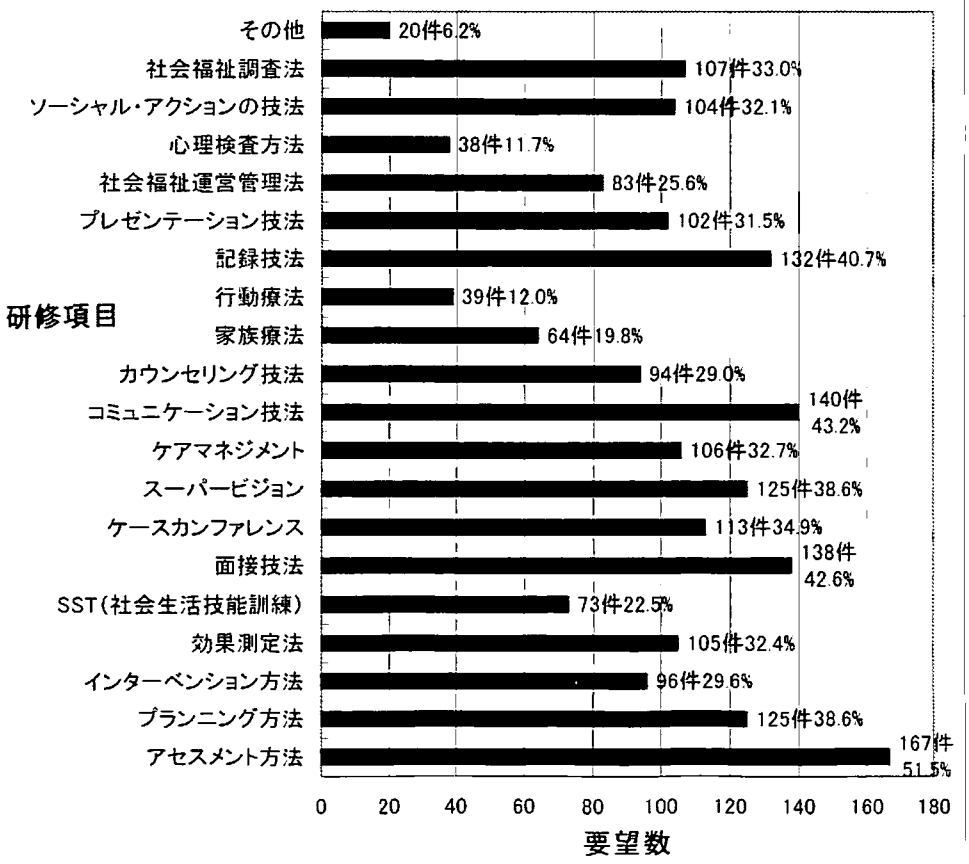
6節　希望する研修内容

1　援助技術・技法の研修内容として希望するもの

援助技術・技法の研修内容として希望する項目（図18：複数回答可）は、「アセスメント方法」が51.5％と最も高く、次いで「コミュニケーション技法」が 42.3％であった。次に「面接技法」（42.6％）、「記録技法」（40.7％）、「プランニング方法」（38.6％）、「スーパービジョン」（38.6％）となっている。

「社会福祉援助技術演習」の担当項目として上位を占めた「アセスメント」「面接技法」「コミュニケーション技法」への研修ニーズがそれぞれ50%前後と非常に高いことが明らかになった。さらに、担当項目としてその教授達成度が「出来ている」と肯定的な自己評価を持っていると回答している項目「コミュニケーション技法」「面接技法」が、研修ニーズとしても上位にあがっているのは、さらにスキルの向上を目指している現れと捉えることができよう。

図18　援助技術・技法の研修内容として望むもの
（複数回答可）

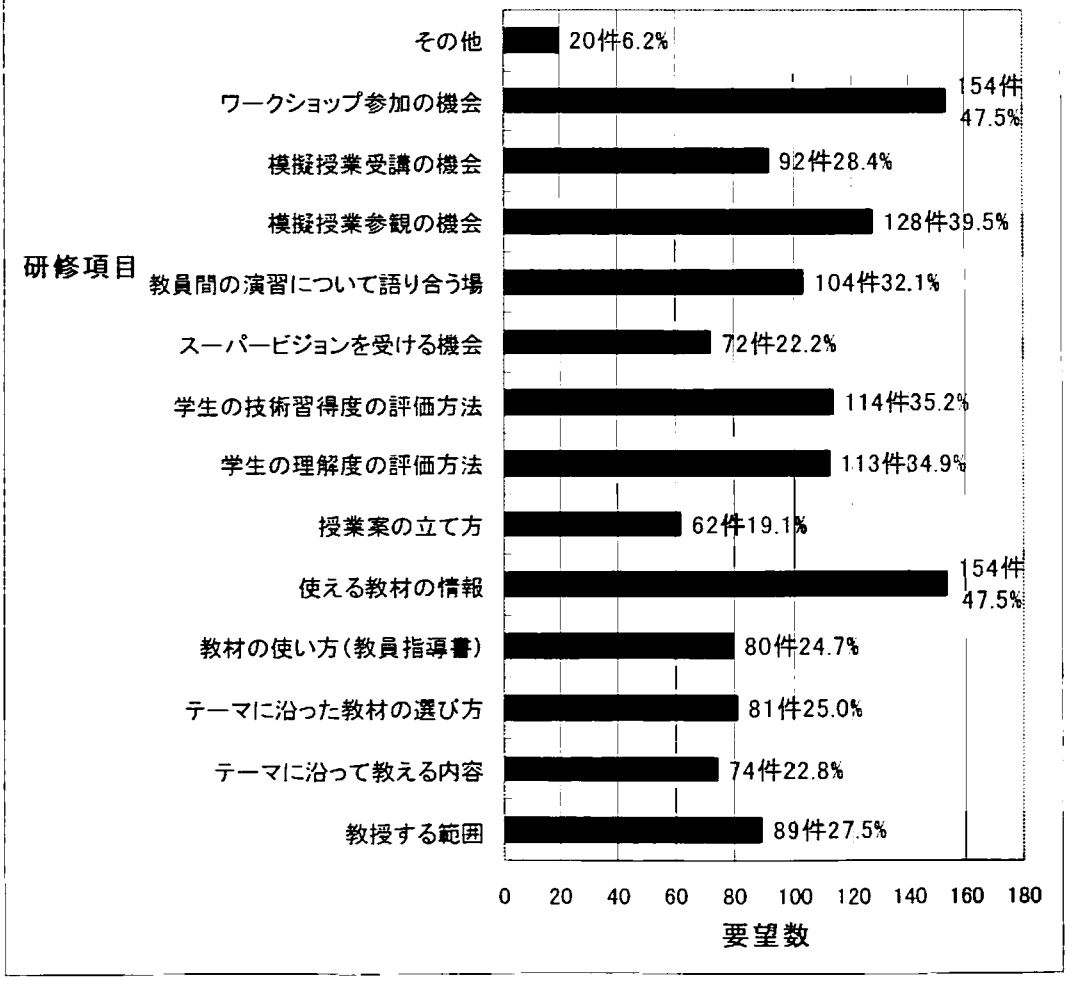


2　教授法の研修内容として希望するもの

教授法の研修内容（図 19：複数回答可）としては、「使える教材の情報」と「特定の援助技術習得のためにワークショップへの参加する機会」がいずれも 47.5％と最も高く、次いで「模擬授業を参観する機会」(39.5％)、「学生の技術取得度の評価方法」(35.2％)、「学生の理解度の評価方法」(34.9％) と続いている。

以下、「演習担当教員同士で演習について語り合う場(＝共通理解)を得る機会」(32.1％)、「模擬授業を受講する機会」(28.4％)、「演習において成就する範囲」(27.5％)、「演習テーマに沿った教材の選び方」(25.0％)、「教材の使い方(教員用指導書)」(24.7％) 等となっている。

図19　教授法の演習内容として望むもの
（複数回答可）



研修内容として、「ワークショップへ参加する機会」「使える教材の情報」「模擬授業を参観する機会」が上位を占めると言うことは、研修において自らの授業へのヒントを得たいというニーズが高いものと考えられる。特に、「使える教材の情報」の高さは、『演習展開上で困っていること』において、「適切な視聴覚教材が分らない」「適切なテキストがない」という項目が上位を占めていることの裏づけであり、研修制度と同時に、教員への情報提供やスーパーヴィジョンの機会の検討も必要であることが伺えた。

次に、研修項目のうち、「特定の援助技術習得のためのワークショップへの参加の機会」を選択した154名を対象に、ワークショップで受けたい「研修内容の項目」について1位～3位を問うた。

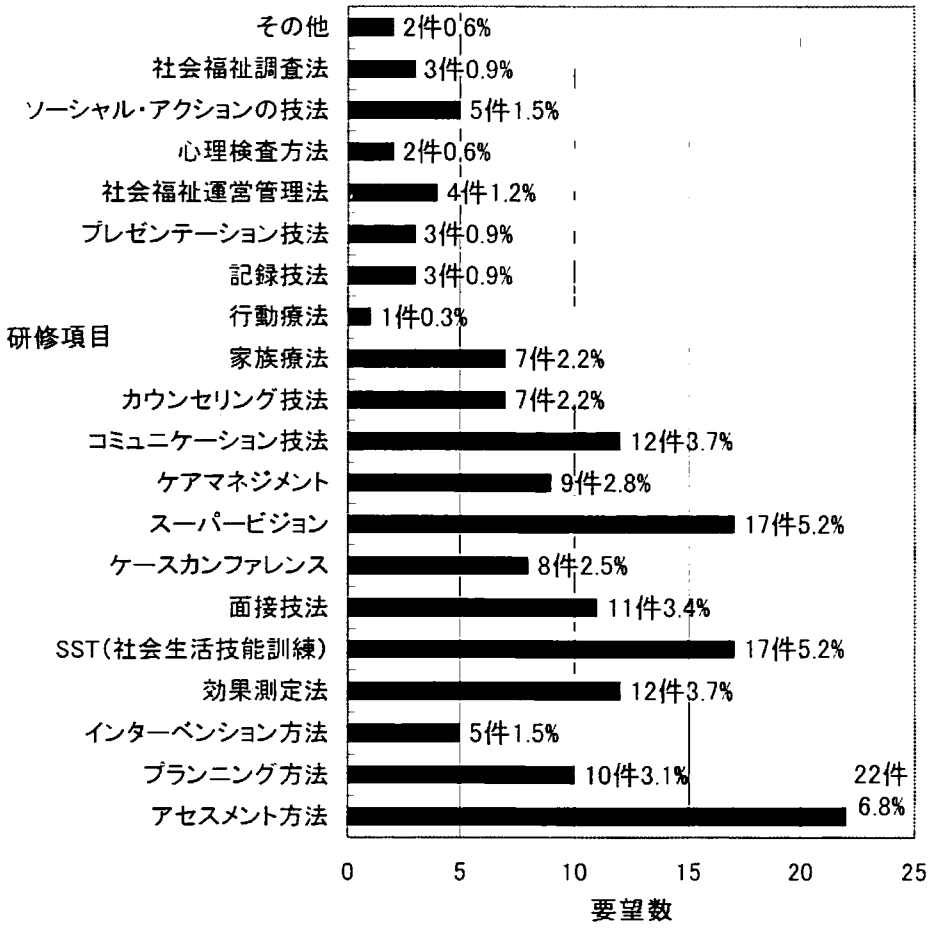
3　ワークショップで受けたい研修内容の具体的項目について（対象：154名）

「特定の援助技術習得のためのワークショップへ参加する機会」を選択した154名に対し、より具体的な希望する研修項目の提示を求め、希望の強いものから1～3位の順位を問うた。

具体的な順位別の項目は以下の通りである。

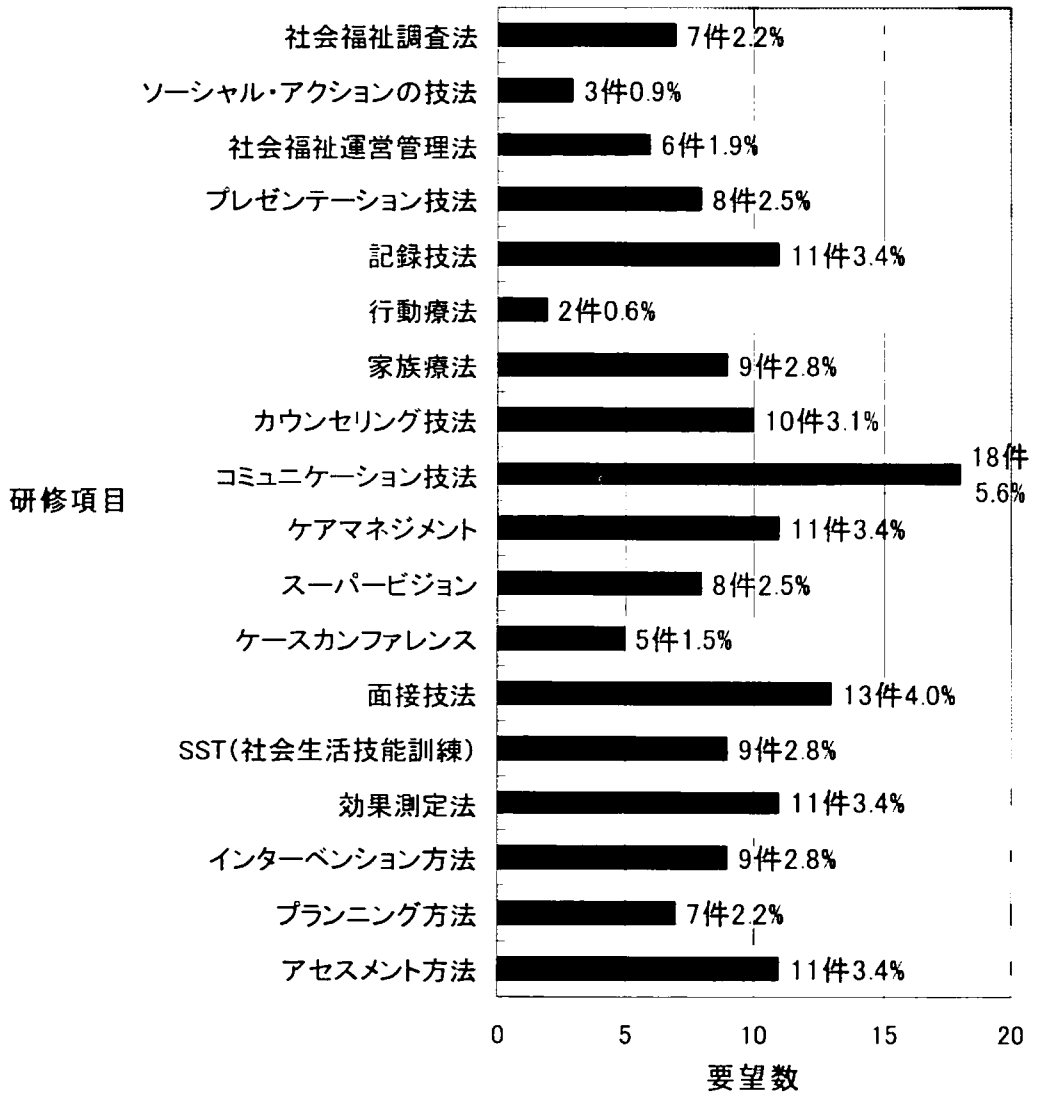
（1位）希望する研修項目の1位として選択された項目（図20-1）は、「アセスメント方法」（6.8%）・「SST」（5.2%）・「ケースカンファレンス」（5.2%）・「効果測定」（3.7%）・「コミュニケーション技法」（3.7%）が上位を占めた。

図20-1　ワークショップで受けたい研修内容



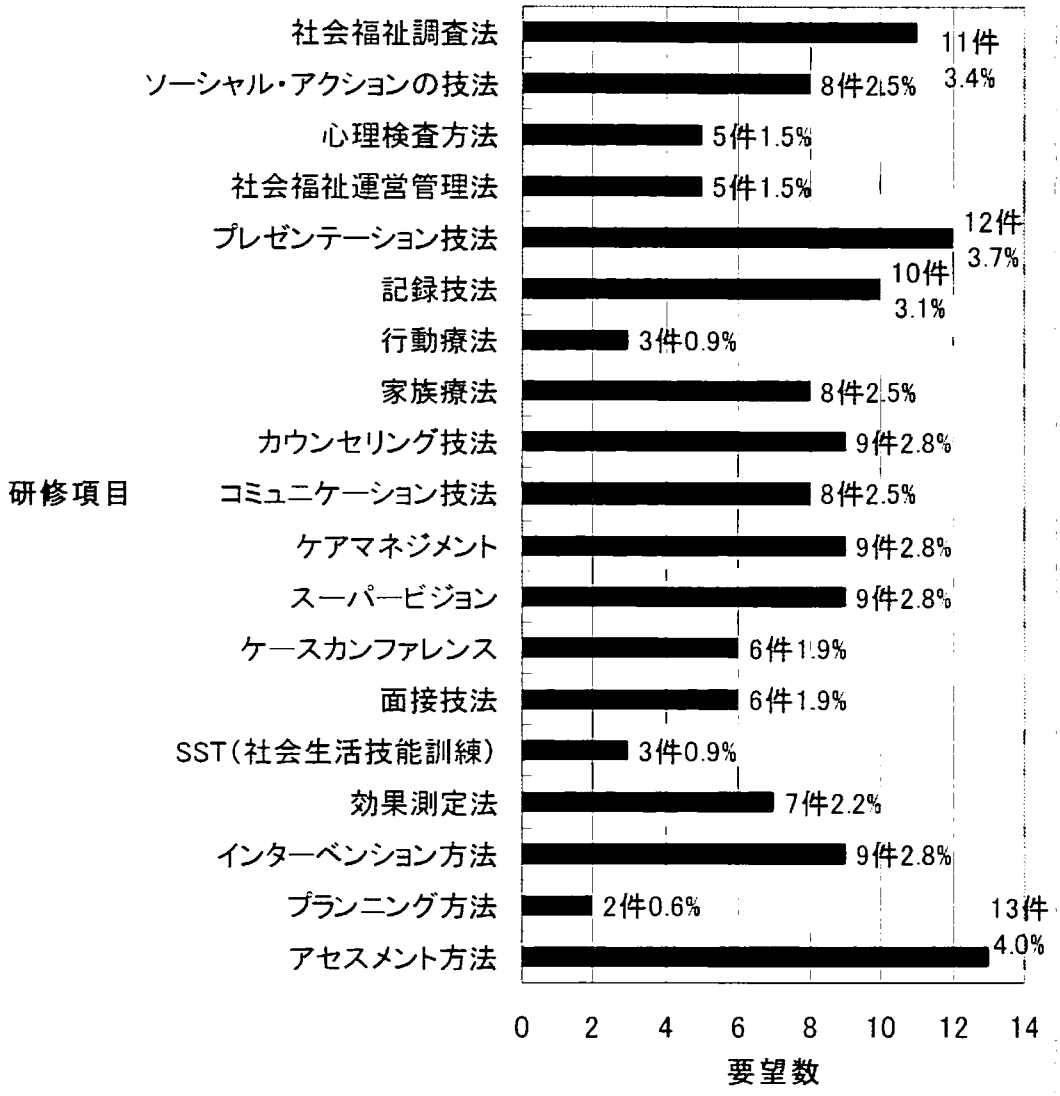
（２位）希望する研修項目の２位として選択された項目（図 20-2）は、「コミュニケーション技法」（5.6％）・「面接技法」（4.0％）・「効果測定」（3.4％）・「アセスメント方法」（3.4％）・「記録技法」（3.4％）であった。

図20-2　ワークショップで受けたい研修内容



（３位）希望する研修項目の３位として選択された項目（図 20-3）は、「アセスメント方法」(4.0%)・「プレゼンテーション技法」(3.7%)・「社会福祉調査法」(3.4%)・「記録技法」(3.1%) であった。

図20-3　ワークショップで受けたい研修内容



7節　希望する教材

授業を進めるに当り、現在求めている教材についてツールおよびそれらの具体的な内容について記述を求めた。(全回答の内容は、資料参照)

記述された教材を援助技術項目別にまとめると、おおむね以下の8点に大別される。

1　直接援助技術に関する教材（157件）

直接的援助技術においては、特に「面接技術」に関するものが多くみられた。

面接技術に関しては、教授達成感について「出来ている」群が上位を占めたにもかかわらず、研修ニーズも非常に高く、教材開発にも希望が高い。社会福祉援助技術演習で取り扱う項目として重点が置かれていると捉えることができる。また、「グループワーク」に関する教材が多く求められていることも着目できる。

アセスメント技法に関しては、面接技法におけるインテーク面接の教材とともに、アセスメントに関する教材への希望が出された。より実践的な事例を用いたアセスメント用紙等の提示を求めるものとなった。

記録に関しては、エコマップをはじめとする記録の技法に関する統一が求められた。実践および実習等で活用できる具体的なものへのニーズが高いことが伺われた。

具体的な主だったニーズは以下の通りである。

(1)ケースワーク・グループワークに関する教材（20件）

・ケースワークをトレーニングするためのワークブック（一連のつながりがあるもの）
・ケースワークの具体的展開が理解できる視聴覚教材
・グループワークの具体的展開が理解できる視聴覚教材(9件)
・グループワークの事例集
・グループワークをトレーニングするためのワークブック

(2)面接に関する教材（59件）

・児童（虐待に関する)、成人、高齢者、障害者等、対象別面接技術のビデオ
・医療福祉関係・ケアマネージャーの面接ビデオ
・インテーク面接、訪問面接、ケースカンファレンスのビデオ
・模擬面接を進めるためのビデオ
　（実際に利用者と接しているようなアングルでワーカーの応答のないもの）
　（良い面接例と悪い面接例を示したもの）
・コミュニケーションパターンに関するビデオ

・学習障害やＡＤＨＤに対する面接技法のワークブック
・生育歴等、インテーク面接での聞き取りのワークブックあるいはマニュアル
(3)アセスメントに関する教材（34 件）
・アセスメント方法をトレーニングするための段階的ワークブック
・困難事例別アセスメントビデオ
・実際に使われているアセスメントシート
(4)記録に関する教材（31 件）
・エコマップの書き方のマニュアル
・マッピング法の書き方のマニュアル
・記録法のビデオ
・実習体験を文章化し、記録する方法のマニュアル（観察のポイント、表現方法、考察の仕方等）
(5) その他（13 件）
・難事例別の支援計画方法、難事例別の介入方法などのビデオ
・ジェネリックとスペシフィックの具体的例示ビデオなど
・評価ポイントを考察できるマニュアル(3 件)
　・評価の視点とマニュアル（ビデオ）
　・援助における判断ができるような能力がみにつくもの。

2　間接援助技術に関する教材（25 件）

間接援助技術は教授項目としては、分担項目に上げられていない養成校も多いなか、コミュニティ・ワークに関する教材への要望が多く掲げられた。

具体的な主なニーズは以下の通りである。

・コミュニティ・ソーシャルワークに関するテキスト
・コミュニティ・ワークに関するビデオ(援助技術面・ロールプレイに役立つもの)
・住民福祉教育のための実践プログラム企画・立案のためのテキスト
・社会福祉調査法、社会福祉計画法、社会福祉運営管理に関する「ソーシャルワーク」の視点がわかる教材
・ソーシャル・アドミニストレーション、運営管理等の具体的なビデオ
・ソーシャル・アクションやアドミストレーションなどに適した具体的なモデルとなる事例（地域、地図、人口密度などの「コミュニティ」タイプ）
・ネットワーキング（多様な分野において）のビデオ

3　社会福祉技術演習の捉え方と方法に関する教材（79件）

援助技術演習の意義や方法に関する教材の中でも、特に事例および事例研究に関するものが多く求められた。特に詳細に対象別・場面別・課題別等の要望があり、擬似的ではあるが、多様化するニーズに対応でき得るよう、より実践現場を意識した教材が求められていることが示された。

具体的な主なニーズは以下の通りである。

(1)事例に関する教材（41件）

・事例集（課題別の編集）

・整理されていない生のままの事例。事例集の多くは整理されていて、逆に学生の作業用には使いづらい。

・教材として使用する高齢者、障害者、家族支援等への援助事例のビデオ

(2)事例研究に関する教材（7件）

・事例研究の方法を示したマニュアルと事例集

・「事例研究」をしたあとの、学びを整理するためのワークブック

(3)ロールプレイに関する教材（15件）

・ロールプレイの事例集・ワークブック

・ロールプレイングの模擬授業などの研修会

(4)その他（16件）

・演習テーマに沿ったプレゼンテーションのビデオ

4　社会福祉援助技術演習の構成要素に関する教材（9件）

援助技術の視点、目的、価値、倫理および生活問題や社会資源等を示す教材の中では、価値観や人権擁護に関する援助技術演習の課題に関するものが求められた。

具体的な主なニーズは以下の通りである。

・いろいろな価値観や考え方を提供できるビデオ

・人権擁護の思想に基づいたケース対応の事例集（アセスメントから援助方針の確立までがわかるもの）

・社会資源や制度について視覚に訴えるようなビデオ

5　人間関係に関する教材（9件）

自己理解・他者理解、コミュニケーション技法等といった人間関係に関するテーマの教材としては、自己覚知およびコミュニケーションに関するものが要望として提示された。

具体的な主なニーズは以下の通りである。

・自己知覚のためのワークブック又はアセスメント表
・コミュニケーションパターン・方法に関するビデオ

6　関連援助技術に関する教材（48件）

関連援助技術に関しては、特に実践現場に関する教材を求めるものが多くみられた。すなわち、「社会福祉援助技術演習」を「社会福祉援助技術現場実習」と関連して位置づけている養成校のニーズか、社会福祉士が活動する現場に関する教材を求めるものがみられた。特徴としては社会福祉施設での利用者の様子や社会福祉士の業務を、より具体的な方法、例えばビデオや事例集で示すことを求めるものであった。

その他、ケアマネジメントやケースカンファレンスに関するビデオ教材等を求めるものがあった。

具体的な主なニーズは以下の通りである。

(1)実践現場に関する教材（29件）
・社会福祉士・ＭＳＷ、生活相談員等の具体的業務を紹介するビデオ
・対象別、領域別(施設・機関)をわかりやすく紹介したビデオシリーズ
・面接場面や施設での生活の様子のビデオ
　附属教材として映像としては出てこない情報(利用者の健康状態、生活歴等の情報)が示されているもの。
・連携(他職種)の各施設・機関における実際のビデオ
・社会福祉援助技術現場実習指導と一体となった援助技術方法、教授法のワークブック
・実習の現場に入り学生と一緒に課題・問題を具体的に解決する方法
・実習中につまずく初歩的なトピックスへのアドバイス集
・ソーシャルワーカーの気持ちの動きも含めた事例集
(2)ケアマネジメントに関する教材（4件）
・ケアマネジメント技術に関するビデオ
・ケアマネジメントの技法を学生が学ぶためのワークブック
(3)ケースカンファレンスに関する教材（6件）
・ケースカンファレンスの方法のビデオ
・他職種との連携、ケースカンファレンスの進め方に関するマニュアル等

7　教授法に関する教材（12件）

少数ではあるが、教授法に関する教材の具体的な要望もみられた。これらは、多様化する社会福祉士の実践場面に伴い、教授すべき援助技術も多岐に渡り、担当者の切実なる要望であると捉えることができよう。

具体的な主なニーズは以下の通りである。

・授業の進め方マニュアルみたいなもの
・演習の教材とその使い方マニュアル
・グループワークを学生に教えるための教師用テキスト
・他大学の演習授業のビデオ
・教材作成の手順及び留意事項（ワークシート作成含む）

8　その他（26件）

・メディア教材として、e－Learningとして利用可能なもの。データベース化されたもの
・ハードウエア（ビデオカメラ、テレビ、録音機器）
・教材や新しい援助技術、あるいは教授法に関する研修の情報提供
・教材は自己開発するものであり、既製の教材の必要性を感じない

希望する教材のツールとしては、ビデオをはじめとする視聴覚教材、あるいは事例集、ワークブック等従来から用いられてきたものが提示される傾向にあった。少数意見としては、「e-learningとして利用可能なもの」「データベース化されたもの」「既存のものではなくコンピュータ活用による教育支援ツール」（4件）等、メディア導入の近年の動向を反映するものも提示された。

また、少数ではあるが「授業の進め方のマニュアル」や「学生に教えるための教師用テキストと学生用テキストを分けてほしい」、「他大学の円融の授業ビデオ」等にみられるように教授法に関する教材への希望も示された。これらは、多様化する社会福祉士の実践場面に伴い、教授すべき援助技術も多岐に渡り、担当者の切実なる要望であると捉えることができよう。

具体的な内容については、これまでも取り扱われてきた内容をより細分化した場面設定（対象別・実践領域別・利用者の視点あるいは専門職の視点）、あるいは擬似的に社会福祉実践現場や社会福祉士等の専門職の見学、体験、学習ができるものが求められている。また、少数意見としては「初級・中級・上級というようなグレード別」（2件）があげられた。これは、開講年次の幅広さによる学生の学習進捗状況、あるいは4年生大学、短期大学、養成校、通信課程な

ど様々な形式の養成システムにおける課題が推測される。

さらに様式としては、ドリル式あるいはフローチャート式のワークブックや事例集・テキスト等が求められた。また、より具体的なものとして「様々なツール集。それをコピー、印刷して使えるもの」、「事例研究をしたあとの学びを整理するためのワークブック。事例集とワンセットのもの」あるいは「変容点をピンポイントし、その変容法を明示し効果のエビデンスを証明できる実践的理論と技法を説明する教科書」等があった。

8節　まとめと考察

調査結果については、5項目19問に渡って分析した。

主な調査結果としては、本調査が日本社会福祉士養成校協会に加盟する全養成校の「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発ニーズを明らかにすることを目的としたものであったが、各担当教員の意向を把握することができ、今後の取り組みへの貴重な資料を得ることが出来た。

また、各養成校の「社会福祉援助技術演習」科目の開講方式についても実態を把握することができたことは、社会福祉士養成における教育目標および教授内容についても議論し検討すべき論点の手がかりを掴むことができた。

さらに、社会福祉士の活動の場や養成機関の多様化に対する、各養成校および各教員からの課題も多く出され、本協会への期待の大きさが伺えた。

(1)調査対象者の属性

基本的属性等については、女性が40.7%、男性58.6%とやや男性が多く、年齢分布状況をみると、40代が34.9%と最も高く、平均年齢は45歳であった。

また、実践・臨床(社会福祉・医療等)現場経験年数は11年以上が44.4%と最も高く、次いで6～10年が18.8%であった。その経験現場・機関(複数回答可)としては、社会福祉施設(54.6%)、医療機関(35.1%)が上位を占めた。

社会福祉分野における教育経験年数に関しては、11年以上が31.5%、6～10年が29.6%と続いた。実践・臨床現場経験年数とともに、教育経験年数も中堅あるいはベテラン領域といわれるものが多いという実態が明らかになった。

しかしながら、「社会福祉援助技術演習」を担当した年数に関しては、1～2年(40.1%)あるいは3～5年(29.0%)という経験年数の短い者が7割を占める現状であった。

取得している社会福祉関連の専門資格に関しては、「該当するものがない」とした者が半数(55.6%)を超えた。有資格者(複数回答可)については、上位から社会福祉士(35.0%)、介護支援専門員(13.8%)、精神保健福祉士(6.3%)、介護福祉士(5.0%)、保育士(4.1%)であった。

したがって、「社会福祉援助技術演習」教育に携わる教員の約4.5割が何らかの社会福祉関連の専門資格を有しており、これらの結果は、担当教員のうち、実践・臨床現場経験者が83%を占める故であると考えられる。

(2)各校の「社会福祉援助技術演習」開講形式について

「社会福祉援助技術演習」開講学年(複数回答可)は、3年次開講(61.3%)が最も多く、2年次開講(50.8%)と続いた。また少数ではあるが、2年次～3年次等という複数年に設定し、学生の援助技術の習得・学習効果を考慮している養成

校もあった。開講年次の設定については、演習担当の方法にも関連がみられ、「演習と実習を関連させ分野別に担当」(10.5%)というものもあった。

演習担当方法としては、約半数近い(45.1%)養成校で、「一人の教員が全ての演習テーマについて教授する」という一人の教員がマルチに対応する形で援助技術の教授を行っていることが明らかになった。これらの結果が、教授項目の選択に反映している可能性もあるのではないかと考えられる。

開講形式については、各校の「社会福祉援助技術演習」の位置付けまたは学習目標等の設定の違いによるものと考えられる。例えば、社会福祉援助技術現場実習と関連付け、実習事前学習も踏まえながら、分野別・配属別の内容に重点を置くよう取り組んでいる場合には、実習配属前に「社会福祉援助技術演習」科目を設定している。あるいは、配属実習において学生自身が実際に体験したことを演習に活かすために社会福祉援助技術現場実習修了者が履修できるように設定している場合等である。

(3)「社会福祉援助技術演習」授業について

「社会福祉援助技術演習」で展開する項目を「技法」および「課題・テーマ」の２分野２４項目を提示し、担当教員個人の教授内容および教授達成度について５段階評価（「良く出来ている」「出来ている」「あまり出来ていない」「出来ていない」「分担に入っていない」）で問うた。

それらの結果から、以下の２点について指摘することができた。

第１点目は、各項目の「出来ている」群および「出来ていない」群の比較から、「技法」の 16 項目に比べ、「演習課題・テーマ」の８項目に対する「出来ている」群が上位を占める割合が高いことが示された。

すなわち、「社会福祉援助技術演習」において、具体的な技法の伝達より、社会福祉専門職としての倫理観等の伝達に力点をおいていると捉えることができよう。あるいは、個人を対象とした具体的な対人援助技術および関係は、教室において教授可能であるが、グループや教室を超えた、技法・テーマは、体験化しづらく、提示する事例も具体性に欠ける傾向があるからであると推測することができる。

第２点目は、「援助技法」に示した、「社会福祉調査法」「社会福祉運営管理法」「ソーシャル・アクション」「ソーシャル・プランニング」、いわゆる間接援助技術に位置づけられている項目は、「分担に入っていない」とするものが 2.5 割前後を占める結果であった。

その理由としては、時間的制約、あるいはこれらの教授内容については他に専門科目を設定し、「社会福祉援助技術演習」という科目内では取り扱わないとしている等であると考えられる。また、開講年次との関連から、「社会福祉援助

技術演習」は、専門分野の導入期として対人援助の基礎伝達、あるいは社会福祉援助技術現場実習と関連づけていると推測することができる。

しかし、社会福祉援助技術は個人や家族というミクロを対象とした場面だけで活用される技術ではなく、実践・臨床現場では、例えば地域社会への働きかけや施設管理・運営等のマクロを対象として活用する技術であることは言うまでもない。今後の課題としてグローバルな視点を持ち、ジェネリックな技術として「社会福祉援助技術」を実践できるよう、教授する必要性があるのではないかと考えられる。

他の科目によってカバーする場合や、他の援助技術演習担当者が実施する場合には、十分な打合せのうえでジェネリックな「社会福祉援助技術」が教授されるよう工夫することが求められる。また、通信制など養成校の種類によっては、援助技術演習の時間数が非常に限られている。そうした場合には、どの範囲までの「社会福祉援助技術」を教授するべきなのか、研修プログラムを検討するわれわれ研修委員会としても明確化しておくことが求められている。

(4)研修ニーズについて

援助技術・技法の研修内容として希望する項目は、「アセスメント方法」(51.5%)が最も高く、次いで「コミュニケーション技法」(42.3%)、「面接技法」(42.6%)、「記録技法」(40.7%)、「プランニング方法」(38.6%)、「スーパービジョン」(38.6%) であった。

「社会福祉援助技術演習」の担当項目として上位を占めた「アセスメント」「面接技法」「コミュニケーション技法」への研修ニーズがそれぞれ50%前後と非常に高いことが明らかになった。さらに、担当項目としてその教授達成度が「出来ている」と肯定的な自己評価を持っていると回答している項目「コミュニケーション技法」「面接技法」が、研修ニーズとしても上位にあがっているのは、さらにスキルの向上を目指している現れと捉えられる。

教授法の研修内容については、「使える教材の情報」と「特定の援助技術習得のためにワークショップへの参加する機会」(47.5%)が最も高く、「模擬授業を参観する機会」(39.5%)、「学生の技術取得度の評価方法」(35.2%)、「学生の理解度の評価方法」(34.9%) と続いている。

研修内容として、「ワークショップへ参加する機会」「使える教材の情報」「模擬授業を参観する機会」が上位を占めると言うことは、研修において自らの授業へのヒントを得たいというニーズが高いものと考えられる。特に、「使える教材の情報」の高さは、『演習展開上で困っていること』において、「適切な視聴覚教材が分らない」「適切なテキストがない」という項目が上位を占めていることの裏づけであり、研修制度と同時に、教員への情報提供やスーパーヴィ

ジョンの機会の検討も必要であることが伺えた。

(5)教材ニーズについて

希望する教材のツールとしては、ビデオをはじめとする視聴覚教材、あるいは事例集、ワークブック等従来から用いられてきたものが提示される傾向にあった。少数意見として、メディア導入の近年の動向を反映するものも提示された。また、少数意見として教授法に関する教材への希望も示された。

具体的な内容については、これまでも取り扱われてきた事例等の内容をより細分化した場面設定（対象別・実践領域別・利用者の視点あるいは専門職の視点)、あるいは擬似的に社会福祉実践現場や社会福祉士等専門職の学習(見学、体験等を通じて)ができるものを求められた。

特に、場面設定については、「高齢者の事例に偏っているのではないか」との意見もあり、他に児童、障害者のみならず、学習障害者やADHD、コミュニケーション障害のある事例等具体的な対象別、または危機対応場面、訪問面接場面やマイクロカウンセリングを使用した面接場面等、多様な場面設定の教材を求めるものがあった。さらにケアマネージャーや新人ソーシャルワーカー等の援助者の多彩な設定を求めるものや、利用者のみの相談が入り、援助者の模範回答のない教材を要望するものもあった。

また、擬似的な社会福祉実践現場や社会福祉士等専門職の学習については、実際に現場を訪れる学習方法だけではなく、教室内で教材を通じて社会福祉施設や機関の業務や、社会福祉士や医療ソーシャルワーカー等の具体的な業務内容が理解できるものが求められた。それらには模範的に作られたものではなく、ドキュメントや臨場感を要望されている。

様式としては、ドリル式あるいはフローチャート式のワークブックや事例集・テキスト等が求められた。

(6)自由記述（資料参照）

自由記述については、回答者の４分の１以上(87件)に何らかの記述がみられた。回答には「社会福祉援助技術演習担当者の資質」や「援助技術教育に関する問題意識あるいは今後の課題」等に関する積極的なものなども多くみられた。

これらは、社会福祉士養成に関する課題の表れと、本協議会の活動に対する関心の表れといえよう。

第５章　「社会福祉援助技術演習」テキスト分析

１節　テキスト分析の意義と目的

社会福祉援助技術演習（以下、技術演習と略す）は、社会福祉士及び介護福祉士法（以下、福祉士法と略す）のもとで必修科目として設定され、社会福祉士養成教育においては、講義科目による主として知的理解と、実習科目による実践的理解をつなぐという意味で、中核となる科目のひとつであるといってよい。技術演習は、1989 年の福祉士法施行当初は 60 時間と規定されていたが、「福祉専門職の教育課程等に関する検討会報告書」（1999 年）によって、120 時間と倍増された。その理由として、同報告書では、①人権の尊重、自立支援等の理念を具体的に理解し、援助の過程で的確な対応ができるようにする、②援助の対象（問題）の理解を深めるために、人の心を理解し、意志の疎通をうまく行うことができるようにする、③生活全体への援助を行うための相談援助技術をはじめ、各種の援助技術を総合的に活用できるようにする、と指摘されている。

福祉士法制定以前にも社会福祉専門教育において技術演習に相当する科目は存在していたが、『社会福祉援助技術演習』を題名に冠するような、技術演習で用いられることを第一義的な目的として作成されたテキスト（以下、技術演習テキストと称する）が見られるようになったのは、福祉士法制定以後のことである。だが、今日まで技術演習テキストはそれほど多くの種類が発行されているわけではない。種類こそ限られているが、その内容や構成はバラエティに富んだものとなっており、技術演習テキストのあり方が問われていると言えるだろう。

ソーシャルケアサービス従事者養成・研修研究協議会の『社会福祉系大学、専門学校、高等学校福祉科等におけるソーシャルワーク教育方法および教育教材の開発に関する研究 報告書』（2002 年）では、表１のように、社会福祉援助技術演習で使用されている教科書・副読本の実態調査結果を紹介している。回答した技術演習担当者のうち、教科書等について指定していないとの回答と無記入とを合わせて約６割にのぼるが、教科書等を使用しているとの回答には、46 種類もの教科書等が挙げられた。そこでは教科書と副読本とが区別されていないものの、学術書、辞書、統計書、文芸書など副読本と思われるものを除いてみても、多種多様の教科書が使用されており、「社会福祉援助

技術演習の授業に関しては、各担当教員が、様々な材料を活用し創意工夫しつつ授業を展開していることが推測される」と結んでいる。

このような実態は、一方では画一的でない多種多様な技術演習が試みられているということができるが、他方では技術演習の全体像が未確立であることを意味しているとも考えられる。いずれにせよ、福祉士制定以後見られるようになった技術演習テキストは、10余年というスパンのなかで趣を大きく変化させてきており、技術演習テキストのあり方についての示唆を得るための分析作業が待たれていたと言えよう。本節はその試みのひとつである。

表1　「社会福祉援助技術演習」の教科書・副読本など

分析対象	タイトル	発行所	採用点数
*	新・社会福祉援助技術演習	中央法規出版	13
*	改訂・社会福祉援助技術演習	みらい	5
*	社会福祉援助技術演習	相川書房	4
*	社会福祉援助技術演習	誠信書房	3
*	社会福祉援助技術演習	川島書店	1
	社会福祉援助技術各論	中央法規出版	1
	社会福祉援助技術総論	中央法規出版	1
	社会福祉援助技術総論－人を認め支え生かしあう－	黎明書房	1
	社会福祉援助技術論Ⅰ	中央法規出版	4
	社会福祉援助技術論Ⅱ	中央法規出版	2
	社会福祉援助方法	有斐閣	3
*	社会福祉実習	中央法規出版	2
*	社会福祉実習サブノート	中央法規出版	1
	社会福祉士実践事例集Ⅱ	中央法規出版	1
	事例を通して学ぶ社会福祉援助	相川書房	1
*	福祉実践演習ブック	中央法規出版	3
	新・社会福祉とは何か	ミネルヴァ書房	1
	社会福祉実践の新潮流	ミネルヴァ書房	1
	ソーシャルワーク事例集	中央法規出版	1
	ソーシャルワークの価値と倫理	中央法規出版	1
*	対人援助－ソーシャルワークの基礎と演習－	ミネルヴァ書房	1

	ソーシャルワーク倫理ハンドブック	中央法規出版	2
	ソーシャルワークを学ぶ	学文社	3
	ソーシャルワーク実践における家族エンパワメント	中央法規出版	1
	医療ソーシャルワークの実習指導ガイドブック	(不明)	1
*	価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習	中央法規出版	4
	事例によるケースワーク演習1～3	川島書店	1
	ケースワーク・グループワーク	光生館	1
	ケースワークの原則	誠信書房	2
	福祉グループワークの理論と実際	ミネルヴァ書房	1
	高齢者援助における相談面接の理論と実際	医歯薬出版	1
	ケア・マネジメント概論	中央法規出版	1
	子どもの援助と子育て支援	ミネルヴァ書房	1
	児童相談事例集	厚生労働省	1
	国民の福祉の動向	厚生統計協会	1
	社会福祉小六法	ミネルヴァ書房	2
	新・福祉カウンセリング	日本文化科学社	1
	福祉カウンセリング	久美	1
	マイクロカウンセリング	川島書店	1
	面接～人の立体把握のために～	FK研究グループ	1
	面接技法から学ぶ	日本看護協会出版	1
	セルフヘルプ・グループの理論と展開	中央法規出版	1
	人間行動と社会環境	ミネルヴァ書房	1
	異和感と援助者アイデンティティ	日本看護協会出版	1
	大学－学問－教育・論集	三一書房	1
	アルジャーノンに花束を	早川	1

(出所) ソーシャルケアサービス従事者養成・研修研究協議会『社会福祉系大学、専門学校、高等学校福祉科等におけるソーシャルワーク教育方法および教育教材の開発に関する研究 報告書』2002年8月、262～263頁を修正。

(凡例) 左端の＊印は、今回の分析対象とした10点を示す。

2節　分析の対象

今回は、表1を参考にしながら、技術演習のテキストとして活用されることを想定して作成されたと思われるテキスト10点（＊印）を抽出し、さらに筆者らが追加した8点を加えて、18点を分析の対象とした。分析対象としたテキストは、表2のように、1988年以降刊行され、本報告の執筆時（2003年2月）までに刊行されたものに加え、2003年3月末までに刊行予定のもの1点が含まれている。

ただし、技術演習では事例の活用が重視されているが、タイトルに事例集と銘打っているものについては、今回は分析対象から除外した。

表2　分析対象としたテキスト

1．平岡蕃・宮川数君・黒木保博・松本恵美子『対人援助 ソーシャルワークの基礎と演習』ミネルヴァ書房、1988年
2．白石大介『対人援助技術の実際』創元社、1988年
3．仲村優一監修『社会福祉援助技術演習』中央法規、1990年
4．岡本民夫編『社会福祉援助技術演習』川島書房、1995年
5．尾崎新『社会福祉援助技術演習』誠信書房、1995年
6．P．デイ他（菱川愛・北島英治・松本栄二訳）『社会福祉援助技術総論』筒井書房、1995年
7．川田誉音ら編『社会福祉援助技術演習』みらい、1995年
8．黒澤貞夫『事例でみる・学ぶ 福祉実践演習ブック』中央法規、1995年
9．久保紘章編『社会福祉援助技術演習』相川書房、1996年
10．社会福祉実習研究会編『社会福祉実習サブノート 初めて実習生となるあなたへ』中央法規、2000年
11．(社)奈良県社会福祉協議会編『ワーカーを育てるスーパービジョン　よい援助関係をめざすワーカートレーニング』中央法規、2000年
12．社会福祉教育方法・教材開発研究会『新・社会福祉援助技術演習』中央法規、2001年
13．社会福祉実習研究会編『社会福祉の実習事例から学ぶ　実習生のための対人援助技術』中央法規、2001年
14．深沢里子・スーザン・ヴォーゲル監修『社会福祉援助技術演習』光生館、2002年
15．北島英治・副田あけみ・高橋重宏・渡部律子編『ソーシャルワーク演習(上)』有斐閣、2002年、及び黒木保博・小林良二・坂田周一・森本佳樹編『ソーシャルワーク演習(下)』有斐閣、2002年（上下巻で1点とした）
16．川村隆彦『価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習』中央法規、2002年
17．福祉士養成講座編集委員会編『社会福祉援助技術演習』中央法規、2003年
18．澤伊佐夫・小嶋章吾・高橋幸三郎・保正友子編『社会福祉援助技術演習ワークブック』相川書房、2003年（刊行予定）

3節　分析の視点及び方法

技術演習テキスト分析の視点は、以下に示すような「社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容」（昭和63年2月12日厚生省社会局長通知、別添1）に掲げられている、社会福祉援助技術演習の目標及び内容を参考にした（以下、通知とする）。

目標
1　社会福祉の専門援助技術を、具体的な事例や援助場面を想定した実技指導（ロールプレーイング等）を中心とする演習形態により、社会福祉援助技術に関する講義及び現場実習と関連させながら、個別指導ならびに集団指導を通してその精度を高めつつ習得させる。
2　学生個々人が自分自身で学習し、考え、主体的に行動する態度を涵養する。
3　演習のなかで、具体的に人権尊重、権利擁護、自立支援について理解し、実際に行動できるようにする。さらに、在宅での生活支援も視野に入れて理解させる。
内容
具体的な援助事例を体系的にとりあげるなどして、社会福祉援助技術をその援助過程を含め具体的に理解させるため担当教員による個別指導並びに集団指導のもとで、学生自身が積極的に参加できる様にすすめる。
さらに、基本的なコミュニケーション等を含めた社会福祉援助技術が学生個々人に身につくよう、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を実施する。その際、次の点に留意すること。
1　実習前においては、具体的な課題別の事例を活用し、相談援助業務に必要な専門援助技術、面接実技、記録実技、評価・効果測定実技等についての指導を行い、講義の内容を深めて身につけさせるようにする。
2　実習後においては、実習総括をふまえて、社会福祉援助技術をより深めて身につけさせるようにする。

これらは、技術演習科目の授業展開の指針であるが、技術演習としてとりあげるべきテーマの範囲やプログラムについては明示されていない。にもかかわらず、技術演習テキストの作成指針としても有効であると考えられることから、ここから分析視点として、次の6点を抽出した。

分析の視点

①目標：援助技術の習得、価値観の習得、主体性の獲得をめざす。具体的には、在宅での生活支援も視野に入れ、人権尊重、権利擁護、自立支援について理解し、具体的に行動できるようにする。

②方法：個別指導と集団指導を組み合わせ、学生の積極的な授業参加を図る。

③形態：実技指導（ロールプレイング等）を中心とする。

④素材：具体的な事例や援助場面を体系的にとりあげる。

⑤科目間の関連：社会福祉援助技術論や社会福祉援助技術現場実習と

関連させる。特に、実習前後の実施時期を考慮する。

分析方法

今回は、分析対象としたテキストとその目次から、まず刊行順にとりあげられているテーマを抽出し、次にその配列を一覧表（表３）に作成し、概観するという方法をとった。それにより、１～53のテーマと、Ａ～Ｆという６つのカテゴリーに分類した。

カテゴリーＡ（技術演習論）は、A1 技術演習の意義、A2 演習の方法、A3 ロールプレイ、A4 感受性訓練、A5 エンカウンター、A6 事例研究、A7 事例、A8 プレゼンテーションと、いった技術演習のとらえかたと方法に関するテーマをまとめることができる。

カテゴリーＢ（構成要素演習）は、B1 社会福祉援助技術の視点・目標・価値・倫理、B2 エンパワメント、B3 生活問題、B4 社会資源、B5 社会福祉施策、B6 ソーシャルワークの構成、B7 実践アプローチ／実践モデル、B8 ソーシャルワーカーの役割、といった社会福祉援助技術の構成要素に関するテーマをまとめることができる。

カテゴリーＣ（人間関係演習）は、C1 自己理解・他者理解・適性、C2 生活史、C3 人間関係、C4 コミュニケーション技法、C5 関係技法といった、人間関係に関するテーマをまとめることができる。

カテゴリーＤ（直接援助技術演習）は、D1 援助過程、D2 個別援助技術、D3 インテーク技法、D4 アセスメント技法、D5 プランニング技法、D6 面接技法、D7 マッピング技法、D8 記録技法、D9 評価技法、D10 集団援助技術、といった直接援助技術の過程と技法に関するテーマをまとめることができる。

カテゴリーＥ（間接援助技術演習）は、E1 地域援助技術、E2 社会福祉調査、E3 社会福祉運営管理、E4 社会活動法、E5 ケア／ケースマネジメント、E6 ソーシャルサポートネットワーク、E7 社会福祉計画、といった間接援助技術に関するテーマをまとめることができる。

カテゴリーＦ（関連援助技術演習）は、F1 レクリエーション、F2 カウンセリング、F3 心理テスト、F4 ケースカンファレンス、F5 チームワーク、F6 職場研修、F7 スーパービジョン、F8 ケアワーク、F9 実習といった、関連援助技術に関するテーマをまとめることができる。

このような分類には、議論の余地があると思われるが、ここでは援助技術演習テキストがとりあげているテーマのおおまかな傾向を知ることが目的であるので、あくまでも仮の分類としておきたい。

表３　技術演習テキストのテーマ分析の凡例を以下に記しておく。

（凡例）左端のＡ１～Ｆ11の表記であるが、アルファベットはカテゴリーを示し、数字はそれぞれのカテゴリーごとのテーマに付けられた番号である。カラム内の数字は、文献ごとのテーマの配列順を示している。右端の数字は、それぞれのテーマが取り扱われている文献数を示している。

表3 技術演習テキストのテーマ分析

	文献No.	*	2	3	4	5	6	7	8	9
	出版社	ミネルヴァ	創元社	中央法規	川島書店	誠信書房	筒井書房	みらい	中央法規	相川書房
	監修者・編集者・著者	平岡蕃、宮川数君、黒木保博、松本恵美子	白石大介	仲村勇一監修	岡本民夫編	尾崎新	P.デイ他著菱川愛・北島英治・松本栄二訳	川田誉音編集代表	黒澤貞夫	久保紘章編
	書名	対人援助-ソーシャルワークの基礎と演習	対人援助技術の実際	社会福祉援助技術演習	社会福祉援助技術演習	社会福祉援助技術演習	社会福祉援助技術総論<基礎と演習>	社会福祉援助技術演習	事例でみる・学ぶ福祉実践演習ブック	社会福祉援助技術演習
	発行年	1988	1988	1990	1995	1995	1995	1995	1995	1996
A1	演習の意義				1	1				
A2	演習の方法				2					
A3	ロールプレイ				4	2				4
A4	感受性訓練				5					
A5	エンカウンター				6					
A6	事例研究				3	5		4		9
A7	事例		2	1						
A8	プレゼンテーション									
B1	視点・目標・価値・倫理						1	1	1	
B2	エンパワーメント									
B3	生活問題	6								
B4	社会資源						5			
B5	社会福祉施策						6		5	
B6	ソーシャルワークの構成									
B7	実践アプローチ／実践モデル				8					
B8	ソーシャルワーカーの役割									
C1	自己覚知・自己理解・適性	3				4			2	1
C2	他者理解									2
C3	生活史							5		8
C4	人間関係	1							4	
C5	コミュニケーション技法									3
C6	関係技法					3				
D1	援助過程	2								
D2	個別援助技術				9		4			
D3	インテーク技法									
D4	アセスメント技法									
D5	プランニング技法									
D6	面接技法		1				2	2	3	5
D7	マッピング技法									6
D8	記録技法		5					3		7
D9	評価技法									
D10	集団援助技術	5			10		3	7		10
D11	レクリエーション							6		
E1	地域援助技術				11					11
E2	社会福祉調査				12					
E3	社会福祉運営管理				13					
E4	社会活動法				14					
E5	ケア／ケースマネジメント							11		
E6	ソーシャルサポートネットワーク							12		
E7	社会福祉計画									
F1	カウンセリング	4								
F2	心理テスト							8		
F3	ケースカンファレンス		4							
F4	チームワーク									
F5	職場研修									
F6	スーパービジョン		3		7			10		
F7	ケアワーク							9		
F8	実習テーマ									
F9	ソーシャルワーク研究法									
F10	情報システム									
F11	利用者保護・サービスの質									

	文献No.	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
	出版社	中央法規	中央法規	中央法規	中央法規	光生館	有斐閣	中央法規	中央法規	相川書房	
	監修者・編集者・著者	社会福祉実習研究会編集	奈良県社会福祉協議会編集	社会福祉教育方法・教材開発研究会	社会福祉実習研究会編集	深沢里子、スーザン・ヴォーゲル監修	北島英治ら編及び黒木ら編	川村隆彦	福祉士養成講座編集委員会編	澤伊佐夫・小嶋章吾・高橋幸三郎・保正	
	書名	社会福祉実習サブノート	ワーカーを育てるスーパービジョン	新・社会福祉援助技術演習	実習生のための対人援助技術	社会福祉援助技術演習	ソーシャルワーク演習(上)及び(下)	価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習	社会福祉援助技術演習	社会福祉援助技術演習ワークブック	取り扱い文献数
	発行年	2000	2000	2001	2001	2002	2002	2002	2003	2003予定	
A1	演習の意義						1		1	1	5
A2	演習の方法						2		2	2	4
A3	ロールプレイ								10		4
A4	感受性訓練										1
A5	エンカウンター										1
A6	事例研究	3		9	1		14		9	10	10
A7	事例		5	11	3	1		6	11		8
A8	プレゼンテーション			8							1
B1	視点・目標・価値・倫理			7			3	1		7	7
B2	エンパワーメント							5			1
B3	生活問題									9	2
B4	社会資源										1
B5	社会福祉施策										2
B6	ソーシャルワークの構成						4				1
B7	実践アプローチ／実践モデル						13				2
B8	ソーシャルワーカーの役割						10				1
C1	自己覚知・自己理解・適性	2	3	1			5			3	9
C2	他者理解			2			11			4	4
C3	生活史										2
C4	人間関係										2
C5	コミュニケーション技法			3			7			5	4
C6	関係技法						12				2
D1	援助過程		4	10			6		3		5
D2	個別援助技術					2				11	4
D3	インテーク技法								4	12	2
D4	アセスメント技法								5	13	2
D5	プランニング技法								6	14	2
D6	面接技法		2	4	2		8	2		15	11
D7	マッピング技法										1
D8	記録技法			5			9			17	6
D9	評価技法			6					7	16	3
D10	集団援助技術							3		18	7
D11	レクリエーション										1
E1	地域援助技術							4	8	22	5
E2	社会福祉調査						17				2
E3	社会福祉運営管理						19			19	3
E4	社会活動法									22	2
E5	ケア／ケースマネジメント										1
E6	ソーシャルサポートネットワー										1
E7	社会福祉計画						18			23	2
F1	カウンセリング									6	2
F2	心理テスト										1
F3	ケースカンファレンス										1
F4	チームワーク									20	1
F5	職場研修									21	1
F6	スーパービジョン	4	1			3				8	7
F7	ケアワーク										1
F8	実習テーマ	1				4					1
F9	ソーシャルワーク研究法						15				1
F10	情報システム						16				1
F11	利用者保護・サービスの質						20				1

４節　分析結果及び考察

分析結果の概要は以下の３点にまとめられる。

第１に、刊行期ごとに取り上げられているテーマの特徴が見られる。

第２に、取り上げられているテーマの頻度に特徴が見られる。複数のテキストに取り上げられているテーマもあれば、１つのテキストにしか取り上げられていないテーマとに、歴然と分かれている。Ｂ、Ｅ、Ｆのカテゴリーでは、１つしか取り上げられていないテーマが全般的に多くなっている。

第３に、カテゴリー別にみると、Ａ技術演習論、Ｃ人間関係演習、Ｄ直接援助技術演習が比較的多いのに対して、Ｂ構成要素演習、Ｅ間接援助技術演習、Ｆ関連援助技術演習は比較的少ない。また、これらの配列に特徴が見られる。

第４に、援助技術の方法について、取り上げられているものと取り上げられていないものとが、歴然としている。

以下、これらの詳細について検討するが、文中、Ａ～Ｅはカテゴリーを示す記号として、また、A1～E8は、カテゴリー別のテーマを示す記号として使用する。

(1)刊行期ごとのテーマの特徴

刊行順に見ると、第１期 福祉士法制定前（1987年～1988年）、第２期 福祉士法施行以後の10年間（1989年～1999年）、第３期 昨今（2000年～現在）、という３期に分類することができると考えられる。

第１期　萌芽期

第１期は、福祉士法が制定され、社会福祉士養成教育において技術演習をどのように展開するか模索されていたと考えられる時期で、いわば技術演習テキストの萌芽期ということができる。

平岡らによるテキスト１は、社会福祉援助技術論の柱となるテーマを、大分類上は網羅しているのに対して、白石によるテキスト２は、援助技術そのものに限定している。この２つの傾向は、後に刊行されるテキストの性格を特徴づける嚆矢となっている。この２書は、技術演習テキストとしては先駆的なテキストして評価することができるだろう。

第２期　提案期

第２期は、福祉士法が施行され、社会福祉士養成教育において実際にテキストが必要とされるようになったという状況を反映して、テキ

ストのタイトルにも、『社会福祉援助技術演習』や類似の名称が冠されるようになり、各出版社からのテキストがひととおり刊行された時期である。いわば技術演習テキストの提案期ということができる。

仲村編のテキスト３のように、タイトルこそ『社会福祉援助技術演習』となっているものの、内容は事例集になっているものは例外的な存在である。ただし、事例の重視は福祉士法制定前も含めて社会福祉専門教育にとって一貫して重要であり、事例を中心としたテキストも、技術演習のテキストとしてひとつのあり方と言えるだろう。今回分析対象としなかったものの、数多くの事例集が刊行されていることを鑑みれば、事例集だけの分析を試みる意義も大きいと思われる。

第２期になって、技術演習の意義や方法に触れたうえで、プログラムを提示するものが見られるようになった。典型的には、岡本編によるテキスト４や尾崎によるテキスト５、久保編によるテキスト９がそうである。この順に沿って、演習プログラムの提示に重点が移っており、テキスト４は、むしろ技術演習論というべき内容となっているのに対して、テキスト９は、技術演習プログラム集というべき内容となっている。テキスト５はその中間に位置すると考えられるが、単著という性格からオリジナリティが高く、かつ著者の実践経験にもとづくユニークなプログラムが提示されている。

また、技術演習論にはあまり触れないで、プログラムの提示を中心としたテキストも多く刊行された。Ｐ．デイらの著で菱川らの訳によるテキスト６、川田編によるテキスト７、黒澤著によるテキスト８がそうである。テキスト６は、タイトルこそ『社会福祉援助技術総論』となっているが、ミクロプラクティスからマクロプラクティスを網羅した、米国のプラグマティックな性格が色濃く反映された技術演習テキストの内容となっている。テキスト７のように、共著によってテーマを幅広く網羅したものと、テキスト５やテキスト８のように、単著によって内容の一貫性とプログラムの整合性を持たせたものという、第１期で示唆されたテキストの２つの傾向がここでも見られる。テキスト７は、ケアワークもテーマに取り上げている点が特徴的である。

この時期の最後に刊行されたテキスト９は、技術演習論、テーマの網羅、プログラムの整合性という３つの点でバランスのとれたものと評価できよう。

第３期　特化期

第３期は、福祉士法が施行されて10年経過後から現在にかけての時期で、とりあげたテーマの拡大と深化という２つの傾向が見られるようになった。いわば技術演習テキストの特化期ということができる。

第３期は、約３年の間に第２期の10年間に匹敵する刊行数に及び、技術演習テキストとしてはバラエティが見られるようになった。その特徴は、テーマを幅広く網羅することに特化したものと、特定のテーマに特化したもの、ワークブックの性格に特化したもの、に分類することができる。そういう意味で、第３期は技術演習テキストの特化期と呼ぶことができよう。

テーマを幅広く網羅したものとしては、社会福祉教育方法・教材開発研究会編によるテキスト12や、北島ら編及び黒木ら編によるテキスト15、澤ら編によるテキスト18があげられる。テキスト12は日本社会事業学校連盟などの関係者によって組織された研究会の成果であり、技術演習テキストとしてとしての標準化を試みたものであると言える。テキスト15は、ヴィネットを多用しテーマを網羅した点に特徴がある。テキスト18は、技術演習の模擬授業で公開されたプログラム集であり、タイトルともなっているように文字通りワークブックとして編集されている。

特定のテーマにしぼったものとしては、実習との関連でプログラムを提案したものでは、社会福祉実習研究会編によるテキスト10やテキスト13があげられる。テーマをスーパービジョンに限定したものでは、(社)奈良県社会福祉協議会編によるテキスト11、また、倫理・価値に限定したものでは、川村によるテキスト16があげられる。

ワークブックの性格に特化したものとしては、最新刊のテキスト17や前述のテキスト18があげられる。

(2)カテゴリー別のテーマの特徴

それぞれのカテゴリーで、どのようなテーマがどの程度取り上げられているかに着目してみる。

Ａ技術演習論では、演習の意義や方法についてとりあげているものは比較的少ない。事例研究以外の具体的な演習方法についてとりあげているものは１点だけである。演習方法として事例研究をテーマにとりあげているものは比較的多く見られる。

Ｂ構成要素演習では、視点・目標・価値・倫理についてとりあげているものは７点と比較的多い。それに対して、他のテーマについてと

りあげているものは、１～２点と乏しい。

Ｃ人間関係演習では、自己覚知・自己理解・適性についてとりあげているものは９点と比較的多いが、他者理解とコミュニケーション技法はそれぞれ４点ずつ、また生活史、人間関係、関係技法はそれぞれ２点ずつと、乏しい。

Ｄ直接援助技術演習では、個別援助技術を一括してとりあげられているものが４点と比較的少ないが、面接技法が 11 点と比較的多い。つまり個別援助技術では、面接技法や記録技法といった技法レベルで取り上げられているものが多い。対照的に、集団援助技術は一括して取り上げられているものだけで７点に及び、逆に技法レベルで取り上げられているものはない。

Ｅ間接援助技術演習も、集団援助技術と同様の傾向が見られ、技法レベルでとりあげられているものは見あたらない。

Ｆ関連援助技術演習では、スーパービジョンが７点と比較的多いものの、他のテーマは１～２点と乏しい。

以上のように、テーマ別にみても、カテゴリー別にみても、テキストによってとりあげているテーマはアンバランスが大きいということができる。最近刊行された複数のテキストのなかには、テーマを網羅的にとりあげたものも見られるが、依然として、Ｂ構成要素演習、Ｅ間接援助技術演習、Ｆ関連演技術演習という３つのカテゴリーについては、全く取り上げられていないものも少なくない。

(3)テーマ配列の特徴

テーマがどのような配列の特徴を示しているかについて、１番目と２番目に位置づけられているテーマが、どのカテゴリーのテーマであるかに着目してみた。

まず、１番目のテーマが位置づけられているカテゴリーは、Ａ技術演習論が６点、Ｂ構成要素演習が４点、Ｃ人間関係演習が３点、Ｄ直接援助技術演習が１点、であった。その他、Ｆ関連援助技術演習には２点ほど置かれていたが、それぞれ実習とスーパービジョンといった特定のテーマに特化したテキストであるため、例外的と考えることができる。したがって、１番目のテーマは、Ａ技術演習論、Ｂ構成要素演習、Ｃ人間関係演習のいずれかのカテゴリーに位置づけられているテキストがほとんどであり、これは妥当であろう。

次に、２番目のテーマは、Ｄ直接援助技術演習が７点、Ａ技術演習論が５点、Ｃ人間関係演習が４点、という３つのカテゴリーに集中し

ていた。ここですでにD直接援助技術演習を偏重する傾向が見られる。

1番目と2番目に位置づけられているテーマの関連を見てみると、1番目・2番目のテーマともにA技術演習論のカテゴリーに収まっているものが4点、C人間関係演習に収まっているものが2点ある。このことは、A技術演習論やC人間関係演習を技術演習プログラムの出発点と考えている著者・編者が比較的多いことを示している。

ただし、2番目のテーマが最も集中していたカテゴリーは、D直接援助技術演習であるが、その場合、1番目のテーマがどのカテゴリーに位置づけられているかを見ると、B構成要素演習が3点、A技術演習論が2点、C人間関係演習が1点、F関連援助技術演習が1点、となっており、これらだけでも6点あった。このことは、1番目と2番目のテーマの配列については、上記の傾向に当てはまらないものも少なくないということができる。

なかでも、D直接援助技術演習を2番目のテーマとしている2点(テキスト13とテキスト14)では、1番目のテーマがいずれも事例となっており、事例→D直接援助技術演習(いずれも個別援助技術)という流れに見られるように、個別援助技術に関する演習を重視する傾向も見られる。このことは、1番目にD直接援助技術演習(個別援助技術)を置き、次いで事例をテーマにしているテキスト2も同様のことが指摘できる。

(4)技術演習の方法

今回は、個々のテキストにおける技術演習の方法について、逐一検討することはできなかったが、方法論について詳細な言及が見られるのは、テキスト4及びテキスト12であり、テキストのなかでは少数にとどまっている。

(5)考察

以上の分析結果を、あらためて分析の視点にてらしてみると、以下のように指摘できる。

第1に、技術演習の目標として、援助技術・価値観・主体性の獲得が最重視されていることを鑑みると、まず、援助技術については例外なく重視されていると言えるが、D直接援助技術演習に偏重している。次に、価値観の獲得は、主として、B構成要素演習のうち、A1視点・目標・価値・倫理のなかで学習することができると考えられる。これをテーマとしてとりあげているテキストは7点あった。そのうち、4点のテキストでは、1番目のテーマとしてとりあげられていた。さら

に、主体性の獲得では、主として、C人間関係演習のうち、C1自己覚知・自己理解・適性のなかで学習することができると考えられる。これをテーマとしてとりあげているテキストは9点あった。そのうち、1番目または2番目のテーマとしてとりあげているテキストは4点であった。いずれのテーマも、技術演習テキストの過半数に満たない現状にあり、テキスト上で重視されているとは必ずしも言い難い。

第2に、技術演習の方法として、個別指導と集団指導の組み合わせと、学生の積極的な授業参加を図るという点については、技術演習のテキスト分析からは推し量ることは難しい。むしろ、シラバス分析や技術演習担当者からのヒアリングによって明らかになるであろう。

第3に、技術演習の形態についても、第2の点と同様である。

第4に、技術演習の素材について、具体的な事例や援助場面を体系的にとりあげるという点であるが、18点のテキストが事例または事例研究をとりあげている。ただ、事例の全体像を取り上げているか、あるいはヴィネットとして取り上げているかという、事例の形態にはばらつきがあり、また、取り上げた事例の体系性については今回は分析していない。テキストで取り上げている事例の如何にかかわらず、テキストを使用する技術演習担当者が、自らの実践体験をふまえ、あるいは別途事例集を使用するなどにより、技術演習テキストを補うことは十分に可能である。

第5に、科目間の関連であるが、これも第2・3の点と同様である。

5節 まとめと課題

(1)まとめ

時期的な傾向とテーマ配列の傾向という2つの側面についてまとめてみる。

第1に、時期的な傾向では、技術演習テキストの刊行時期を、テキスト内容が模索された萌芽期、多彩なテキストが刊行された提案期、内容の特徴が分化する特化期という3期に分けることができた。最近（特化期）のテキストの傾向としては、テーマを幅広く網羅することに特化したもの、特定のテーマに特化したもの（スーパービジョン、実習、価値・倫理など）、ワークブックの性格に特化したもの、という3つの傾向が見られた。だが、E間接援助技術演習やF関連援助技術演習について取り上げられたテキストは乏しい。

第２に、テーマ配列に見られる傾向としては、Ａ技術演習論やＣ人間関係演習を技術演習プログラムの出発点と考えている著者・編者が比較的多い。だが、技術演習を個別援助技術に関する演習に限定されている傾向も見られる。

これら２つの側面から見る限り、技術演習テキストの全体的な傾向は、依然としてＤ直接援助技術演習、特に個別援助技術に偏重していると言わざるを得ない。それは、通知にも見られることだが、社会福祉援助技術演習の内容が「相談援助業務」に矮小化されていることに起因するものであるとも考えられる。もとより、社会福祉援助技術が、利用者の個別化を原則とし、個別的援助技術の重要性をいくら強調してもしすぎることはないものであることは論をまたない。だが、少なくとも、社会福祉士養成課程で用いられる技術演習テキストにおいては、とりあげるカテゴリーやテーマに関しては、バランスのとれたものであることが望ましい。

(2)課題

最後に、技術演習テキストのあり方として、以下の７点を提言する。

①Ａ～Ｆのカテゴリーが、バランスよく取り上げられるべきであろう。

②カテゴリーの配列としては、技術演習の目標からみて、Ａ技術演習論、Ｂ構成要素演習、Ｃ人間関係演習、のいずれかを出発点とするのが妥当であろう。テーマ配列のあり方は、今後の研究に委ねざるを得ない。

③ケアマネジメント、エンパワメント、権利擁護、情報の共有と記録のあり方、ケアワークとの関連、さまざまな場面での面接技法といった、昨今のソーシャルワークに関するテーマや技法等の課題をどのように技術演習テキストに反映させるか検討の余地があろう。

④技術演習テキストの形態や素材の開発や改善の必要上、各種の『事例集』が多数刊行されてきているのと同様に、ワークブック形式のテキストも多数刊行されることが有用であろう。

⑤各種の『事例集』や実習での事例など、技術演習テキストにおける事例の取り上げ方も検討の余地があろう。

⑥技術演習テキストに、社会福祉援助技術論や社会福祉援助技術現場実習との関連が明示されることが望ましい。

⑦社会福祉援助技術演習の趣旨にてらして、技術演習プログラムの妥当性、教育上の効果やその評価方法等も検討されるべきであろう。

6章　まとめと課題

1節　各調査・資料分析結果のまとめ

(1)『社会福祉士養成校教員研究プログラム基盤構築事業』全体

日本社会福祉士養成校協会の研修委員会は、当該事業として以下の事業プログラムを実施することを計画した。2002年度の進捗状況は、下記のとおりである。

① 社会福祉士養成教育の実態と教員の要望に関する調査	実施
② ①をふまえた研修プログラムの骨子の作成	一部実施
③ 社会福祉士養成カリキュラムの教授法の明確化	検討中
④ 教材の開発	一部実施
⑤ 研修プログラムの試行的実施	検討中
⑥ ⑤の評価と研修プログラムの提案	検討中
⑦ 研修プログラム基盤構築に向けての提案	未実施

(2)「社会福祉援助技術演習」の科目設定状況調査

社養協会員校103校から提示を受けた資料調査（『授業要覧』『学生便覧』『履修要項』等）から、科目設定状況を要約すると以下のとおりである。

①科目の名称：1科目対応の場合、全養成校で読替はない。複数科目対応では、多くの場合、Ⅰ・Ⅱ等を付しているに過ぎない。

②設定科目数：養成施設と専門学校では1科目対応、大学と短大では複数科目対応の傾向にある。

③単位数（時間数）：②と同様の傾向が見られる。

④履修年次（時期）：修業年限が短い養成施設や短大等では、在学期間全体にわたり、4年制大学では履修時期の中心は3年次にある。

(3)「社会福祉援助技術演習」教育の実態と要望ヒアリング調査

社養協の7ブロックのうち、5ブロックで9回のヒアリング調査を実施し、33校の33名にヒアリングした。教育実態と要望を要約すると以下のとおりである。

①カリキュラム上の位置づけ：演習を現場実習と関連させて実施している養成校が多い（分析可能であった25校のうち、18校）。

②担当教員数と学生数：ほとんどの養成校が、教員一人あたり15～25名の範囲であった。そのため非常勤講師での対応が多く、教員間の授業内容の統一に困難が見られる。

③配置年次：多くが3年次に配置しており、次いで2年次が多く、あわせて全体の9割以上を占める。4年次の配置もわずかにある。

④授業内容：現場実習と関連させている場合は、基本的な対人援助技術が多い。そうでない場合は、ソーシャルワークの実践モデルが中心となっている。いずれも養成校や教員によって差が大きい。何を教えたらよいのか悩んでいる教員も多く、研修の要望もある。

⑤授業方法：ほとんどの養成校で、ロールプレイや事例検討など実践的な演習方法が採用しているが、それ以外の演習方法にはあまり共通性が見られない。教員の創意工夫に委ねられており、教授法を学びたいという要望が見られる。

⑥教材：教材使用の有無や種類とも、教員による差が大きい。適切な教材選択の判断に困難が見られる。

全体的に、社会福祉援助技術演習のカリキュラム、授業方法、教材等、基本的な要素についての養成校間、教員間での格差が大きく、とりわけ教員の自由裁量に委ねられている点について、社養協などで何らかの基準が必要との意見が少なくない。

(4) 「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発ニーズ調査

社養協加盟校187校を対象に質問紙調査を実施し、324票の有効回答が得られた。担当教員の研修・教材に対するニーズを要約すると以下のとおりである。

①基本的属性：男女比はおよそ6：4。年齢は40歳代が最多。83%が実践経験あり。社会福祉士35.0%をはじめとする社会福祉関連資格の有資格者が半数近くを占める。実践経験と教育経験ともに11年以上が最多で中堅層が多い一方、社会福祉援助技術演習の担当年数は、1～5年が7割近くを占めている。

②開講形式：開講年次は3年次が約6割、2年次が約5割。2～3年次にわたる複数年次が少数ある。半数近くの養成校で、一人の教員が全ての演習テーマについて担当。現場実習と関連させてい

る場合は、分野別の内容に重点を置き、実習前後に履修できるよう設定してある。

③授業：技法 16 項目及び課題・テーマ 8 項目という 2 分野の教授達成度は、前者に比べ後者が高い。教授内容では、間接援助技術を分担していない者が約 2.5 割を占めている。

④研修ニーズ：援助技術・技法では、アセスメント方法、コミュニケーション技法、面接技法、記録技法、プランニング方法、スーパービジョンが上位を占めている。教授法では、教材の情報、ワークショップ参加の機会、模擬授業参観の機会、学生の習得度評価方法や理解度評価方法が上位を占めている。

⑤教材ニーズ：ツールではビデオなどの視聴覚教材、事例集、ワークブックのほか、マルチメディアがあげられている。内容では、多様な対象・領域・視点を網羅し、臨場感ある模擬的な場面設定ができるものがあげられている。様式では、模範解答のないもの、ドリル式やフローチャート式のワークブック、事例集等があげられている。

⑥自由記述より：担当教員の資質や社会福祉援助技術教育に関する問題意識や今後の課題など、積極的な意見が多く見られる。

(5)「社会福祉援助技術演習」のテキスト分析

1988 年から 2003 年 3 月まで刊行されたテキスト 18 点（一部刊行予定を含む）についての分析結果を要約すると以下のとおりである。

①刊行時期による傾向：テキスト内容が模索された萌芽期、多彩なテキストが刊行された提案期、内容の特徴が分化する特化期という 3 期に分けられた。最近の特化期では、広範なテーマを網羅することに特化、特定のテーマに特化、ワークブックの性格に特化という 3 つの傾向が見られる。

②テーマ配列の傾向：1 ～53 のテーマを、A 技術演習論、B 構成要素演習、C 人間関係演習、D 直接援助技術演習、E 間接援助技術演習、F 関連援助技術演習という 6 つのカテゴリーに分類したところ、A や C を技術演習プログラムの出発点としているものが多い。一方、D 直接援助技術演習に偏重している傾向も見られる。

③分析視点にてらして：科目の目標（援助技術と価値観の習得と主体性の獲得）からみると、D 直接援助技術演習に比べて E 間接援助技術演習は弱い。価値観や主体性の獲得についてもテキスト上

重視されているものは多くない。演習の素材では、具体的な事例は多く取り上げられているが、取り上げ方も多様である。

2節　今後の課題と当面の課題

以上、3つの調査と1つの資料分析を実施し、研修委員会として、また、社養協として検討すべき課題の多いことが明らかとなった。以下では、社養協としてある程度時間をかけて検討していくべき今後の課題と、研修委員会がここ1，2年の間に実施すべきと考えられる当面の課題とを分けて記述する。

(1)今後の課題

①社会福祉援助技術論・社会福祉援助技術演習・社会福祉援助技術現場実習（社会福祉援助技術現場実習指導を含む）の3（ないし4）科目の関連の明確化：各校によって科目設定にはかなりの差異が見られるが、少なくともこの3科目の関連性について、社養協としての考えを明らかにするかどうか検討する。

②社会福祉援助技術演習の授業内容、授業方法、教材等の違いに関する意見の明確化：これらについて養成校間・教員間の違いがかなり大きいという実態について、社養協としてどう考えるのかを明らかにする。

③社会福祉援助技術演習の授業内容、授業方法、教材等の標準の設定：何らかの標準が必要であると考えるならば、演習における達成目標等を含めた社養協版のミニマム・スタンダードの確立を検討する必要がある。

④養成校のタイプの反映：その際、演習の体制やカリキュラムの異なる、4年制大学、短大、専門学校、養成施設、あるいは通学制・通信制などを含めた実態と要望を反映させることが重要である。

⑤担当制タイプの教育効果等の検討：一人の教員が全てのテーマを担当するマルチ対応型や、複数の担当教員による対応といった担当制のタイプの違いは、演習テーマの選択やテーマの統一性などの違いをもたらしている可能性も考えられる。それぞれの詳細な実態、背景、教育効果、メリット・デメリット等の明確化が必要である。

(2)当面の課題

①「社会福祉援助技術演習」教授法の研修整備：実践・教育経験のある中堅層が多い一方で、社会福祉援助技術演習の担当経験が短い者が多いという現状を踏まえ、演習の教授法に関する研修プログラムを整備する必要がある。

②テーマに即した教授法提示の検討：倫理・価値等の教育の場合や、具体的なコミュニケーション技術を教育する場合など、それぞれにおける困難性と教授上の課題を明らかにする。

③援助技術別の教授法提示の検討：直接援助技術と間接援助技術の教授上の困難性と課題を明らかにする。

④研修プログラムの提案：援助技術演習で教授する個々の技術についての研修プログラムだけでなく、演習における教授法の研修プログラムの開発が求められている

⑤研修機会に関する情報の提供、担当教員向けのスーパービジョンの機会の提供：研修委員会として、これらのことがどのように可能か検討する必要がある。

⑥教材開発と教材に関する情報提供：テキスト分析の結果として明らかとなった、以下に示す「社会福祉援助技術演習」テキストの重要なポイントを踏まえ、適切な教材を開発する。また、適切な教材に関する情報提供のあり方を検討する。

ポイント：

- ジェネリックな社会福祉援助技術の習得の必要上、広範なテーマがバランスよく取り上げられていること
- 社会福祉援助技術演習の目標から、社会福祉援助技術演習の意義と目的の理解、社会福祉援助技術の構成要素の理解、社会福祉援助技術の基礎となる人間関係や対人援助の習得等のテーマを出発点とし、テーマ配列をバランスよく行っていること
- 多様な演習形態を前提としながらも、「社会福祉援助技術演習」として教授すべき＜必修＞の部分と＜選択＞の部分とを分けるなどの工夫が試みられていること
- 「社会福祉援助技術演習」と、社会福祉援助技術論および社会福祉援助技術現場実習との関連性を明確にしていること
- 各々の演習プログラムの教育上の効果や、自己評価・他者評価のガイドラインを明示していること

社会福祉士の養成において、社会福祉援助技術演習という科目のみが決定的に重要であるわけではない。しかし、少なくとも、教室内における講義系科目による理論知と、現場実習を通して得た体験や実践知とが、社会福祉援助技術演習において統合されるという意味で、社会福祉士養成にとって中核となる科目であることは間違いない。

社会福祉援助技術演習は、基本的には厚生労働省の通知に掲げられている目標や留意点を踏まえて実施すべきであるが、多種多様な養成校の実情から、社会福祉援助技術演習の内容や方法も、多種多様にならざるを得ない。だが、社会福祉士というひとつの国家資格を持つ社会福祉専門職を養成するうえで、少なくとも一定の基準やミニマム・スタンダードがあって然るべきではないか。今回の調査と資料分析を経て、研修委員会ではこの点の検討が重要であり、必要であることを改めて確認した。

毎年多数の社会福祉士が生まれていく。社会福祉士の働きを必要とする利用者も多数生まれている。全ての利用者がどの社会福祉士の援助を受ける場合であっても、同等の専門性を有する社会福祉士を、社養協としては輩出していく使命があることをあらためて確認しながら、研修委員会としては、今回の調査研究で明らかになった実態や要望をもとに、来年度以降も事業を継続・発展させていく所存である。

来年度は、具体的な研修プログラムの開発、その試行的実施と評価、教材の開発や教材に関する情報提供のあり方の検討などを実施する予定である。

資　　料

資料１　「社会福祉援助技術演習」の科目設定状況調査　技術演習以外の科目

※　資料一覧の見方

１　左の列から、学校ごとに、①養成校の種別、②各校での指定科目に相当する開講科目名称、③設定単位数（時間数）、④履修年次（時期）、⑤備考、⑥整理作業時の主な資料を記載した。

２　養成校の種別は、「１」が養成施設、「２」が大学、「３」が短期大学、「４」が専門学校、「５」が大学院である。

社会福祉原論

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉原論」	不明	1期と3期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。翌年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会福祉原論」	4	1年前期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「社会福祉原論」	60時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「社会福祉原論」	60時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1～2期、連続	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「社会福祉原論」	4	1～2	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般要成課程の項より
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1～2学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「社会福祉原論」	4	通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「社会福祉原論」	60時間	通年		『課義概要』（2002年度）より
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1年		『履修要項』（2002年度）より。翌年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「社会福祉原論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－3年後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	いずれも2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「社会福祉学概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉概論Ⅰ」及び「社会福祉概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉概論Ⅰ」及び「社会福祉概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	いずれも1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉学概論」	4	1年	学期不明	『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉原論」	4	1年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「社会福祉学概論」	4	1年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉原論」	4	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	4	1年通年		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	2	1年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会福祉原論」	4	1年通年		『履修要項』の課程表より
2	「社会福祉論A」及び「社会福祉論B」	各2、計4	「A」－1年または2年前期、「B」－1年または2年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉原論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	3年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「人間福祉概論」及び「社会福祉原論」	各4、計8	不明		コピー資料より検索
2	「社会福祉概説」及び「社会福祉原論」	「概説」－2、「原論」－4、計6	「概説」－1年前期、「原論」－1年後期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	1年通年		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	3年通年		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	1年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉概論(a)」及び「社会福祉概論(b)」	各2、計4	「(a)」－1年以降前期、「(b)」－1年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉学原論」	4	2年または3年通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉原論」	4	2年以降前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉学概論」	4	1年	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	4	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－4年前期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論」	4	1年通年		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉原論」	4	3年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉原論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「社会福祉学概論」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「社会福祉原論」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	4	2年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉概説」	4	1年通年		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期または2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉概論Ⅰ」及び「社会福祉概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論1」及び「社会福祉原論2」	各2、計4	「1」－3年前期、「2」－3年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉学概論A」及び「社会福祉学概論B」	各2、計4	いずれも1年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	2	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	4	1年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉原論」	4	1年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉原論」	2	1年前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉学概論」	4	1年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉学概論」	4	1年通年		コピー資料の課程表等より
2	「社会福祉原論」	4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉原論」	4	1年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉概論」	4	2年通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉原論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉学概論Ⅰ」及び「社会福祉学概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉原論」	4	1年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉概論」	4	1年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「社会福祉概論Ⅰ」及び「社会福祉概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉概論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉原論Ⅰ」及び「社会福祉原論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉原論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「社会福祉概論」	4	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会福祉原論」	4	1年前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「社会福祉原論」	4	1年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「社会福祉概論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「社会福祉原論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「社会福祉概論」	4	1年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「社会福祉原論（社会福祉Ⅰ）」	60時間	1年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「社会福祉概論（社会福祉Ⅰ）」	60時間	1年通年		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉原論」	60時間	1年通年		『課程要項』（2002年度）の課程表
4	「社会福祉原論」	4	1年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会福祉原論」	2（60時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	社会福祉原論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「社会福祉論A」及び「社会福祉論B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

老人福祉論

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「老人福祉論」	不明	1期～2期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「老人福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	3期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「老人福祉論」	60時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「老人福祉論」	60時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1～2期、連続	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「老人福祉論」	4	1～2	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1～2学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	いずれも前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003－2004年度）課程表より

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「老人福祉論」	６０時間	通年		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	１年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「老人福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－１年後期、「Ⅱ」－３年前期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年、「Ⅱ」－３年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「高齢者福祉論（老人福祉論）」	4	２年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	２年通年		『履修案内』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年前期、「Ⅱ」－２年後期		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」及び「老人保健福祉臨床」	各２、計４	「老人福祉論」－１年、「老人保健福祉臨床」－２年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	２年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	２年前期		『学生ハンドブック』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	２年通年		『学生便覧』（２００２年度）「社会福祉士試験」の項より２０００年度以降入学生課程

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「高齢者福祉論」	2	２年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	１年通年	複数学科あり、一部は２年通年	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	３年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	１年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各２、計４	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「老人福祉論」	4	２年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	１年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	２年通年		『学習便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	１年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	2	２年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「老人福祉論」	4	１年から４年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「老人福祉論Ａ」及び「老人福祉論Ｂ」	各２、計４	「Ａ」－２年または３年前期、「Ｂ」－２年または３年後期	隔年開講	『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「高齢者福祉論」	4	不明		コピー資料より検索
2	「老人福祉論」	4	2年後期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	2年通年		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「高齢者福祉論」	4	2年通年		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	1年または2年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	セメスター制度のため年次記当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論(a)」及び「老人福祉論(b)」	各2、計4	「(a)」－2年以降前期、「(b)」－2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	2年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「老人福祉論」	4	2年以降通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	1年または2年	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	2	1年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	2年通年		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「高齢者福祉論」	4	2年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『課題ガイド』（いずれも2002年度）

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「老人福祉論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「老人福祉論」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	2	2年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「老人福祉論」	4	3年以降	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論1」及び「老人福祉論2」	各2、計4	「1」－1年前期、「2」－1年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「高齢者福祉論」	2	1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	2年または3年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「老人福祉論」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「老人福祉論」	2	2年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「老人福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「老人福祉論」	4	2年通年		コピー資料の課程表等より
2	「老人福祉論」	4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「老人福祉論」	4	2年または3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「高齢者福祉論」	4	2年または3年通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「老人福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「老人福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「老人福祉論」	4	1年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「老人福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「老人福祉論Ⅰ」及び「老人福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「老人福祉論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「老人福祉論」	4	2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「老人福祉論」	4	1年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「高齢者福祉論」	4	2年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「老人福祉論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「老人福祉論」	60時間	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「老人福祉論」	4	1年～2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「老人福祉論」	60時間	1年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「老人福祉論」	60時間	1年通年		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「老人福祉論」	60時間	1年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「老人福祉論」	4	1年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「老人福祉論」	2（60時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	老人福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「老人福祉論A」及び「老人福祉論B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

障害者福祉論

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「障害者福祉論」	不明	3期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「障害者福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	4期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「障害者福祉論」	60時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「障害者福祉論」	60時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1～2期、通年	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「障害者福祉論」	4	1～2	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	3～4学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－前期、「Ⅱ」－後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「障害者福祉論」	60時間	通年		『課職概要』（2002年度）より
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1年		『履修要項』（2002年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「障害者福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－3年前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「障害児・者福祉論Ⅰ」及び「障害児・者福祉論Ⅱ」	各2、計4	いずれも2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「「Ⅱ」」－3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年後期		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	2	2年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。学年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「障害者福祉論」	4	2年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	3年通年		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	2	2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「障害者福祉論」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「障害者福祉論A」及び「障害者福祉論B」	各2、計4	「A」－2年または3年前期、「B」－2年または3年後期	隔年開講	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論A」及び「障害者福祉論B」	各2、計4	いずれも3年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	不明		コピー資料より検索
2	「障害者福祉論」	4	2年前期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年または3年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論(a)」及び「障害者福祉論(b)」	各2、計4	「(a)」－2年以降前期、「(b)」－2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心身障害学」	4	2年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「障害者福祉論」	4	2年以降通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	3年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修基準』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	2	1年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	3年通年		『履修事項の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「障害者福祉論」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「障害者福祉論」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	2	2年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「身体障害者福祉論」及び「知的障害者福祉論」	各2、計4	いずれも3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論1」及び「障害者福祉論2」	各4、計8	いずれも2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	2年または3年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「障害者福祉論」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「障害者福祉論」	2	2年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「障害者福祉論」	4	2年通年		コピー資料の課程表等より
2	「障害者福祉論」	4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「障害者福祉論」	4	2年または3年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「障害者福祉論」	4	2年または3年通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「障害者福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「障害者福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「障害者福祉論」	4	1年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「障害者福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「障害者福祉論Ⅰ」及び「障害者福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「障害者福祉論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「障害者福祉論」	4	2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「障害者福祉論」	4	2年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「障害者福祉論」	4	2年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「障害者福祉論」	60時間	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「障害者福祉論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「障害者福祉論」	4	1年～2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「障害者福祉論」	６０時間	１年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「身体障害者福祉論」及び「知的障害者福祉論」	各３０時間、計６０時間	「身体」－２年後期、「知的」－２年前期		『２００２年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「障害者福祉論」	６０時間	１年通年		『調査要項』（２００２年度）の課程表
4	「障害者福祉論」	4	１年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「障害者福祉論」	２（６０時間）	不明		『学生便覧』（２００２年度）の課程表

種別	障害者福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「障害者福祉論Ａ」及び「障害者福祉論Ｂ」	各２、計４	不明		『大学院要覧』（２００２年度）の課程表より検索

児童福祉論

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「児童福祉論」	不明	３期	３期制	『学習のしおり』（２００２年度）及び『募集要項』（２００３年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「児童福祉論」	4	１年通年		『学生便覧』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	４期	４期制（１～３期－１年目、４期－２年目）	『履修の手引き』（２００２年度）の課程表より
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）及び『入学案内』（２００３年度）課程表より
1	「児童福祉論」	６０時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「児童福祉論」	６０時間	１年	１年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	１～２期、通年	４期制	『学習の手引き』（２００２年度）の課程表より
1	「児童福祉論」	3～4	前期	８学期制	『学生便覧』（２００２年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	３～４学期	４学期制（１～２学期－１年目、３～４学期－２年目）	『学習のしおり』（２００２年度）
1	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－前期、「Ⅱ」－後期		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『入学案内』（２００３～２００４年度）課程表より

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「児童福祉論」	60時間	通年		『講義概要』（2002年度）より
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	2年		『履修要項』（2002年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「児童福祉論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－3年前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年後期		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	2	2年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「児童福祉論」	4	2年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	2	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	2	2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「児童福祉論」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「児童福祉論A」及び「児童福祉論B」	各2、計4	「A」－2年または3年前期、「B」－2年または3年後期	隔年開講	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	不明		コピー資料より検索
2	「児童福祉論」	4	2年後期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	1年または2年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論(a)」及び「児童福祉論(b)」	各2、計4	「(a)」－2年以降前期、「(b)」－2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	2年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「児童福祉論」	4	1年以降後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	3年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	1年または2年	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	2	1年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『調査ガイド』（いずれも2002年度）

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「児童福祉論」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「児童福祉論」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	2年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	2	2年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「児童福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	2	1年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	2年または3年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「児童福祉論」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「児童福祉論」	2	2年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「児童福祉論」	4	2年通年		コピー資料の課程表等より
2	「児童福祉論」	4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「児童福祉論」	4	2年または3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「児童福祉論」	4	2年または3年通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「児童福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「児童福祉論Ⅰa」及び「児童福祉論Ⅰb」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「児童福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「児童福祉論」	4	1年通年		『調査要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「児童福祉論」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「児童福祉論Ⅰ」及び「児童福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「児童福祉論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「児童福祉論」	4	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「児童福祉論」	4	2年前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「児童福祉論」	4	2年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「児童福祉論」	60時間	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「児童福祉論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「児童福祉論」	4	1年と3年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「児童福祉論」	60時間	1年と3年	学期不明	コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「児童福祉論（児童福祉）」	60時間	1年通年		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「児童福祉論」	60時間	3年前期		『調査要項』（2002年度）の課程表
4	「児童福祉論」	4	1年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「児童福祉論」	2（60時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	児童福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「児童福祉論A」及び「児童福祉論B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

社会保障論

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会保障論」	不明	1期～2期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。米年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会保障論」	4	2年前期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「社会保障論」	60時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「社会保障論」	60時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	3～4期、連続	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「社会保障論」	4	3～4	9学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	1～2学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「社会保障論」	4	通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「社会保障論」	60時間	通年		『課程概要』（2002年度）より
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	2年		『履修要項』（2002年度）より。米年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「社会保障論」	スクーリング6時間、自己学習162時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	2年前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「社会保障論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	2年通年		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」及び「社会保障法」	各2、計4	「社会保障論」－1年、「社会保障法」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	2年前期		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「社会保障論」	4	3年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	2年通年		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	2	1年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会保障論」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「社会保障論A」及び「社会保障論B」	各2、計4	いずれも2年または3年、前後期は不明	隔年開講	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	不明		コピー資料より検索
2	「社会保障論」	4	2年前期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	3年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	3年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論Ⅰ」	4	2年通年		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	1年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論(a)」及び「社会保障論(b)」	各2、計4	「(a)」－2年以降前期、「(b)」－2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	4年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	2年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会保障論」	4	2年以降後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	1年または2年	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－3年～4年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	2	2年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	3年通年		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会保障論」	4	3年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	2年以降通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「社会保障論」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「社会保障論」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	2年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	2	1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「社会保障論」	4	2年または3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論1」及び「社会保障論2」	各2、計4	いずれも2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	2年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会保障論」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会保障論」	2	3年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会保障論」	4	3年通年		コピー資料の課程表等より
2	「社会保障論」	4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「社会保障論」	4	1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会保障論」	4	2年または3年通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会保障論」	4	2年通年		『学生便覧』『授業要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会保障論」	4	2年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会保障論」	4	2年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会保障論」	4	1年または2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会保障論Ⅰ」及び「社会保障論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会保障論」	4	1年通年		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「社会保障論」	4	2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会保障論」	4	2年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「社会保障論」	4	1年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「社会保障論」	60時間	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「社会保障論」	60時間	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「社会保障論」	4	2年～3年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	不明	不明	不明		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「社会保障論」	60時間	2年通年		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会保障論」	60時間	2年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「社会保障論」	4	2年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会保障論」	2（60時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	社会保障論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「社会保障論A」及び「社会保障論B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

公的扶助論

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「公的扶助論」	不明	1期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。翌年次はレポート提出のスケジュールより
1	「公的扶助論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「公的扶助論」	30時間	半期	学期不明	コピー資料（課程表）
1	「公的扶助論」	30時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3期	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「公的扶助論」	2	5	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般要成課程の項より
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「公的扶助論」	2	前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「公的扶助論」	３０時間	前期		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	２年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「公的扶助論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「公的扶助論Ⅰ」	2	２年後期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「公的扶助論」	2	３年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	２年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	３年前期		『履修案内』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論Ⅰ」及び「公的扶助論Ⅱ」	各２，計４	「Ⅰ」－３年前期、「Ⅱ」－３年後期		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	2	２年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	３年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	３年前期		『学生ハンドブック』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	３年前期		『学生便覧』（２００２年度）「社会福祉士試験」の項より２０００年度以降入学生課程

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	２年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	３年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	2	３年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	2	３年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「公的扶助論」	4	２年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	３年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	4	３年通年		『学習便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	２年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	1	３年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「公的扶助論」	4	１年から４年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「公的扶助論」	2	２年または３年、前後期は不明	隔年開講	『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	2年前期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	1年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	不明		コピー資料より検索
2	「公的扶助論」	2	2年後期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論Ⅰ」及び「公的扶助論Ⅱ」	各2、計4	いずれも3年前期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	2年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	3年前期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	2年または3年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	2年前期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	不明	不明	不明		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「公的扶助論」	4	2年以降後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助」	4	3年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	4	3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	2	3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	3年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「公的扶助論Ⅰ」及び「公的扶助論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	3年前期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	2年以降前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	4年半期	学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	3年前期		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『課題ガイド』（いずれも2002年度）

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	2年以降後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「生活保護論」	4	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	3年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「公的扶助論」	2	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	4	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	2	2年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	3年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「公的扶助論」	3	3年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「公的扶助論」	2	3年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	3年以降後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	4	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	2	2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	4	2年または3年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「公的扶助論」	4	2年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	2年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「公的扶助論」	4	3年前期		コピー資料の課程表等より
2	「公的扶助論」	2	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「公的扶助論」	2	1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「公的扶助論」	2	2年または3年後期		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「公的扶助論」	2	2年前期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「公的扶助論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「公的扶助論」	2	1年前期		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「公的扶助論」	2	2年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「公的扶助論」	2	2年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「公的扶助論」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「公的扶助論」	2	2年前期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「公的扶助論」	2	2年前期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「公的扶助論」	2	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「公的扶助論」	2	2年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「公的扶助論」	2	2年半期	学期不明	『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「公的扶助論」	30時間	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「公的扶助論」	30時間	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「公的扶助論」	2	1年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	不明	不明	不明		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「公的扶助論」	30時間	3年前期		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「公的扶助論」	30時間	2年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「公的扶助論」	2	2年前期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「公的扶助論」	1（30時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	公的扶助論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「公的扶助論」	2	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

地域福祉論

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「地域福祉論」	不明	3期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「地域福祉論」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	2期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「地域福祉論」	30時間	半期	学期不明	コピー資料（課程表）
1	「地域福祉論」	30時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3期	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「地域福祉論」	4	3～4	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	2学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「地域福祉論」	2	後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「地域福祉論」	30時間	前期		『講義概要』（2002年度）より
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	2年		『履修要項』（2002年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「地域福祉論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「地域福祉論Ⅰ」	2	2年前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「地域福祉論」	2	2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「地域福祉論」	2	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	2	3年前期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論Ⅰ」及び「地域福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	2	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	3年前期		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「福祉コミュニティ概論」	4	1年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論Ⅰ」及び「地域福祉論Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。学年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「地域福祉論」	4	3年以降	学期不明	コピー資料の課程表より検索

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	2	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	4	2年通年		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	1	2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「地域福祉論」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「地域福祉論」	2	2年または3年前期	隔年開講	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論Ⅰ」	2	1年前期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	1年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	不明		コピー資料より検索
2	「地域福祉論」	2	3年前期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論Ⅰ」及び「地域福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年前期、「Ⅱ」－3年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	2	3年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	3年後期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	2年または3年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論(a)」及び「地域福祉論(b)」	各2、計4	「(a)」－2年以降前期、「(b)」－2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	2	2年以降前期		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「地域福祉論」	4	2年以降後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	4年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	2	2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	2	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「地域福祉論Ⅰ」及び「地域福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－4年前期、「Ⅱ」－4年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「地域福祉論Ⅰ」	2	1年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	2年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	4年年期	学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「地域福祉論」	4	3年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「地域福祉論」	4	4年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論Ⅰ」及び「地域福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「地域福祉論」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	4	2年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	2	2年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「地域福祉論Ⅰ」及び「地域福祉論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「地域福祉論」	2	3年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「地域福祉論」	2	2年前期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「地域福祉論」	2	3年以降4年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論1」「地域福祉論2」	各2、計4	「1」－3年前期、「2」－3年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	4	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	2	2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	4	2年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「地域福祉論」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「地域福祉論」	2	4年前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	4	3年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「地域福祉論」	4	4年通年		コピー資料の課程表等より
2	「地域福祉論」	2	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「地域福祉論」	4	2年または3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「地域福祉論」	2	2年または3年前期		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「地域福祉論」	2	2年前期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「地域福祉論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「地域福祉論」	2	1年後期		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「地域福祉論」	2	2年後期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	表なし				『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「地域福祉論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「地域福祉論」	2	2年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「地域福祉論」	2	2年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「地域福祉論」	2	2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「地域福祉論」	2	2年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「地域福祉論」	2	2年半期	学期不明	『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「地域福祉論」	30時間	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「地域福祉論」	30時間	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「地域福祉論」	2	2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「地域福祉論」	30時間	2年前期		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「地域福祉論」	30時間	3年前期		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「地域福祉論」	30時間	3年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「地域福祉論」	2	2年後期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「地域福祉論」	1（30時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	地域福祉論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「地域福祉論」	2	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

社会福祉援助技術論

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術論」	不明	1期～2期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。翌年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会福祉援助技術論」	8	1年通年		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	「Ⅰ」－スクーリング6時間、自己学習162時間、「Ⅱ」－スクーリング6時間、自己学習16	「Ⅰ」－1期、「Ⅱ」－2期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術論」	スクーリング12時間、自己学習324時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「社会福祉援助技術論」	120時間	通年		コピー資料（課程表）

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「社会福祉援助技術論」	120時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術論」	スクーリング12時間、自己学習324時間	1期～4期、通続	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「社会福祉援助技術論」	8	1～4	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」及び「社会福祉援助技術論Ⅲ」	スクーリング12時間（「Ⅰ」－6時間、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－各3時間）、自己学習3	「Ⅰ」－前期、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術論1」、「社会福祉援助技術論2」、「社会福祉援助技術論3」及び「社会福祉援助技術論4」	スクーリング12時間、自己学習324時間	1～4学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	「Ⅰ」－4、他科目各2、計10	「Ⅰ」－通年、他科目前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「社会福祉援助技術論」	スクーリング12時間、自己学習324時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より
1	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各60、計120時間	いずれも通年		『講義概要』（2002年度）より
1（通信）	「社会福祉援助技術論」	スクーリング12時間、自己学習324時間	1～2年		『履修要項』（2002年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「社会福祉援助技術論」	スクーリング12時間、自己学習324時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「調査技法」、「ソーシャルワーク論Ⅰ」、「ソーシャルワーク論Ⅱ」、「ソーシャルワーク論Ⅲ」、「ソーシャルワーク論Ⅳ」及び「ソーシャルワーク論Ⅴ」	各2、計12	「調査技法」－2年前期、「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期、「Ⅲ」－2年後		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	いずれも2年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」及び「社会福祉援助技術論Ⅲ」	「Ⅰ」及び「Ⅱ」－2、「Ⅲ」－4、計8	「Ⅰ」－2年、「Ⅱ」－4年、「Ⅲ」－3年通年	ⅠとⅡに学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ－A」、「社会福祉援助技術論Ⅰ－B」、「社会福祉援助技術論Ⅱ－A」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ－B」	各2、計8	「Ⅰ－A」－2年後期、他科目－2年後期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論Ⅰ」、「社会福祉援助技術総論Ⅱ」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各2、計8	「総論Ⅰ」－1年前期、「総論Ⅱ」－1年後期、「各論Ⅰ」－2年前期、「各論Ⅱ」－2		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」及び「Ⅱ」－1年、「Ⅲ」及び「Ⅳ」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「ケースワーク論」、「グループワーク論」、「コミュニティワーク」及び「社会調査」	「総論」－4、他科目－各2、計12	「総論」－1年後期～2年前期、「ケースワーク論」－2年前期、「グループワーク論」－2		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論A」及び「社会福祉援助技術論B」	各4、計8	「A」－2年前期、「B」－2年後期		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論A」及び「社会福祉援助技術論B」	各4、計8	いずれも3年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程
2	「社会活動と援助技術論」、「コミュニティワーク」及び「社会調査」	「社会活動と援助技術論」－4、他科目－各2、計8	いずれも2年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」及び「各論Ⅰ」－2年通年、「各論Ⅱ」－3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「ケースワーク」、「グループワーク」、「コミュニティワーク」及び「社会調査」	各2、計10	「総論」「調査」－2年前期、「ケース」「コミュニティ」－2年後期、「グループ」		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－2年通年、「各論Ⅰ」－2年後期、「各論Ⅱ」－3年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「ケースワーク」、「グループワーク」及び「コミュニティ・ワーク」	「ケースワーク」－4、他科目－各2、計8	いずれも2年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－2年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術論A」及び「社会福祉援助技術論B」	各4、計8	「A」－2年通年、「B」－3年通年		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論ⅠA」、「社会福祉援助技術各論ⅠB」、「社会福祉援助技術各論ⅡA」及び「社会福祉援助技術各論ⅡB」	「総論」－4、他科目－各2、計12	「総論」－1年通年、他科目－1年から4年の間　半期	各論の学期不明	『履修要項』の課程表より

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論A」及び「社会福祉援助技術論B」	各4、計8	いずれも2年または3年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」及び「社会福祉援助技術論Ⅲ」	「Ⅰ」－4、「Ⅱ」及び「Ⅲ」各2、計8	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－2年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期、「Ⅲ」－2年前期、「Ⅳ」－2年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論ⅠA」、「社会福祉援助技術各論ⅠB」、「社会福祉援助技術各論ⅡA」及び「社会福祉援助技術各論ⅡB」（「各論ⅡB」にかえて「社会調査論」も可）	「総論」、「各論ⅠA」、「各論ⅠB」、「社会調査論」－4、「各論ⅡA」及び「各論ⅡB」－各2、計12	「総論」－3年通年、「各論ⅠA」－2年通年、「各論ⅠB」－3年通年、「各論ⅡA」－2年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「ソーシャルワーク論」、「ケースワーク」、「グループワーク」、「コミュニティワーク」、「社会福祉調査」及び「施設管理」	「ソーシャルワーク論」－4、他科目－各2、計14	不明		コピー資料より検索

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」3年通年		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」及び「社会福祉援助技術各論」	各4、計8	「総論」－2年通年、「各論」－不明		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」－3年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「ソーシャルワーク論」、「ケースワーク」、「グループワーク」、「コミュニティワーク」及び「社会調査法」	各2、計10	「ソーシャルワーク論」及び「ケースワーク」－2年前期、「グループワーク」及び「社		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－2年、他科目－3年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論A」、「社会福祉援助技術論B」及び「社会福祉援助技術論C」	各4、計12	セメスター制度のため年次配当なし	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	いずれも2年以降通年		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助方法論」及び「福祉援助技術論」	各4、計8	「方法論」－2年または3年　通年、「援助技術論」－3年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術総論」、「ケースワーク」、「グループ・ワーク」、「コミュニティーワーク」及び「社会福祉調査」	各4、計20	「総論」－2年以降　後期、「ケースワーク」－2年以降　後期、「グループワーク」		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－1年通年、「各論Ⅰ」－2年通年、「各論Ⅱ」－3年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉方法総論」、「社会福祉方法論Ⅰ」、「社会福祉方法論Ⅱ」、「社会福祉方法論Ⅲ」及び「社会調査方法論」	各4、計20	「総論」－1年または2年、「調査方法論」－1年、その他は3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」及び「社会福祉援助技術論」	「Ⅱ」－4、「Ⅰ」及び「Ⅲ」－各2、計8	「Ⅰ」及び「Ⅱ」－2年、「Ⅲ」－3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－1年通年、「各論Ⅰ」－2年通年、「各論Ⅱ」－3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」－3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期、「Ⅲ」－2年後期、「Ⅳ」－4年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」及び「社会福祉援助技術論Ⅲ」	各2、計8	「総論」－1年後期、他科目－2年以降 前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	いずれも、2年通年		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉方法原論」、「社会福祉方法各論Ⅰ」及び「社会福祉方法各論Ⅱ」	「原論」－4、「各論」－各2、計8	「原論」－2年通年、他科目－3年	各論は学科により前期または後期	『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（いずれも2002年度）

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「ＩＡ」、「社会福祉援助技術論ⅠＢ」、「社会福祉援助技術論ⅡＡ」及び「社会福祉援助技術論ⅡＢ」	各2、計8	「ＩＡ」－1年前期、「ＩＢ」－1年後期、「ⅡＡ」－2年前期、「ⅡＢ」－2年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「社会福祉方法総論」及び「社会福祉援助技術各論」	各2、計8	「総論」－2年、「各論」－3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論Ⅰ」、「社会福祉援助技術総論Ⅱ」、「社会福祉援助技術各論ⅠＡ」、「社会福祉援助技術各論ⅡＡ」、「社会福祉援助技術各論ⅠＢ」及び「社会福祉援助技術各論ⅡＢ」	各2、計12	「総論Ⅰ」－1年後期、「総論Ⅱ」－2年前期、「各論ⅠＡ」－2年前期、「各論ⅠＢ」－2		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「ソーシャルワーク論」、「コミュニティワーク論」、「ソーシャルワーク方法論Ⅰ」、「ソーシャルワーク方法論Ⅱ」及び「社会福祉調査論」	「ソーシャルワーク論」－4、他科目－各2、計12	「ソーシャルワーク論」－2年通年、「コミュニティワーク論」及び「社会福祉調査		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期、「Ⅲ」－3年前期、「Ⅳ」－3年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期、「Ⅲ」－2年後期、「Ⅳ」－2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－2年後期、「Ⅳ」－3年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」－3年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論1－1（個別援助技術）」、「社会福祉援助技術各論1－2（集団援助技術）」、「社会福祉援助技術各論2－1（地域福祉援助）」及び「社会福祉援助技術各論2－2（社会福祉調査論）」	「総論」－4、「他科目」－各2、計12	「総論」－2年通年、「各論1－1」－2年後期、「各論1－2」－3年後期、「各論2－		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会福祉方法論（総論）」、「ケースワーク」、「グループワーク」、「コミュニティワーク」及び「社会福祉調査」	各4、計20	「グループワーク」－3年、他科目－2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「ケースワーク」、「グループワーク」、「コミュニティワーク」及び「社会調査法」	各2、計10	「総論」及び「調査法」－1年後期、他科目－2年	2年分は学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－1年通年、「各論」－いずれも2年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論」	8（基礎理論4＋実践応用4に分割実施）	いずれも2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ(1)」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ(2)」、「社会福祉援助技術各論Ⅱ(1)」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ(2)」	各2、計10	「総論」－4年前期、「各論Ⅰ(2)」－2年前期、他科目－2年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論」及び「社会福祉調査法」	「総論」及び「各論」－各4、「調査法」－2、計10	「総論」－各論－2年通年、「社会福祉調査法」－3年半期	「調査法」学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－1年通年、「各論Ⅰ」－2年前期、「各論Ⅱ」－2年通年		コピー資料の課程表等より
2	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	年次不明		コピー資料の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術論A」及び「社会福祉援助技術論B」	各4、計8	「A」－2年または3年前期、「B」－2年または3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	「総論」及び「各論Ⅱ」－各2、「各論Ⅰ」－4、計8	「総論」－2年または3年前期、「各論Ⅰ」－2年または3年通年、「各論Ⅱ」－3年または		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術総論Ⅰ」、「社会福祉援助技術総論Ⅱ」、「社会福祉援助技術各論Ⅰa」、「社会福祉援助技術各論Ⅰb」、「社会福祉援助技術各論Ⅱa」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱb」	各2、計12	「総論Ⅰ」－1年前期、「総論Ⅱ」－1年後期、「各論Ⅰa」及び「Ⅱa」－2年前期、「Ⅰ		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術論」	8	1年～2年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期、「Ⅲ」－2年前期、「Ⅳ」－2年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各4、計8	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期、「Ⅲ」－2年前期、「Ⅳ」－2年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術論」	8	1年後期～2年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「社会福祉援助技術論Ⅰ」、「社会福祉援助技術論Ⅱ」、「社会福祉援助技術論Ⅲ」及び「社会福祉援助技術論Ⅳ」	各2、計8	「Ⅲ」－2年、他科目－1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会福祉援助技術論」	8	1年前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術総論」、「社会福祉援助技術各論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術各論Ⅱ」	各4、計12	「総論」－1年通年、他科目－2年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「社会福祉援助技術総論」及び「社会福祉援助技術各論」	各60時間、計120時間	「総論」－2年通年、「各論」－3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
4	「社会福祉援助技術論Ⅰ」及び「社会福祉援助技術論Ⅱ」	各60時間、計120時間	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術論」	8	1年～2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術論①」及び「社会福祉援助技術論②」	各60時間、計120時間	「①」－1年通年、「②」－2年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術論」、「ケースワーク」、「グループワーク」、「コミュニティワーク」及び「調査統計」	「技術論」－60時間、他科目－各30時間、計180時間	「社会福祉援助技術論」－1年通年、「ケースワーク」－2年前期、「グループワーク」		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術論」	120時間	1年～2年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表

種別	社会福祉援助技術論	単位数	年次	備考	主な資料
4	「社会福祉援助技術論」	8（4＋2＋2に分科認定と思われる）	「4単位分」－1年通年、「先の2単位分」－1年後期、「後の2単位分」－2年前期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会福祉援助技術論」	4（120時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表
5	「社会的援助方法論A」、「社会的援助方法論B」、「社会福祉援助技術ⅠA」、「社会福祉援助技術ⅠB」「社会福祉援助技術ⅡA」、「アクションリサーチ論」、「社会調査論A」及び「社会調査論B」	各2、計16	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

社会福祉援助技術現場実習

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	不明	2期～3期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。翌年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会福祉援助技術現場実習」	6	1年後期～2年前期まで		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	180時間以上	2期～4期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	90時間以上	前期から後期の間	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「社会福祉援助技術現場実習」	192時間	集中		コピー資料（課程表）
1	「社会福祉援助技術現場実習」	180時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	９０時間以上	１期～４期	４期制	『学習の手引き』（２００２年度）の課程表より
1	「社会福祉現場実習」	6	8	８学期制	『学生便覧』（２００２年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	９０時間以上	不明	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	９０時間以上	不明	４学期制（１～２学期－１年目、３～４学期－２年目）	『学習のしおり』（２００２年度）
1	「社会福祉援助技術現場実習」	4	通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	９０時間以上	前期から後期の間	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『入学案内』（２００３～２００４年度）課程表より

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
1	不明	不明	不明		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	９０時間以上	１～２年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習」	９０時間以上	前期～後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「ソーシャルワーク現場実習」	4	３年通年		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年前期		『履修案内』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年通年		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	8	２年前期～３年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年後期		『学生ハンドブック』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３～４年通年		『学生便覧』（２００２年度）「社会福祉士試験」の項より２０００年度以降入学生課程

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	３年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」※実習指導と一体	各３、計６	「Ⅰ」－３年通年、「Ⅱ」－４年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉実習Ⅰ」、「社会福祉実習Ⅱ」及び「社会福祉実習Ⅲ」　※実習指導と一体	「Ⅰ」－４、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－各２、計８	「Ⅰ」－２年通年、「Ⅱ」－３年通年、「Ⅲ」－３年～４		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅲ」　※　実習指導と一体	各２、計６	「Ⅰ」－３年後期、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－３年～４年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各２、計４（福祉環境学科は一括４単位科目）	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	３年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉実習Ⅰ」「社会福祉実習Ⅱ」及び「社会福祉実習Ⅲ」　※実習指導と一体	各90時間、計270時間	「Ⅰ」－1年集中、「Ⅱ」－2年集中、「Ⅲ」－3年集		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医療福祉実習Ⅰ（社会福祉援助技術現場実習）」	4	3年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	4	3年通年		『履修要項』の課程表より
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年または4年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習B」	4	3年通年	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	12	4年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	不明		コピー資料より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年集中		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	2年後期～3年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉実習Ⅰ」及び「社会福祉実習Ⅱ」	各2、計4	いずれも3回後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉実習Ⅰ」及び「社会福祉実習Ⅱ」	各2、計4	「1」－2年集中、「Ⅱ」－3年集中		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	4年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習A」または「社会福祉援助技術現場実習B1」及び「社会福祉援助技術現場実習B2」	「A」－4、「B1」及び「B2」－各2の計4	セメスター制度のため年次配当なし。先修条件あり	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年以降通年		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」及び「社会福祉援助技術現場実習事前指導」	「実習」－6、「事前指導」－2、計8	「実習」－3～4年、「事前指導」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉実習Ⅱ」及び「社会福祉実習Ⅲ」　※実習指導と一体	各4、計8	「Ⅱ」－2年以降通年、「Ⅲ」－3年以降通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉現場実習」	4	3年通年（履修コースによっては4年通年）		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	2年～3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	「Ⅰ」－2単位、「Ⅱ」－4単位計6	「Ⅰ」－2年後期、「Ⅱ」－3年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各2、計4	いずれも3年以降通年		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	6	3年集中		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年	学期不明	『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年集中		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「社会福祉実習および実習指導Ⅰ」及び「社会福祉実習および実習指導Ⅱ」　※実習指導と一体	「Ⅰ」－4、「Ⅱ」－2、計8	「Ⅰ」－2年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	3年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年または4年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	6	3年通年		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年通年、「Ⅱ」－4年通年		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各3、計6	「Ⅰ」－3年後期、「Ⅱ」－4年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習3（配属実習及び現場実習指導）」	4	3年集中		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「実習3」　※　実習指導と一体	6	4年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習」　※実習指導と一体	6	3年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習」	6	3年後期～4年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年～4年　集中		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	3年後期		コピー資料の課程表等より
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各2、計4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年通年、「Ⅱ」－4年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習」	4	2年～3年連続、通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉実習Ⅱ」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術現場実習」	4	1年～2年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉実習Ⅰ」及び「社会福祉実習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「社会福祉実習」	4	1年後期～2年前期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉実習Ⅰ」及び「社会福祉実習Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術現場実習」	4	2年前期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術現場実習」	4	2年前期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「社会福祉援助技術現場実習」	4	2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会福祉援助技術現場実習」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅲ」	「Ⅰ」－4、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－2、計8	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－2年集中		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「社会福祉援助技術現場実習」	180時間	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習Ⅲ」	「Ⅰ」及び「Ⅱ」各80時間、「Ⅲ」－40時間、計200時間	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」及び「Ⅲ」－2年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「社会福祉現場実習」	180時間	1年～2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術現場実習」	180時間	3年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「社会福祉現場実習」	180時間	1年集中		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術現場実習」	180時間	2年後期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「社会福祉援助技術現場実習」	6	不明		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会福祉援助技術現場実習」	6（180時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習	単位数	年次	備考	主な資料
5	「社会福祉援助技術現場実習A」及び「社会福祉援助技術現場実習B」※実習指導と一体	各3、計6	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

社会福祉援助技術現場実習指導

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	不明	1期～2期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会福祉援助技術現場実習指導」	6	1年前期～2年後期まで		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「Ⅰ」－スクーリング4時間、自己学習108時間、「Ⅱ」－スクーリ	「Ⅰ」－1期、「Ⅱ」－2～4期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング6時間、自己学習122時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「社会福祉援助技術現場実習指導」	90時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「社会福祉援助技術現場実習指導」	90時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング5時間、自己学習120時間	1期～4期	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「社会福祉現場実習指導」	6	8	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング5時間、自己学習122時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング5時間、自己学習120時間	1～4学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「社会福祉援助技術現場実習指導」	3	通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング5時間、自己学習120時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
1	「社会福祉援助技術現場実習指導」	90時間	通年		『講義概要』（2002年度）より
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング5時間、自己学習120時間	1年		『履修要項』（2002年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	スクーリング5時間、自己学習120時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」及び「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」	各1、計2	「Ⅰ」－2年後期、「Ⅱ」－3年後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	3	3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	2年後期～3年後期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各2，計4	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－3年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	2年～3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年通年		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3～4年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ」	各2、計6（福祉環境学科は一律6単位科目）	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	※現場実習と一体				コピー資料の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「1」－1、「Ⅱ」－2、計3	「1」－2年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	※現場実習と一体				『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医療福祉実習Ⅰ（社会福祉援助技術現場実習）」	2	3年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」	2	2年通年		『履修要項』の課程表より
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年または4年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	4	3年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導B」	2	3年通年	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				コピー資料より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「1」－4、「Ⅱ」－2、計6	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」3年通年		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	2年後期～3年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉実習指導Ⅰ」及び「社会福祉実習指導Ⅱ」	各1、計2	「Ⅰ」－3年通年、「Ⅱ」－3年後期から4年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉実習指導Ⅰ」及び「社会福祉実習指導Ⅱ」	「Ⅰ」－2、「Ⅱ」－1の計3	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」－3年前期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習指導（事前）A」、「社会福祉援助技術現場実習指導（事前）B」及び「社会福祉援助技術現場実習指導（事後）」	各1、計3	セメスター制度のため年次記載なし。受講条件あり	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年以降通年		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	4	3～4年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	不明	3年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	※現場実習と一体				コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉現場実習指導（Ⅰ）」及び「社会福祉現場実習指導（Ⅱ）」	各4、計8	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」－3年通年（履修コースによっては		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「Ⅰ」－1、「Ⅱ」－2、計3	「Ⅰ」－2年、「Ⅱ」－3年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「Ⅰ」－2、「Ⅱ」－4、計6	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ」	各1、計3	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－2年後期、「Ⅲ」－3年前後		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－3年以降前期、「Ⅱ」－3年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「Ⅰ」－2、「Ⅱ」－1、計3	「Ⅰ」－2年通年、「Ⅱ」－3年半期	「Ⅱ」－学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年	学期不明	『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『課程ガイド』（いずれも2002年度）

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－3年	「Ⅱ」－学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※現場実習と一体				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『課程要項』（2002年度版）
2	※現場実習と一体				コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	4	3年または4年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	4	2年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習事前指導」及び「社会福祉援助技術現場実習指導」	「事前指導」－1、「実習指導」2、計3	「事前指導」－2年後期、「実習指導」－3年通年		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各1、計2	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－2～3年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ」	各2、計6	「Ⅰ」－2年後期、「Ⅱ」－3年通年、「Ⅲ」－4年通年		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各1、計2	「Ⅰ」－3年後期、「Ⅱ」－4年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習1（見学実習）」、「社会福祉援助技術現場実習2（事前教育）」及び社会福祉援助技術現場実習4（事後教育）」	各2、計6	「1」－2年後期、「2」－3年前期、「3」－3年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	※現場実習と一体				『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	実習指導	2	2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	※現場実習と一体				『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	3	3年後期～4年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年～4年 前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	3	2年後期から3年前期、通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	3年通年		コピー資料の課程表等より
2	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」、「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ」	各1、計3	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「社会福祉演習Ⅰ」及び「社会福祉演習Ⅱ」	各4、計8	「Ⅱ」－3年通年、「Ⅲ」－4年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	2年～3年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉実習指導」及び「社会福祉実習Ⅰ」	各2、計4	「実習指導」－2年通年、「実習Ⅰ」－1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	1年～2年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉実習指導Ⅰ」及び「社会福祉実習指導Ⅱ」	各1、計2	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「社会福祉実習指導Ⅰ」、「社会福祉実習指導Ⅱ」及び「社会福祉実習指導Ⅲ」	各1、計3	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期、「Ⅲ」－2年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉実習指導Ⅰ」及び「社会福祉実習指導Ⅱ」	各1、計2	「Ⅰ」－1年後期、「Ⅱ」－2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」、「社会福祉援助技術実習指導Ⅱ」、「社会福祉援助技術実習指導Ⅲ」及び「社会福祉援助技術実習指導Ⅳ」	各1、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期、「Ⅲ」－2年前		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
3	「社会福祉援助技術現場実習指導」	2	1年後期～2年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	「Ⅰ」－1、「Ⅱ」－2、計3	「Ⅰ」－1年、「Ⅱ」－2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会福祉援助技術現場実習指導」	3	1年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱ」	各2、計4	2年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	90時間	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「社会福祉現場実習指導Ⅰ」及び「社会福祉現場実習指導Ⅱ」	各60時間、計120時間			『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「社会福祉現場実習指導」	180時間	1年～3年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	90時間	3年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「実習指導」	60時間	1年通年	他のいずれかの科目と組み合わせての該当と思われる	『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	90時間	2年前期～3年前期		『課程要項』（2002年度）の課程表
4	実習指導	2（1＋1に分割認定と思われる）	「先の1単位分」－1年前期、「後の1単位分」－2年通年		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会福祉援助技術現場実習指導」	3（90時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	社会福祉援助技術現場実習指導	単位数	年次	備考	主な資料
5	実現場実習と一体				『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

心理学

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「心理学」	不明	3期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「心理学」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	2期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「心理学」	30時間	半期	学期不明	コピー資料（課程表）
1	「心理学」	30時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	1期	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「心理学」	2	6	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	1学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「心理学」	2	後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003－2004年度）課程表より

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
1	「心理学」	30時間	前期		『講義概要』（2002年度）より
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	2年		『履修要項』（2002年度）より。次年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「心理学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「心理学Ⅰ」	2	1年前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学」	2	1年後期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学概論Ⅰ」、「心理学概論Ⅱ」、「発達心理学Ⅰ」、「発達心理学Ⅱ」、「臨床心理学Ⅰ」及び「臨床心理学Ⅱ」	各2、計12より4単位選択	「心理学概論」－3年、「発達心理学」－2年、「臨床心理学」－		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学A」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	4	1年通年	理数学科あり、一部学科には、2単位科目、1年後期	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学概論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学」	4	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。次年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「心理学」	2	1年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学概論Ⅰ」及び「心理学概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	1年から4年の間	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「心理学（福祉）」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「心理学A」及び「心理学B」	各2、計4	いずれも1年から4年の間、前後期は不明		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学Ⅰ」及び「心理学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「臨床心理学」と「発達心理学」、「福祉心理学」、「心理学」、「心理学Ⅰ」、「心理学Ⅱ」のいずれか	「福祉心理学」－2、他科目は不明	「福祉心理学」－1年前期、他科目は不明		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	4	不明		コピー資料より検索
2	「心理学」または「生涯発達心理学1～3」及び「臨床心理学」	「心理学」－2、他の場合－8	「心理学」－1年前期、「生涯発達心理学Ⅰ」－1年後期、「生涯発		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「臨床心理学」及び「発達心理学」	各2、計4	いずれも2年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学Ⅰ」	2	1年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	2年後期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	4	1年から3年の間		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学概論」	2	セメスター制度のため年次配当なし	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学概論(a)」及び「心理学概論(b)」	各2、計4	「(a)」－1年以降前期、「(b)」－1年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「一般心理学」	4	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学A」	2	不明		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「心理学（1）」及び「心理学（2）」（心理学概論でも可）	不明	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	1年後期		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会適応の心理学」	4	1年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「心理学Ⅰ」及び「心理学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「心理学」	2	1年前期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学概論」	2	年次不明		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	1年半期	学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「心理学」	2	1年前期		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『課程ガイド』（いずれも2002年度）

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	不明	不明	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「心理学」	2	1年または2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学a」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「心理学」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学」	4	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学Ⅰ」及び「心理学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「心理学」	2	1年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「心理学」	2	2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「心理学」	2	1年前期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「心理学概論」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「心理学概論」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「心理学A」及び「心理学B」	各2、計4	「A」－1年前期、「B」－1年後期	左記はいわゆる一般教育科目として設定されているが、学科専門教育科目の「パーソナ	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「心理学1」及び「心理学2」	各2、計4	「1」－1年前期、「2」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「心理学概論」	4	1年または2年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	不明	不明	不明		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「心理学」	2	1年または2年前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	4	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「人格形成と生活行動」	2	1年後期		コピー資料の課程表等より
2	「心理学」	2	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「心理学」	2	1年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「心理学」	2	2年または3年前期		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「心理学」	2	1年後期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「心と行動の科学（心理学）」	2	1年または2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
3	「人間の心（心理学）」	4	1年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「心理学」	2	1年または2年後期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「心理学」	2	1年前期または後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「心理学」	2	1年または2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「心理学Ⅰ」	2	1年前期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
3	「人間の心理」	2	2年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「心理学」	2	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「心理学」	2	1年後期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「心理学」	4	1年	一般教養科目	『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「心理学」	60時間	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「心理学」	30時間	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「心理学」	4	1年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「心理学」	30時間	2年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「心理学」	30時間	3年後期		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「心理学」	30時間	2年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「心理学」	2	1年前期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「心理学」	1（30時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	心理学	単位数	年次	備考	主な資料
5	「心理学の基礎と応用」	2	不明		『大学院要覧』（２００２年度）の課程表より検索

社会学

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会学」	不明	３期	３期制	『学習のしおり』（２００２年度）及び『募集要項』（２００３年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「社会学」	2	２年後期		『学生便覧』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	３期	４期制（１～３期－１年目、４期－２年目）	『履修の手引き』（２００２年度）の課程表より
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）及び『入学案内』（２００３年度）課程表より
1	「社会学」	４５時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「社会学」	３０時間	１年	１年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	４期	４期制	『学習の手引き』（２００２年度）の課程表より
1	「社会学」	2	5	８学期制	『学生便覧』（２００２年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	２学期	４学期制（１～２学期－１年目、３～４学期－２年目）	『学習のしおり』（２００２年度）
1	「社会学」	2	後期		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『入学案内』（２００３～２００４年度）課程表より

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
1	「社会学」	３０時間	後期		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	２年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「社会学」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「社会学Ⅰ」	2	１年前期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会学」	2	１年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「社会学概論」	4	１年通年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学」	2	1年前期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学概論Ⅰ」及び「社会学概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学A」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	4	1年	学期不明	『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	4	2年通年	複数学科あり、一部学科は2単位科目、2年前期	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学」	2	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学概論Ⅰ」及び「社会学概論Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。学年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「社会学」	2	1年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学概論」	2	1年後期		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	2	1年から4年の間	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「社会学（福祉）」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「現代社会論」及び「社会的人間論」	各2、計4	「現代社会論」－1年または2年後期、「社会的人間論」－1年または		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学Ⅰ」及び「社会学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」、「社会学Ⅰ」、「社会学Ⅱ」のいずれか	不明	不明		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	不明	不明		コピー資料より検索
2	「社会学概論」	4	1年後期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「家族学」及び「地域社会学」	各2、計4	いずれも1年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学Ⅰ」	2	2年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	2	1年後期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	4	1年から3年の間		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学概論」	2	セメスター制度のため年次記当なし	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学概論(a)」及び「社会学概論(b)」	各2、計4	「(a)」－1年以降前期、「(b)」－1年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	4	1年または2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学A」	2	不明		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会学概論」	不明	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	2	1年前期		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学基礎論」	4	1年	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学」	4	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学」	2	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「社会学Ⅰ」及び「社会学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会学」	2	1年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学原論Ⅰ」、「社会学概論Ⅱ」または「社会学」	各2	「原論Ⅰ」－2年以降前期、「原論Ⅱ」－2年以降後期、「社会		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	2	1年半期	学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会学」	2	1年前期		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『課程ガイド』（いずれも2002年度）

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	不明	不明	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「社会学」または「社会学概論」	いずれも2	「社会学」－1年または2年、「社会学概論」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「現代社会論」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『課程要項』（2002年度版）
2	「社会学」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学」	4	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学Ⅰ」及び「社会学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会学」	2	1年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「社会学概論」	2	1年前期または2年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「社会学Ⅰ」及び「社会学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「社会学」	2	3年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会学概論1」及び「社会学概論2」	各2、計4	「1」－1年前期、「2」－1年後期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会学A」及び「社会学B」	各2、計4	「A」－1年前期、「B」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「社会学1」及び「社会学2」	各2、計4	「1」－1年前期、「2」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「社会学概論Ⅰ」及び「社会学概論Ⅱ」	各2、計4	いずれも1年または2年の半期	学期不明	『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	不明	不明	不明		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「社会学」	2	1年または2年前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「社会学」	4	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「社会の動態と生活秩序」	2	1年後期		コピー資料の課程表等より
2	「社会学」	2	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「社会学」	2	1年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「家族社会学」及び「地域社会学」	各2、計4	いずれも2年または3年前期		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会学」	2	1年前期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「家族・地域・職場（社会学）」	2	1年または2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
3	「人間と社会Ⅰ（社会学）」	4	1年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会学」	2	1年または2年の前期または後期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「社会学概論」	2	1年前期または後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会学」	2	1年または2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「社会学」	2	1年前期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
3	「現代社会学」	2	1年前期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「社会学」	2	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「社会学」	2	1年前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「社会学」	4	1年	一般教育科目	『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「社会学」	30時間	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「社会学」	30時間	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「社会学」	4	2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「社会学」	30時間	2年後期		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「社会学」	30時間	3年後期		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「社会学」	30時間	1年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「社会学」	2	1年後期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「社会学」	1（30時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	社会学	単位数	年次	備考	主な資料
5	「現代社会論A」及び「現代社会論B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

法学

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「法学」	不明	1期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。当年次はレポート提出のスケジュールより
1	「法学」	2	2年後期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「法学」	45時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「法学」	30時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3期	4期制	『学習の手引き』（2002年度）の課程表より
1	「法学」	2	5	8学期制	『学生便覧』（2002年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）課程表より
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	3学期	4学期制（1～2学期－1年目、3～4学期－2年目）	『学習のしおり』（2002年度）
1	「法学」	2	前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	前期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『入学案内』（2003～2004年度）課程表より

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
1	「法学」	30時間	後期		『講義概要』（2002年度）より
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	2年		『履修要項』（2002年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「法学」	スクーリング3時間、自己学習81時間	前期～後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習の手引き』（2002年度）課程表より
2	「法学Ⅰ」	2	1年前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「法学」	2	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度入学生用）課程表より検索
2	「日本の憲法と法律」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学（人権・著作権等）」	2	1年後期		『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学概論Ⅰ」及び「法学概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「法学」及び「日本国憲法」	各2、計4	いずれも1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	4	1年	学期不明	『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	4	3年通年	複数学科あり、一部学科は、2単位科目、3年前期	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「法学」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「法学（憲法）」	4	2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法律学」	4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「法学」	2	2年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「法学概論」	2	1年後期		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	1年から4年の間	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「法学（福祉）」	4	1年通年		『履修要項』の課程表より
2	「憲法・くらしと法」	各2、計4	いずれも1年から4年の間、前後期は不明		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学Ⅰ」及び「法学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」、「法学Ⅰ」、「法学Ⅱ」のいずれか	不明	不明		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	不明	不明		コピー資料より検索
2	「法学概論」	2	1年前期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	2年後期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学Ⅰ」	2	2年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	2年前期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	4	1年から3年の間		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「法学概論」	2	セメスター制度のため年次配当なし	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「現代法学(a)」及び「現代法学(b)」	各2、計4	「(a)」－1年以降前期、「(b)」－1年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	※なし				『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学A」	2	不明		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「法学（1）」及び「法学（2）」	不明	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法律学」	2	2年後期		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学（含日本国憲法2単位）」	4	1年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「法学」	2	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学」	2	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「法学」及び「日本国憲法」	各2、計4	「法学」－1年前期、「憲法」－1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「法学」	2	1年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学概論」	2	1年以降前期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学（日本国憲法）」	2	1年半期	学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	開講なし				『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	不明	不明	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「法学」または「法学概論」	いずれも2	「法学」－1年または2年、「法学概論」－2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	1年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「法律学」	2	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「法学」	4	1年以降	日本国憲法4単位を含む。学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学Ⅰ（日本国憲法）」及び「法学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「法学Ⅰ」及び「法学Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「法学」	2	1年前期または2年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「法学」	2	1年前期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「教養講義H（法学）」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「法学」	4	1年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法学A（日本国憲法を含む）」及び「法学A（日本国憲法を含む）B」	各2、計4	「A」－1年前期、「B」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「法学1」及び「法学2」	各2、計4	「1」－1年前期、「2」－1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「法律学概論Ⅰ」及び「法律学概論Ⅱ」	各2、計4	いずれも1年または2年の半期	学期不明	『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	不明	不明	不明		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「法学」	2	1年または2年後期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	4	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
2	「法律と生活」	2	1年後期		コピー資料の課程表等より
2	「法学」	2	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「法学」	2	1年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「法学」	2	1年または2年後期		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「法学」	2	1年前期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「契約と社会のルール（法学）」	1年または2年前期			『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
3	「人間と社会Ⅱ（法学）」	4	2年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「法学」	2	1年または2年の前期または後期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「法学」	2	1年前期または後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「法学」	2	1年または2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「法学」	2	1年前期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
3	「生活と法」	2	2年後期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「法学」	2	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	なし				コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「法学」	4	1年	一般教育科目	『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「法学」	30時間	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「法学」	30時間	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「法学」	4	2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「法学（憲法含む）」	30時間	2年後期		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「法学」	30時間	3年前期		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「法学」	30時間	1年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「法学」	2	1年前期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「法学」	1（30時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	法学	単位数	年次	備考	主な資料
5	「現代社会と法」	2	不明		『大学院要覧』（２００２年度）の課程表より検索

医学一般

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「医学一般」	不明	２期	３期制	『学習のしおり』（２００２年度）及び『募集要項』（２００３年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「医学一般」	4	２年通年		『学生便覧』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	２期	４期制（１～３期－１年目、４期－２年目）	『履修の手引き』（２００２年度）の課程表より
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）及び『入学案内』（２００３年度）課程表より
1	「医学一般」	６０時間	通年		コピー資料（課程表）
1	「医学一般」	６０時間	１年	１年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	３～４期、連続	４期制	『学習の手引き』（２００２年度）の課程表より
1	「医学一般」	4	1～2	８学期制	『学生便覧』（２００２年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習・６２時間	３～４学期	４学期制（１～２学期－１年目、３～４学期－２年目）	『学習のしおり』（２００２年度）
1	「医学一般」	4	通年		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『入学案内』（２００３～２００４年度）課程表より

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
1	「医学一般」	６０時間	通年		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	２年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「医学一般」	スクーリング６時間、自己学習１６２時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「医学Ⅰ」	2	１年前期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－１年、「Ⅱ」－２年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「医学概論」	４（介護専攻は同一名称６単位科目）	１年通年（介護専攻－２年通年）		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学概論」及び「医学知識」	各2、計4	いずれも1年	学期不明	『履修案内』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般」及び「医学概論」	各2、計4	いずれも1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	3年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学知識」	4	1年前期		『学生ハンドブック』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）「社会福祉士試験」の項より2000年度以降入学生課程

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学一般」	2	3年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学概論」	4	3年通年	複数学科あり、一部学科は6単位科目、1年通年	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般」	6	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「医学一般」	4	1年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学一般」	4	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学概論」	4	2年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	2	2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「医学一般」	4	1年から4年の間通年		『履修要項』の課程表より
2	「医学一般」	4	1年または2年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学一般」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学概論Ⅰ」及び「医学概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－2年後期	セメスター制度採用。年次に、セメスター制度の配当セメスターと想定学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	2	2年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学概論」	4	不明		コピー資料より検索
2	「医学概論」	4	2年前期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学概論」	4	2年前期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学一般」	4	3年通年		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	3年通年		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	2年または3年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般A」及び「医学一般B」	「A」－4、「B」－2、計6	セメスター制度のため年次配当なし	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般(a)」及び「医学一般(b)」	各2、計4	「(a)」－2年以降前期、「(b)」－2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学一般」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－2年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	2	1年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	3年通年		『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「医学概論」	4	1年通年		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「保健医療論」	4	2年以降通年		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「医学一般」	4	2年以降前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	2年通年		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般Ⅰ」	4	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学一般」	4	2年以降通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉援助技術演習）
2	「医学概論」及び「公衆衛生・環境医学」	各2、計4	いずれも1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「医学一般」	4	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	3年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学知識」	4	2年通年		コピー資料の課程表より検索
2	「臨床医学概論」	2	1年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「医学概論Ⅰ」及び「医学概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年後期、「Ⅱ」－3年前期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「医学概論」	4	3年以降通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「医学知識」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「ソーシャルワーカーのための医学知識」	4	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「医学概論」	2	2年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般」	4	2年または3年通年		『専門科目課程案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「医学一般」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「医学一般」	2	2年前期		『課程概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学概論」	2	1年半期	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
2	「医学概論」	4	1年後期		コピー資料の課程表等より
2	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「医学一般」	4	2年または3年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「医学一般」	4	2年または3年通年		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「医学一般」	4	1年通年		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
3	「医学一般」	6	1年前期～2年前期		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	「Ⅰ」－4、「Ⅱ」－2、計6	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年前期		『課程要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－2年前期、「Ⅱ」－2年後期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「医学一般」	4	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
3	「医学一般（基礎）」及び「医学一般（保健指導）」	各2、計4	いずれも2年前期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「医学一般」	4	2年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「医学一般」	4	2年通年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「医学概論」	4	1年通年		『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「医学一般Ⅰ」及び「医学一般Ⅱ」	「Ⅰ」－60時間、「Ⅱ」－30時間、計90時間	「Ⅰ」－1年通年、「Ⅱ」－2年前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「医学一般」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「医学一般」	4	1年～2年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「医学一般」	60時間	2年通年		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「医学一般」	30時間	1年通年	時間数が記載のとおりであれば、他科目と組み合わせての該当。開講の1年通年が正しけ	『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「医学一般」	60時間	1年通年		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「医学一般」	4（2＋2に分割認定と思われる）	「先の2単位分」－2年前期、「後の2単位分」－2年後期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「医学一般」	2（60時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	医学一般	単位数	年次	備考	主な資料
5	「医学・リハビリ特論A」及び「医学・リハビリ特論B」	各2、計4	不明		『大学院要覧』（2002年度）の課程表より検索

介護概論

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「介護概論」	不明	1期	3期制	『学習のしおり』（2002年度）及び『募集要項』（2003年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1	「介護概論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）課程表より
1（通信）	「介護概論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	1期	4期制（1～3期－1年目、4期－2年目）	『履修の手引き』（2002年度）の課程表より
1（通信）	「介護概論」	スクーリング3時間、自己学習81時間	後期	前後期制（前期－1年目、後期－2年目）	『学習指導書』（2002年度）及び『入学案内』（2003年度）課程表より
1	「介護概論」	30時間	半期	学期不明	コピー資料（課程表）
1	「介護概論」	30時間	1年	1年課程、学期不明	コピー資料（『学生便覧』）の課程表より

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
1（通信）	「介護概論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	４期	４期制	『学習の手引き』（２００２年度）の課程表より
1	「介護概論」	2	5	８学期制	『学生便覧』（２００２年度）の一般養成課程の項より
1（通信）	「介護概論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習指導書』（２００２年度）課程表より
1（通信）	「介護概論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	４学期	４学期制（１～２学期－１年目、３～４学期－２年目）	『学習のしおり』（２００２年度）
1	「介護概論」	2	後期		『学生便覧』（２００２年度）の課程表
1（通信）	「介護概論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	後期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『入学案内』（２００３－２００４年度）課程表より

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
1	「介護概論」	３０時間	前期		『講義概要』（２００２年度）より
1（通信）	「介護概論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	２年		『履修要項』（２００２年度）より。※年次はレポート提出のスケジュールより
1（通信）	「介護概論」	スクーリング３時間、自己学習８１時間	前期	前後期制（前期－１年目、後期－２年目）	『学習の手引き』（２００２年度）課程表より
2	「介護概論Ⅰ」	2	１年後期		『履修の手引き』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「介護概論」	2	１年	学期不明	『履修の手引き』（２００２年度入学生用）課程表より検索
2	「介護福祉」	2（介護専攻は「介護概論」として４単位科目））	２年（介護専攻－１年過年）	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「看護概論Ⅰ」	2	２年	学期不明	『履修案内』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論Ⅰ」及び「介護概論Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年前期、「Ⅱ」－２年後期		『履修要項』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	2	１年	学期不明	『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	３年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	３年前期		『学生ハンドブック』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	３年前期	学科によっては３年後期	『学生便覧』（２００２年度）「社会福祉士試験」の項より２０００年度以降入学生課程

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	２年	学期不明	『学生便覧』『シラバス』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	4	１年過年		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	2	４年前期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論Ⅰ」及び「介護概論Ⅱ」	各２、計４	「Ⅰ」－２年前期、「Ⅱ」－２年後期		『学生便覧』（２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論Ⅰ」及び「介護概論Ⅱ」	各２、計４	不明		『学生便覧』『履修ガイドブック』（いずれも２００２年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より。※年次については、段階的選択必修制でしかも学科により異なるため判断不可であった。
2	「介護概論」	4	１年以降		コピー資料の課程表より検索

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	2	1年後期		『学習便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護福祉論」	2	3年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	2年	学期不明	コピー資料の課程表より
2	「介護概論」	2	1年から4年の第半期	学期不明	『履修要項』の課程表より
2	「介護概論」	2	1年または2年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	2年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論Ⅰ」	2	2年前期	セメスター制度採用。年次は、セメスター制度の配当セメスターと開講学期から	『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	3年前期		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	不明		コピー資料より検索
2	「介護概論」	2	1年後期		『キャンパスライフ』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	2年前期		コピー資料（新入生ガイドブック）の課程表指定の社会福祉士受検資格科目及び『授業ガイド』（2002年度）

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	3年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	2年前期		『授業ガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	3年または4年		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	4	セメスター制度のため年次配当なし	いずれも前後期とも開講	『授業要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	2年以降後期		『課程履修要覧』『履修要項』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	1年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	2年以降前期		『履修の手引』、『授業概要』（2002年度）の課程表より検索
2	「介護概論」	2	2年以降前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2（履修コースによっては4単位科目）	2年前期（履修コースによっては1年通年）		『学生便覧』『授業概要』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	4	3年以降	学期不明	『履修要項』（2002年度入学生用）の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	2	1年	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論Ⅰ」	2	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より
2	「介護概論Ⅰ」	2	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
2	「介護概論Ⅰ」	2	1年後期		『履修要綱』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	2年以降後期		『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	1年半期	学期不明	『履修申告の手引』（2002年度）の課程表より検索
2	「介護福祉論」	2	2年前期		『履修ガイド』の社会福祉士受検資格の項、『講義ガイド』（いずれも2002年度）

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	2年以降前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	不明	不明	不明		コピー資料（社会福祉博動技術演習）
2	「介護概論」	2	2年	学期不明	『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	3年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項、『講義要項』（2002年度版）
2	「介護概論」	2	不明		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	2	1年以降	学期不明	『履修の手引き』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	2年前期		コピー資料の課程表より検索
2	「介護概論Ⅰ」及び「介護概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		コピー資料の課程表より検索
2	「介護概論」	2	2年前期		『学生便覧』及び『開設科目一覧』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
2	「介護概論」	2	2年前期		『授業概要』（2002年度）課程表より検索
2	「介護概論」	2	3年以降前期		『学生便覧』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	4	2年通年		『履修要覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表より

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護概論」	2	3年	学期不明	『履修要項』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	2	1年前期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	4	2年または3年通年		『専門科目講義案内』（2002年度）の課程表及び社会福祉士受検資格の項
2	「介護概論」	4	2年以降通年		『履修要項』（2002年度）の課程表より検索
2	「介護概論」	2	2年前期		『講義概要』『学生ハンドブック』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	3年半期	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
2	「介護福祉論」	2	1年後期		コピー資料の課程表等より
2	「介護概論Ⅰ」	2	年次不明		コピー資料の課程表より検索
2	「介護概論」	2	2年または3年後期		『履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
2	「介護概論」	2	2年または3年前期		『キャンパスガイド』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「介護概論」	2	1年前期		『学生便覧』『授業概要』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「介護概論」	2	2年前期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「介護概論」	4	1年通年		『学生便覧』『学習の手引き』（いずれも2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「介護概論」	2	1年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表より検索
3	「介護概論Ⅰ」	2	2年前期		『履修要項　授業計画』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「介護概論」	2	1年後期		『学生便覧』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項及び課程表
3	「介護福祉概論Ⅰ」及び「介護福祉概論Ⅱ」	各2、計4	「Ⅰ」－1年前期、「Ⅱ」－1年後期		『学園生活』（2002年度）の課程表より
3	不明	不明	不明		コピー資料

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
3	「介護福祉論」	2	2年前期		『履修要項』（2002年度）の課程表
3	「介護概論」	4	1年	学期不明	コピー資料の社会福祉士受検資格の項より
3	「介護概論」	2	1年前期		コピー資料の社会福祉士受検資格の項
3	「介護概論Ⅰ」及び「介護概論Ⅱ」	各2、計4	1年半期	学期不明	『授業科目履修要項』（2002年度）の社会福祉士受検資格の項より
4（3年課程）	「介護概論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索
4	「介護概論」	60時間	1年通年		『学生便覧』（2002年度）の課程表より検索

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
4（3年課程）	「介護概論」	4	1年	学期不明	課程表のコピー資料より検索
4（3年課程）	「介護概論」	30時間	1年後期		コピー資料（課程表）より検索
4（3年課程）	「介護概論」	60時間	1年通年		『2002年度生ガイドブック』の課程表より検索
4（3年課程）	「介護概論」	30時間	1年前期		『講義要項』（2002年度）の課程表
4	「介護概論」	4（2＋2に分割認定と思われる）	いずれも1年後期		コピー資料の課程表より検索
4（1年課程）	「介護概論」	1（30時間）	不明		『学生便覧』（2002年度）の課程表

種別	介護概論	単位数	年次	備考	主な資料
5	「介護福祉論」	2	不明		『大学院要覧』（２００２年度）の講義表より検索

資料２　「社会福祉援助技術演習」教育の実態と要望に関する ヒアリング調査結果　ブロック別

関東信越ブロック

関東信越ブロック第１回ヒアリング調査結果

日時：９月 11 日（水）14:00～

司会：　Ａ大　　Ｆ氏

　　Ｂ大　　Ｉ氏

参加者：Ｃ大　　Ｔ氏　　Ｈ大　　Ｋ氏

　　Ｄ大　　Ｔ氏　　Ｉ大　　Ｉ氏

　　Ｅ大　　Ｋ氏　　Ｊ大　　Ｋ氏

　　Ｆ大　　Ｕ氏　　Ｋ大　　Ｎ氏

　　Ｇ大　　Ｓ氏　　（以上９名）

１）ヒアリング調査の主旨説明

・援助技術演習のテキストづくり

・各大学へのヒアリング調査実施、パターンづくりとまとめ

・教授法、教科書についてディスカッションの中で方向性を作る

・現状把握、課題、問題点などの教育方法も話し合う

・各大学での授業（演習システム）のあり方、シラバスの説明

２）援助技術演習についての議論

Ｓ：Ｇ大　３年次夏休み現場実習、演習を２単位とする

２年生から開始①（プリントより番号説明）

３年前期②　３年後期③～ゼミ形式アットランダム

４年④～新カリキュラムで集中実施

①：入り口部分３３０名＋福祉科教職学生

全体的講義＋事例グループ検討形式。援助における人間関係を中心とした授業

②③：２５名ゼミ形式。同じグループ、同じ教員で無作為に選ぶ

②：基本部分、ロールプレイ中心

③：事例を使いながらアセスメント、評価へ

④：実習後演習の意義、実習で体験した事例を用いてグループでの話し合い。実践と理論を結びつける授業。ビデオ学習での面接場面学習など

Ｉ：たくさんの教員が関わるが方法論的に一致したものはあるか

Ｓ：ない。各科教員による。
　何に力をいれているかはわからないがシラバスは統一している
Ｎ：Ａ大　プリントを参照。履修者１学年１００名ほとんど全学生が履修している。
履修条件：A：卒業単位４０をとっていること。
BCD：A をとってからやること。
春、秋両方開講（セメスター制）２年後期～４年までに取り込む予定である。シラバスはインターネットでとりこめる。
A：基本的部分より演習の入り口に立つところまで
特徴として、学生が４名の教員のところをまわるように授業を取っていく。最後のほうは事例でロールプレイをしながらインテーク面接などを実施。非言語表現とはどんなことかビデオ学習なども取り入れての学び。
BC：インテークからのプロセスを１つの事例を追って学習。教員が利用者役になり、学生が援助を考えていくやり方。その際同一シラバスの元に教員がランダムに学生を選ぶ。しかし、シラバスは同じだが授業内容が異なるため、他教員の授業を見に行くことにしている。
D:コミュニティについてはじめたばかりで試行錯誤している段階である。
Ｉ：直接実習に結びつくのではないのでは。
Ｎ：結びついていない。
Ｆ：実習入門という授業でカバーしていく。この科目自体は実習に関わりはない。
Ｉ：Ｂ大は直結している。これらのことが今後の議論になっていくであろう。
Ｋ：Ｅ大　セメスター制、３年１２０名（教員６名）、４年１００名（教員５名）演習指導は３，４年通年で実施、実習も同様。３年が 20 名多いのは、福祉科教員プログラムのため。「援助技術演習」相川書房のテキストにしたがっておこなう。
３年次：自己覚知、コミュニケーション技法学習。
４年次：プリント参照。具体的にミクロからマクロの視点へ深める。
実習と演習は別で考える。実習体験は実習指導で行う。演習では分野をあえてわけず、ランダムで実施。実習指導はそれぞれの分野で行う。実習時期についてはそれぞれ異なる。

演習ＩＩを履修しなければ資格とれない。総論は一年後期に学習。精神保健福祉士、社会福祉士プログラムとも演習はひとつの科目でおこなう。どちらも分野を超えて学習。資格は両方とれないシステムである。

Ｉ：実習と連結している。全部同じ目線でおこない、実習指導も分野別徹底している。

Ｔ：Ｄ大　３年で演習履修。３，４年で２週ずつ実習。
実習前教育についての取り組みへの課題、実習と演習とのリンクが難しい。実習との連結をどのようにしていったらいいのか課題。２０代の若手職員など呼び実習ではできないことを授業で補足。演習と実習は結びついていないのが現状。

Ｔ：Ｃ大　演習教員１名、３年生９０名２クラスを担当。演習通年４単位。児童福祉学科社会福祉コース７０名＋編入生＋他コース。
課題：テキスト「人間関係演習ノート」を使いながら１つ１つふりかえる。９０名と人数が多いため、グループ体験がどこまで理解されているのか？
実習：３年の春、夏休み中実習。実習指導も１名の教員。実習先は学生の自己開拓に任せる形。資格だけではないのでシステム変えたい。指導の限界がある。

Ｉ：ロールプレイなど９０名で教室はどうされているのか？

Ｔ：一番大きい教室を確保し何とかやっている。

Ｉ：Ｉ大　援助技術演習という概念はない。社会福祉学演習＝ゼミのみ。プリントより①～⑩まで統一しない教員１０名。1学年で４０人、うち１１０人が実習している。
1年：基礎
2年：実習前分野別ゼミ（3年次実習のための実習先選びは抽選）
3年：専門ゼミ＋実習
4年：卒論指導
特徴：精神保健福祉士はとれない。資格がすべてではなく、学問としての社会福祉。来年度からカリキュラム分けを改善する予定。

Ｋ：Ｈ大　セメスター制　社会福祉方法演習とよぶ。（連続２コマ４単位）
１年：概論
２年：方法論総論　（４単位）１１月に学生と面接し１週間配属実習の実習先決定。社会福祉士、精神保健福祉士どちらでいくかここで決定。

３年：方法論演習　前期：基礎対人援助について学習。後期：現場実習のための統一試験実施。
４年：実習　１１月に行く学生多い。実習と選択ゼミどちらかであったが来年から変更する。つまり、実習と方法演習をリンクさせる形へと変更する。

Ｋ：Ｊ大　卒業生なし、現在４年目で、今年で完成年度を迎える。
資格メインの取り組み：社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、福祉科教員である。
福祉：８０名　１クラス２５名３名の教員（助手２名）
介護：３０名　１クラス３０名２名の教員
これら担当教員が実習も担当することが多く、実習とリンクさせている。演習は実習後（実習３年次）４年次に開講している。前期では調査など、後期では記録や面接などを教えている。
２．３年：援助技術に力入れる。見学、ロールプレイなど学習。
３年次：分野別実習指導。
４年次：まとめ
実習システム：社会福祉士：２年事前学習、３年実習
精神保健福祉士：３年事前学習、４年実習（選抜２０名のみ）

３）ディスカッション１６：３０～　発題者：Ｉ
デイスカッションのテーマ「実習と教育をどう結びつけるのか？」
・その内容
・実習とのリンク
・教授法について

Ｓ：学年も関係してくるが、演習で行ったことと実習が結びついたか？と学生に質問したところ、結びついていない。それより事前学習が役に立っている。精神保健福祉士のほうは教員３人で２０人クラスのため演習、実習つながり強い。何を感じているのか、個別性が重要である。

Ｉ：アメリカでは演習と実習結びついている。実習と演習の位置付けはどう考えるか？

Ｔ：Ｃ大　現場に出た際、何を行っていいのかどう援助すればいいのかわからなく、自分自身の体験を通して思った。その体験からさまざまなグループに参加し学習したので、体験的ワークが重要であると考えとりいれている。

Ｓ：実習をどこにおくのかが重要ではないか？事前、事後学習をふく

めて臨床、体験を通して実習とするのか？広い意味で考えていく必要性があるのではないか？

K：実習体験を通して事前、事後学習がいかせるのでは？演習は日用体験をもとにプログラムをつくっている。

I：大学という組織ではなく個人としての意見も聞かせて頂きたい。

T：D大　リンクを無理にさせる必要はないように感じる。現場と密な関係をしていればいいがしていなかったらできない。リンクできない状況でやる必要はないのではないか。

N：演習に意味を感じる。履修学年が決まっていないことで難しい点があるが、その中での気づきが重要。演習、実習指導名前は違うがやることは同じである。体験してきたことをいかにスーパービジョンしていくのか、結びつけることを教員、学生一緒におこなっていくことが重要ではないか。

I：ソーシャルワークプラクティスと演習を結びつける。人間関係、エンパワメント、ケアマネジメント含めて学ぶことが重要なのではないか。

N：時間数も増え、ぜひ実践していきたい。

S：いきなりソーシャルワーク理論をつかうのでなく基本的な人間としての話を聞く姿勢などが大切なのではないか。現場経験ありの教員に生かしてもらいたい。

U：F大　実習のありかたミクロ、マクロの視点が分野ごとリサーチしていくことがことなるのではないか。ソーシャルワーカーとして１：１の実習課題を見つけ演習につなげていけばいいのではないか。

I：専門家養成のための養成ではないのかと個人的に考える。そうしなければ専門家は育たない。

S：看護の場合を考えても資格は絶対条件である。福祉は選択であるが、やはり４年生大学としてあくまでも資格ではないか。

T：D大　実習に致命的結果がでてくるのではないのか。やはりそこを考えての指導が必要と考える。

I：逆に言うと、演習から実習に結びつく必要もあるのではないか。これらを社会福祉士養成学校すべてにたいして広げていく必要性がある。厚生労働省から、社養協から、みなで働きかけ、現場に結びつく教育をしていくためには動かしていきましょう。今回のような話し合いを今後も行い生かしていきましょう。

関東信越ブロック第２回ヒアリング調査結果

日時：9月12日（木）14:00～

参加者：Ａ大学　　Ｔ先生
　　Ｂ大学　　Ｙ先生
　　Ｃ大学　　Ｋ先生
　　Ｄ大学　　Ｙ先生
　　Ｅ大学　　Ｉ先生(司会)　以上５名。

①Ａ大学の演習について

Ａ大学：実習が２年と３年次に２回行われる。社会福祉援助技術演習は履修学年が３年で実習に行く学生が受ける。履修資格は総論・ゼミ・原論をとっていること。２年で各論Ⅰ・Ⅱを必修ではないがほぼ全員が取得している。２年次に２週間の入門実習を行う。３年へあがるときに試験を行っている。選抜試験。実習は２回、１回は２年次に２週間の入門実習を行う（６月）記録の書き方や、態度など基本的な知識を与えて現場に出る。その体験をもとに自己覚知やバイスティックに結び付けてみるなど次の段階へ進めていく。入門実習なので相談機関や養護施設等はさける。３年で現場実習を４週間行う。10月から始まるので、授業は公欠になる。実習は演習の成績がＡかＢであること、Ｃの学生は実習ができない。ほとんどの学生にＣはつかない。演習は援助技術現場実習のバックアップゼミという位置付け。援助技術にかんすることは演習で、実習に関して記録の書き方等基礎的なことは実習指導で行う。週１回１年間。

教員が５名、助手が２名、８クラスに分かれる。１クラス25名である。バックアップゼミとミックスゼミ（分野を分けない）を行っている。

技術に関しては演習で行い、記録の書き方などは実習の事前学習で行う。演習には実習指導の内容が含まれており、実習と演習はかなり近いものがある。

Ｃ大：先生ごとに中身は違うのか。

Ａ大：教員の得意分野が大きく、教員同士でシラバスを交換してはいるが内容はそれぞれに異なってしまう。

Ｄ大：卒業後もみんな福祉の現場に進むのか。

Ａ大：得に現場実習に出た学生に関しては多い。

Ｅ大：クラス28名は多い？大変では？

A大：大変である。2 年生実習も担当しており、学生と関わっているので、学生に関してはある程度理解できる。様々な課題を抱えている学生は助手ではなく教員が担当するようにしている。

E大：演習は現場体験と切り離して、実習の指導の中で現場の体験をやるべきだという考えもあり、こちらの場合だと演習と実習を一体にしているように思えるが・・。

A大：現場から持ちかえった事例の中で考えた方が、質問を受けたときに学生自身が答えやすいし、活発なやりとりができる。

B大：巡回指導はあるのか。

A大：2 年次は全教員が行い 3 年も全教員ではあるが、課題のある学生のところだけ巡回する。

B大：受け入れ先は？確保が大変ではないか？

A大：夏までは他の学校でいっぱいになるので、10 月に行う。10 月なら受け入れられる施設が多い。公的機関の場合は向こうの都合に合わせる。

E大：病院での実習は無理か？

A大：病院の場合は自主実習になる。MSW になりたい人は数名程度しかいない。

② B大学の演習について

B大学：人間学部人間学科福祉心理専攻。社会福祉だけでなく心理も勉強できるというかたちでやってきた。定員が 130 名、実際は 170 名弱である。97 年から保育心理専攻と福祉心理専攻の 2 本で立ち上げ、2003 年度からまた新たに人間福祉学科 130 名、保育学科、心理学科、共生社会学科 100 名の 4 学科体制になる。精神保健も検討中である。

演習はⅠ・Ⅱで 2 単位ずつ、通年でⅠが 2 年、Ⅱが 3 年で履修。Ⅰは一緒に、Ⅱはグループ別で行う。

演習は約 150 名が履修、実習に行くのは約 120 名弱、教員が 6 名で 1 クラスあたり大体 25 名である。心理の学生も心理だけでは就職が難しいため、福祉士もとりたいという学生も含む。

実習は 3 年次の夏から春にかけて行う。

演習は学生の希望によるもので、分野にばらつきがあり、8～40 名になってしまうことも。40 名になってしまってもクラスを分けることはない。実習指導とははっきりと切り離して行っていく。

実習指導は 2 年次後期から事前学習、講義中心である。配属先が

決まるのは3年次5月末で、8グループに分かれる。教員は専任2名と非常勤が担当する。

演習はあくまで理論、だれでも履修可であり、実習とは切り離した考えで行う。

教員によってシラバスはばらばらで、うち合わせもない。分野別に分けているわけでもない。演習ⅠをおとしてもⅡを履修することができる。積み上げ、ということを考えると、考えていかなければない。

E大：演習を実習に行くための基礎理解と考えるのか？コミュニケーションや自己理解は演習Ⅱにあたるのか？

B大：どちらかというと演習Ⅰのほうが専門的である。配当を考えるべきなのかもしれない。

③C大学の演習について

C大学：定員が80名、実際の人数は100名弱、その90%が実習を行う。ちょうど改善時期である。今までは2年前期・後期で演習Ⅰ・Ⅱとしていて、演習Ⅰは社会福祉実習論を演習としていた。2年後期で演習Ⅰ、3年前期で演習Ⅱとなる。教員は4名、実習担当も同じ教員。社会福祉実習論は現場の話しを聞いたり、スライドを見たりする。

演習Ⅱでは教員は同じ内容で同時進行していく（過去は分野別だった)。機械的に4グループにわけ、教員もローテーションして各グループ2回ずつまわっていく。主に面接技術の取得(2年後期)、場とその人たちの理解（3年前期)、以前は一緒にしていたが混乱があった。

演習は週に1回で半期、1グループ25名、その中で3名でロールプレイを行う。それぞれ課題を設定しておこなう。実習に行かない学生もとることができる。

実習は今回より4年夏休み（4年春からもある)。一般就職の人には実習をあきらめてもらい、本当に現場で働きたい学生にいってもらいたい。(人数を減らす)。

厚生労働省のいう実習先だけが実習ではないと考える。NPO や病院など、バラエティにとんだ実習先に行かせたいが福祉士がとれない先には誰も行かない。

D大：精神も両方とれるのか？

C大：精神に関しては教員がきびしく面接を行う、以前は両方取れて

いたが、改定後では両方取ることはできない。

就職は一般が 80%、公務員と福祉系企業もいれれば 30%である。

E大：実習が 4 年だとそれまでに学生は間延びしてしまうのでは？

C大：確かに、演習と実習は切り離しているが、3 年の後期が準備学習と 4 年の後期が事後学習なので教員自身も大変。

④D大の演習について

D大：人間福祉科、今年度が 5 年目であり、今年 1 回生が卒業した。福祉の教員は 5, 6 名、その他公衆衛生、福祉工学などさまざまである。資格にこだわらず様々な分野にでていき、外から働きかけるのが福祉であると考える。学年 110～120 名、社会福祉士と精神保健福祉士は両方とれない。進路指導は 2 年から 3 年にあがるときに試験を行い、適正をみる。その時点で 50 名弱に減る。それまでに 2 年の春から小論文、過去問、面接などを定期的に行っている。

精神分野は学生 10 名に対して教員 2 名、福祉士は 40 名に対して教員 4 名（1 クラス 10 名）である。

演習は 3 年次通年（夏休みに集中あり）から、前期が共通でコミュニケーションや自己覚知など、後期は分野別に分かれる。夏休みはボランティア、精神分野の学生は 1 日精神病院見学実習を行う。ボランティア、実習体験後実習をやめる学生もいる。

選考からもれた学生でも演習の履修はできる。また敗者復活もあり、学生の努力次第である。

実習指導は 4 年次春から（記録の書き方など）実習は 4 年秋（9～12 月）その後個別指導、実習は指定科目をすべて履修済み（単位取得済み）であること。

2 年から定期的に過去問をやったりと、試験対策をしている。PSW は 17 名中 7 名合格。福祉士の学生が一般に行く学生も多い。卒論を書く学生は福祉士は受けられない。

⑤E大学の演習について

E大学：演習の内容すべてを実習に結び付けている。3 年前期にほぼ全員が実習を行う。定員 80 名、実質 100 名。福祉就職率 90%。

教員 10 名前後である。前期は授業が取れない。月～木曜が実習で金曜日帰校日、金曜の 2 コマを使って指導を行う。2 年前期で援助技術演習、実習と直結している。2 年後期前ゼミとして 1 グル

ープ10名程度に教員1人で行う。演習Ⅱは3年4，5月と実習が終わった7月に集中的に行う。理論的なことは総論やその他の授業で。精神と両方とる学生は100中10名ほど。実習先決定は2年後期である。

まとめ

演習を実習の一部とみなしているか、はっきりと分けるべきと考えるべきか。実習と演習の関係のなかで一連とみなす大学と全く分けている大学とがある。演習とは理論的なものを考えると、事例や現場の経験をどう位置付けるかが問題になってくる。それはどういう実習を目指すのか、どんな学生を育てるのかという根本的な問題に至るのではないか。

教授法に関してはロールプレイや事例を使ったりと、それほど大きな違いはないのでは。

大学における福祉教育の位置付け、つまりコース、学科など独自性をもっているところで、自分たちで決められない部分で左右される。それらをどう考え、変えていくか。

演習の位置付けが専門家思考の場合とボランティア・市民思考、実践家と様々である。もうひとつの機軸として組織のあり方、定員の問題、カリキュラムのありかたなど、根本的な教育の方針で位置付けていく。その中で決まってくる。こういう方向性だとこういうモデルが考えられるというものを作り、最終的にそれぞれの大学を位置付け、自分たちの大学がどの位置にあるのかを見る必要がある。

厚生労働省の要項でも実習と演習の内容に共通する部分がある。演習の中に実習指導的なことが含まれており、はっきりとわかれていない。分けることにどういう意味があるのか。

カリキュラムを含めたしっかりとしたガイドラインを作り、教授法等についても考えていかなければならない。学校によって考え方は違うので、ひとつのガイドラインを作るのではなくモデルをつくりその中にそれぞれの大学を位置付ける。

全部の学校にアンケート調査を行いすべての学校を位置付ける。裏づけとなるデータが必要だ。

関東信越ブロック第３回ヒアリング調査結果

日時：12 月 20 日（金）14:30～

司会：　Ａ短期大学　　Ｔ先生

参加者：Ｂ短期大学　　Ｙ先生　以上１名。

１）担当科目の教授法の具体的な内容の紹介及び課題や問題の検討

(1)　社会福祉援助技術演習の位置づけについて

①カリキュラム全般の中での位置づけ（社会福祉援助技術論で説明済みのことを再度わかりやすく説明する）

②日常生活とのかかわり（ルールやマナーとの関連等）

③カリキュラム全体における位置づけ（他の講義科目，特に社会福祉援助技術論との関連，体験学習であること）

(2)実習との関連

①特に事後報告と事例研究（領域別・対象者別）と関連付ける（必要に応じてロールプレイ）

②実習巡回で得てきた指導者からの情報を学生にわかりやすく伝える

③実習場面のロールプレイ，ビデオ学習

(3)課題と問題点

①演習で行ったことがどの程度浸透しているのか，評価することが困難（特に実習との関連）

②実習場面，社会福祉援助色，社会福祉施設等のビジュアル教材が不足

③ロールプレイを含めた体験学習の方法（他のバリエーションの有無を知りたいが不足）

２）使用している教材

(1)教科書

①尾崎新『社会福祉援助技術演習』誠信書房，1992 年

②社会福祉教育方法・教材開発研究会編『新社会福祉援助技術演習』中央法規出版，2001 年

(2)文献資料（他分野・多数）

①社会福祉援助技術論の教科書（関連著書）

②Creative OD

③社会福祉士国家試験のうち事例問題

④久保紘章編『社会福祉援助技術演習』相川書房，川田・水野他編

『社会福祉援助技術演習』(株)みらい，岡本民夫編『社会福祉援助技術演習』川島書店

⑤新聞記事・週刊誌記事・詩（歌詞も含む）

⑥ビデオ：たとえば以下のとおり

『ケアマネジメントの技術』(基礎編，応用編 1，応用編 2) 長寿社会開発センター

『ぼけなんか怖くない』高齢社会をよくする女性の会

『グループホームで創る生活』(グループホームの実践から学ぶ I) グループホームはつね

『べてるの家を知るために』(全 8 巻) べてるの家

『男たちの旅路・車輪の一歩』NHK

『晩秋』1989 年ユニヴァーサル映画

『奇跡の人』1962 年製作（ワーナー・ホーム・ビデオ）

『愛は静けさの中に』1986 年パラマウント映画

『生きる』1952 年東宝映画

(3)課題と問題点

①ビデオの場合フォローアップが大切。そうでないと楽しいだけで終わる可能性がかなり高い。

②実習場面，面接場面等をモデル学習したいがそのためのビジュアル教材が不足。

3）担当科目の教授法に関する研修ニーズ

①モデル学習のための教材・資料が圧倒的に不足している。

②“みる”，“きく”，“ふれる”および感性を磨く等の教材が不足している（特に社会福祉に関連したもの)。

③上記を教えられる教員が少ないこと。研修も少ない？

④適当な教科書が本当に少ない。現存のものは，残念ながら“帯に短し襷に長し”である。

⑤社会福祉の専門性とわれわれが日々営む生活の日常性との違いは強調されるが，それらの連続性・共通性がほとんど語られていないために，学生にとってはぴんと来ない場合が多い。したがって問題意識も薄いままになってしまうことが多い。

⑥体験学習そのものの意味，諸形態等が整理される必要あり。

⑦事例研究，援助のための訓練（感性を磨く，援助・技術の習得，知識の確認)，実習との関連，その他をどのような組み合わせで思考していけばよいか迷うこと多々あり。そもそもこれだけのこと

を盛り込むと時間が不足する。

⑧援助者の倫理に関連することを体験学習の中で実施することが難しい。

4）インタビュー内容

カリキュラム全体の中での援助技術の位置づけに関してお話させていただきます。シラバスと関連するんですけども，そこよりももっと大きいところから実際には始めているので，そんなことを中心になんですけども，まず，社会福祉全般の中での社会福祉援助技術の位置づけを社会福祉援助技術論Ｉという科目で行っている。改めてわかりやすく援助技術演習の中で説明するっていうことが第一にあります。その内容に関しては，制度体系と実践体系というふうな分け方をしている。その二つをうまく組み合わせて社会福祉の援助目標である一人ひとりがその人らしく自己実現していくことにどう結びつけていくのか。援助技術論のところでは，制度体系とか社会資源等をうまく活用しながら方法や技術を体験学習していくという位置づけで一つはやっています。

もう一つは，日常生活とのかかわりというのをやらないと，学生は自分のこととは関係のないものとして援助技術を捉えやすいので，たとえば日頃の親とのかかわりだとか，友達とのかかわりとか，そういったところでコミュニケーションしていくときにどんなことを大切にしているか，そういうふうなことをですね，“みる”とか“ふれる”とか“きく”だとか，そういう五感にかかわることを援助技術との関係で具体例をあげて説明していきます。特に教室での最初のルールやマナーっていうことを関連づけて，実はそういったことが援助技術を習得するうえでも大切なんだということを一番最初に言います。日常生活とは無関係ではないから，逆に日常生活の中で気付けていったり，気をつけていったりすることが援助技術を身につける第一歩になるんだという位置づけで二番目に話しています。

もう一つ，カリキュラム全体の中での援助技術演習の位置づけということなんですけども，まず手っ取り早くいうと援助技術論で展開されたことを体験学習していくという二つの関係なんですけども，それがまず第一なんですが。ご承知のように援助技術論はどこかの，何かの社会福祉の領域だとか対象に限定されるわけではないですよね。ある意味では，老人福祉の場であっても児童福祉の場であってもやっていかなくてはならないことでもあるから，対象とか領域に限定されな

いで，自分なりに活用していかなくてはならないということを，頭でやるのではなくて，ロールプレイやその他の体験学習，グループディスカッションだとか，場合によってはフィールドワーク的なところで外に出て行ったり，あるいは実習での場面なんかも具体的に関連づけて話す。そういうようなところでのカリキュラム全体の中での位置づけというのは話しています。その辺のことが，まず第一。位置づけについてですが，社会福祉全般の中での，日常生活とのかかわり，カリキュラム全体の中で，特に援助技術論との関係のところに当たると思います。

次に実習と演習との関連。これは実は重要だと思うのですけども，結構難しいところでもあって。担当者がうちの場合違うこともあります。その辺の摺り合わせをする時間がなかなかないのです。私が援助技術演習をやっているなかで，どのような実習との関連を持たせているかっていうことだけをお話できると思います。

まず第一に，事前の実習に関する準備に関しては○○先生という実習指導担当の先生にやっていただいて，私がやっているのは事後報告を時々事例研究という形でですね，学生それぞれいろんな現場で実習していきているわけですよね。そこで特に困ったことを再現してロールプレイをやってみて，じゃぁどういうところに気をつけていったらいいのかということを，比較的，事例研究とのかかわりでやっています。それがまず第一です。

第二に，いまやったような事例研究とのかかわりなんですけども，一応，学生同士のグループスーパービジョンという形で一つの実習報告をされたあとに，お互いに指摘しあう，評価しあうという形で進めていく。自分たちだけではなく他の視点を入れていくということを 2 年生になってからやっています。

グループの持ち方は年度によって違いますが，だいたい一つのグループを 7～8 人程度考えている。場合によっては，学生数が全体で 30 人ぐらいと比較的小さな場合なんかはもっと小さくします。それで，グループ相互のこととグループ内のことを。グループ内はなるべく同じ領域の実習先のところでくませるようにしています。それで発表していって，最初はグループ内でつめてやる。そのほかに違うグループで指摘しあうという形をとっています。

演習の中でこれをやっているが，やる機会はそれほど多くない。あくまで事例研究との関連でっていう形ですね。十分でないときは，模擬的な事例を使って，じゃぁ，グループはどう捉えるかっていうこと

もやっている。題材としては，2〜3回ぐらいをこの形式で行っている。年度年度の学生の実習への取り組みによって違えてはいる。

もう一つ，三番目ですけども，私自身も実習巡回で現場へ行って来て担当者と会ったり，管理者と会ってきたときの情報を，個別のものは学生との面談の中で伝えていったり，実習担当者へ伝えていったりするんですが，一般化されやすい情報だとか，困ったこと，失敗経験，これを匿名みたいな形で，じゃぁこういう場合，実際こういうことが起きたのだけども皆だったらどういうふうにするっていう形をグループでですね，スーパービジョンというグループディスカッションの中で考えて発表しあう。あまりそういうのが実習巡回で得られないときいは，とばしていくということになりますけども。その場合，前年度経験してきたことをもってきて検討してもらう。

四番目，これは困難です。実習場面のロールプレイなんですけども，まず事前のことをやるのは，事前のオリエンテーションの場面を設定して実習担当者のところへ訪問していくというのを想定して，教室の外からのトントンから始まって，そして実習指導者は誰，実習する人は誰っていうような，で，あとから施設長に紹介していく場面とかそんなものを場面のロールプレイでやっています。あと，事後のロールプレイについて，困った場面を特に取り上げてピックアップしていって，利用者と実習生，指導者と実習生でやる。題材で今までやってきたなかでは，贈り物される例だとか，苦手な利用者を敢えて挙げていって，どうかかわっていくかというものをテーマとしてやっている。

もう一つ，ビデオ学習なんですけども，これは極めてそういうビジュアルな教材がほとんどないので，既存のビデオの中で全然関係ない面接場面みたいなものを取り上げてきて見せている。こういう場面，自分だったらどうするかという問いかけを行うということでおさまっている。

課題と問題点

課題と問題点なんですけどもたくさんある。自分自身ができないことも含めてなんですけども，まず，援助技術演習の演習で行ったことがどの程度浸透しているか，これを評価するのが非常に難しい。たとえばレポートを書いてもらってどうこうということも可能なんですけども，十分反映されているかどうかということ自身，たとえばアンケート形式でやることは可能なんですが，それを数値化しちゃったら逆に見えにくくなってしまうようなところもあるようで。現状ではレポートを提出してもらって特に問題になるようなことは話し合いをする

機会をもつというような対応はしている。浸透しているかどうかという成績の評価というよりも，やった事柄がどのくらい体で実感できているかということを評価するのがまず第一に難しいですね。

次に，さっきちょっと言いましたけども，実習場面とか，具体的な場面とかもそうですが，社会福祉の援助職，専門職の活動，あるいは社会福祉の領域・対象別の施設の内容なんかを要領よく紹介してくれるビデオ，ビジュアル教材が非常に不足しているので，これがある程度あると非常にやりやすいだろうなと思います。いまのところ体系だったものが，僕はあまり探し当てていない。特に実習場面なんかは他の心理カウンセリング場面なんかあるようなんでけども，意外にないのが，援助職はこういうのがありますよというのはあるが，じゃぁ具体的にはどんなことをやっているのか，そういうようなビジュアル教材があると助かるのですが，今のところ見当たらない。施設も同じ。まぁいろんな形があるのでなかなか難しいのでしょうけども。

それと三番目にロールプレイを含めた体験学習。一応やっているんですけども，今のところ自己流でやるしかないっていう。果たしてこれが適切なやり方なのかどうか，確かめる手段があまりないですね。もしあれば，他のバリエーションとかいろんなロールプレイのやり方があるでしょうけども，場面設定でそこをやるだけだったらできるのだけども，果たしてこれでいいのだろうかという手探りの状態であるというのが課題であり問題点だと思いますね。

教科書

まず過去に取り上げた教科書，現在も使っている教科書もあるのですが，一番目は，10年ほど前に書かれた尾崎新『社会福祉援助技術演習』（誠信書房，1992年）のものから実践的だなぁと思われるような場面がある。あと，読み物としても比較的読んでいて面白い。トピックスのようなものがたくさあり，あの中からロールプレイに応用していって，たとえば苦手な利用者だとか，贈り物の例だとか，電話のかけ方だとかをトピックスの応用としてやってみるということで，結構やっています。最初の頃は，内容も順次グループでまとめっていって発表しあうというようなことをやっていました。いまはちょっとやらなくなっています。

もう一つは最近出た，社会福祉教育方法・教材開発研究会編『新社会福祉援助技術演習』（中央法規出版，2001年）という，これはかなり技術的なものです。もう一人の演習担当の先生が心理的なことが得意領域で，エゴグラムなんかもやっている。この教材については，分

厚く細かすぎるので全部できなくて，学生の方も，重たく大きいものを持ちたがらない（笑）。
教科書に関してはこれがいいというぴったりしたものが僕の方ではみつからない。「帯に短し襷に長し」というところがありまして，ぴったりとした教科書が見つからないというのが課題であり，問題点であると思います。研修の大きな課題と思う。

その他，文献資料に関してですが，これは特定するのがとても難しい。私の場合はふんだんにいろんな分野のものを用いています。先ほども言いました，日常生活とのかかわりで援助技術の問題，技術を身につけるということを考えていますので，それこそさまざまな分野でやっています。一つ，文献としては援助技術論で使用している文献の中から改めて取りだしていくとか。あとは足立・佐藤・平岡編『ソーシャル・ケースワーク―対人援助の臨床福祉学』（中央法規出版，1996年）を使っている。その他も関連するものがたくさんあるが，社会福祉の分野だけに限りません。社会学も心理学もあるし，漫画もあるし（笑），詩もあります。ふんだんに取り入れてくるようにしています。

Creative OD（organization development）というのも使っていますが，これはＲＫ大学で最初やられたグループの研修みたいなものをさまざまな手法を用いてですね，グループワーク的に進めていくというものなんですが，一つ紹介すると，NASA というのがありまして，アメリカ航空宇宙局の飛行士のために開発されたものです。サバイバルゲーム的なことで，集団の意志決定をするという場面でやるものです。それを演習の時間の中では応用させてやったり，あるいは Creative OD の中にはファイル形式でたくさんありますから，それを全部することができませんので拾い出して活用しています。Creative OD は組織開発ですが，もともと教育学科でやっているものですが，会社の研修でも使われている。現在も 6～7 冊の分冊で出版されていると思いますが，部分的にうまく活用できると思います。

次に，社会福祉士の国家試験の中から事例問題を活用しています。事例を題材として，問題に関係なく事例を取り上げて，グループでもって討論して，出し合うという形ですね。主に今やっているのはケースワーク，グループワーク，コミュニティワークという方法別に分けていって，それに関連するような，なるべく最近の事例を取り上げる。結果的に少し国家試験対策にもなっているかと思う。感触を知るという意味でもよいことかもしれないが，問題には関係なく，ある程度やっています。題材としてはある程度役に立つ。

その他，「社会福祉援助技術演習」と名のつく文献がある。一つは最近やったのでは，ノンバーバルコミュニケーションの問題で，座る位置，視線，お互いの距離というのを久保紘章編『社会福祉援助技術演習』(相川書房）から取り上げました。川田・水野他編『社会福祉援助技術演習』(株)みらい，岡本民夫編『社会福祉援助技術演習』川島書店。最近では川村隆彦『価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習』(中央法規出版）の活用も考えられる。特に，部分的には久保先生のものは結構使えるところがあるように思う。3～4か所ぐらいはいつも使っている。

それから，ミネルヴァ書房の『対人援助』という文献もありますが，あの本の中にもさっき言いましたCreative ODのものが題材として取り上げられているんですね。たとえば，ことばかけ。「私は～」で始まる文章，あるいは「あなたは～」で始まる文章の20答法，それで他者から見られている自分とか，自分から見ている自分，あれを私は応用して二人一組でロールプレイをさせて，そこから先は自分の方で勝手にやっているんですけども。一人で書くだけでは面白くないので，お互いに「私は～」で始まった文章を「あなたは～」で始まった文章にかえすだとか，そういう応用をやっています。

新聞記事・週刊誌記事・詩，歌詞なんかもよくやります。たとえば，詩なんかで言いますと金子美鈴さん，「みんなちがってみんないい」を個別化と関連づけたり，あるいは茨木のり子さんの個人の感受性にかかわることや，聴くということをすごくとりあげて，援助技術の中で特に聴くということが大切なんだということを出しています。さらに歌詞では尾崎豊，山田蒲池の詩なんかで，青年期のアイデンティの求め方と援助というのはどうかかわるのだろうかという，ここのところは結びつけづらいのだけども学生が真っ直中ですので，自分の中だけで自分らしさを求めていくことから，徐々に人がいる職業の中で自分自身を見つめていくということとはどういうふうな意味があるのかということを，例えば実習で経験してきたことを発表してもらって関連づけていくということですね。

もう一つ，関連するのは童話です。知られているのでよく私が取り上げるのはモモ。ミハエル・エンデがつくっているものですけども，その中で主人公が「聴くことの名人」なんですね。それとかかわらせて援助技術の中で“聴く”ということの意味をやっている。ただ情報を得るということだけじゃなくて，このモモという少女がですね，自分が何か伝えてアドバイスすることは全然しないのです。ただ一心に

聴いてくれるというその行為が相手を勇気づけるっていう場面が非常に多くあるんですね。聴くっていうと，何だか情報を得るという考えになりがちですけども，援助者が利用者の話を一生懸命に聴いてくれるということが勇気づけることになるということから大切なんだよ，っていうのを童話と絡ませています。こういうものについて，比較的学生は関心を寄せる傾向があります。

それから，ビデオに関する教材なんですけども，教科書的なものから，特にケアマネジメントについて私はそんなに得意にしているものではないのですが，この技術に関しては少なくとも事例研究という形で取り上げることが必要です。

あとはグループワークのグループとグループホームで行われている実践のかかわりはどんなところにあるのか。問題を投げかけるぐらいなのですけども，ビデオでは最近の老人福祉の中でグループホームは話題になってきていますので，それを取り上げるだけでも意味はあるのかなと考えてます。使い方は様々なんですけどね。必ずしも，「グループ」という文字が一緒だから同じにする必要もないし。実践活動と，あと生活からの支援というのを考えていくなかで，なぜグループホームは意義があるのかが明確になったりしてくる時もあります。

そういう社会福祉全般のビジュアル教材なんか中心にやりますが，あとはドラマとか映画を活用していきます。半年に一回ぐらいなんですけど，領域別にやると『男たちの旅路・車輪の一歩』という NHK のドラマがあるのですが，それを見て車椅子の視点からというのを理解するのに役立たせていったりしています。

『晩秋』(1989 年ユニヴァーサル映画）っていうのは，高齢化していく問題を扱っています。『奇跡の人』1962 年製作（ワーナー・ホーム・ビデオ）は有名なヘレン・ケラーのやつですね。『愛は静けさの中に』(1986 年パラマウント映画）は聴覚障害の人の世界観を表していく，これは演劇でも行われているんですけど。あと『生きる』(1952 年東宝映画）という黒澤映画です。これ意外に関係なさそうなんですが，ソーシャルワーカーの態度として，自分自身も自分らしくなっていく，たとえば援助の中で見えてくること，『生きる』っていう映画の中では「課長さんが出てきてもうすぐ死ぬ」っていう設定の中で，いつもとんぼ返りばかりしていた課長さんが，残り期間をどうしたら有意義に過ごせるかっていうようなことを，住民の公園づくりのために一生懸命にやっていくなかで，ようやく残り少ない時間だけども自分らしさが仕事の中に生かせたというそういう映画ですから，それとソ

ーシャルワーカーになることの意味がかかわる。観るとしたら，一番最後の方でまとめみたいな形で紹介する。重ね合います。

ただ，映画というのは90分以上のものが大部分ですので，やっていくと2週に分けたりとか1コマの授業の枠の中では難しいですね。ある程度，援助技術演習のためというわけではないですけども，こういう映画が縮約版みたいに編集し直されていて，40～50分ぐらいのものがあるといいな（笑）と思う時があります。現状は，まぁ2週にかけてでも一通り観てもらうのもいいかと，時間の方はとっています。よくですね，前の週に学生が休んでいて，何だかわけがわからないということも起こりますけど（笑），でも家にビデオを持っている学生が大方ですので，借りて続きを観させるということも可能ですから。ビデオはそれだけに頼りがちになりますけども，説得力という点では大きいと思います。

課題と問題点

教材の課題と問題点ということを敢えて言うと，ビデオ，ビジュアルの場合，普通の映画を題材にした時は，フォローアップを必ずしないと，ただ楽しいというだけに終わりになりがちです。どの場面が援助技術演習と関連してくるのだろうかとか，たとえば聴覚障害の人が抱えている問題を観るときに，健常者から聞こえてくることができないとだけ考えたら大間違い。体験の仕方の構造が全然違っちゃうというふうなことをわからないと，相手の気持ちになって行動するということは難しいということを話したり，フォローアップを必ずしないと，特に普通の映画の場合はやっておかないと，「あの授業は楽しいから」とか何となくで終わったりということですね。

それと，二つ目は，重なるんですけど，ビジュアルの教材はやはり全般的に不足している。適切なものがあまりないようです。特に実習場面や面接場面の中で，モデル学習したいと思うのだけども，そういうビデオは皆無に等しいんじゃないかなと，知っている限りですけどね。場面をただ流すだけの場合は良いのですけども，この場面をモデル学習的に教えてくれるようなものがあると非常に都合がいいんですけど。今のところ，あまり見当たらないですね。企業等の研修なんかでモデリング，モデル学習みたいな形で，社会福祉の現場でやられていることなんかがあると非常に助かるんですけどね。あまり見当たらない（笑）と…。

まずですね，不足している部分だとか課題をある程度，感じていることからいって，こうあって欲しいということにつながるんですけど

も，1 番目には，先ほど少し言ったのですけど，モデル学習のための教材・資料が圧倒的に不足していて，もし可能であればそういう資料づくりのための時間を研修の中で一緒にやっていくというのも一つの方法かなと考えているんですけども。多分，これは使いようにもよるんですけども，特にモデル学習に関連したビジュアル教材ですね。こういったものは欲しいなと思う。できなければそれを創っていくということをどういう形になるのかわからないのですけども，欲しいなという気がします。

二番目に，これは私が一番強調しておきたい事柄なのですけども，普段我々が“みる”，“きく”，“ふれる”という感性に関連するような，そういうまず社会福祉関連の教材は，私が知っている限りでは皆無に近いと思います。ところが，実際には学生は実習する時なんかは利用者とかかわる中で，絶対にそのことは感じていたり，あるいは感じていなくっても経験しているんですね。まずよく“みる”，よく”きく”ということがあって，できないとほとんど現場実習でやったことの意味も掴めてこないということが実際だと思います。そういう意味で学生の感性を，センスを磨けるような教材もそうなんですけども，教授方法を検討しあえるような場が研修として欲しいなと思うんですね。

また，それと関連するんですけども，実際にはそういう教員は私は少ないと思ってます（笑）。逆に先ほど一番最初のところで言ったのですけど，日常生活の我々の“みる”，“きく”，“ふれる”をもとにした感性的なことが社会福祉の現場でどう関わっているのか，関連をつけられる教員が非常に少ない。教員そのものが別のものという感じで捉えていて，教える時は教える，これは別物という感じでいる人が多いので，実はこれは一番，理論だとか技術だとか，あるいは倫理も関係するんですけど，それ以前の問題として，まず，“みて”“きいて”“ふれて”感じ取ったことを相手に伝えるということが土台になると思うのですけど，土台が抜けているのが，特に援助技術演習の中では大切なんですけども，甚だしいような気がする。これが一番大きな問題。これは教員の感性を磨ける機会，研修ということにつながる。

それと，先ほどこれは言ったのですけど，教科書が本当に援助技術演習に関しては適切なものは少ないと思います。研修の場で，むしろ検討していくという方法も一つはあるかなと思っています。まずは何を援助技術演習の中でやっているかということを出し合うということをしていかないと，それもなかなか難しいと思いますので，研修というよりも検討会というようになるのかもしれませんけども。ぜひ必要

なことだと思います。そういう意味では今回のこういうインタビュー，非常に意義があると思います。従来ほとんど行われてこなかったですものね。

あと，援助技術演習に関しては，国が指示している内容をみても，一応文面はあるのだけれども，指示している方が何をやってもらったらよいのかよく分かっていないのではないかということが，文面上からは多分に感じられます。ロールプレイをやれだとか，実習前・実習後のことを容易く書かれているのですけど，非常に難しい。評価にしてもそうですけど，ロールプレイということもどういうことをすることなのか，そもそもわかっていない教員がたくさんいる中で指導しているわけですから，なかなか難しいと思いますけど（笑）。そういうところから，少し見直していかないと，援助技術演習という科目は何だか訳のわからないものになる。未だに学校では個々バラバラにやっています。実際にやっていることは。国としてもとても指示しにくい科目なのではないかと思う。また，教員もどれだけ応えていけるかという問題も多分にあると思う。摺り合わせる機会を研修という場で設けてもいいのかなという感じはします。ただ，研修を持つにしても，研修の講師，講師をする人が果たしてどれだけいるのか，体験を語るぐらいにしか現状ではないんじゃないのかな。項目として列挙することはできても，どう身につけるかという点については今の時点では難しいのではないか。

五番目に，“みる”，“きく”，“ふれる”ということとも関係するんですけども，社会福祉の専門性とわれわれが日営，教員としても一人の人間としてもそうなんですが，日常性とのこう，援助場面というのがありますよね。社会福祉の援助場面と，われわれが日常の家族と助け合うみたいな日常的な援助場面との違いは沢山強調されている。では，それらの共通性とか連続性についてはどうかというと，その問題についてはほとんど語られていない，その認識がほとんどないのではないかという気がするので，研修の場では詰めていかないと，教員が教えていることと自分でやっていることがつながらないということが出れば，やはり学生にも日常身近なことと援助技術とがつながってこないのではないか。教員の側の日常性と専門性の問題も連続性，共通性っていうことをもっと体得していけるような機会が絶対必要ではないかと思います。その意味では一つ体験学習を取り入れていくことが必要。大元は違いばかりが強調されているため。連続性，共通性ってことについて書かれたものを私はほとんど知らない。その辺が重要なことで

はないかなと思います。たとえば，先ほどから言っているコミュニケーションをとること，とること自体は共通しています。共通している部分をもう少し突き詰めていくというか，違いは確かに分かります。資格を持っている人がやるのとやらないのとか。あるいは期間が限られているだとか限られていないだとか。そういうことは当然ありますけれども，そこだけが問題なのではなくて，私たちが日常生活の中でも援助技術を磨けるのだとしたらある程度共通性というものも明確にしておかないと難しいのではないかと思います。

その次に，体験学習そのものの意味についてですが，下手をするとやりっぱなしになることがあるので気をつけなければならない。教員が体験学習をやっていく，あるいはそのやり方のフォローアップをどうして説明していけるのかっていうこと，その力は絶対に養成されると思うので，フォローアップの力をつける研修の場なんかがほしいなと思います。私自身も手探りでやっています。

体験学習そのものの，さまざまな方法や形態，ロールプレイに限るわけではないわけですよね。たとえば他分野でいうと，文化人類学なんかでのフィールドワークと社会福祉の実習はどう関係しているのか，その辺の整理がもう少しされていたり，体験学習の形態をいろんな形で紹介していただけたら，非常にそれを活用することもできるのではないかなと思ってます。現状ではそんなところ，自分の知っている範囲では形態を活かすことができないということですね。

さらに，援助技術演習の中でいつも迷うことなんですけども，いろんなことを盛り込んでいくと時間が全然足りない。たとえば，事例研究，あるいは実習との関連。さらに，いま教科書として『新社会福祉援助技術演習』を使っていますが，主にスキル，技術的なことを身につけるということを徹底していくのか，あるいは援助のための訓練的なことを演習の中でやっていくのか，そういうものを全部入れていくとなると，時間数をどう配分していったらいいか，その配分の問題もずいぶん迷う。どこか自分の得意なところを強調する形にしかなっていかないと思うので。その辺の配分なんかも，これは国の指導も大切ですが，触れられておりませんし，そういったことをお互いに話し合える場がほしいなと思います。

次に，援助者の倫理に関することなのですが，これも非常に難しい。たとえば訓練の場で倫理を身につけるなんていう一朝一夕みたいなことはできないし，いまやっていることは演習の中では，倫理綱領などの説明をある程度していったりするんですが，倫理とか価値の問題を

もう少し演習の中に取り込んでいくにはどうしたらいいのか，ちょっと手探りの状態です。事例をみてもらって明らかに「無責任な親」だとか，あるいは「働こうとしない若い人」などの例で出発するようなことは教材なんかにもありますけれども，そこから先をどう援助職の倫理のようなものをもう少しやりたいのだけども，やり方が今一わからないというのが現状です。体験学習の中でそれができるのかどうかという，難しいところなんでしょうけど。

教授法に関する研修，方法や期間，場所とありますけれども，なかなか現状では，援助技術演習を受け持っている先生方は，たとえば期間を，1 週間ぐらい集中してやるなんてほとんど難しい人が多いと思う。それこそ実習の巡回などで出回っているし，援助技術演習だけをやっている先生というのは少ないですからね。まとまった期間をどうとったらよいかの案は私もなかなか思い浮かばなくて。短期の一泊ぐらいしてというのは可能だと思いますけれども，現状では期間的な問題は非常に大きいと思います。

東海北陸ブロック

東海北陸ブロック第１回ヒアリング調査結果
　日時：11月30日（土）１４：００～
　司会：　Ａ大学　Ａ先生
　参加者：Ｂ大学　Ｂ先生
　　Ｃ大学　Ｃ先生　（以上２名）

１）Ｂ大学

2年次に実習をしていたが知識など不十分で難しいと判断し、今年から3年次の11月と2月に2Wずつ実習することに変更した。その結果、実習期間が休暇中ではないため、この期間中の授業をどうするのか、またその事前と事後指導を入れる期間が短いなどの問題が浮上しているところである。全8名の専任教員で担当し、自由度の高いしかし援助の基礎技術としてのワークブック(3部作)を作成して検討中。担当教員は必ずしも援助技術系教員ではないが、技術論研究会があり、そこにはほとんどの担当教員が参加している。ワークブックはこの研究会で検討している。

ワークブック〈Ⅰ〉の内容は、(1)グループ作り・クラス作り、(2)自分のことを知る、(3)面接の基礎で、それぞれに3-4つのワークが入れてある。〈Ⅱ〉〈Ⅲ〉については現在作成中。各教員が使いやすいものを選んで使うことになっている。夏休み中に全教員共通の課題あり、①3日以上の現場体験をする(書式は決まっていて、このレポートを評価対象としている)、私の場合は、それ以外に②わが町わが村のエコマップ、福祉地図を作ってみる、③新聞記事から、何が社会福祉の問題や課題なのかを考えるレポートを課している。夏休み後に、これらの素材を基に意識的に“話す”。意識的に話す、主張する、ディベートする、最終的には面接につなげる。グループを作って話し合う、ということ自体ができない。最初の導入には、どうしても半年はかかると思う。

3年次での技演では、面接技法と事例検討を中心にしている。私の場合は、面接の基礎(ビデオ)、傾聴の連鎖(マイクロカウンセリング)を教材として用いている。夏休み中に、ライフヒストリーを聞き取り調査、ナラティブストーリーテリングを意識している。

11月に最初の現場実習に行くので、実習で現場での聞き取りが必要

になる。利用者の方を理解することを意識している。家族療法のビデオを教材として用いることがある。

何を目的としている授業なのか、援助技術現場実習は4週間、援助技術演習は120時間、演習に何を期待されているのか、資格養成の範囲ではなく専門職の養成としてはどのような指針があるのか、もう少し整理したものがないのか。

技演の授業の位置づけについて、援助技術論の知識を含めて、いわば援助技術論の講義の内容を現場に結び付けていくための橋渡しのための科目である、と考えている。基本的には実践教育ですからプラクティカルな内容を無視することはできないが、実践と理論は、すぐにはつながっていくものではない。K先生もおっしゃっていたと思うが、教育の内容を順次現場へ落としていくための授業と位置づけている。どちらかというと実習についてはいろいろな考え方があると思う。たとえば全体の福祉教育の集大成として実習を見る場合と、技術系のひとつの関連のなかの実習として位置づける考えもあると思う。このように、いろいろな位置づけがあると思うが、しかし技術演習については援助技術との関係でみている。また多少実習指導という意味合いでも考えている。実習そのものが、果たして、その一連の流れの中にあるものなのかは、ちょっとわからないが･･･すべての科目を統合したものという考えもあるかもしれないし･･･。

果たしてどの程度までが4年制大学、学部レベルでの力量として必要だろうか。基本的な視点までではないかと思う。O先生は、アプローチができるような臨床的な技術を身につけること、そのために事例をたくさんをたくさんこなすことという指摘があったが、これは大学院レベルでの教育内容ではないかという気がする。スーパーバイザーにも、それだけのソーシャルワーカーの力量を引き出せるか、という問題も現実にはある。

実習体験後には、自分自身の事例として、援助という視点から見たときからのつまずき、とか失敗とか、うまくいかなかった体験を振り返ることで自身の事例を書いてもらう。そしてなぜうまくいかなかったのか、という身近な出来事でいい、というと、うまく答えられなかった場面とかを、事例として書くことができる。これは架空のことではないので、リアリティがある。そのような工夫をしている。

技演のゴールがはっきりと定まっていないので、みんな手探りになっていると思う。目標とか課題について、だいたいのコンセンサスができれば、もうちょっと標準化できるのではないかと思う。

実際に、技演を担当している教員たちが集まって、メンバー間でいっぱい事例を出し合って話し合えば、また徐々に、そうした貴重な素材をお互いに書きあいながら蓄積していくと、自然にフォーマットができてくるのじゃないか、と思える。今まで、なぜ、これがやれなかったんだろうという思いがする。実際に、教育現場で、教員たちは、一生懸命工夫しているが、これで本当に良いのだろうか、と悩んでいる。自分の授業が、果たして、それなりの質を担保しているのか、確信がもてないで授業を担当している。だからうまくいかなかったときには、すごく落ち込んでしまう。ある種のミニマムスタンダードが求められているのではないかと思う。

ロールプレイで、その役になることができるというのは、イメージができるということである。しかし、そのイメージができるということこそ、それまでの勉強と、それまでの知識とがあって可能なのであり、統合されて可能となる。クライエントの役をやってみて、クライエントの気持ちを推測することができる。またソーシャルワーカーとして、どのように捉え、ソーシャルワーカーの役割をイメージすることができるようになる。最近の学生の社会性のなさ、という点を考えると、体験の少ないクライエント役をやるということ自体が難しい。

エコマップについて、実際に、用いていますか?インテークの場合などは、情報の共有に役に立つが、援助の過程で、どの程度用いられているだろうか、と疑問だったりする。

2）C大学

2年と3年で通年の実施。技演の授業に際して教員を選択できる。40人を半分で割って2名で担当。教員間での話し合いは特にない。そもそも援助技術演習でのゴールはどこのレベルに到達する必要があるのか。プラクティスは、いわば無限であり、学部レベルでどこまで獲得させるのかが、まだ整理されていないと思う。あるべき姿というより、できるところでそれぞれが試みているに過ぎないのではないか。どの程度卒業させ、現場へ送り出せばよいのか。よくわからないままに担当した最初の授業は、振り返ってみると、講義になってしまっていた。

2年の前期には対人援助の導入部分であり、ここに多くを費やす。面接技法として質問の仕方(open-ended ,closed-ended)、繰り返しなど、基本的な信頼関係の形成の方法や記録について講義し、実際に使ってみる。今年は、ホームレスの人たちの面接調査を実施した。信頼

関係を形成するような面接を試み、面接調査を実施し、記録を書く。次に、この面接記録を逐語録にしてみる。またさらに要約体にしてみる。このようにして記録の練習にも役に立った。ほかにもクライエントの情報を伝えて短いロールプレイをやってみる、記録係を決めて逐語録をとってみる、後半では少し長い事例をやるようにしている。前期の最後にドラマを作らせる。

2年の後半では、ドラマやストーリーを作成し、また教員側が事例などを基にして作成して与え、これらの素材を基に、できるだけ、相手の困った立場に寄り添うトレーニングを試みている。感性や想像力を高めるトレーニングといえる。

技術演習は1年通してやることでやっと可能となる科目だと思う。たとえば「この問題について議論してください」と指示してから、さっとグループに分かれて議論できるようになるのに約半年かかる。教員と学生との信頼関係ができるに従ってスムーズな課題の達成が可能となる。学生の中に助手役を作って、授業風景をビデオ撮影し、議論と発表の授業についても、後半で議論と発表の様子を振り返り、プレゼンテーション時の態度などについても議論することを試みている。

3年次では、事例を用いながら、クライエントが使える社会資源は何か、などを問いかけていく。事例を用いるときには、いかに、そこにリアリティを持たせるかが重要。このときに、実は自分の現場での体験が生きている。たとえば、事例中に、「家族は困った」とあれば、「困った」とここに書かれているが「困った」という家族の思いは何なのか？と学生に問いかけていく。その思いなどは、何も事例中に書かれているわけではない。しかしソーシャルワーカーとして、そこに書かれている家族の困った状況について考えられること、想像されることはなんなのか、について、学生に考えさせる。そこができなければ、アセスメントにつなげられない。そこで、それぞれの学生に考えさせて、次に、こうした状況における家族に対して、どのような言葉かけや面接ができるのか、学生にやってみさせて、それをビデオにとる。そのビデオをみんなで見て考える技術演習をしている。なんのためにこのような演習をやっているのかといえば、彼らが現場に行っていろいろな体験をするだろうが、その際に、大学でやったな、そんなこともやったな、と思い出してくれれば、という思いでやっている。できるだけ現場に近づけることを意図している。来年の今頃、もし医療ソーシャルワーカーとして働いていたら、電話を取らなければならない、そのことを想定してみて、最初の一声の、声のかけかたをやってみよう、

という風にやっている。他の専門職の臨床研修期間に比べれば、現場実習期間は短すぎる。2 週間というのは、行ってきただけのようなものである。だから事例を用いて臨床的な訓練をせざるを得ない。

しかし現実の臨床現場に出たときに、大学でやってきたことが全く求められていない、また全くなされていないことも多いわけで、就職先の現場レベルや実際の利用可能性などについても、まったく無視するわけにはいかない。そうでなければ、大学でやってきたことが役に立たないことになる。

実際に用いられている書式を使って記録をとらせるなど、道具ぞろえが臨床感を増すので必要だと思う。ツールとしての小道具、OHP、NHKのドキュメントなどを、用いている。評価対象としたレポートのテーマは、面接技法について問題と思うことを書きなさい。

2 年通しても、やれることはたかが知れている。信頼関係って、どういう風にやれば信頼関係になるのか、せいぜいこれで、前期が終わってしまう。極端にいうと･･･。記録にしても、マッピング技法を含めて、ジェノグラムやファミリーマップをやっていれば、これでもう、後期は終わってしまう。そんなに、あれも、これもって、できない。

5 人で人グループにする。5 人規模の場合は、お客さんになれないので、参加せざるを得ない。前半 45 分で話し合い、後半 10 分ずつ報告して、教員からコメント 5 分で、丁度の時間となっている。

グループで議論ができるかできないかは、学生のレベルの問題ではなくて、教員によるプレゼンテーションの方法によるのではないか、と思う。学生に、少しでも現場の状況に立たせて、そこでものを考えるという思考パターンを作ることが大切ではないかと考えるようになった。そこで、事例を基にして、事例を作成する。インシデント的なもの、場面的を切り取ったもの、ビネット１、ビネット２、というようなものなど。

東海北陸ブロック第２回ヒアリング調査結果
日時：12 月 19 日（木）１０：３０～
司会：　Ａ大学　Ａ先生
参加者：Ｂ大学　Ｄ先生
　　Ｃ大学　Ｅ先生　（以上２名）

３）Ｂ大学

社会福祉援助技術演習（以下「技演」という）は、3 年次、週 2 ｺﾏ連続の通年である。実習は 3 年次（編入生は 4 年次）、夏休みに連続 4 週間実習を原則としている。

技演の 1 クラスは 30 名。技演を担当する教員の約半数は非常勤である。そこで各担当教員の標準シラバスとして、①社会福祉実践の目的・価値・知識②専門職の動向と倫理③面接技法④ＧＷ・ＣＯ⑤ケアマネジメント・サポートネットワーク⑥アセスメントと援助計画⑦社会福祉援助の関連技術⑧事例から学ぶ方法⑨ＳＶ⑩社会福祉調査の基礎等を位置づけている。また、事例検討やロールプレイは随時取り入れ、必要に応じて各担当講師の相互乗り入れや、学外のゲスト講師（当事者を含めて）を招くことが可能である。

テキストは原則担当教員の判断による（本学教員を中心とした技演のテキストやその他のテキストを使用するクラスもある）。

Ｋ教員の場合、標準シラバスをベーシックとして、数冊のテキストを使用している（事例集を含む）。演習が 2 コマ連続になったため、演習の指導案作成（タイムスケジュール含む）に力点をおいた。指導案も様式の内容は、①単元名②演習のねらい（キワードを含む）③演習の進め方④導入・展開・まとめ⑤学生の反応⑥ツールの準備等（教材準備を含む）である。

また、前期の 1 コマ目は、演習前のアイスブレークとして、10 分程度の構成的グループエンカウンターを随時行っている（誕生日ゲーム・ジャンケンゲーム・ヒューマンチェーン等）。また。1 コマ目はビデオ視聴や疑似体験の実施。時には、現場（当事者を含む）人との交流や話し合いを実施し、学生のモチベーションを高めることに力点をおいている。後期は、気づき力から「問題解決能力」のトレーニングとして、感知力・構想力・実践力をつけるためＢＳ法・セブンクロス・ＫＪ法・チェックリスト法・特性要因図法等の企業人向けのスキルをソーシャルワーカーの視点からアレンジして取り組んでいる。

２コマ目は、事例をロールプレイ（実習体験後は、学生達がインシ

デント場面のシナリオを作成してロールプレイを行う事例と、テキストの事例等活用）することで、各学生が課題点を共有化し、ワークショップ方式で議論。各グループは、問題解決のツールを駆使して発表。特に振り返り（ＰＣ討議等）を重視し、教員は、演習のねらいのキーワード理解を再確認している。

事例研究の方法は、課題をＢＳ法で出し合い（質より量の視点で、人の意見は批判しない約束）セブンクロスやＫＪ法等で整理し①今すぐ解決できる事柄②1 年程度解決に要する事柄③解決に予算やシステムが必要な事柄の 3 点に整理して発表。翌週各グループの解決策を教員がコメントして学生にフィードバック。

学生に関心があり、知識も十分な場合は（児童虐待・障害者・痴呆性高齢者）2 コマ連続で事例研究にあてる。また、介護者や障害者等当事者をゲスト講師に招き、学生の課題分析と解決策について当事者の思いや考え方を討論し、演習にリアリティを持たせている。

技演の最終ゴールを「問題解決能力の強化」として総括している。

大学全体では３月・７月・翌年１月に技演担当者会議を 3 回開催している。すべての技演担当教員が、お互いの授業案と終了後の報告を行い、情報交換と演習の共通認識を確認している。例えば 3 月の会議は、新年度に向けた標準シラバスの確認・演習の進め方等の議論を行う。７月には、各教員のシラバスの提示と中間のまとめを確認する。翌年１月は各教員が本年度のシラバスの実施を持ち寄り報告し１年間の総括を行う。

技演は、高齢者等特定の分野別に限定せず、ゼネラルソーシャルワーカーの養成を目標としている。従って担当教員が全ての演習を実施するのは困難であるところから、前半 3 回、後半 3 回分のゲスト講師招聘の予算を組んでいる。各担当教員の話し合いで各担当の得意分野の相互乗り入れもある、また、外部の人材に依頼する場合もある（施設・病院・機関・団体等人材リストを社会福祉実習教育研究センターが所有し、教員の随時活用の便宜を図っている）

注 2002 年 4 月から全学の社会福祉実習教育研究センター（6 名の専任、）が設置された。一方、学部には実習教育委員会（5 名で構成）が設置されている。この両者が連携し合い社会福祉の（医療・精神保健を含む）実習教育と研究に取り組んでいる。

4）C大学

技演は2年と3年次に、通年で技演Ⅰ、技演Ⅱとして開講している。技術演習の担当は、専任の9名の教員。技演ⅠとⅡの連続性はあまり明確に意識づけられていない。

2年次に援助技術総論があり、各論Ⅰと各論Ⅱも2年次に開講。2年次の技演は、常勤のみで担当しており、実際には2年次にゼミがないため、学生相談対応的なクラス担任的な意味合いという実態がある。教員を学生が選ぶことはできない。履修登録した学生にそれぞれ教員が割り振られて、技演のクラスが決まる。

3年次の技演は、非常勤も含めて9名、学生数は19-20名。担当教員すべてが個々に異なるシラバスを示し、教員の専門分野により授業内容は各教員に任されている。資格対応の社会福祉基礎科目のすべてが受験対応となっているわけではないので、学生にとっては統合的な理解は難しいだろうと思われる。社会福祉援助方法論ということ事体が分かっていない。テキストも自由となっている。学生によっては、事例研究ばかりという技演を履修することもあれば、全く違う内容をやっている場合もある。担当教員によって、全く異なる内容の技演を受けていて、ビデオを見つづける技演や、介護福祉のホームヘルパー的な内容を展開している教員もいた。

実習には、3年夏休みと、4年の夏休み中で、それぞれ2週間ずつ配属。基本的には、同じ施設・分野へ行くことはできないことになっている。ほかに精神保健福祉士も資格取得できるので、学生のなかには、現場実習と精神保健福祉実習をそれぞれ2週間ずつ行く者もいる。技演と実習指導は分けている。技演には、実習につなげるための技演という考え方もあるだろうが、そのことはあまり意識されていない。

また技演と援助技術論などの理論に関する講義も同時平行的に開講されているため、学生にとっては理解が難しくなっている。援助技術論と技演がつながっていれば、視点とか価値とか、その方が理解しやすくいいかなと思うが、担当教員が異なっていて、同時平行的に進んでいると、かなりやりにくい。自己覚知とか、既に講義でやったところなのか、その都度学生に聞きながら授業をやっている。事例展開なども同じ。すべて同時進行なので、学生がわかっていない中で、技演を進めていかなければならない。

そこで、改善に向けて「援助技術演習担当者会議」を設けて、来年度の統一したシラバスづくり等を取り組むことになった。統一した基本的なシラバス案を作成し、テキストも統一化しようと段階的にできるところでやろうということになっている。

近畿ブロック

近畿ブロック第１回ヒアリング調査結果

日時：2003年1月18日(土)2:30～4:30pm

司会：　Ａ大学　ＩＨ氏

参加者：Ｂ大学　Ｉ氏

Ｃ大学　ＩＭ氏

Ｄ大学　Ｔ氏

Ｅ大学　Ｆ氏

Ｆ大学　Ｋ氏

Ｇ大学　Ｙ氏(司会)　　(以上、６名)

１）Ｂ大学：Ｉ氏

社会福祉援助技術演習については、４年生で通年２コマである。基本的には、演習は実習との関連で位置づけられている。

実習は、２回に分けている。３年次で２週間、主に施設で実習し、４年次で２週間、相談機関などの機関実習である。履修学生数は、１５人から１８人。担当教員はＩ氏一人である。４年次の実習生と援助技術演習の履修生は基本的には同じである。Ｂ大学の特徴としては、一人の教員で 15～18 人の担当で、融通性が聞くところにある。この15～18 人で一つのクラスになっており、演習、実習の他、卒論、福祉士受験も併せて指導している。従って、チームワークを意識した授業を心がけている。

シラバスについても、その年のグループの状況によって異なるが、基本的には、コミュニケーションスキルなどしている。例えば、社会福祉協議会の訪問調査員のトレーニングを受けて、調査員の練習をして、地域に出てみることをしている。そういった具体的な実践を通して、授業を展開している。ただし、このためには、教員の準備が大変である。

教材やテキストについては、一切用いてなく、そのときそのとき考える。例えば、テープレコーダーを用いて、面接の練習のテープ興しを行ったりする。シラバスは、別紙の通りである。基本的には、最低限教えるべきものは、面接技法やコミュニケーション、自己覚知、グループワークの実践などである。なお、グループワークの理論はグループワークの授業で教えている。コミュニティワークは、社会福祉協

議会などで、ボランティアコーディネーターの役割をさせたりして教えている。

なお、B大学の人間福祉学科全体としては、43人の学生がいて、福祉系、心理系、教育系に分かれる。比率は、4：4：2であり、従って、1学年15～18人となる。

最後に、援助技術演習は、ある意味では、実習指導にもなっている。ただし、実習指導は3人担当でまた別にやっている。

2）F大学：K氏

詳しくは、別紙の資料通りであるが、社会福祉援助技術演習については、2002年度の3年次から、通年週1コマを2年続けている。実習は、2年次(主として施設実習)と4年次(主として機関実習)で2週間ずつ行っている。1学年の定員は100名であるが、実質は130名ほどである。そのうち、9割以上が実習に行くことになる。社会福祉援助技術演習の担当教員は10名で、専任は3人で、非常勤が残りの7人となっている。教員が10名いるので、教員同士のコミュニケーションをはかるために、毎年2月に話し合っている。一つのクラスは、10～15名程度である。3年次から4年次の2年間同じクラスをもつことになっている。大学内部の問題もあり、専任教員があまり多く担当できないという現状がある。

社会福祉援助技術演習は、基本的に実習とつながっており、1年次では、実習1で施設見学とか、現場の人に来てもらって話しをしてもらう。10人の教員で統一した内容を保つために中央法規の『社会福祉援助技術演習』を配布し、それを参考にするようにしている。しかし、現実的には、教員によってそれぞれの得意分野異なるので、多少教える内容に差があるが、それは仕方のないことである。

教材としては、中央法規の面接の技法を用いたりしている。なお、教科書の内容については、教科書によっては内容に整合性がなかったり、バラバラであったりして、統一されたものがないのが気になる。

実習指導についても非常勤講師がたくさんいる。そして、実習後に、実習した時のケースを用いて理論化するようにしている。

3）G大学：Y氏

社会福祉援助技術演習は、基本的には現場実習とのペアで位置づけている。地域学科では1学年140名、臨床学科では130名、さらに編

入が毎年 60 名いて、大体 250 名から 270 名が演習と実習をとることになる。社会福祉援助技術演習Ｉは、３年次に行っており、実習指導的な要素が強い。

現場実習は、3 年次の後期で、主として 11 月に集中して行っている。実習ゼミの一人の教員の担当学生数は、15 名程度である。老人、障害、児童など各分野別にグループを分けている。

社会福祉援助技術演習Ⅱは４年次の履修としており、４年生で実習に行く学生に対して行っている。また、４年次は、社会福祉士に含まれない実習も行っており、そのために必要な学習を行っている。

来年度から、社会福祉援助技術演習Ⅱを４年次に前期２コマで行う予定である。シラバスは別表の通りである。また、カリキュラム改正したので、順次社会福祉援助技術演習の位置づけも変わっていく予定である。

４）Ｅ大学：Ｆ氏

Ｅ大学では、社会福祉学科の１学年定員は 100 名、福祉心理学科も 100 名の定員であり、合計すると 250 名程度になる。社会福祉援助技術演習は、３年次に配当している。実習とのセットの授業であり、通年２コマとしている。現在は、週２コマといっても２コマ連続で行っている。演習担当教員は全部で１３名で担当している。他大学と同じで非常勤が多いの現実である。担当学生数は、多少ばらつきがあり、最大は 23 名である。演習の授業内容については、それぞれの担当教員に任せている。なお、２年生、３年生次には社会福祉士の実習を行っている。4 年生には精神保健福祉士コースがあり、定員は 40 名である。また、それ以外に、社会福祉士以外の研究実習もある。

来年度からカリキュラムを変更する予定であり、社会福祉援助技術演習については、４年次にⅡが配当されることになる。内容については、基本的には各教員に任せることになる。Ｆ氏の授業内容については、別表の通りである。

各教員同士の情報交換は、システマティックにはほとんどやっていなく、自由にやっているのが現状である。それでもなお、授業の始まる前の 15 分間は、連絡調整会議的なものは行っている。

５）Ｃ大学：ＩＭ氏

Ｃ大学は、平成 12 年度に短大として設立されたが、来年度から４年

制になることを前提に話しを進めたい。1学年の定員は80名、次年度は90名になる。7名の教員がいて、現状では、実習は2年生で行かせることになる。

短大なので、1年次から社会福祉援助技術演習がスタートする。演習Ⅰでは担任が演習のクラスを担当することになる。内容としては、短大の1年生ということもあり、『福祉の哲学』を共通に読んでいる。多くのクラスのでは何かの教科書を読んでいるが、ＩＭ氏としては、グループ作業を行っている。演習Ⅱでは、『社会福祉援助技術演習』の教科書を読んだりしている。

6）Ｄ大学：Ｔ氏

Ｄ大学Ｔ氏の場合、通信のスクーリングで援助技術演習を担当している。スクーリングで演習を体験授業として受けることができるのは、3年次以上である。演習は6コマであり、基本的には1日でできることになる。

学生については、全体で9,000人程度いるので、演習が４６クラスに分かれており、従って、延べ46人の教員が担当している。演習担当教員は、全員非常勤講師である。一クラス２０名程度にするようにしている。

内容については、基本的には、各教員にお任せしている。なお、Ｔ氏のシラバスについては、別途配布した参考資料通りである。

中四国ブロック

中四国ブロック・ヒアリング第１回調査結果
日時：2003年１月７日(火)15：30～
司会：　Ａ大学　　Ａ先生
参加者：Ｂ大学　　Ｃ先生
　　Ｃ大学　　Ｄ先生

Ａ：目的っていうのが、社会福祉士養成校協会のほうで、昨年、秋にアンケートを演習担当の先生に送らせていただいたかと思うんですけども、そのアンケート調査をさらに補足する意味で、実際にアンケートの方にお書きいただけなかったような内容、あるいは、実際に活字で示すのが難しいような、いわばちょっと現場の本音の部分というか、そういうことを含めて直接お話を、各ブロックでいくつかの大学に協力をお願いして、させていただいておりまして、そういうものをこれから集計し最終的には養成校協会のほうで演習の一定ミニマムスタンダードのようなものを考えていきたいというふうなことで。ちょうど昨日、おととい、東京の府中のほうで研修をさせていただいて、そこでもお集まりいただいた方のなかから、それぞれやってはいるんだけれども、実際何を共通のものとしてやるのかというふうなところでは、なかなかこれというものが示せないのが現状でして。個々それぞれでやって、なかなか学生に対して一定の水準のものをというのがないのが現状だろうと。そういう意味ではこれからそれをつくらざるを得ないと。いうところで、まず第一歩ということだろうと思うんですけども。たちまち今演習のほうを研修委員会のほうで進めており、一方で実習は実習でまた別のプロジェクトをたちあげて今やっているようなんで、だから、いずれにしろ、社会福祉士のほうについては、この演習と実習についてあらためて中身を整理してやっていくということになろうかと思いますね。

Ｃ：いやぁ、ほんとなにやっていいかわからない。私はこれからやればいいんですよ。これから。

Ｄ：演習が今、１と２になってるんですね。演習１が今三年の通年。で、４年でまた演習２という形で通年という形になっています。

一応、平成12年の4月でカリキュラムが改正になったとき、それまでは演習は通年一本だけだったんですが、この演習の単位が増えましたよね。4単位でしたっけ？

A：120時間になりました。

D：ですね。増えましたので、そのこともあって、演習1演習2という形でその一期生から変えてやっている状況です。もともとの考え方として、教員が最初の段階のカリキュラムでは演習ひとつに対して8人の教員がつく形をとってたんです。うちの教員がですね。だから、8グループに分かれるなりなんなりするかたちだったんですが、今度演習1演習2になったこともあって、4人ずつに分けたんです。演習1を4人が担当する、演習2を4人が担当する、というかたちで。あとまぁ、演習1がちょうど今終わりかけているところで、演習2が来年度、E先生が。考え方として演習1のほうでいわゆる、直接援助技術に近いところを、っていうのをねらって、演習2のほうは間接援助に近いところをねらおうっていう捉え方は一応しているところなんですね。

A：それと、演習と実習とのつながりっていうのは？

D：なかなか難しいですね。ほんと難しい。だから、今度は実習は実習で、実際、まぁ例えば、この演習1っていうのは、うちのカリキュラムで言えば、援助技術演習1ですよね、これが私を含めて4人で担当する、このなかではケースワーク、グループワークについてとか、ロールプレイ、ケーススタディっていうのを中心にやる。今回前期は私と木村が担当して、こっちを中心にやったんですね。グループワークでも、基本的には名前を呼ぶとか、そういうことを中心にやって、後期はこの二人がサカイ・イワサキで、半期を半分に分けて7回ずつそれぞれが担当して、ケースワークを中心にされたっていうかたちとっていますね。それに実習は同時並行できますから、こっちのほうがあとにくるような形になりますね。

A：実習を担当される先生は同じ先生方？

D：ええと、私とC先生が中心となって、実習のほうは実習指導と現場実習ですよね。わたくしどもの福祉学科では、実習指導も実習指導1、実習指導2っていうかたちで単位数的には多くしてるんですね。だから、これももともとは現場実習1 2だったのが、実習指導と現場実習をきちんと分けなさいっていうのが12年にありましたよね。そのときに、どうわけるかっていうのが問題とな

って、結局現場実習をひとつ授業でとりますよね。じゃあ、それと並行して実習指導２をやろうと。だから、これが３年にくる授業になりますね。そして、２年の後期に、いわゆる今までの授業でいえば、現場実習１っていう授業ですかね、の、少し内部のなかで先生たちの話を聞いたりだとか、施設からきていただいて話を聞いたりという授業を二年の後期から入れて、３年の実習指導っていうのは実質それぞれが実習計画をたてたりだとか、という授業。それと現場実習っていうのも授業のコマとしてとっといて、今だったら木曜日の１コマめと金曜日の１コマめ、実習指導２は金曜日でしたかね。現場実習っていう授業は木曜日の１コマめにいれといて、それぞれ授業をしながら、そこで結局実習計画をたてる、そして、それについて、こちらと話を個々話していく。終わったらそれの報告をみんなの前でするっていう、やり方をとっている。だから、これとこれが直接結びついてるかと言われると、結びついてないのが現状かもしれない。

Ａ：演習のほうは４人の先生方が担当されて、学生は４人すべての授業をうける？

Ｄ：ことはないです。だから最初どうしようかと思ったんです。最初はね。だから結局４人が一年間はりつくことができるかっていうのが問題ですね。だからそれは無理だろうと。結局一年間拘束されるっていうのは。結局まぁ、それでもなんとかしようっていうので、前期はこの二人がやろうと。後期がこの二人がやろうと。そのなかをどう振り分けるかっていうのは、この二人が話し合って決めようというので、ここ二人が前期にやったときには、グループを２つに分けたり、４つに分けたりしてグループワークを中心にやらせた。ここはもうそれぞれの先生が七回ずつとって、全体でされたっていうかたちですよね。だからこれについて今度は演習２っていう授業を、演習２っていうのは、今度はまた別の４人の教官が担当するんですけれども、これをどうするかっていうのは今から先生方が話し合って、基本的には今度は、何が残るんですかね。間接援助の部分が残るっていう考え方はしてるんですけれども、どういう授業の形態になるかっていうのは今から。もう実習とは全く関係のないところで。

Ａ：今年がはじめてなんですよね。

Ｄ：そうですね。今年ももう反省点で、これをもう一年早くやらないといけないね、っていう話がでてるんですね。だから二年生から。

A：二年次から。

D：うん。それに、ある意味、この演習を通して、まずは人間関係づくりからだよね、っていう話になります。

A：そうですよね。だから、なかなかグループワークするっていっても、学生自身がそのグループをうまくつくることができないとか。

D：そうですね。最終的に、まぁこの二人がねらったのは、95いるんですけれども、95人の名前が覚えられるかどうかっていうのが最後の目標だったですね。だから試験問題も学生の名前書かすような問題だったです。

C：僕だめだね。

D：95人の名前が書けますか？って。

A：覚えていました？

D：覚えているのは覚えていましたね。それだけまぁ自己紹介をさせる、他己紹介をさせる、それをまぁ、15回そればっかりやらせましたね。最後はだから95人が輪になって、それぞれが隣の人を紹介するっていう形までやらして、終わらしたんですけどねぇ。これが実習と結びつけようっていわれたら、もう全然ですね。

A：そうしますと、今、演習の中身そのものは本当に、先生方のほうで工夫していただいて、おつくりになっているという。

D：そうですね。基本的には中央法規さんからでてる、社会福祉援助技術演習のテキストがありますよね。あれだけは学生に持たせています。だから必要なところだけは見なさいっていうかたちです。あれでやるわけにはいかないですけれども、専門的な言葉なんかをあそこで勉強させないとできないので、あれは使わせています。後期もあれは一応使った形にはなっています。

A：それ以外に先生のほうで、例えば、プリント・・・。

D：そうですね。プリントをつくったり、今日はこういうワークをするための資料をつくったりっていう形ですね。

A：例えば視聴覚の教材、ビデオとかそういうものは？お使いにはならないですか？

D：使える教室ではないから、しょうがないから、グループをやるときは、教員二人が見本です。モデルです。だからもう、例えば、クライエントさんとワーカーにわかれて、こんにちは、っていうところからのモデルをこっちが見せて、こんな感じだよ、っていうところから、うまくいかないね、っていうところからですね。

A：じゃあまたその事前打ち合わせを・・・。

D：二人で前の日には、じゃあこうしましょうかね、っていう話をして、準備をして、この授業にのぞむっていうのがいつもでしたね。

A：D先生のときは二人で同時にされたんですね？

D：そうですね。最初は分けてやろうかっていう話もしてたんですね。だから、例えば、私は心理が専門だから、サイコドラマみたいな形でやらそうかと。K先生のほうはもう少しグループを動かすことをやらせようかということを考えてたんだけど、二人で話をしてて、これはできないんじゃないかって話で、もっと一番基本的なところをおさえないと、それはこの人たちは、ほんと名前すら覚えていない人がたくさんいるんじゃないかっていう話になって、結局はもう、メインは名前を覚えるっていうことだけが目標になりましたね。

A：実際、昨日おとといの研修でもやっぱりかなり意見としてありましたのが、専門的な技術うんぬん以前の問題として、他者とのコミュニケーションをどうとるのかとかそういうことすらできない学生が今増えているから、まずそこのところをやっていかないと、とても演習に入れないとご意見っていうのがかなりあったもんですからね。

D：そうですね。しかも、それは、ほんとは、さっき言ったように、もうちょっと早い学年からやらないと、だめなのかなぁって思うんですけどね。

A：だから、そういう意味では例えば一・二年のころのほかの科目も含めて、そういう人と関係づくりできるようなものも意識的にいれていかないと、なかなかこの演習だけですべて時間でこなすっていうのは実際なかなか難しいのかな、っていう。

D：無理ですね。結局それはまぁ、変な話、ここのカリキュラム自身をわれわれがつくったものではないから。来たとき会ったときにやっているから、だから矛盾だらけですよね。もう詰め込んであるからね。指定科目だけで。だからもう一年から法学、社会学、心理学が通年ではいっていて、原論はあるわ、何はあるわで、まずはもう指定科目を消化しようっていうのが考え方ですからね。ほんと、実際、人間関係がどうだこうだとか、そうなってくるところには、なかなかたどりつくまでには息切れをしている。

C：他所じゃどうやっているのですかね？

A：ほんといろいろですね。だからもう、特に私学の場合は人数がそれなりに多くなってきますから、まずその一クラスを20人でおさ

えるかどうかっていうところで分かれてきますし。実際こないだのアンケートの結果では、だいたい39人までのところで編成しているっていうところが大方ではあったんですけれど。だから、それ以上の人数をひとりで担当しているっていうのは全体としては少なくはあったんですが。

D：うちなんかは特別かもしれませんね。多いですね。ひとりで90何人いっぺんにやるんだから。

A：ただ、実際にどんなふうにやっているかっていうところでは、例えばもう、4人おられれば、4人の方が同時にされてですね、それをローテーションでまわしたりとか、いうところもございましたし、それからもう、全然もう4人のなかで連携なくですね、それぞれのやり方でお任せというところもあったりとか、ほんとそういう意味ではさまざまです。これは、っていうのがなかなかないのが現状だと思います。やっぱり担当される教員の方もそれぞれ得意分野もあられれば、そうでないところもおありですから、もうどっちであるかっていうと、自分の得意なところでしか、やりようがないっていうようなところでですね。ただ、そうしたときに、学生からすると、一部分だけ教えてもらっていいのかっていう。その辺の課題がやっぱりどこもジレンマとしておありのようで。なかなかその、国のほうから示されているような教育内容をすべて網羅してやるっていうのはなかなかできてないというのが現状だろうと思いますね。

D：でしょうねぇ。

A：あとアンケートのほうでいただいてましたのは、例えば、教材等について、一定共通のテキストなりが今後できるのであれば、そういうものを活用をしたりとか。あるいは、視聴覚の教材についてもまぁそういうものを例えば養成校協会のほうでつくられればね、ぜひ使ってみたいとかっていうお声はあったんですけども。逆にいうとそういうものがなかなかない。ほとんどつくらざるをえないというなかでまた難しさをお感じになっているのかなと。

C：学生がぐるぐる回るかよね。一番いいのは。

A：そうですね。うちの場合も、例えば、前期を半期づつにわけて入れ替えをしたりとか。いうふうな形で学生がそれぞれの教員をまんべんなく受講できるような形にはして、それでまぁなんとか、それでもまだ不十分ですけれども、なんとか網羅していこうみたいな、かたちにはしてるのだけれども。

C：ただ人数が多いとねぇ。回すのもね。
D：回すのも大変よねぇ。
A：一学年が90・・・？
D：ですね。100ですからね。多いです。
C：演習どころの話じゃあないわね。講義でも大変なのに。二人づつペアを組んで、まわしていければいいけど、二人ペアを組んじゃうと人数が足りなくなるわね。で、ひとりでやると90人を全部やらなきゃならん。
A：難しいところですね。
C：だから演習が早ければいいんだよね。今話しのように。学年の早い時期に。
E：まぁあればいいんでしょうけど。ちょっとね、もうカリキュラムがね。めいっぱいだからね。これを動かすためには・・・。もう入りきらないですもん。変な話、実習をまわすだけでも大事ですね。
A：実習は３，４年次・・・？
D：３，４年次です。まぁ３年次が中心ですね。うちは無謀なことを考えて必ず週に１度は廻ろうということをやりましたからね。今回。
A：あ、実習巡回？
D：なってるじゃないですか？
C：忠実にね。
D：忠実に廻ろうとか言って。愛媛でもどこでも廻ろうって言って。
A：あ、県外もですか？
D：廻りましたね。今年はね。
A：そうですか。うちはちょっと県外はようせんかったです。
D：やっぱ県外一回だけですか？
A：県外は一回だけですね。で、あとは電話とかメールをつかって連絡を実習指導者の方と学生ととるっていうかたちで。とても県外を一週間に一回っていうのは・・・。
D：廻りましたよ。
A：そもそも予算もつかないですよ。うちは。
D：学生からするとまわってほしいんですね。
A：それはそうだと思います。言われます。
D：廻っていても実習担当者の方も廻ってくるのが当然っていう感覚ですね。週に一回ね。だからそういうのをやりだしたら、この演習、ほんと教員がきゅうきゅうしていますね。

A：ですよね。年がら年中休みないですもんね。ほんとに。
D：だからどうにかして、一年間しばられない方法っていうのをこういう授業なんかで考えていかざるを得なくなってきますね。
A：この授業単独でっていうことではなくて、全体のなかでの位置づけですからね。
D：位置づけですからね。だから不十分なところはいっぱいありますよね。
C：演習やって実習にでれば一番いいわねぇ。
E：ほんとはそれが一番いいと思うんですよ。演習をやって、人と話すことがなれて、実習計画を学生がたてるのを見ると、結局はコミュニケーションがどうだこうだとかでてきますよね。そういうぶんを中心にでてくるから、結局コミュニケーションとはなんたるものかっていうのを演習を通して、どう考えていくかっていうところですもんね。だからほんとはもう少し早くやれればいいんだろうけど、そのためにはこのカリキュラムをどう動かすか、BK大なんかはそれが一番大きな課題じゃないですかね。今は。
C：先生のところは何人でしたかね？
A：一学年が４０人前後ですね。うちの場合は学科として独立してないものですから、それこそカリキュラム編成なんかだと、どうしても他のコースとのからみもあって、うちだけでいじれないという・・・。あのへんがちょっと。
D：時間割なんかにしても？
A：そうですね。それこそ３年次のものを２年次におろすとなると、他のところから反発がきますんで。福祉コースだけで勝手にはできないという。どうやって他のコースとか学科の合意を得るかっていうのはありますね。
D：それはそれで大変ですね。やっぱりね。
C：高知のD大に行ったら３０人だったからね。びっくりしたよ。わたしゃ。こういう大学もあるんだって。３０人ですよ。まぁ贅沢な。私は来年、どうすればいいんかねぇ。
D：現実的な話になりますよね。
A：また今度２のほうはC先生はじめ、他の４人の先生で担当される？
D：そうですね。もともとは一つの演習であったものを、二つに分けて・・。じゃあ演習１にも２にも８人が全部かかわれるかって言ったら、時間割で８人合わせることもできないですよね。今はもう。

A：そうですよね。みんなが同じ時間にいるっていうことは・・・。
D：まずそこから無理な、話がでてきますからね。８人の時間をどう調節するか・・・。４人を調整するのでも大事ですからね。現実問題ね。だから結局もうね、４人に分けてなんとかかんとか収まっているっていう状況ですね。不十分なところはたくさんあると思いますけどね、学生に対しては。反省としては、もう少しやればほうがいいよね、って。だから結局３年次でやりますから、半期１５回とったとしても、そのうちの２回は実習で学生がもういない。前後ちょっとずれて実習にいく学生がいれば、結局全員がそろうのは１０回がやっとっていうのが多いですよね。
A：演習の１のほうが、直接援助技術で、次年度始まる２のほうが間接・・・？
D：一応そういう構想にはなってるんですけどね。
A：研修のところでやっぱりでてたのは、間接援助技術の中身として、何をしていくのかっていうとこも話題にはなってたんですけど。だから、ケースワーク・グループワークは比較的演習としやすいけれども、例えばコミュニティワークとか、あるいは、アドミニストレーションとかプランニングとか、調査法とか・・・。ああいうのはどういうふうな形でやるんだっていうみたいな話になって。そりゃそうですよね、みたいなことでですね。一応そういうものが項目としてはあがってるんですけど、実際にでも、演習でどこまで、どういう形でやっていけるのかっていう。
D：それはそれでまた難しいですね。難しいですね。
C：難しいね。教室はどこだったかいね？
D：あっちの４号館の３階です。
C：あれは机が動くんかいね？
D：そう。動くんです。
C：ああ、動くのであればならいいね。固定式の教室があるのが困るよねぇ
D：演習なんかはですね。例えば、各論も３年次にやるんですね。各論は、Ｋ・Ｃ・Ｄが担当するんですね。３人が。Ｋのところでケースワーク、グループワークをやるんです。で、Ｃ先生のところでコミュニティワークをやるんです。僕のところで社会福祉調査をやるんです。今ちょうどその社会福祉調査をやっているけれど、これがまた演習とうまくリンクできるかって言ったら、なかなかできない。担当教員も、僕は社会福祉調査をやっているけれども、

演習ではこっちをやっている状態ですよね。逆に演習２のほうでは、各論を教えた先生っていうのは、Ｃ先生しかいらっしゃらなくて。あとの先生は別の先生がはいってくるわけですから。だからどういうことができるかってなると、まだまだ見えてこない・・・。先生おっしゃられたように、間接援助の部分もやらないといけないだけど、確かに何ができるかなぁって言われると・・・。まさか質問紙をつくるわけにはいかないし、とか、なりますよね。

Ａ：２のところの中身についてはこれから担当の先生方で・・・？

Ｃ：これから。誰がやるんだ中心になって。

Ｄ：さぁ誰でしょう。

Ｃ：僕はだからそういう意味じゃ、１でコミュニティワークをやって、２で事例検討をね、やればいいかなぁと胸算用してるんだけど。そうするとまぁつながるんで。私の場合はね。だけど、９０人をどうやって・・・。

Ｄ：やっぱりそこですよ。私学の難しさっていうのはね。

Ａ：その多い人数の学生・・・？

Ｃ：Ａ大から院生さんをお借りせにゃいけん。コミュニティワークの事例検討・・・。

Ｄ：かといってだから、実際３年次に実習に行かせていますけど、実習のなかで学生が個々の事例を持つところまでやっているのかっていうと、やってないですよね。できてないですから。なかなか学生自身が事例検討っていったときに、まだピンとこないところは多々ありますよね。

Ｃ：僕はね、今年は基礎ゼミで事例を読んでいますよね。事例をとにかく読ませようと思ってね。わかってもわからなくても、別にまたつつかないで。とにかくどんどん読んでいくと。そいで、それを土台にしてコミュニティワークやって、事例検討に持ち込んでいきゃいいかなぁと。

Ａ：それは一年次？

Ｄ：これですね。人間福祉基礎演習っていうのを、専門演習とは別で二年生なんですね。２年生でここに教員が７人になってるんですけど。それぞれ専門分野違うんですけど、とりあえずもう学生全部分かれて、１年間そのその先生と一緒に何かを勉強するっていう。ある程度共通のものは持つけども、個々の先生の専門、例えば、Ｈ先生は法学の先生なんですね。Ｙ先生は社会学の先生。Ｎ先生は精神の先生。Ｃ先生は高齢者の先生ですから。だからほん

ともうみんなそれぞれ違うけれども、とりあえず、そこに１５，６人ですよね。一人の先生が。別れてそこで何かをやるっていう。これは今度基礎演習は次には、専門演習っていうかたちで、これは人間福祉学科教員全員になりますから、これがまたシャッフルされて、専門演習でいろいろと調べていくっていう形ですよね。だから、そうなったときに、例えばＣ先生のように、ここにもかかわっていらっしゃる、ここにもかかわっていらっしゃるっていう先生はなんとなく頭のなかにじゃあこうしよう、ああしようってできるんだけれども、例えば、ここでは法学をされてる先生が、ここで演習されてもこっちではでてこられませんから、結局、また実習とも全然関係ないところですから。つながってはいけないっていう分はありますね。

Ｃ：演習実習中心になるんなら少しどっかの科目を削らないとねぇ。増やすばっかりじゃあ。ほんとに僕は、時間割よう作るなぁと思って。作る人たちの頭のなかが見てみたいと思って。JR のダイヤ組むようなものでしょ。どっかで衝突事故おきるのではないかと思って。

Ａ：でもほんと悩ましいところですよね。カリキュラム組む・・・。あと教職だとか、他のものも・・・。

Ｄ：うちはあと保育士もありますからねぇ。これに。教職ね。超過密時間割ですもんね。５コマ目までびっしり入っている。

Ｃ：ほんとにようやっているねぇ。テキストはいつごろできそうなんですか？

Ａ：いやぁ。まだ。まったくその辺は・・・。

Ｃ：これをまとめてから・・・。

Ａ：だからそのテキストとか教材のようなものをつくるとして、こういうものがあったらというものがございますか？なかなかそこが・・・。

Ｄ：難しい。例えば、ここに書いてあるようにテキストこれを使ってますけれども、じゃあこれを 100％活用できるのかっていったら全然してないですからね。正直言って。やっぱり作った人の考えで流れているから。結局こちらの思いとはずれますよね。結局テキストは学生はもってくるけど結局はそれを使わずにこちらがどんどんどんどん進めているような状況になりますね。

Ａ：アンケートのところでてきたのが、国試対策とどう演習を関連づけるかっていうのもあったんですけど、そういうことは意識さ

れてますか？

D：まぁするとますますわけわからなくなる・・・。

A：ですよね。

D：演習のなかで国試までできないですよね。そりゃ国試で学生それぞれが実技で面接でもあるっていうならもうちょっと必死になるかもしれないけど・・・。あの介護の介護技術みたいにあればなるかもしれないですけど。そういう意味でいえば、事例検討くらいですかねぇ。国試でいえば。多いですよね。やっぱりね。とにかく、もともとうちのカリキュラム自身の問題もたくさんですけどね。例えば、C先生なんかが老人福祉論なんかをされているのは、うちなんかは多くの指定科目が通年なんですよ。通年4単位でとってるんですね。これでもうしばられきって・・・。自由にいろんなものがいれていけない。あれは2単位あればいいんだろうけど。ほんともう心理学も法学も社会学も全部4単位で入っているし。そうですね。指定科目は全部4単位ですよ。通年の授業で。もうはやくなんとか4年間が終わって自由になりたい、っていう。

C：だから中身どころの話じゃないんだよね。どうこなしていくかっていう。

D：とりあえず完成年度までをどう今申請したカリキュラムでこなして、それが終わったあと、どうもう変えていくかっていうどれだけ、頭のなかはどれだけ減らしていくかをもう考えていますよね。

A：それだけやっぱり負担が大きいですよね。

D：大きいですね。だから通年でって言われたらですね。やればやるだけのことあるんでしょうけど。実際問題ですね、今ちょうど社会福祉調査なんかでも7コマ、だいたい8コマくらいですかね。3人で分かてますから、各論のなかで教えますけど、8コマでは教えきれないなぁっていうのは思いますよね。そういう話になっちゃいけないんですけど。実際問題B大の場合はそこらへんが大きなネックですよね。

A：演習の場合は特に学外の方から例えば、現場の方に来ていただいてっていうのはしてないですか？

D：は、してないですね。学外の方に来ていただいているのはこの実習指導1のときですね。話をしていただくっていう形でここにはかなり来ていただいて。例えば、S学園の園長先生とか、Kの理事長先生とか、今回はZのN先生、あと精神保健のワーカーの方

とか来てもらって、話をしてもらうようにしていますけどね。あとは、まぁN先生なんかは現場実習なんかでも少し、現場の方に来ていただいたりはしているみたいですし。というかたちですね。演習のなかでも現場の方に来ていただいているところとかあるのですか？

A：いやほとんどないですね。ただあの、非常勤で別の授業をもってもらったりしていたときに、まぁその、例えば、1コマ2コマちょっと事例をだしていただいて、それを材料にやったりとか、いうことはあるみたいですね。でも、演習っていうことになると、どういうふうに学外の方に参加してもらうかっていうのはやっぱり考えなきゃいけないとこもあるみたいで。そういう意味でちょっとなかなか、導入しているところは少ないみたいですけど。

C：ちょっと余分な話だけども、学外の方から演習なんかに来てもらったときは謝礼はどっからでるの？

D：それはだから、来年度もし先生が授業で、学外の人を呼びたいと思えば、今書類が来ているじゃないですか、予算の。あれにいれといて、Cのこの授業でこれを使いたいから、っていうんで、お金をとっとかないと。

C：そうか。僕は非常勤に行っているときにね、僕は自分で授業をやらないで、みんな来てもらってね、現場から。それで話してもらって、僕の謝礼をそのまま渡したの。ああいうことは非常勤ならやれるなぁと思ってね。

A：あの、看護学校のときにそういうやり方がありましたね。

C：僕今それをね、E看護でやっているの。学生はそのほうが喜ぶし、あとで、こちらとしてのコメントをしてね。それなりにインプットをしていくと、いいんで。

D：それをするためには予算をとっとかないと。

C：あれは研究費ではだせないのかね？研究費でそういうこと使っちゃだめなのかね？

D：一応やっぱり授業としてとっておかないと。

A：うちもそうですね。その授業にかかわる予算としての要求・・・。

C：なるほどね。いい顔しないだろうね。てめぇがやりゃいいのに、なんでてめぇに給料払ってまた人雇わなきゃならないんだ、って

D：でも実習指導1なんて外部講師で6人分の予算とっていますからね。

C：まぁあれはさ、それなりに理解できるじゃない。実習受け入れて

くださるところに来ていただいて。ごめんなさい。余計な話を。もう頭が来年度になっている。

D：もう来年度をどうねぇ・・・。ほんと考えますね。

A：養成校協会のほうで、研修を年二回開いていて、一つは1月最初の一泊二日でやっている研修なんですが、もう一つだいたい10月くらいにやってるようなんですけども、その研修に対して、こういう授業の組み立てとか実際にやっていくのにかかわってですね、こういう研修を企画してほしいというような、ものがございますでしょうか。だから、例えば、昨日・おとといで言うと、模擬授業っていう形で、それぞれの分野別でやっていただいて。例えば、高齢者なら高齢者でやっていただいて、興味のあるかたはそこへ行って、実際にプレゼンされているのを聞きながら、一方で受講生となってもらって、演習に参加したりとか、いうふうなのがあったり。あるいは、ワークショップで、教材づくりのワークショップがあったりなど。いうふうなのを1月のところではやっていたりしたんですけども。

C：あれに行きたかったけれどねぇ。残念だったね。

A：実際他の方がどういうふうに授業しているかを知る機会っていのがほとんどないもんですから。

C：ないねぇ。あれはほんと僕行きたかったんだけどねぇ。

D：そういうのがあったんですか。あったんですかっていうレベルですからねぇ。

C：どのくらいこられたんですか？

A：ええとですね。結局100名あまりだと思います。昨年度に比べて減ったらしいです。

C：そうですか。それは何か理由があったんですか？

A：いや、ちょっとはっきりとした・・・。

C：僕なんか特に新米教師だからああいうのをしっかり学べるところへ行かせてもらえるといいなぁと思って。

C：結局養成校っていうことで、大学だけではなくて、短大・専門学校、それからもう一つ、前の流れがあって、高校の福祉科の先生方も参加されて。大きくは高校の部会とその他のところで分かれる形にはなるんですけども。高校のほうも今福祉科がすごい増えてきてるもんですから、一方で高校とのつながりをどう持たしていくのかっていうのが。ちょっと開会のときに文部科学省の方と、厚生労働省とそれぞれの担当の方がこられて、今後そこら辺が課

題になりますとはおっしゃってたんですが。高大連携っていうことが。でも、どういうふうにつなげていくのかっていう、非常にまた難しいと。

C：秋はいつあるんですかね？決まっているんですか？

A：いえ、まだです。たぶん、4，5月の時期に研修委員会で年度の計画をたてることになると思いますんで。

C：あれは全国で一箇所？

A：です。今年度は確か、京都でやったと思うんですけど。秋は。

C：そうねぇ。僕はほんと研修に行かせてもらいたい。

A：一月は年の始まりでいつも。高校との関係で。高校がすぐ授業始まっちゃうもんですから。それでどうしても冬休み最後のところっていうことに。

C：もう少し分散してやるっていう話は全然ない？

A：それがですね、一つはブロック単位でそういうものをやってはという話はでてます。だからここで言えば中四国ブロックっていうことになろうかと思うんですけど。

C：特に新米教師用にやってもらいたい。ステップアップで。今頃多いでしょう。僕らみたいな人間が。新参者が。だから、やっぱり教授法なんていうのは、現場にいて誰も学ぶ機会があるわけじゃないんで、やっぱり基本的なことはきちんとやっぱりどこかでね、一度通過させてもらえるといいなぁと。学校レベルでもないでしょ。もちろん。だから新米向け、新米だけ来いって言ってもらって、行かせてもらったら。ほんでベテラン先生たちがちゃんとプレゼンテーションをしてやってもらえるといいかなぁと。僕なんかほんと困ってる。授業なんて。僕のは授業になっているのかって。学生に聞くとおもしろいって。面白いと授業とは全然違うんで・・・。現場の人間が大学に入ってきたから、教員のレベルが落ちたっていわれると肩身の狭い思いをねぇ。その通りやろうとおもうよ。

A：実際ほんと教授法をやっぱり習う機会がない・・・。

C：ないですよねぇ。自分が習ったようにしかやっぱりやってないし。自分のやれるように、やりやすいようにしかやってないからね。やっぱり一度教員になるためには、基礎的な研修を聞いて、文部科学省がやるべきですよね。ほんとは。そういうのなんかやってもらえるとうれしいなと思います。専門学校の教員があれをやらなきゃいけないというんで、全社協が、ねぇ。去年からやりまし

たよね。僕あれはいいことだと思うんですよね。看護教員があれをやらないと教員になれないんですよね。やっぱりやるべきだと思うよ。ブロックでもやってもらえませんか？K大の先生が･･･。

A：いえいえ、とんでもない。私もまだ新参者ですから。実際介護福祉士のところは介養協が中心になって、プログラムつくって、かなり長い日程で研修受けさせてますから。

C：そうそう。ハードでねぇ。あれはいいと思うよ。行くほうは大変だと思うけど、やっぱり一度はね、一度やっぱりああいうチャンスがくぐれてるといいんじゃないかなぁと。二週間か、何週間でしたっけね。

A：ええとね、確か1クールが一週間。

C：看護教員のぶんはH看護協会がやってて、ずいぶんあっちからこっちから全国から来てるよね。狭き門なの。僕はあちこち行くと、ぜひあれに参加させてもらえるようにしてくれないかっていう話があるくらいあれは評判がいい。そしたら今度は介養協がやるって話になって。それはいいなぁと。行くのは大変だけど。一度そういうチャンスをやっぱり。なんか基礎はね、同じものをみんながもってるっていう。あとはそれにオリジナルが加わっていけばいいんだけど、はじめから全部オリジナルでいいかっていう話になると、ちょっと僕は不安で。関連するようなしないような話で申し訳ない。

A：いえいえ。ブロックでっていうのは委員会のほうにも、伝えさせていただきます。

C：手取り足取りやってください。わけがわからんのがおるから、ときどき。

D：ほんとわけわからない分野ですね。社会福祉って。僕だから、やっぱり僕難しい。僕はもともとが障害児教育ですもんね。臨床心理なんかだから、ほんともう、福祉そのものがこんななんかね、手探り状態ですね。

C：実習は実習でまた別にやってるって話で、あれは多いにまたそれも期待してるんですよね。ソーシャルワークのアイデンティティっていうのが、現場と研究者の間で何があるんだと。それがないままに実習に行ったり受けたりして、学生はいい迷惑だと。極端にいうと。ほんとそれ感じますよね。そこがはっきりしないで、実習指導1，2だっていう話をしたって、学校のほうが一人で空回りしてるだけで、現場が全然そこに関与して来ないしくみのな

かでね、いくら学校がああだこうだっていっても、だって、実習に行った先じゃそれとは関係ない形で実習・・・、じゃあそれをごちゃごちゃ言ったら受けてもらえなくなるし。ここが学生の被害者だと思うなぁ。僕は。だからそういう実習という場所で、現場と教育する側とのアイデンティティがちゃんとしてて、演習がありっていうふうになっていかないとね、演習は演習、実習は実習、ってまたセパレーションした状態で、今度は現場とあれとはまた違う状態で。学校のなかで統一することも大事だけど、もっとやっぱり現場と共有できるっていうもののなかに、教育をいれていかないと、いくらこう今まで学校の先生方が育てて、送りだしてくれても、現場のほうでザルで水をすくうような形で、結局勉強してきた人たちがね、勉強したものが活かされるシステムのなかに入れないということになると、ザルで水で落ちないでしがみついているのは、成長してなんとか生きれるんだけども、それはもう個人の努力以外の何者もないっていう。現場のなかでね。なんか私ね、これじゃあいかんなぁとつくづく。まぁ先生もおんなじで、現場やってきた人間っていうのはやっぱりそういうことがいたく気になりますよね。テキストをつくるときも、共有して使えるテキストね。現場と学校が共有して使えるテキストっていうことやらないと。今までの実習のてびきの本なんかでも結局教員むけ、学校むけのテキストであって、現場には何のメッセージも伝えていないというね。それがね、独りよがりだなと思うんですよね。それはまぁどうだっていったって、結局学校が一生懸命になってやってることが、現場で受け入れられなきゃほんとに学校でやっていることがまたね、さみしくなっちゃう。まぁこういうカリキュラムいじることもいいけど。どう現場と語り合えるっていうか、共有できるものを一つでも二つでも増やしていく取り組みがいるなぁと。だから学校教員には新米教員には、教授法の講習会があって、それから現場の指導員の人たちにはその人たちむけの学校のご奉仕をしなきゃいけないですよね。もっと。現場のために時間をさくっていうことをね。そうすると、現場が育てば、ね。学生も育っていくわけで。先生たちだけがいくら育っても、学生も現場も育たないんじゃ・・・。私はどっちも中途半端になっちゃって、なんかむなしさと老人性うつ病に今かかりつつある・・・。ここにそのうちいかにゃいけんなぁと。

D：ほんと、C先生がおっしゃるように、現場、まぁ自分が知ってい

る現場だけで授業をしてるようなもんですよね。だからどんどんどんどん現場から離れた年数が長くなればなるほど、狭くなっていって、なんかいびつになっているなって思うことはありますよね。

C：たくさんのことを教えなくてもいいけど、これとこれとこれだけはお互いに一緒にちゃんと学生に、現場と学校とで入れていこうね、っていうものをね、なんか、あんまりパーフェクトなものを狙わないで、そういう積み重ねのしくみでテキストをつくってもらったり。テキストもステップアップしていく、それを使う人もステップアップしていけれるようなね。あんまりパーフェクトなものを作っちゃうと、一部の人たちだけはやれるけど、うんどうもまぁ、みんなが遊離しちゃって、現場も離れちゃって、我は我のやり方でやるっていうふうになっていったらいけない。私はもう、ほんと実習担当になって花粉症になってね、もうひどいんですよ。今まで花粉症なんてまったく縁がなかった。うちの事務長がひどかったの。で、いつもからかってたんです。うるせえ、っていって。今ここでね、私が一人でおおくしゃみしながら。実習やるようになってから。ほんま。さっきの話じゃないけど、ほんと 100 人からの実習をまわすのはね。入れ込んでいってね。

A：それは 8 人で担当されるんですか？

D：実習はもう二人。ほとんど。

A：二人！？巡回も？

C：巡回はみんなで協力してやるけど。その実習計画をつくらせたり、それを一人三回も四回も面接しながらつくらせて、それでつくって、実習の事前訪問に行かせて、それで訪問でしょう。今度は。もう実習計画書をつくらせるだけで。一人きたら一時間くらいかかるでしょう。それが 3 回くらいくるのはくるんですよね。施設は施設でいろいろあるし。あれ以来体調くずしちゃって。

D：年々実習をお願いするのがしんどくなりますね。

A：きびしいですね。

D：ほんときびしい。まぁうちなんかはほんとこの演習から離れるんですけど、6 月 11 月にしてるから、なんとかみんなが同じような時期にいけるっておもいますよね。ほんと年々厳しくなる。

C：施設がいやがるしね。ほんとに私もいやだったからね。受けるの。断ることに専念していたほうだから頼むのがね。これは人一倍きついですよ。わかる分だけね。相手の気持ちが。

D：実習時間はどんどんどんどん増えそうな気もしますしね。実習はさせろ、させろ、って言うんですけどね。

C：なんでも実習だからねぇ。もうちょっとこう、実習にほんとに、実習演習をきちんとやっていこうっていう話なら、もう少しザ学を減らしてもらって、選択科目にしてもらって。ちょっとつめこみすぎだわねぇ。全然ゆとりないですな。大学は。ゆとりある教育いいながら。

D：いいですかね。そんなところで。

A：はい。ありがとうございました。

中四国ブロック第2回ヒアリング調査結果

日時：2003年1月9日(木)10：30～

司会：　A大学　　A先生

参加者：B大学　　J先生　(以上、1名)

A：このヒヤリングの目的なんですけれども、昨年アンケートの方お答えいただいたのですが、それを補足する目的が主で、なかなかアンケートのほうに書ききれないことですとか、実際担当をされている方々の率直な気持ちというか、お考えの部分をお聞かせいただきたい。それを今後社養協のほうで、演習の、できればミニマムスタンダードのようなものをつくっていって、それともう一つは、テキストなり教材をいくつかモデル的なものができれば、それをご活用いただけるかなというふうなこともあるものですから、そうしたところでさせていただきます。で、ブロック単位でやっているものですけども、ここはですから中四国ブロックということになるんですが、今私が拡大研修委員というものを去年の秋から急遽することになりまして、それで先日B大のほうへ行かせていただいて、C先生とD先生のお二人からお話を聞いてはきたんですけども、で、今日二回目ということになります。あと、本学の方の演習担当の話きいて、その程度で終わるかなと思うんですけども。それで、アンケートの方とかさなるかとは思うんで

すけども、改めて、こちらのですね、演習の形態を、概略を教えていただいて、実際の運営の仕方について工夫されてる点等お伺いしたいんですけども。

J：演習時間は水曜の２限３限、お昼休みはさんで２限３限を通年で行っています。特徴としては、専任の教員が７名、で、分野別、技術別になっています。ケースワーク・グループワーク・コミュニティワーク・ケアマネジメント・調査法・価値、倫理という枠があって、記録法。その７つにそれぞれ担当教員が一人。まぁケースワークだったらケースワークの教員が一年間ケースワークを持つということになっています。で、学生を７つのグループにわけて、ぐるっとローテーションで一巡できるようになっています。

A：一年間で？

J：一年間なんですけども、一人の教員に３日分なんですね、だから１コマ使うことになってるんです。ケースワークだったら６コマつかって、６コマ終わったらぐるっとローテーションということをしていますので、６×７、４２回で全員が一通り基礎的な援助技術を学ぶと。あと残った１８回ありますね。全部で60回ですから。１８回を今度は５つに、記録法と価値、倫理の部分を除いたケースワーク・グループワーク・コミュニティワーク・ケアマネジメント・調査法にまた再編成しなおしまして、５グループに再編成しなおして、その５グループで今度は１２コマ行います。１２コマ行って、あとはゲストスピーカーによるレクチャーと振り返り、まとめの時間にあてています。

A：一グループが何人くらいなんですかね？

J：一グループが18か19か。20は越さないんで。それをO先生がすごく気をつけられて、やっぱり20を超えないようにと。最初のグループは。次のグループは５領域になりますので、一グループ25,6人になります。

A：演習は何年次に？

J：三年次です。

A：福祉実習との関連性みたいなのはどんなですかね？

J：それが研修のときにもでてたんですけど、うちはたぶん意識をしてないんだと思います。ほとんどの教員が、私もそうなんですけども、演習を担当している教員はほとんどが実習とかぶっているんですけれど、でも実習指導の時間は実習指導の時間でまた別のプログラムを組んでいますので、実習指導は実習指導、で、援助技術演習は援

助技術演習というかたちでいまんところはたぶん、私の意識のなかであんまり関連づけてないな、という気がします。で、ちょうど三年生の夏休みに実習に行きますので、前半で例えばグループワークなりケースワークが前半で終わってしまって、で、実習があってっていう学生もいるし、そうじゃなくて、実習が終わってからケースワークやグループワークやるっていう学生もいるんです。そのローテーションの具合で。ですから、それでずいぶん、実習でグループに出会った学生なんかは非常に理解度も早かったりとか、記録なんかも実習できたえられて、だいぶ要領がわかって記録もとれるようになったりとかいうのがあるんですけど、どうしても実習前とそこで切り離されて、援助技術演習との関連が今ちょっとできてないなという気がします。

A：一学年何人だったでしたっけ？

J：一学年ですね、100人定員で130人くらいはとってるみたいです。

A：130人全員実習ですか？

J：はい。全員実習。うちの方針は社会福祉士の国家資格をとりあえず、全員受験させると。それで合格率をあげるというのが学校の方針なんで、指定科目は全部必修科目になってるんです。だからいやでもなんでも、むこうがむかまいが、とりあえず全員指定科目は取らせて、実習に行かせて、演習もやらせて。で、全員受けさせる。受けさせるっていっても、最終的には私はちょっと受けません、違うところに就職しますっていう学生さんも1人や2人いるんですけども、方針としては全員受けさせると。そうなんで、私もそのへんで、大丈夫かなと思う学生が実習に行ったりしてるんですけども、もうそこは全部。

A：実習もだから必修科目・・・？

J：必修科目。

A：落とせないわけですね？

J：落とせない。実習もそっからずっと続いてますんで、実習指導も45時間ですよね、結構長丁場なんですけど、それもあって。で、個別の対応しながら。落とせないんです。だから、落としてしまうと、例えば、夏休みにちょっとリタイアというか、そういう学生もいたんですけども、そういう学生は春休みに行かせるか、いったん落として来年とらせるとか。そういう措置をとって、とにかくとらせる。最後まで。そうでないと、卒業ができないもんですから。そういう方針です。

A：それで、演習のほうは７つのグループにわかれてっていうことなんですが、実際にそれぞれの内容に関しては各担当の先生のほうで・・・？

J：まず自分たちでもちよって、そして、こんな感じでやりますっていう事前打ち合わせをして共通理解をして、そして、最初の時間ですね、援助技術の４月の最初の時間に全員学生を集めて、で、各担当の教員がこの分野ではこういうことします、っていう簡単な。シュラバスは一ページ分ですので、また補足のシュラバス、それぞれの領域のシュラバスみたいなの配って、で、説明をして、グループ分けの紙を配って、次回かれこれでいきますと。場所も、いろいろ。演習によって。私が使ってるのは、ゼミ室っていうのがあって、何にもない部屋に可動式の椅子とテーブルがあるところなんで、広い部屋なんですけど、そこを使う教員と４階にソーシャルワーク演習室っていうのがあって、少しここより狭いんですけど、6,7 人のグループが入れて、マジックミラーがついてて、ビデオ撮影ができるようになってる部屋があって、ケースワークの先生なんかはそこを使ってロールプレイなんかをして、それをビデオにとってあとでみんなで振り返るというようなことをやっていらしたり。ケアマネの先生もそうかな。場所もいろいろばらばらなんですけど。二号館にいったり、ここでやったりとか。でも、基本的にはあれやこれや、ああすればいいこうすればいいというような人の領域には口をださず、一応こういう感じでいきます、というくらいで。

A：先生はどちらを担当されるんですか？

J：グループワークなんです。

A：こないだの研修のときにもちょっと、私が参加していたところでってたのは、なかなか社会福祉の専門的な援助技術の演習に入る前段階のところで、働きかけをしないと、例えばコミュニケーションがうまくとれないとか、そういう前段階のところの教育をわりとこの演習でもしていかないと、うまく運営できないというようなご意見なんかもあったんですけど、そんなところはどんなですか？

J：ええとですね、コミュニケーションは、うちの大学は全体的に少人数教育っていうのを売りにしてて、一年次の前期にチュートリアルっていって、それはもう名簿順で分かれる、専任教員にだいたい 6,7 人で割り当てて、火曜日の２限に少人数で、まぁ一年生

入ったばっかりで大学のことわからなくて、で、大学とはこんなことですよ、こんなこと勉強しますよ、っていうようなことを話し合ったり。あとチュートリアルの時間に福祉だったら福祉の意識を高めてもらうということで、チュートリアルの時間に車椅子体験をしたり、あるいは、身障者スポーツを体験したり、体育館で。いくつかのゼミが集まって。で、いくつかのゼミで児童館とか社協とかに見学に行ったり、全体で今年はカンボジアの子供たちの家っていう、まぁいってみたら児童養護施設みたいなのを自分でつくって活動している NPO の人に来ていただいて、で、その公演を聴いたりして。チュートリアルのなかで大学になれてもらうっていうことと、福祉の意識を高めてもらうっていうことを、できるだけ少人数で学生のニーズをききながら対応できてるんですね。で、次の段階でそれは前期までなんですけど、二年生にもゼミがあって、専門演習１って呼んでるんですけど、二年生もまたゼミにわかれて、ここで大体 6,7 人のグループでゼミを行いますので、だいたいそういうところで、コミュニケーション能力ではないですけど、まぁ少人数ですので、学生もいいたいこと教員にいったりとか。で少しづつグループ、私は今専門演習、二年生の後期はグループの援助と実際、やったかな、すごい薄い本があって、グループの力とか、グループダイナミクスとか、あるいはグループを用いてこんな援助方法があるとかっていうことをわかりやすく説明した文献があって、それをみんなで読んでるんですね。そういうことをしていって、ですから、私はだいたいチュートリアルと専門演習１を体験してきてるので、ある程度自分の意見とか話たり、グループでディスカッションしたりという場は与えられてきてるはずだという気はしてるんですね。それを経て援助技術演習３年生でやってきますので、もちろん個人差はありますけども、グループワークをやってみると、ほんとにできる子はきちんとリーダーシップを発揮して、グループをひっぱっていく子もいますし、もちろんそれができなくて、グループになってディスカッションって言っても、一言もしゃべれない子ももちろんいますけれども、実際の夏休みの実習を経てきますと、結構発言の回数も多くなったり、あるいはちゃんと人の意見もきけるようになったりとか、そういう変化はみられますんで。実習と演習とかならずしもリンクしてないということを言いましたけれども、チュートリアル、専門演習１っていうのがコミュニケーションな

んかについては大きな影響を及ぼしているのではないかと思います。

A：他の先生方がどうされているかっていうのはなかなかちょっとわからないんですが、例えば先生のところでは演習されるときに、こんな工夫をされているっていうようなものがあれば。

J：まず最初は二年生の援助技術論がありますので、援助技術論である程度７つの技術の概要は知識として頭に入っているはずなんですが、きっと忘れているみたいなので、最初のとき、グループワークの概要をもう一回説明する。その上で、グループの力っていうのを活用するのがグループワークだから、まずは最初のその６回ではグループの力をみんなに体験してもらうと。グループっていうのはこういう力があるっていうのをしっかり体験して、で、次の５グループになったときにグループワークを選んだ人についてはじゃあその力をつかって、ワーカーはどう働きかけるべきかっていうのを学びますということをしっかり伝えて、18か19ですので、６か７かの、３つのグループに分かれて、もうほとんど講義は最初の30分くらいで、体験学習トレーニングみたいなことをずっとやっています。それは、自分自身が学生のときにグループワークの時間に先生が実施していた演習を取り入れたり、自分のトレーニングの文献を探してきてそれを活用したりしてるんですけど。先日の研修で同じような教材を使っていることがわかりまして、だから、自分のやり方はまぁまぁそんなに的外れじゃなかったんだなと。そういう確認もできましたけれども。

A：ちなみにどんな教材を・・・？

J：これをやろうと思ったんですけど、それでいうと、ジェネリックソーシャルワークの流れとは外れているなっていう気はするんですね。完全に分離してやっているので。で、これでやろうかなと思ったんですけど、これはやっぱりグループワークというよりもグループをつかってということですので、実際にグループを体験してもらうということで、これをつかってるんですけど。「creation human relations」という。Press Time社の・・・。だから、ＫＦ大の先生もＫＩの先生も使っているっておっしゃっていました。それを話したら他の先生で知らない先生が教えてほしいって言われて。こんど送りますっていってるんですけど。情報提供。

A：ちょっと見せていただいてよろしいですか？

J：どうぞどうぞ。全巻で7冊なんですけど、私は個人の気づきの分とこのグループプロセスを理解するというぶんで。こっちがグループプロセスを理解する分で、そっちは個人の気づき、自己覚知の部分はそれでやって、これはグループで力をあわせてなにかするときに、で、グループの力を体験するときにこっちを・・・。今はですね、これが6巻の分と、こういう風にばらばらになってるんです。これはまぁ導入のアイスブレーキングとクロージングだけ買って、これでまたアイスブレーキングをやって。大学外の講演なんかでもアイスブレーキングとクロージングでこれ使ったりしてるんですけども。今はこうやってばらばら売りになっていたりして。それぞれ。っていうのを使っています。今さっき言った二年生のゼミにはこれを使って。あと、これを補足するものとしてこれをつかってるんですけど。

A：あと、こうした教材に加えて視聴覚の教材とかもお使いなんです？

J：ええとですね、ビデオを使いたかったんですけど、ビデオは、グループワークのビデオっていうのをなかなか探し出せなくって、こないだの研修で回想法っていうビデオ、あれがいいですっていわれたんで、ぜひ使ってみようかなと思ってるんですけど。

A：中央法規の？

J：はいはい。ほんとは、ケースワークの先生がやられてるみたいに学生のロールプレイのビデオ、ロールプレイじゃなくっても学生がこの課題をしてるときの様子とか、ディスカッションしてるときの様子をビデオにとって、で、自分がグループの課題をしてるときにどんな動きをしてるのかっていうのをみてもらいたいって思ってるんですけど、自分自身がビデオをなかなかつかいこなせなくってまだ撮ってないんですね。で、3グループあるので、どこに焦点を合わせるかっていうのが、まだ一年目なのでまだできてないです。後期の最後ぐらいにちょっとやってみて、ビデオためしにとってみたりしようかなと思ってるんですけど。他の先生は、院生にとってもらうとか、ケーブルテレビの人に撮影に来てもらうとかそういうことをされている先生もいらっしゃったみたいです。外ちょうすると予算もまたかかってきますので。それはちょっと。視聴覚教材の開発と、学生の様子をできるだけ映して、学生自身に見てもらいたいというのがあるので。ケースワークではそれができているので。ソーシャルワーク演習室はビデオ撮影ができる設備がありますので。ケースワークのほうはそれできち

っと自分の面接の様子なんかはみています。

A：今後、社養協のほうでこうした教材ですとか、視聴覚のビデオとか、できればっていうことで考えてるんですけど、それについて要望ですとかご意見っていうのはいかがですか。

J：ビデオをやっぱり。私、教材の分散回にいたんですけど、やっぱりグループワークのビデオっていうのが回想法のビデオしかでてこなかったんですね。面接に関してはいろいろビデオもでているので、それを活用されているようですけど、グループワークのビデオはなかなかいいのがないっていうのと、発題者の方がおっしゃった回想法のビデオしかでてこなくて、他の先生からもこういうビデオつかってますっていうのがでてこなかったので、きっとグループについてのビデオっていうのはあまりないのかしらと。まぁそのあたりのビデオがあればいいなと思うのと。それから、これにしても、これら全部そうなんですけども、グループの力を体験するっていうの、で、グループの力を体験しながら自分自身の気づきを深めるっていうのにはいい教材なんですけれども、実際にグループワークをするときに今度はワーカーの立場にたって、その力をつかってかかわっていかないといけないので。その教材がないんですよね。それで、事例集なんかはたくさんでてますけれども、今はＩ先生たちがだしたグループワーカーの技術っていうの本と使ったりしてますけども、実際に面接の練習のように、ワーカーとして働きかけるような、それを引き出せるような教材がないかなぁと。みなさんその点は苦労されてるみたい。これはやっぱり活用されてるんですけど、これはどっちかというと、自己理解自己覚知とかコミュニケーション技法とかプレゼンテーションとかそのあたりはこれでできるんですけども、ワーカーとしてグループの力を理解して活用するっていうときに、どのようにしたら学生にそれが伝わるかなぁというところで、今ちょっと・・・。その最初の６コマはこれで十分だと私も思ってるんですけれども、次のグループワークを選んでくれた後期の５グループのうちの25人にはちょっとグレードアップしたものをしたいなと思ってるので、そのあたりは今苦労してるところです。でも、方向性としてはジェネリックの方向にいってるので、あんまりグループワークグループワークというのもどうなんだろう、と思ったりはしてるんですけれども。

A：最後のほうでまとめをされるわけですよね？全体の。そこでもう

一回統合するようなまとめになるんですかね？

J：はいそうです。最後の最後に統合して。で、ゲストスピーカーとして現場の方に来ていただいて、現場で技術をどのようにつかっておられるかということを話していただくなかで、それを二回くらいやって。で、それをふまえて、この技術が現場のなかでどう統合されているかっていうのをまとめとして行う。その予定なんです。この形態になったのが、今年からなので。予定なんでね、まだやってないんです。今の三年生からこれをはじめたので、一期生（卒業生）と今の4年生は教員三人体制でやってらしたそうなので。そういう意味から。教員三人体制でケースワークとケアマネジメントとコミュニティワークかな。それを中心に。まぁ教員の専門分野の3分野でローテーションを組んでやったらしたので、その意味からいうと、より技術的には詳しくできるようになっているとは思っているんですけれども。

A：その最後のほうでお呼びすることになっているゲストスピーカーの方っていうのはもう決まってるんです？

J：それはO先生にまかせてしまってるので。一人はケアマネージャーの方で。そのケアマネの方とあと病院のワーカーさんの予定なんですが。それぞれの教員が自分の時間のなかにゲストスピーカーに来てもらうっていうこともされてるようですけど。私はずっとこれでいっぱいいっぱいだったので。ずっと演習をやってましたけど。

A：それともう一つ。今社養協のほうで、先日の1月の最初の研修ともう一回秋に、9月の終わりから10月くらいだと思うんですけど。研修を年二回企画してるんですけど。

J：教育セミナーとはまた別にですか？

A：一月最初の分と、10月の最初くらいにありますよね？去年、R校でやったやつ。そういう研修を今後もやっていく予定なんですけども、研修に対してこういうものを企画してほしいとかいったあたりはどうでしょうか？

J：研修は・・・、研修内容になるかどうか。さきほども、基準の話をされてましたけども、今回の研修なんかでも特に若手の先生方のシュラバスを見せてもらうと、ものすごくきちっと細かくかいてらっしゃるんですよね。ねらいがあって、参考文献のページ数まで。テキストとはまた別に参考文献が、回数分、15冊分くらいあるような感じで、びっくりしたんですけど。それは全部ページ

数もかかれてて、ページ数が書かれてるからねらいとしては、その授業までにこの部分くらい読んどいてねっていうねらいらしいんですけど。それで教材なんかも非常に工夫されてて、教材としてつくられた教材ではなくて、まぁ報道であるとか、テレビの番組とか新聞とか。ここまで細かくよくできてるなというのが実感なんですね。ですから、そこまでできなくっても、これだけはしっかり、もちろん、社会福祉士の指定科目なんかにものってますけど、あれはどっちかっていったら理念的なものがのってるので、例えば技術だったらこの技術だけは身につけておかないといけないとか、この知識だけは絶対見につけとかないといけないとか、で、その知識と技術をどう連携させていくかとか、そのような、それこそ最低基準みたいなものがあれば、まぁそれをベースに各自が工夫してっていうのがあればいいなと。だいたいどの専門職でもきっとそうだと思うんです。医療の分野でもかならずこれだけはやっておいてっていうのがあるんでしょうし。リュウコクの研修でもその話がでてたんですかね。医学の教育なんかは、教授法とか教育方法なんかもきちっと共通のものがあって、で、それに沿ってみんな学校がやっていると。ですけど、社会福祉のほうは、それぞれが工夫されているんだけれども、共通した、援助技術の教授法とか、援助技術論の教授法とかそういうものがぜんぜんないから、個々ばらばらになってて、それが全体としての質の向上につながらないのではないかと思ったりしたので、そういうのがあったらいいなと思うんですね。演習のやり方でも、うちなんかは20人きらないでできてるので、その点は私自身もやりやすいし、学生も少人数で取り組めてると思うんですが、25から30でやらないといけない学校もあったり、あるいは演習といいつつ、大教室で一気にやってるというようなところもあって、そんなばらばらでいいのかと。一応20人って基準を示してはいますけれども、実際、運用というか、学校によっては運用の仕方がこんだけ違う、それで援助技術演習で、時間が増えたので、うちは2コマ続きでやっていますけど、2年と3年にわけて、二年1コマ通年、3年1コマ通年でやってらっしゃるところもあったりして、またそれもそのほうがいいのか、わけてずっと基礎的なものをやってグレードアップしたものをやって、そのあたりの基準なんかがもうひとつあいまいなままで、専門職としてのレベルをあげていくっていうのは難しいんじゃないかなと思っています。いろいろ話

を聞くとほんといろんなやり方があって、Ｔ大学は、実習を平日の授業中にいってらっしゃるんですよね。で、火曜日と木曜日にいってらっしゃるのかな。で、水曜に演習をもってきて、そこは完全にリンクしてるんですね。実習でやったことを演習で反映させて、またそれを次の実習にもっていくと。そんなことができたらすごい理想的なんですけれども、地理的なものとか、他のカリキュラムとかの関係からすると、そういう余裕をもったカリキュラムをくめないですし、理想としてはそうやって時間的にも実習と演習がリンクしているようなものができたらほんと理想的だなと思いました。ただ、その先生は結局リンクしてるんだけど、一人で１００人をみていらっしゃるんですよ。それだから、不思議な。一人で１００人を見て、１００人を１０人ずつのグループに１０わけて、教室を１０教室に。で、課題を与えて、で、先生がそれを見回るという。ともすれば本当にほったらかしになってしまいそうな。リンクしてるんだけど、またやり方によってはそういう一人だけで見ないといけないとか。必ずその辺の基準があったほうがいいんじゃ。特に演習については。先ほどいわれたようにコミュニケーション、人の話が聞けないとか自分の意見きちっといえないとかそういう学生さんが多いみたいなので、できるだけ少人数でそして、教員がカバーできるような人数でできるのが理想的ですよね。うちは、私は今年一年やってみて、人数的には非常にやりやすかったですし。ただ教材とか非常に苦労しましたけれども。そして視聴覚の問題ですね。ぜひともビデオを。できたらと思っています。

A：あと研修の時期等は・・・？まぁ今一年の一月の最初と。

J：あれはちょっときつかったですね。あれは高校の先生を配慮してですよね？それは十分よくわかって。高校の先生がぜんぜん来ないからなんだと思って。でも５,６はちょっときついなぁと思いましたね。他の先生にもできたらね、複数で参加してもらったらよかったんですけど、やっぱり時期的に難しいだろうし、私が今年度の社要協担当窓口になってますので、そういうのもあって、でなくちゃというのででたんですけど。ちょっと・・・、講義が終わって、あ、でも、入試とかがあるから２月３月は案外皆さんばらばらとあれですかね。で、国試があるんで。あ、そうだ。全然関係ないんですけど、後期びしびしでしょ。私はずっと一コマ目に入ってるんですけど。

A：これは通常の授業とは別に・・・？

J：いや、別途っていうか無償なんですよ。カウントされないんですよ。それをすごい負担感だっていうので、今。だから一月国試があるので。今日もやってるんですよ、模試を。で、模試をやると監督につぶされたりしてね。ですから、それの負担も非常に大きいんで。ソーシャルワーカー＝ゴールじゃないんですけどね、うちの学校はそれがゴールになってるんで。演習は演習で一生懸命やってるんですけど、なんか四年生になると、それが乖離してしまうと。あの援助技術演習はどこいってしまったの、という。それで、結局国試が終わるまでみなさんばたばたしてるんで。そういうのもあって、二月三月のほうがありがたいし。秋はまだ休み中で、講義は１０月からなんでまだでやすいですけど。後期はすごいしんどかったです。これだけやって合格率が８０パーセント９０パーセントになるわけではないんですけれども。

A：予備校なみですね。

J：そう。予備校みたいになってるんですよ。だからこっちで教えた理念とかね、とかとかけ離れて、問題やらして。せっかく３年でやってきたことが、４年生の国試対策でがらっとではないんですけども、ちょっと方向性を変えて話さないと、こっちはとけないと。教員自身みんなこっちにかぶってる先生ばっかりなんですけれども。

A：これ前期からするんです？

J：前期からするんですよ。前期はまだね、ちょっと余裕があるんですけど。後期はびしびしっと。一週間に一回必ずまわってくるんで。これのあり方もちょっと。援助技術演習についてはある程度かたまってきたし、O先生の思いがあったようなので、それが今回かなえられたと。あと考えないといけないのは実習とのリンクと。でも最終的に国試とどうやってつなげていったらいいんでしょうかという。そこが非常に厳しい。私そこにすごいジレンマを感じています。社養協としてはどちらもということになるんでしょうけど。でもなんかねぇ、自分自身でもやっていることが・・・。３年生に伝えていることと４年生に伝えてることと違うわけじゃないんですけれど、もうほんとにつめこみのことだけになってて、事例問題はありますけれども、やっぱりそんな深くねぇ、立場にたってっていうことは言いますけど、やっぱりそれは文章上のことですので、常識で考えてっていうことでしかいえないので、も

うほんとにそれで技術が身についたかどうかは図れないですから。あ、そうですね。援助技術演習の評価方法なんかもあれば・・・。今やほんと教員の主観のみでやってるような。まぁそれぞれ評価基準は、私ももっていますけれども、全体としての評価基準が。まぁですから、最低基準が決まればもちろん評価基準も決まりますので。評価方法とか評価基準なんかもあればいいですね。

A：先日、B行ったときにいただいたご意見で、できればブロック単位ぐらいで研修をしていただくとでやすいっていう声もあったんですけど、どうですかね？

J：そうですね。あんまり・・・。

A：結構中四国でもありますからね、学校が。

J：ありました。ありました。でもやっぱり中央の方が多かったですね。ブロック単位であればでやすい。それはあります。でもまぁそれプラス全体の研修があればいいですね。

A：以上です。

九州ブロック

九州ブロック第１回ヒアリング調査結果
日時：2002年11月30日(土)　15:00～
司会：　Ａ大学　　Ｋ氏
参加者：Ｂ大学　　Ｍ氏
　　Ｃ大学　　Ｔ氏
　　Ｄ大学　　Ｎ氏
　　Ｅ大学　　Ｙ氏
　　Ｆ大学　　ＴＲ氏　（以上、５名）

Ｍ：今回は、九州ブロックのヒアリング調査ということで、こういう話をしてほしいという依頼をうけております。Ａ大学のファイルの一番上に掲載してあります。この流れに沿って内容を深めていきたいと思っております。
その前に、自己紹介をいたしましょうか。

Ｋ：社養協の研修委員をさせていただいております、Ａ大学のＫと申します。本日はお手伝いに上がったものですので、必要であれば、関東ブロックで一度ヒアリングの方を実施致しましたので、そちらの経過等、必要であればご報告をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

Ｔ：Ｃ大学のＴです。今日は、オブザーバー参加をさせていただきますが、もし、人が足りない時には、ちょっとお手伝いしようかと思っておりますが、こういう形で参加させていただくことになりました。よろしくお願い致します。

Ｙ：こんにちは。Ｅ大学のＹと申します。大学の方では、私は児童が専門ですので、児童福祉論を担当しているのですが、あと、援助技術論及び現場実習、演習を併せて担当しております。今日はどうぞよろしくお願い致します。

Ｍ：主みたいな顔をしていますが、この大学で勤務しておりますＭと申します。専門は援助技術系の領域でして、実は、もう東京の方の大学を卒業しまして何十年になりますかね、いつの間にかＢの主みたいになりました。おかげで、外で果たさないといけない領域が随分と増えまして、対外的な学会とか学校連盟の役割も少しは担わないといけないという気持ちはあったのですが、今はもうＫ県やＫ市

だけの審議委員会の審議委員長とか副委員長とか委員が７つほどございましてパンク状態で、今回はＴＲ先生に依頼があって、お互いに忙しい最中ではあるのだけれども、２人でローテンションを組んで、役割を果たさせていただこうかということで参加させていただくことになりました。よろしくお願い致します。

Ｎ：Ｄ大学のＮと申します。午前中に急な用事が入りまして、少し遅れましたけれども、ご迷惑おかけしました。ごめんなさい。私は大学の方では、ケースワークという授業を担当しておりますが、平成11年からお世話になっておりますが、それより前は、MSWをやっておりました。よろしくお願い致します。

Ｍ：よろしくお願い致します。一応、ヒアリング調査の概要ということで、こういうふうに進めてほしいという以来をいただいているのですが、そこの中に「インタビュー内容と方法」というところをご覧いただけますでしょうか。

一番目が、担当科目の教授法の具体的な内容の紹介及び課題や問題の検討というところで、シラバスに基づきカリキュラム全体の中での援助技術演習の位置づけ、実習と演習との関連についてまず説明してもらい、次にどのような方法で教えているか説明してもらう。その後、課題や問題点を整理し、どのような教授法があればいいのか検討する。また、どのようにすればその教授法を自分のものとできるかを検討する。

二番目が、使用している教材、授業で使用している教材、教科書、文献資料、AV資料等を挙げてもらい、それの使用方法を説明してもらい、その後、課題や問題点を検討する。どのような教材が欲しいのかできるだけ具体的に出してもらう。

三番目が、担当科目の教授法に関する研修ニーズ。担当科目について教員が望んでいる研修ニーズを明確にする。具体的には、研修内容、講習方法、場所・期間等ということで、おおむね３項目の領域について少し話を流してほしいということの依頼であります。

どうも考えてみましたら、１と２はダブリがありまして、まず最初に、それぞれの大学の中での実習と演習との関連、あるいはカリキュラム全体の中の援助技術演習の位置付け、こういうもののお話をいただいたあとに、むしろ、じゃあその演習というかたちで、どういう教育教材を利用しながら、学生教育あるいは養成を進めているのか、そういうことの話しをしていただいたあとに、１の後半にもどって、その課題や問題点を整理し、どのような教授法があればよ

いのか検討するという方向に流していった方が良さそうな気がしますので、1番と2番は若干、ミックスしたようなところで少し話を進めて行くことができればと思っております。ひとつ、肩の力を抜いて、ざっくばらんに、教えても教えてもワケの分からん学生に対する怒りも出てくるかもしれませんけども、肩の力を抜いて、情報の交換を含めたところで話ができればというふうに思っております。トップバッターはどう致しましょうか？Y先生の方でよろしゅうございますか？

Y：まず、援助技術演習の位置づけというものですが、専門職養成の中の科目として位置付けております。特に2年間という長い期間の中でそういう授業があるわけですが、特に意識していることは援助技術論との関係で、つまり援助技術論で学習している内容をできるかぎり反映して、自分のものに学生がしていけるように、援助技術論の進捗状況を大事にして、演習を学生が授業で講義で知識として教わったことを具体的な演習の中で身に付けていくというような関連性の中で、位置づけています。それから、実習ともう一つ重要な関連は、やはり実習との関連だろうと思います。今、援助技術論とのつながりの中でと申し上げましたけれども、もうひとつ学生自身が、実習に行って、実習がどのようになっているのかということは、あとで説明の機会をいただければ説明をしたいと思うのですが、簡単に言うと、2年生の夏休みに実習に行っているものですので、まず2年生の段階で行く実習Ⅰというものがあるのですけども、ですので、現場実習ではありません。2年生の夏にまず実習に最初の段階で行くということですが、そこから帰ってきたときに何をそのぉ、ま、コミュニケーション実習というふうに位置づけていて、実習Ⅰという夏に行く実習をですね。コミュニケーションの技術の習得というのをメインに据えておりますので、それをどのような達成度なのかをフィードバックしながら、特に2年生の後期は実習を踏まえた、演習での確認や、自分の技術に何が不足しているのかというところで、授業の中で学生にもう一度学習させるような位置付けでしています。それは、現場実習でも同じです。現場実習は3年生の夏に行きますけれども、そこでも後期の場合は、実習で学んだことのフィードバックを3年の後期の中心にしていくということです。ですから、援助技術論を意識しつつ実習を意識しながら、それを演習の中に統合していくというような形で考えているというふうにお考えていただくといいのかな、というふうに思います。簡単ですがこ

んな感じです。

M：はい。それと先生、ついでに、例えば実際に先生がご担当いただいてる領域の中で、演習をどういう方法論で教育しておられるかということも、ついでにセットでお話しいただければと思います。

Y：はい。演習を始めて2年目で、まだ模索の段階であるのですが、1年目に、つまり今の3年生ということになるわけですけれども、始めたときにすごく反省したのは、援助技術論の中味が、非常に素通りしていっているというか、こちらの方でそれなりに教えているつもりなのですが、身についていないということがすごくあったのです。やはり2年生の前期にもう少し学生と対話を中心に、何が分かっていて何が分かっていないかということを、意識的にしようということをしました。その時に、何を題材にするといいかという、ちょうど2年生の前期は倫理とか倫理綱領という授業が中心になるので、バイスティックの7原則の本を、誠心書房から出ているＯＺ先生が訳されてる本があると思うのですが、あれをグループに分かれて輪読する、そしてそれを踏まえてディスカッションするということのなかで、ソーシャルワーカーとしての基礎的な態度の習得ということを今年意識的にやってみました。その効果は、今、少しずつ出てきているのかな、というところで、もうちょっと先を見ないと、その効果がどうだったのかというのは分からないのですけど、今年はですから若干そういう工夫をしてみました。

あともうひとつ、学生にはテキストというのは具体的には用いていないのですけど、ま、バイスティックは唯一使ったものですけれども、基本的に2年間の中でこれを使うというのは出してなくて、教員の方で意識して使っているのは中央法規の「社会福祉援助技術演習」を意識して、教員のなかでこなしていくことを意識して、教員側のテキストという意識でやっているということでしょうかね。そんな感じです。

M：では、Mの方から話をさせていただこうと思います。実はですね、今日こういう資料をお配りさせていただきました。急いで作ったので綴じ方の間違いがあるかもしれません。

まず、ご承知のように昭和62年に社会福祉の国家資格制度ができ、指定科目領域が設定され、本学も当初の指定科目を科目として開設することで、学生の養成をしてきたのですが、近年、指定科目領域の大幅な変更や見直しが行われました。

その新しい厚生省の指定科目に対するカリキュラム領域を実施しているのが、今、3年生なのですね。ですから、ちょうど4年過程の中の在学生という枠で見ていくと、教育に関しては新規の領域がゴッチャになっているというところで、本学の福祉教育が行われていることになっています。新カリキュラムは、旧来は講義系の科目が非常に多かったのですが、おそらく、できるだけ現場に出向いていった時には、頭でっかちだけではなくして、即戦力として巣立っていくような人間の養成をしていこうという思惑でもあったのでしょうが、例えば、援助技術に関しては「援助技術総論」があって、「各論Ⅰ」があって、「各論Ⅱ」があって、その上に「演習」が成り立っていましたが、この辺が軒並み見直され、演習系の科目領域が少し膨らむようになってきました。

我々の大学では演習をどう位置づけていくかと言いますと、やはり、講義中心に展開していく指定科目領域、各大学がその大学独自に設定している関連科目領域、こういうものを、福祉を担う世界で生きていこうとするものが、それぞれの領域の知識を演習の中に集中させて、自分自身の福祉臨床家としての完成度を高めていく。あるいは、事例の中で利用者さんにスポットライトを当てて、今まで得た知識をもとにしながら、事例の状況を刻んで行く。そういう集大成したところ演習があるだろうという捉え方を私はしております。

そして、また演習も知的理解のレベルですから、もう一方では、実習に出向いて行って、そこで起こったことを演習に戻って検証して行くというキャッチボールをしていき、専門家の完成度を高めて行くような位置に演習があるのではないかと思っています。

こうなりますと本来の演習の姿というのは、講義を中心とした社会福祉の基礎科目領域を、全部、最初マスターして、それから関連科目領域も全部マスターして、そしてその潤沢な知識を持った後に、演習に取り組んでいくというのが理想ではあるのですが、なかなかこの辺のところの科目の配置がうまくいきませんでね。実は、各種、児童にしろ障害にしろ、いろんな専門科目が周辺に分散されてる。そうすると、私のところは演習は3年生から始まっていくんですけど、ちょうど福祉全体の専門の授業が2年生から始まっていくんです。そして、2年生から福祉全体の専門の授業のスタートラインがあって、それからやがて、より個別分化した専門領域が3年生から本格化する。こうしたところに演習が入ってますから、他の福祉に関する関連科目領域も平行してとっていかなければならない。そう

すると、演習とは知識を集大成したところで取り組んでいくという前提条件が、ちょっと崩れていったりするところがありまして、その辺が大学として科目の設置や配置の仕方にちょっと苦慮しているところでございます。
昔は私どもの大学は実習を4年過程に置いていて、全体のいろんな知識を総合的に学んだ後の最後確認として4年生の実習に出すような方向でいたのですが、実は学内からも学生からも「就職活動がなかなかできません」ということを含めた、いろんな意見が出まして、それならば実習を3年生の秋に、それから、私どもの実習は2つに分割してます。一般には大学というのは4週間あたりでやっておられるみたいですが、3年次に2週間、4年次に2週間ということで分割をしておりまして、ちょうど、例えば、福祉の専門的な講義系の科目、それから3年次から始まっていく演習の領域なども、ちょうど前期の授業が終了した時に、前期というのは語らせて終わっていくのですが、それが終了した頃に、秋場の3年生は実習に取り組んでいかなければならないという、そういう、何と言いますか、実際、具体的整合性のないようなところで、実習生を送り出したりしていかなければならないようなところも一方ではあったり致します。そういう学内の現状というのがまずひとつあるということ。
それから、じゃあ、そういう中でですね、例えば演習というものに対してどういうふうに取り組んでいるかということで、Mがやっている方式をちょっと紹介させていただきますと、実は、これが今日お配りさせていただいた資料の領域なのですが、1枚目の左側のところにですね、「社会福祉援助技術論Ⅰ」、それから下の方に「社会福祉援助技術論Ⅱ」という表現がございます。これは本来、厚労省の指定科目領域でいくと、実はⅠの領域にあたるのですが、本学はセメスター制への移行を展望して単位を半期2単位で一旦修了するという形をとっているのです。ですから、前期のものをⅠとよび、後期のものをⅡというふうに表現しております。ですから、ⅠとⅡをセットで合わせて通年型の科目になっていくということです。そしてこのいわゆる「援助技術演習Ⅰ・Ⅱ」二つ合わせて通年型ですが、この中ではソーシャルワークの全景的な講義を、これは2年過程です。2年過程で、ソーシャルワークの全景的な講義をしていくということをやっております。ただ先程もちょっと、あの、今の福祉系の学生の3年生が、ちょうど厚生労働省が出した指定科目の新カリの上限の学年だということの話をさせていただきましたが、中

には単位を取り残した旧カリの学生もおりますし、それから、本学は3年次編転入の学生の受け入れも致しておりまして、もう実は中がゴチャゴチャ、ゴチャゴチャしているのです。ですから、できるだけ1コマ、コマを置くことによって、抱き合わせの授業ができればということで、これは、旧科目領域で落したものも、ここのところで一応抱き合わせが、あの、これは2年間くらいの経過期間でやっていこうということですが、抱き合わせで援助技術総論の領域が取れるような領域で設定しております。これは過渡的な措置としておこなっております。

そして技術論のⅠの領域では、ⅠとⅡで通年だということのお話をさせていただきましたが、ここでソーシャルワークの全般的な話をさせていただきます。講義内容をちょっと読ませていただきますと、社会福祉援助技術の全体の理解と、その援助技術が社会福祉諸制度の中でどのように活かされるべきかの専門職としての役割理解を深め、また、福祉利用者の立場を尊重した権利擁護、自己決定の尊重という近年の福祉動向を理解する。将来、社会福祉士の国家試験受験資格を目指すものは、受験のための指定科目であり、後期に開設される「社会福祉援助技術Ⅱ」ともセットで履修していった方が望ましい。

これはですね、学生にとってはですね、前期の授業だけとって後期をとらないということが自由になってるんですね。ですからあくまでも実は福祉士の受験資格を目指していくものは、セットでとらないと、資格条件にはつながらないよという警告をここでちょっと出しております。そして前期の授業計画としては、社会福祉諸制度とソーシャルワークの関係、それからソーシャルワークの伝統的な6領域と社会福祉固有の専門技術、社会福祉系の専門分野における専門性、専門職の各種専門性、社会福祉現場と各種専門職の関係、それからソーシャルワークの6領域というのは、1940年代にアメリカで完成されてきたひとつの枠組みで、その後アメリカ自体も随分と中身が様変わりをしておりますから、日本の場合は、伝統的な教育では6領域を前提に紹介するのだけれども、今のアメリカでは少し方向や流れが変わってますよということで、5番目、最近のアメリカにおけるソーシャルワークの動向、最近の福祉の動向と利用者の人権尊重、権利擁護、自己決定の尊重の問題ということで、これは平成の12年に立ち上がってきた、新法「社会福祉法」、その枠の中で専門家たちが基本的に持たなければならない理念としてこういう

ものが新しく含まれてきてますよという話を一部入れていく。それから、そういうひとつの流れの中で、8 番目が、求められる福祉施設及び福祉専門職の意識改革ということで、画一的なサービスを提供していく時代ではなくして、個々の利用者さんのニーズに合ったサービスの提供や応対をしていくようなものが要求されていく時代だということで前期を流していく。
それから、やがて「援助技術論Ⅱ」の領域になってまいりますと、具体的にソーシャルワークの個別分野においてを、お話をさせていただくというところで、実は、特に固有の専門技術のケースワーク、グループワーク、コミュニティワークなんかの基本的な原理と過程ですね、こういったところを紹介するところで、だいたい 1 年が終わっていくということになっております。
そして、実はその後に 3 年生になりまして、右の方の資料になります。3 年生になりまして、「社会福祉援助技術演習Ⅰ」というのがスタートしていきます。これは演習形式ですから、セメスター形式の区分けができておりません。演習は通年科目として本学に置いておりますから、ここは演習Ⅰということで通年科目で置いております。そして、厚労省の位置づけていく指定科目の演習Ⅱに関しましては、次年度、平成 15 年からこの演習Ⅱがスタートしていくということで、初めての取り組みで、この辺のステップアップの中で演習をまた格上げしていく教育をするためにはどうすればいいかというところで、今、苦慮している段階です。
実は先生方の「社会福祉援助技術演習Ⅰ」をご覧いただきましたらですね、ここのところには、ケースワークとグループワークを中心としたところが実は書いてあるんです。これはですね、本来この枠組みのなかにこだわっていく必要はないのですが、実は、ちょうど私どもの大学が、在学生という枠組みで見ていくと、旧カリと新カリのちょうど入れ代わりの時期ということもございまして、できるだけ旧カリの授業で落した者が再履修をしていく時に、新カリの科目を履修しないといけない。だけども、単位の読み替えがきくところで 2、3 年の過渡的な措置として配慮しているのですが、この「援助技術演習Ⅰ」は、そういったことで従来型の各論Ⅰにあたっていく領域なのです。これはケースワークとグループワークをセットにしたものを各論Ⅰにしなさい、それと、コミュニティワークと福祉調査をセットしたものを各論Ⅱにしなさいという旧来型がございましたが、そこのところで、ひとつの過渡的な期間を乗り切っていこ

うということで、その辺の抱き合わせを考えております。けれども、科目名称が演習ということになりましたから、学習の主導権を学生の側に渡していくようなスタイルの教育も、この中に4割程度入れ込んでいくというような方法で現在のところやっております。
ここには授業内容としては、「社会福祉援助技術現場演習Ⅰ」は、「社会福祉援助技術論Ⅰ」の（？）基礎として成り立つもので、受講にあたっては前年度までのこういう科目を受講しておくことが望ましい。そして、未修得の者は基礎からやっていきなさい、強制ではないけれども流れが掴めなくなりますよということを強調致しまして、それから、次の段落、1年間の演習ではソーシャルワーク分野の中で、ソーシャルケースワーク（個別援助技術）、ソーシャルグループワーク（集団援助技術）の分野を専門的に展開する。二つの実践論分野とケースワーカーの援助があってクライエントがどのように変化していくのか、あるいはグループワーカーの介入によって、グループが如何なる成長を遂げていくのか、その力動的な過程というものを詳細に見ていきたい。
第3段目が、演習の内容によっては、臨床の向上のための特殊訓練がある。これはロールプレイをだいたい想定しています。この場合は、訓練の進行上、遅刻者は一切入室できないし、途中退席も認められない。実は、相当数の学生がおりましたらですね、けっこういい加減な学生もいるし、圧倒的多数がまじめなのですが、実は、言ってもいっても分からない学生さんも若干名おりまして、そのへんの警告の意味でちょっと書かせていただいております。そして、授業計画としては、ケースワークの事例分析、面接技法の紹介と紙上訓練、事例を通してソーシャルワーカーの諸問題を考えるということで、これも事例編、公的扶助ケースワークの事例、ロールプレイによる応答能力の点検とスーパービジョン、ケースワークの諸過程、医学モデルから生活モデルの方向へと変わりつつあること。それから、やがてこれが1セット終わった頃に今度はグループワークの事例分析、講義と討議を中心とします。
8番目は、グループワークの機能構造の理解、体験学習、討議、講義をおこないます。この体験学習というのは、アメリカで開発されたプログラムがありましてですね、1950年代にグループ体験学習という集中的集団体系の学習スタイルが日本に入ってきて、いろんな学習の方法があるのですが、ゲーム感覚でグループである作業を達成することによってグループがどういう力を発揮していくことがで

きるかというような、行動科学的な集団理解の方法を取り入れたものがあるのです。このさわりの部分、これはですね、本格的なものは、実は合宿方式でしかできませんから、90分の時間枠の中で済むような、ほんのさわりの部分を入れておりまして、グループを媒介にして人間が成長するというのはどういうことなのかということを理解していくようなものを、一角ですね、入れていくということをやっております。実は、本格的なものは、福祉の現場はだいぶん20年くらい遅れているな、という気がするのですが、これを本格的に導入しているのは、日本の看護界です。ですから時々は、Kの日赤の看護研修なんかでも、3日間、現職の看護婦さんたちを30名近く缶詰めにして、研修センターの缶詰め状況の中で、朝の9時から夜の9時まで、この辺の集中訓練をしていくのがあるのですが、実は、大学ではその一角だけをですね、授業の枠の中に入れていく予定を立てているわけです。そして、その後に両者の代表的な学説の紹介ということで、ケースワークとグループに関するいろんな学説を簡単に紹介していくような手立てを一応講じていっているということで、これはですね、実は現在ちょうど秋場の講義の進行の途上のところです。

それでですね、この演習Ⅰという名称の中で、Mなりにどういう資料を用いた授業を展開しているかということを、次のページ以降で紹介させていただこうと思いますが、実はちょうど1年生の時の援助技術論のⅠⅡ、いわゆる通年型のところで、原理とか過程の領域の原則的な話を一応終了している、そういう前提で、実は2年次になりましたら、いきなり最初の授業から具体的な事例を出しながら、ワーカーがどういう面接過程の中で介入をすることによって、クライエントがどう変化しつづけていくのか、メカニズムの紹介というのを入れていきます。これは、だいたいですね、これを全部使っているのじゃないかと思うのですが、非常に2枚半にわたっていく資料の中に、人が一つの環境を通して、人間が変化していくメカニズムが非常に分りやすいんですね。これをだいたい私は7時間くらいの時間をかけて、実際の福祉の臨床の世界のクライエント状況、何かトラブルが起こることなんかの世間話を交えながら、じっくりと時間をかけて、環境を通して人間が変化していく世界や、そこの中に見えてくる相談面接の技術や技法などの話をだいたい続けていっております。それからケースワークの過程の話しなんかもこの枠組みの中に当てはめて紹介していくのですが、診断学派の過程とここ

でいうケースワークの過程と何がどう違うかという話もちょっとさせていったことあります。これがだいたい終わりましたら、この事例の最後の、ボールペンで書いております、3 ページという後ろのところを開けていただければと思うのですが、ここのところにちょっと殴り書きをしたところがございまして、環境を通して、ちょうどこの OM ケースの最後のところですね。環境を通して人間が変化する世界をこういう事例によって論じた後に、伝統的なソーシャルケースワークを活用する分野の中で、多様な問題を抱えてる分野として、特に公的扶助ケースワークの世界がありますよ、ということで話をふっていきまして、そして、昔、今一緒のＴ先生たちと立ち上げていった「ソーシャルワークを考える」という出版物があるのですが、本としては古いのですが、僕はあそこの事例がちょっと捨て難くてですね、「ソーシャルワークを考える」の中に、生活保護の実は事例があるんです。あの事例のところにふっていきながらですね、公的扶助ケースワークの中でワーカーが、保護受給世帯の一つの利用者を支援するということはどういうことであるかということの支援関係をずっとテキストに目を通しながら分析をいれていくと。ただしですね、当然この公的扶助ケースワークというものは、生活保護法という法の枠組みの中で運用されているわけですから、やはり、生活保護の法の枠組みを知らないと理解できない。ですからこれもですね、ではどの程度生活保護法を知ってるかと授業中、学生たちに問いかけながら進めていくのですが、実はほとんど学生たちが理解しておりません。ですから 1 時間くらいの時間の枠をとって、そしてまず生活保護法の法の体系をちょっと説明して、そこからその制度に魂を入れていく公的扶助ワーカーのひとつの役割ということで、事例の方に話を持っていくような、そういう教育をしております。

それが終わりまして、今度は、次のボールペンで書かれた 4 というところをご覧いただければと思うのですが、そこでですね、利用者支援というのは当然いろんな福祉の諸制度に対する理解を置かなければならない。それと同時にもう一方では、利用者と呼ばれる人たちの心の状態を受けとめていく感受性といったものがなければ、この利用者支援はできないのですよ。そこで利用者さんの心の状態を受けとめていくひとつの専門的なコミュニケーションとして、いろんな面接の技術や技法があるのだけれども、実はその中で感情を受けとめた切り返しをしていくことが面接関係の核になっていくとい

う方向に話をふっていきます。そしてそこでですね、実はこの「感情の反映」を学んでいくということで、中級コースと書いているのですけど、これは社会福祉士の養成講座でもやったことだったのですが、ここはちょうどカッコのところがクライエントのしぐさが出ているところです。うなだれて、少し眉間にシワを寄せながら、そして、出す言葉としては、ここはカギカッコですが、友だちと旅行にいく計画をしていたのですが、出張ついでに父が私のアパートに来るというのです。昨日、留守番電話に入っていました。ということで、しぐさまでは、うなだれて少し眉間にシワを寄せて、言葉としてはこういう言葉を出したと。そうすると皆さん方はソーシャルワーカーとして目の前に座っている臨床家ですよと。そのクライエントの言葉に対して感情を受けとめた切り返しをするとどういう切り返しができるかということで、まず受講している学生個人個人に書かせて、4ー5名ずつのグループを作らせて、グループで自分達で最高のあるいは理想的な切り返しだということを絞り込んでごらんと。そしてその後にグループ代表に報告をさせながら、教壇に立っている私が、本来の理想はこうあるべきではないかと、応答関係のひとつの紹介をしていくということをだいたいやっております。
実は中級と書いておりますのは、実は裏話をするようなものですが、実は初級コースがあるんです。これをちょっとお配りします。
今、お配りしたのが初級コースでして、実は2年生の「援助技術論」という講義系の枠の中に入れてあるのです。例えば、ケースワークの原理の中でバイスティックの7原則あたりから登場してきますが、僕自身の臨床の経験も絡ませながら、この7原則のひとつの奥深さというものをじっくり時間をかけて説明していきつつ、もう一方では、実はそれだけ覚えたってダメなんですよと。臨床の世界では使い物になりませんと。7原則というのは、利用者を信用していく専門家たちが内面に秘めていく心の戒めみたいなものであって、これを実際に現場で活かしていくということは、その瞬間瞬間の利用者やクライエントの状況に対して、どういう専門的な言葉の投げかけができるかというそういうコミュニケーション能力というものが次の段階は問われていくのですよと。では諸君たち、コミュニケーション能力を今から点検していってみましょうかということで、実はそこからですね、2年生の一般の授業の中でやっていくやつなのですが、実はですね、例えばここに一番最初、問題1、言葉かけによって、相手に与える意味や影響を分かるということで、2年生の時

のケースワークの中のバイスティックの７原則が終わった後に講義の中で少し練習問題をさせていくやつがある。
「考えても何だかくだらないことばかりに思います。この世の中で何か欲しいなんて考えるのが無理ではありませんか先生」と言葉を出した。皆さん方は臨床家だ。どういう切り返しをするか。そして７つの例題があげているのですが、実は７つの例は全部ダメな例を挙げてあるのですね。そこでオチをちょっと入れます。皆ここに該当する人があったら手を挙げてごらんというと、ここで全員がひっかかって手を挙げるのですが、実は理想的な応答というのは違うんだよということで、ではこの７つが何故違うか何故問題であるかといったところの一つ一つの検証をしていくわけです。そんなことは考えない方がイイですよということは、相手のもつ心理的事実を全面的に否定した言い方なんだということで、ずっとこれを点検して紹介する。
そしてまたその後に、特殊な応答のあり方の一部を理解するということで、これは、長くクライエントと継続面接を展開していると、クライエントが臨床家に特殊な関心や感情を持ちはじめてくることがある。こうした時に出てくる言葉、「先生はビートルズが好きですか」、「先生はスポーツがすきですか」とか、こういう例を挙げて、そしてここでも理想的な応答や切り返しはどうしたらよいか、といったひとつの言葉かけとか、コミュニケーションのひとつの出し方とか有り様というものを学生に理解してもらう。
その後の「沈黙」というところも、ひとつの山場でございまして、ここは「援助技術論」の授業の中でも学生たちに考えてもらう時間を、とにかく知恵と脳味噌を振り絞ってごらんということで、実際、相談面接過程の中で、沈黙が出てきた時に、皆さん方が臨床家だったら、この沈黙というのはどういう形で解消していったらいいか。自分を臨床家としてイメージしなさいと。２人きりの防音装置の施された部屋にいて、そして自分と相手と面接していて、相手との会話が途切れる。そうするとシーンとした緊迫感がただよっていくことをイメージしながら、この沈黙が生じた時にどうしたらよいかというナゾを解いて下さいということで１時間程の時間を差し上げます。そしてここでも、一般のテキストには、沈黙の時には慌てず騒がず黙っていればいつかクライエントが話してくれますよといったことが、一般的なテキストに書いてあるのですが、ちょっと僕もチャチを入れまして、それでは深みがないと。実は「沈黙」というの

はもっと深みがあるのだと、1 時間くらい、実はその後に学生たちの代表の発表を 2、3 本いただいたあとに、1 時間くらい時間をかけて、この「沈黙」の心の世界を、ちょっとカッコつけて説明することにしているのです。
それが終わりましたら、今度は初級コースというのがあり、感情の反映の初級コースでありまして、ここに例題が 1 から 5 まで作ってございますけども、これは何故初級コースかといいますと、クライエントの話し言葉の中にクライエントの感情が非常に強くこもった部分が入っているのです。それだけを抜いて切り返しをすると、面接上は形式的に感情の反映技法になるのです。こういうのを初級コースとしてちょっと紹介しております。ですから、やがて彼らの今の 2 年次の一般講義の中で行われていく初級コースの教材を通した学習が終わったあとの演習のところでは、しぐさが入る中級コースなんかを出しまして、そこで少し専門的な講義をしています。
そのあとに、6、7、8、9 を見ていただければと思うのですが、この 6、7、8、9 はですね実は昔、実際にＫで起きた出来事の事例です。以下、一部省略。ですから何回も研究会をしながら、基礎資料は膨大な資料があるのですが、これを、400 字 50 枚くらいの資料としてまとめたのですが、これを 1 時間くらいかかって、読み合わせにちょっと時間がかかります。それからちょっと肉付けした説明もしていきます。そしてこれを学生達に出しまして、皆さん方がソーシャルワーカーであるという前提に立って、この事例の流れに目を向けていただきながら、ワーカーの対応のどこがいいか、どこに問題を感じるか、問題を感じるところがあれば、自分がその場にいたワーカーであるという前提に立って、どういう対応をすべきであったか、それを事例の中から全部切り刻んで欲しいということの話を致します。
だいたいそれに 1 時間くらいの枠をやるのですが、翌週からはグループ代表 2、3 名くらいにまた発表してもらって、それから他の学生たちから意見を聞いて、最終的にはＭなりの考え方を少しそこの中で出させてもらうということをやっております。
9 ページを見ていただきますと、ちょうどソーシャルワーカーをめぐる諸問題の事例がここで終わっているのですが、実際に書いた原稿はその後のところにＭの分析がずっと続いているのですが、セットにした資料を出しましたら学生が分析だけに先に目を向けて、自分達で考えることをしませんので、学生向けの講義資料は、事例の

領域だけで一応とどめて、そしてソーシャルワーカーとしての資質の向上を図っていくような教育養成をやっております。以下、一部省略。

そして、それが終わった後に、10枚目の資料になります。これが事例として使っていくものなのですが、これは実際に昔、私どもの大学の学生たちに、10分間の模擬面接をやらせたものです。それを私が自宅に持ち帰って、一字一句残さずに掘り起こした逐語記録です。ですからちょうどコミュニケーションのキャッチボールをしながら、面接というのは、利用者さんの心の状態を受けとめていくことが重要なのです。そこでこの10分間の逐語記録に目を通して、はたして自分がワーカーだったら、ワーカー・クライエント間のコミュニケーションに目を通しながら、ワーカーの言葉かけのいいところ、問題があるところ、問題があるところに対しては、自分がワーカーだったら、どういう切り返しの言葉に変えていくか、それをひとつひとつ点検していきなさいということを言います。これも個人個人でまず考えさせて、あと各グループで報告させるのですけど、最後のオチがあるのは、これはざっとながめていくと、潤沢なコミュニケーションのキャッチボールが行われているような感じがするのですが、ひとつひとつ専門的な点検をしていくと、これは100%問題だらけなのです。ですからそこに問題提起を致しまして、この中には、最近ソーシャルワークの技法の説明に、「開かれた質問」とか「閉ざされた質問」とかが出てきますが、全てその技法文がこの中に入っているのです。そういう中で、逐語記録を通して具体的な応答関係の中味の学びを深めていくこともやっております。
これが終わった後に、授業の流れとしては、実際に受講生をワーカー・クライエント関係のペアにして、まわりに4、5名の観察者を置くようなグループをつくって、ロールプレーを実施していくような方向で演習Ⅰの領域を今実動させている段階です。それからどうも見て行きますと、これは本学の事情なんですが、3年生の時点で今回、秋場に実習が2週間ございましたので、講義を実習期間中、進行させることができませんで、ちょっと進行が遅れまして、実はシラバスではグループワークまでいきますよと書いてあるのですが、どうもグループワークまで入って行けそうにない。ただ予定では「ソーシャルワークを考える」という出版物の中に、グループワークの事例がございますので、そこのところを事例として活用するという

ところで、私自身も授業を続けている段階でございます。
それともうひとつは、今後どうするのかということで、演習Ⅱというのは、おそらくどこの大学でも次年度以降の方法ではないかな？T先生どうですか？演習Ⅱというのはもうやっているところもあるのでしょうか？

T：うちはやっていますね。

M：やっていますか？そうですか。うちの大学では4年生においていますから、次年度以降という方向になってくるのですけど。

T：たぶん、集中でやっていると思います。

M：そうですか。これはですね、実は今まで総論があって各論Ⅰ・Ⅱがあって、そこに演習がありましたが、旧来型の演習を担当していた時の資料なのです。これはですね、最初、教材の開発をして行く時に、日本福祉士会とかいうところが事例問題集を出しているのですが、だいたい見開きの2ページくらいで、その利用者さんの人生状況から、既往歴から、またどういうサービスを組み立てて行くかということがたった2ページだけで固まっている。どうも学生に教育をして行く時にはそれだけではちょっと不足しているような感じがするわけです。私などが学生によく言うのは、例えば、実際に現場で忙しい中でいろんな記録を残して行かなければならないから、その回の記録はポイントポイントで終わってしまう。けれど君たちはまだ学生なんだ。学生なんだから、現場の人間が忙しい中で次から次にケースをこなしている以外のところで、ひとりの利用者さんやケースに接触しながらじっくりとその人の生きてきた人生の経験や過程というものを知ることができる。だから、最初に利用者を理解する時には、片手間な事例を持ってきて、ああです、こうですといってコピーとったものの発表は僕は一切認めない。だからですね、今までやっていたのは、学生を6、7名のグループ分けをして、そして、熊本管内の今、福祉支援を受けている人と接触しなさい。それがいなければ、過去、福祉支援を受けた人たちに接触しなさい。そして接触をして、その人の生きてきた人生の経験や体験の世界に耳を傾けさせてもらいなさい。ただしその時には、今まで授業で学んだことを全部活かさないといけませんよ。相手の感情を害するような言い方をして行くと関係は遮断されるし、大学の問題になってくるし、やはり授業で学んできたケースワーク的言葉かけもふんだんに使いながら、これは授業で単位を取るだけではないのです。利用者さんからいろいろなことを学ぶことによって福祉の専門家の生き

方やあるいはあり方を学ぶことができるということで接触をして、自分たちで事例を作りなさいとやっていたのです。これがですね、実は段ボール箱に4箱くらいあるのですが、今日はその一部しか持って来れませんでした。そしてこれはグループが発表したものなのですが、「介護保険導入前後の変化」ということで、これもある利用者さんに接触を致しまして、自分たちでインタビューしながら事例を作っていった。そして介護保険を受ける前には、行政派遣のヘルパーが無償サービスでいろんなことをやって、やがて介護保険後にはどういうサービスが受けれるようになって、そこで利用者さんの気持ちとしては、はたしてそれがよかったかどうかということですね。だいたいこれだけで60枚あります。以前、旧来の科目領域の演習でやっておりましたのは、各グループごとの質疑応答の時間が90分です。ちょうど授業のひとコマ分です。チャイムが鳴ると同時に開始します。そしてだいたい1時間くらい発表して、残り30分を聞いている側から質疑応答です。例えばこれは介護保険にからむ領域の比較ですから、事例が出てくる以外のところで、制度の活用の仕方とか、介護保険の中で85項目のチェックの仕方はどうしていくのかとか、グループはこと細かなデータを挙げていくのです。ですから、利用者さんの人生史だけを書いている資料ではございません。介護に関わる全ての資料がここに書かれてあって、聞いてる側というのは、自分たちは障害問題をやった。すると、介護の話を聞く時には、そこに集中して聞き耳を立てながら、その発表グループの中味を自分自身のものにしていきなさいというふうにやっていきます。ですから、ちょっと厳しいこともやりました。実は当初グループから質問が出ない時には、全部僕が命がけで質問をしておりました。そしてリズムが出ましたら、学生自ら全部こなしていくことになるのです。こうした中で今までは学生自ら利用者さんに直接接触させて、学生自ら作らせて、文章の書き方とか表現の仕方、それから聞いたものを客観的にしかもいきいきと読み手に伝えて行くにはどうしたらよいかというところで随分と苦労してまいりました。できれば、これは旧来型の授業でやっていたのですが、私どもの大学では「援助技術演習Ⅱ」が4年次にありますので、今度、Mが担当していくところも、こういう書式を活かせていければという気持ちを持っております。ですから今までは学生たちが立ち上げたので100種類くらいあります。これ自体ももう少し専門的な目で圧縮して組み立てていくと、相当にいい事例が100本近くのいろんな違う事例が

出てくるのではないかと思うのですが、この方式を、例えば新カリの「援助技術演習Ⅱ」のところでどう持ち込んでいくかということを僕の課題にしています。ただひとつ心配なのは、これきついんですね。２人（記録者のこと）も昔とったのです。おそらく発表前は夜も眠れなかっただろうと思いますし、手抜きだらけの発表にはビシビシ質問が飛んできますし、答えきれなかったら次回までに調べておけと言われます。皆命がけでこれをやっていまして、要所要所のものは新聞社が聞きに来まして、いくつか新聞の記事になっていたものもございます。

今までMが 100 人を取りしきっていましたので、通常の１年間で終わらなかったのです。終わらない時には土曜日や休日の朝９時から夕方５時まで学生は皆文句も言わずに出ていました。今度はもうちょっと少人数化したところで他の先生も担当することになっているのです。そうするとあまりにきつい課題を出すと避ける学生もでてきて、Mの授業は受講生ゼロということも出てくるかなというような、そういう感じを持っております。私が今やっている範囲で、具体的にどういうことをやっているかということの中味まで出してくれということでしたので、一応これだけの資料を準備させていただきました。すみません。長々と話を致しました。ちょっとご覧になって下さい。クリップで閉じてあるのがセットになります。

知的障害の関係では、「親の会」の団体に学生たちが接触して、利用者さんを紹介してもらって随分詳しい掘り込みをして事例を作ったのですが、団体の人たちが感動して、自分たちも知らないことがたくさん書いてあるということで、学生たちが発表したことが、実は、先日一冊の本になりました。

Ｋ：どのくらいの期間ですか？

Ｍ：１年間です。最初はまず各自どういうことに関心があるか課題を出して、そしてグループ分けをして、このグループも最初は大きなグループです。それから６名前後の小グループに分割をしていきます。ただ中にはグループの中でお互いに協力し合っていくという関係の調整ができないものがいたり、ある特定の人間だけに依存して手抜きだらけのものがいたり、そういうものは遠慮なくMに連絡させている。そしてだいたい半年間がグループづくりです。それから各グループに僕が入り、とっぴょうしもないような研究の方向を出すところがありますので、入り込んでコントロールや提案をして研究の軌道修正をしていきます。そしてだいたい夏休みまでのあいだ

に研究の基礎的方向づけができあがります。そして夏休み期間中にほとんど休みなく学生たちがあちこちの現場を回りながら動いています。特に二部生は夏休みしか動くことができませんから、夏休みに本格的な調べものをしていく山場を作るようにしております。後期の一回目は発表のための微調整をするくらいで、次の回からは本格的な発表をやっております。
ある学生は、ここから3時間くらいかかるところに牛深というところがあるのですが、そこの利用者さんが、君たちの勉強になるのだったらいいよということで、グループでヒマを見つけて何回も何回も行くのですが、在宅の寝たきりの方でしたけど、実際に聞きに行くだけではなく、食事を作ったり、一緒に飲んだり、世間話をして応援して、そうしたら相手が喜んでいろんな話をしてくれる。ただし事例としてまとめるときは、守秘義務上の問題だから、特定の地域とか名前がわかるような書き方はやめていきなさいということで、こちら側がちょっと事前点検をしまして、発表という形に持ち込んでいきます。利用者さんから受け入れられた学生さんたちは、発表が終わった後も接触を続けていきたいということで、3か月に一度は訪ねていくとか電話をするとか、こういう接触を卒業まで続けている学生さんもいます。
先生によっていろんなスタイルがあるのかもしれませんが、これが私が今まで立ち上げてきました一つの方法でございます。実はこれも一番代表的なものを（？）をとろうかと思ったのですが、一部だけでも60枚もあるものですから、専門的につめていく時に後でコピーでもと思いましたけれども、さしあたって本日は見本を持ってきたということでおさえさせていただきました。
これが例えば私がやっている教科書の問題ですとか文献資料とか、それからビデオなども、アレンアイビーの「マイクロカウンセリング」というビデオを、応答関係の分析が終わった後に見せたり、その合間合間にビデオを止めて分析も入れます。でも英語が日本語訳してあり、訳が硬いところがありまして、日本のスタイルで見ていくとあの言葉かけが馴染まないなというところがあり、ここは、私は疑問に感じる、という所もテープだけに頼らず止めて、学生にも聞いたり私なりの考えを言ったりしています。こういうふうにビデオなどを利用しているところもあります。すみません、ひとりでしゃべりまして。
では、つぎにN先生お願いできますか？

N：はい。貴重なお話しをありがとうございました。
私の所属しておりますD大学は、4年目という新設校で、矛盾を抱えながらやっている現状です。資料をお配りしておりますが、きていないでしょうか？
M：ちょっと休憩入れなくていいですか？
5分程度休憩しましょう。
＜休憩＞
N：本学は平成11年に開設致しました。私は平成11年から入職しておりますけれども、現在1期生が4年生です。この4年間のカリキュラムにつきましては、平成10年に、現在学科長でおります（？）先生を中心に作られたものなんです。文部科学省からのシバリというのがございまして、4年間大幅なカリキュラムの変更ができませんでした。したがって非常に矛盾を感じながらとりあえず4年間このカリキュラムで続けてきたというところです。来年、平成15年度から大幅にカリキュラムが変わります。まだ認可のＯＫがいただいてませんので、本日ちょっと持って来れませんでした。ですので資料は旧カリキュラムということですのでご理解いただきたいと思います。
まず資料の1ページ目ですけれども、ご覧いただけますでしょうか。第1点のカリキュラム全体の中での援助技術演習の位置づけということですけども、これは先日社養協で出しました学科の紹介ですけども、この⑤のところですね。見ていただけますでしょうか。養成教育の特徴というところですけども、福祉への学びには、知性や判断力に裏付けられた豊かな感性と情熱が求められる。本学科の特徴は、人間福祉学科となっておりますので、必ずしも社会福祉（？）だけではないのですね。人間や社会について多角的に学ぶ基礎科目がおいてあります。その上に社会福祉についての専門的科目がおいてありまして、学習を積み重ねていくということになっております。特にソーシャルワーク専門職養成につきましては、地域の福祉現場と教育側の連携を重視しながら援助技術教育全体を展開しているという特徴があります。
⑨をご覧下さい。と言いますのは、教員は多彩な顔ぶれですけども、社会福祉士資格取得専任教員が6人おります。現場における臨床実践経験豊富な教員もおりますので、授業は講義の他、演習形式も取り入れ、これは1年次から1、2、3、4年にわたっておりますけれど、学生個々のニーズに応じた多面的な就学支援をおこなっております。

めくっていただきまして、援助技術演習のシラバスをということなので、演習のシラバスのみ持ってまいりました。まず授業科目ですけども、「ケースワークⅡ」という科目ですね。これが、社会福祉援助技術演習の読み替えになっております。私と司法ソーシャルワークのご専門でいらっしゃるW先生という方が担当しております。W先生は九州の家裁の調査官のパイオニアのひとりであったと聞いております。学生は定員150名ですので50ずつ3クラスですね。W先生が2クラス、Nが1クラスです。内容ですけどもシラバスの関係で細かくは書いておりませんが、まずこれは3年生の後期の授業ですね。ここではジェネリックな援助技術について学ばせております。具体的には、コミュニケーションスキル、それから面接スキルですね、面接につきましては、援助技術の中央法規から出ております福祉士養成のテキストでしょうか、8巻か9巻ございますけど、そこにあまりのってないように思いますので、昔の社会福祉の教育では面接が中心だったと思いますが、これが基本中の基本だと思って、少し時間を使っております。3回ほど使っております。具体的には、前期に理論学習しておりますので、後期のこの演習ですべて実践させるということです。クライエント役とワーカー役とオブザーバー役と、3人で1グループ作っていただき、約10分間、皆に話してもいいよという問題をクライエントさんは考えてもらって、そして10分間模擬面接をしております。(?)どなたかそれぞれから感想を出してもらうということになっております。この時に、実際の机だとかイスだとか、そういった場面設定についてもいろいろなやり方でいただきます。生活場面面接の場合、例えば学校の中庭でやらせたり、(?)の中でやったり、面接室でやったりということで、状況をいくつか体験させております。

次に、観察のスキルですね。観察のスキルについては、クライエントさんの観察がテキスト等では中心になっているようですけども、それだけではなくて、ワーカーの自己観察、具体的には、ワーカー・クライエント関係の中でのワーカーの逆転移の自己理解、それからその使い方、そういたことまでできればと思ってやっておりますが、学生は首をかしげております。「逆転移って何」というところから説明するのに本当に四苦八苦しております。特に心的外傷のクライエントさんも、今後、虐待問題等で増えてくると思うので、この逆転移の問題を軽く見てはいけないな、と認識しております。勉強しながらやっております。

それから、もうひとつは社会環境面の観察というのを意識的にやっております。その他、記録の技法ですね。記録技法に関しては実際に圧縮記録上述体（？）、要約体、説明体という基本中の基本の3つの記録スタイルで事例の一部分をまとめるようにということでやっております。それから、実際の実践の中で記録ということが如何に重要かということを理解してもらうために90分使っております。これは資料としましては、E先生（？）の「個人ホーム、職員のために書かれました処遇と記録」というテキスト、1冊全部を読み込む形でやっております。
次が事例研究ですね。具体的な援助の展開過程で、本から出されている7つの援助の展開過程に沿って事例を見ていくということをやってみております。また、実際の現場では、7つの展開過程を意識して必ずしもやれるとは言えないという状況の中で、今後の課題であると伝えながらやっております。
それで、右側ですけども、今度は人間福祉（？）と書いてありますが、これは3年の前期のやはり援助技術演習の読み替えの科目です。3年前期です。そこに担当教員の名前が挙がっておりますが、複数の教員が担当しております。
本学は教員が14名おりますけど、簡単にいいますと半分がですね、援助技術を持つことが可能な教員、半分が2つの学問研究分野の先生、社会学ですとか、環境学の先生ですとか、そういった構成ですので、すべての先生で援助技術演習を持てれば理想的なんですが、それが叶いません。ですので、援助技術演習を持てる先生は、それを意識した展開をしていただき、持てない先生に関しましては、人権尊重と自立支援、権利擁護ということを意識した教育内容ということで、あとは教員にお任せしております。ここに細かいことは書いておりません。
めくっていただきまして、次のページの左側、これは援助技術（？）で、同じ3年の後期です。内容は同じです。そして右ページ、「ソーシャルワーク演習」ですけど、これは4年の前期ですね。ここではスペシフィックな援助技術ということを意識した演習展開をしております。学生25名を1グループとしまして、教員が6名ですね。となりますと、1回のケースワークの時間が、（？）2回なんですね。分かります？児童ケースワークという演習が2回、次の高齢ケースワークが2回ということになっていますので、あまり深められない問題があるので、ちょっとこれは来年次以降は見直していきたいと

思っております。具体的な事例研究を中心にして、ロールプレーなどを入れながら援助技術の総括をするという時間にしております。学生はこれは総当たりですので、全部やることになるんですね。どれかひとつというわけではございません。総当たりです。そして全部レポートですので、かなりこの時間は厳しいようです。出席してないと落ちます。ということです。以上が、援助技術演習のシラバスの説明です。

2 点目の実習との関係ということですけど、もう一つの資料をご覧いただけますでしょうか。本学の演習と実習というのは非常に密接なつながりがあります。現場出身の教員が何人かおりますので、現場との関係が深いということもあろうかと思いますけども、学生には、いわゆるきれいごとの実習に終わるのではなくて、現場の問題性についても現実から学び、そして課題解決につなげていくようにと指導しております。自分なりの意見を持つことが求められるというふうに伝えております。

N：実習というプロセスを通じて実は、大学と、それから現場と、学生ということで、問題や課題を共有して、実は現場の実践間の援助技術のレベルを上げていきたいという裏の意図があります。そんなふうに言うと不遜なんですけども、実際に学生を現場に出しますと、「ソーシャルワークなんか何もやってなかった」とか、ご存じの状況がありまして、学生はまったく別人になって戻ってくるんですね。「先生、先生が言ったことは全部アメリカの話でした。」とか「理想なんですよね。」ということで、すごく（？）に捉らわれるんですけど、そうではないんだよと。ということを伝えていくために、意図的に現場の方に大学の方から働きかけて、現場の方からもフィードバックをいただくということで、やっていこうというふうに思っております。つまり三角構造のイメージで実習展開しているということです。これはいろんな文書に書いておりませんのでここだけの話にしていただければと思います。

それで資料なんですけども、まず 1 ページ目、実習の指導体制ということで、これは一番上、トップにですね実習運営委員会というのがございまして、最高審議決定機関、ちょっと仰々しいですけども、それの左側に社会福祉実習指導室というのがひと部屋ございまして、ここに実習の担当教員と実習助手とが張り付いているような感じです。私は学科の方の授業と実習指導室とどちらも両足をかけてるような感じです。

それから右側ですけど、実は学外の講師が複数おります。そういうネットワークがございますので、話のついた講師を一番知ってると、そういうことをすべて分かっているのですね。適宜、先生たちに来ていただいて話をしてもらっております。下は、「打ち合わせ会」をおこなっているということです。
2 枚目ですけど、社会福祉実習教育の 4 年間の流れです。これは見ていただければと思います。
3 枚目ですけど、これは実習演習という科目にしておりますが、実習の事前指導に相当する科目です。ⅠとⅡ、前期・後期で 3 年生のときにやっております。実は、持って来ましたのは、社会福祉援助技術演習を意識して実習演習をおこなっておりますので持ってまいりました。先ほど見ていただいて分かるように、あれだけでは援助技術演習としては物足りないのでこの時間などでカバーしている状況です。具体的には、観察の記録の書き方、面接の仕方などをこの時間にしております。めくっていただきまして、これは実習計画書です。左側は実習にいく前に各自が書く課題です。右側がその具体的な課題を展開する学習方法ということで 7 つの柱を立てております。最後は「その他」で、自由に好きなことをミニ課題にしなさいということで書かせております。
最後は、4 年間の社会福祉実習教育課程および援助技術教育課程をミックスしたスケジュール表です。参考までに付けております。
それで、ひとことで本学の社会福祉援助技術および実習教育の目指しているところは何かということをお話ししますと、真にクライエントさんの問題解決に役に立つワーカーを養成したい、ただそれだけなのです。いくらきめ細かい実習指導や演習指導をしても、実際にワーカーになる人は、まだ 4 年生でいませんけど、ごく一部でしょうし、そのワーカーたちが本当にクライエントさんの役に立つのかということになると、自信のないのが正直なところです。何か見てると、資格を取るのは誰のためなのかな、と、学生が仕事を得るためのものになっているのではないかと疑問に思っておりますので、エネルギーをかければかけるほど、クライエントのことを考えると矛盾に陥っております。それで、実際には、学生の中に本気でプロになりたいという人もいれば、資格だけもらえればいいよという人もおりますし、いいかげんな学生もおりますので、どのあたりに焦点を当てて、援助技術教育を頑張っていけばいいのかがまだ分かりません。教員の中でも温度差がありまして、実はまとまっていない

のです。いろいろとご指導をいただきながらやっていきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

M：ありがとうございました。T先生、TR先生、何かございませんか？

TR：私は援助技術を担当しておりませんので、勉強させていただいております。

T：今日は資料を持ってきておりませんが、説明させていただきます。ここ数年、援助技術演習から退いておりましたが、事情があって今年担当することになりまして、うちの大学の特徴として現場の実践者と大学の教員が対になって半年ずつを受け持ちながら、1クラスを受け持っていくというプログラムです。私自身の援助技術演習の考えなんですが、1つは実践理論学会の中でソーシャルワークの理論研究というのがありまして、そのときのフリーアンサーをまとめたんですが、現場教育と大学教育との乖離状態があって、ソーシャルワークなんて言葉を知らなくとも現場はやれるんだという話もあれば色んな立場からの回答があって、調査そのものに対してずいぶん批判的な意見があったんですが、非常に残念だったのは大学教育を否定した面からある意味現場教育が始まるようなそういうことさえあるんですね。それを例えば現場実習から帰ってきた学生の反応を見るとまさにそんなわけで、ソーシャルワークより運転免許があるほうが大事だという反応なんですね。そして、介護の技術がないと話にならない。だから特に介護なんかは学生が敗北感を感じて帰ってくることが多い。専門学校の学生の方がはるかにいいわけです。ところが「さすがにソーシャルワークやってる学生ですね」という援助もなかにはあるんですね。例えば実習で、老人ホームで実習でそこでグループワークと称してある活動をしていて、お年寄りに花をいけさせていて、最後どうするかというと先生がきて全部やり直して、受付なんかに飾るんですね。要するにプログラムとして行われていて、その時に学生が「これはグループワークじゃない」と疑問をもって実習報告書いたら、さすがに園長がピンときて、要するに本人の満足度、達成度に焦点を置いてないグループ活動、それはグループワークとは言えないということで、「さすが大学で援助技術やってる学生ですね」と言われたこともあります。こういう視点がケアワークやってる中でも実はたくさんあるなと感じてて、まさ

にソーシャルワークとケアワークの統合だとか分離だとかということに関連があるんですが、それなりに現場実習の中でのソーシャルワークの視点というのが努力すれば見出せるなとという思いもあります。ですが、もう一方では大学教育を否定したとこで現場教育が始まるというのもあって、何とかこれを乗り越えたいなというのがあって、現場の方に大学に来てもらおうという思いもあったんですね。ただし大学に来てもらう現場の先生の方にも全くソーシャルワークの視点が無いのも困るんでですね、それは力量のある先生を求めたんですが、ある意味で実験みたいなとこがあって学生には申し訳ないんですが、２年目で自分たちの持っている材料で学生たちに話し始めたんですね。僕らはなかなか現場の材料というものが持てないんでですね。どこかの借り物、輸入した領域でしか話せないとこがあって、それを現場の先生方に伝えてく、啓発していくという作業と、学生というのはこういうことを考えてて、ソーシャルワークはこうだから、じゃあこういうところで援助活動というものを教えていこうかという、そういうプログラムを今やっている段階なんですね。少しずつ成果がみえてきているようですね。現場の先生方にも参加して頂いて今後の援助技術のあり方と現場実習を考えようかなと思っています。で、実習に行って学生が「援助技術で学んだことが何も役に立ちませんでした」という言葉を毎年出てくるんですよね。そういう意味では現場実習と援助技術の連動性をもっと考えるべきで、それには実際に現場で使っている記録様式の中でその中でソーシャルワークとして生きていけるか、そういうことも考えていくべきではないかと思っています。うちの大学では新しいカリキュラムになって援助技術演習は通年で２コマになっています。時間は５、６限目という設定で２コマ続けてやることになります。これはメリットがあって、例えばビデオを見た後これを使ってどうするかとか、１時間だとどうしても短いというときがあります。でも誤算だったのが、５、６限ということでお腹がすいてしまうという点です。本来４、５限という設定にしたかったんですが、教務上そうせざるを得なかったんですね。現実的に僕自身がどういうプログラムをやっているかというと、同じようにビデオを使ったり、ロールプレイをやったり、事例を使ったりしてるんですが、最初に介護についてのビデオを使います。これは反面教師的な使い方をするんですが、それは事例やケースが成功事例だけではないんだよということを教えるために使っています。で、この事例は微妙な事例なん

ですよね。介護福祉士講座で使ってる「障害者の心理・高齢者の心理」というビデオでして、これが老人ホームの１日を描いてるんですが、ソーシャルワークの視点を持っている方が見るとこれはちょっとというビデオなんですね。お年寄りを理解してるビデオなんですけど、どんどん、どんどん遠くに行ってしまうような、共感的な姿勢というよりは評価的、客観的姿勢というお年寄りに対する描き方なんですね。最初にステレオタイプ化したお年寄りの特性が文字で説明されて、その後お年寄りが出てくるんですが、僕らとは違う世界に住んでいるんだというビデオなんですね。食事拒否の場面では、見る人が見たら老人虐待ではないかという場面でして、寮母の方が口の中に食事を押し込むというシーンがあるんですね。それを当たり前のように見る学生もいて「ケアの大事さがわかった」と感想をいう学生もいるんですね。そこに「君がそういう風に介助されたらどうするんだ」という話から、もう一度捉えなおしていく、まったく違う解釈をしていくという作業をしていくんですよね。そして最初に出てきたお年寄りの特性、疑り深くて涙もろくてということを、同じ文言で若者で作るんです。異性にすごく弱いとか、色々言えるんです。そうすると、学生はすごく反発するですよ。でもお年寄りも同じことが書いてあるじゃないかという視点で捉えて、お年寄りを個別化するという大事さというものを見せるんです。そのビデオを使って、感想を書いたり、ディスカッションしたり、あとは僕もマイクロカウンセリングのビデオを使うんですが、吹き替えで問題もあるんですが、「開かれた質問、閉ざされた質問」や「要約技法」であるとか、そういう要点はロールプレイを使うときに使っています。あまりマニアックにやると学生には難解ですが、例えば「感情の反映」のところの「複合情動」なんかに関しては非常にいいもので、あの「複合情動」みたいなものをどうにかビジュアル的に表現できないものかと思っています。なかなかいいものが無くて、僕は黒澤明の「赤ひげ」という映画を使って、赤ひげと子どもとのある意味「転移現象」に近いような医者に見せたりするものをそういう場面場面でレポートを作って「感情の反映」や「複合情動」みたいなものとかを理解できないかと思って利用しています。もっといい材料があれば使いたいと思ってるんですが。事例、ロールプレイに関しては、こちらが２、３こちらが作ったものを利用しているんですが、いつも同じストーリーなんですけど、１つは大学に入学してくる不本意入学生の事例で相談に来たという事例です。もう１

つは、卒業を控えて不安感があるのだが根本的には恋人と仕事との葛藤しているという事例です。クライエントにはクライエント情報を、ワーカーには表面的な情報を提供してやりとりさせます。その中に「開かれた質問、閉ざされた質問」なんかを取り入れていくという感じです。僕自身コミュニティや地域とか調査とかをやってきて、どうやってこれを組み込んでいくかということで苦労したんですね。今後考えていることなんですが、K市のHPの中にこれから地域福祉計画を作る地区懇談会の地域住民の意見、問題点が出ていて、ここを抽出してプランの中にどのように提言、事業目標として盛り込んでいけるかということをさせて、それを使って調査をしてその分析、集計を後期やっていこうかと思っています。うちの大学で当初援助技術演習を作っていくなかで直接援助と間接援助とを半期ずつに構成をしたんですが、ただはっきり分けることが出来ないもので、直接援助の強い教員、間接援助の強い教員というプログラムの分け方で、それと現場の先生と大学の教員がクロスオーバーしている援助技術のメニューになっております。学生は黒板に書いてあるものをノートしていくということはやりますが、実際舞台に上げようとすると全然上がってこないということがあります。そして、3年生になると急に福祉は難しくなるというふうに学生が言うんですが、それは援助技術演習みたいに自らが舞台に上がってやらなければならないということが多くなってくるからだと思いますね。それから、学生自身が課題や問題を持っている子が多いなという思いがあるので、できたら援助技術演習をしながら自分が癒されて、福祉についてのモチベーションも高めてくるようなものを求めていけたらと思っています。

M：結局大学は指定科学領域がある限りは、その道を目指すものの完成度を求めていかなければならないし、もう一方では実習というものを授業の枠組みの中で抱えていて、大学が実習の現場とどう折り合いをつけていくかというものが今後の課題でして、うちの大学でも実習の現場と微調整含めて苦労している点はありまして、学生の数が多いもので実習に出向いていく数も大変多いんですよね。その学生の数だけ実習の取り組みがありまして、色々な出来事が起こったりしています。僕らとしては国が言っている指定科目は最低限の科目でして、1つ1つの科目の中でしっかり記憶して欲しいという思いがあるんですが、より実践的なもの対人援助などに関しては実習先に出向くと使えない。だから学んでいったものに関しては、す

ぐに友人関係や人間関係を通じて確認し努力していきながら自分のものにしていってもらいたい。これを「試行ケースワーク」という形で使っていきながら友人関係の中で、１つ１つを反応を確かめて自分の物にしていきながら、試験の点数だけではだめだということを示していきたいと思います。
そして、実習先にも色んなところがありまして、いい施設もあればそうでないとこもあって、しかし学生を引き受けてもらっているからにはその関係維持のためにも教員が奔走しなければなりません。厚労省が出した指定科目領域の中で援助技術演習が強化されたのは、事例の分析やロールプレイなども含めて臨床能力を自分自身も習っていくというような教育養成を強化していきなさいという方向だと思います。そうした中に、教材をどう開発、活用、利用するかという問題が出てきます。僕自身としては、色んなビデオがあるといいなという感じがしています。「マイクロカウンセリング」や「グロリアと３人の娘たち」などがありますが、とても高価で自分では買えません。そのビデオを見せながら途中でストップさせながらコメントを入れていくと結構学習効果があがります。こういうビデオ等の開発も豊かにならないかなと感じています。そうすると授業の効率もよくなっていくんじゃないかと思います。実習の事前指導についても文字だけではなくて、ビデオなど開発していけば現場がどう動いているのか実感としてわかるんですよね。厚労省が認めている実習先のビデオが開発されたら、是非買うんですがね。業者は乗り気なんですがね。それから活字にした事例なんかは私自身がもっているものだけでは、やはり不足なんですよね。これからは地域福祉活動というものが大きな実践の理念となっていく中で、そういったものの事例も使いやすいものがあれば使ってみたいんですが。皆で共有できると思っているんですが。

Ｔ：昔学校連盟が実習用のビデオを作ったことがあるんですが、自由的交流療法と老人ホーム用と障害者施設用の３本あったんですが、また援助技術演習を受け持つのでもう一回見直したんですが、あのビデオの中にある光景は実際に特養などでは見られないんですよね。ただ視点としては、分離派なんですよ。で、もう１本の自由的交流療法は統合理論なんですよね。ですから、ビデオの中ではソーシャルワークを考える視点としてはかなり違いがあるんですよね。ただその分離する考え方も大事かなと思ってきてるのは、社会福祉士会の熊坂さん達と実習の調査をやったときに、彼ははっきり「ソーシ

ャルワークを老人ホームでやる」って言ってるんですね。「ソーシャルワークを施設でやれないのは、施設長の問題だ」と言っていまして、つまり相談に来たときに「それは生活指導員の仕事だから」と伝えておけば、お年寄りはちゃんと指導員のところに来て相談するということなんですよ。現実的にそういうことをやってないから、ソーシャルワークとケアワークが分離した形で成立し得ないんだということなんですよ。ですから、ビデオを作るときに現実を知らせるべきなのか、啓発というか、方向性としてこういう風にすべきなのか、作っていくときに考えるなと思うんですけどね。

M：やはり、理想は平均的なスタイルと特別的な取り組みなどをしているとこなんかをビデオの末端辺りで紹介していただければと思います。ビデオの開発という点で進んでるのは、看護の世界ですよね。しかしあれも大変高価でして、是非社会福祉の世界でも潤沢なモデル的なビデオ、ある時には平均的なものや理想的なものを区分けして紹介していってもいいだろうと思っています。学校連盟が「ソーシャルワークとはこういうものだ」という理想とするビデオを作ってもいいんじゃないかと思います。

T：もう一つなんですけど、事例に関してですが、今は以前に比べて事例がコンパクトにまとめられているものが多いですけど、あれに関してはどう思われますか？

M：あれは僕にとっては使いにくいんですよ。僕自身学生に先程のような大胆なことをやらせてたんですが、それをやっていく中でも学生の中で新しい人間関係が芽生えがあったりするんですよ。けども、専門家が出した手短なケースをやっていくと、これと、これと、これのサービスを利用するから、これと、これと、この情報だけあればいいということになってしまうんですよ。例えば寝たきりの方で介護サービスのメニューはこれしかないから、じゃあ身体状況も含めた情報だけでサービスを当てはめていくことになります。これでは今ある制度やサービスの中で当てはめていくだけになってしまって、利用者のニーズではこのサービスが足りないというソーシャルワーカーの重要な気付きの部分が不足してしまうんです。その利用者の生きてきた体験や生い立ちを出来るだけ細かく理解していくことが、その後の対人支援の広がりがでてくる感じがします。例えば、ある痴呆病棟で食事に来ない方がいたんですね。そこにPSWの職員がいて、彼は家族が面会に来る度に利用者の生い立ちや経歴などの聞き取りをしていたんですね。彼は周りの職員からは聞き取りばか

りしていて、利用者援助をしていないとマイナスのイメージで烙印を押されてたんですが、彼は、その利用者が昔社長をしていたという情報を家族から聞いてたもので、その PSW のアイデアで「○○さん」と呼んでいたのを「○○社長」と呼ぶことにして、食事の介助をおこなっていくようになったら食事を食べるようになったそうなんです。こんなふうに利用者の生い立ちや経歴をたくさん知っていくことで、今ある問題解決のための謎解きが出来るということを学生時代に学んでいくことが大事なんじゃないかなと思うんですがね。僕自身学生に言っているのは、そういう勉強を学生時代にしなさい、じっくり利用者にはまってみてくださいと言うんです。

T：確かに短い事例を使っていくとそういう状況になってしまいます。足りない情報だらけの中でこういう答えを出すのかという感じがします。だから、どうしても反面教師的なものを使ってみたりしています。社会福祉士会の作った児童虐待の事例でいい部分もあるんですが、援助の仕方そのものに問題があるとこがあって、色んな解釈の仕方が出来るんですよ。明確な答えをこちらが持ってはっきりさせたほうがいいんですかね。

M：僕が思うのは、福祉士会などが作っている事例なんかは学生が学んでいく上では利用者の情報が不足していて、学生のための事例としてはもう少し長めの事例を作っていくと、教育の過程の中で使っていけるのかなと思っています。

T：何か埋めていく作業というものはどうなんですかね。つまり、ここでこの情報があればという反面教師的な使い方で。

M：それも方法の１つだと思いますよ。もう１つは、事例が出た場合は解答は別分刷で欲しいんですよ。セットになっていると専門家の判断も簡単に読みこなしてしまって、それを見て自分達もそうだという風に流れてしまってるんですよね。途中考えてみるということが抜けてしまうんですよね。

T：ソーシャルワークの場面だと答えはこのエリアにあるんだけども、こういう答えもあるというバリエーションの１つとしてあるんだろうと思うんですよね。

M：作るということも大変だと思うんですよね。

この間社会福祉士会の作った模擬試験があったんですが、その事例問題なんですが、これも答えじゃないかというものが全問にあるんですよ。グループワークの問題にしてもそうで、広い意味でのグループワークでは全部あてはまるんですよ。しかし、出題者がトレッ

カーの学説をもとにするものですから答えが出てくるんですね。でも、グループワークということで他の学説も含めて考えていくと全て正解になってしまうんですよ。そういう意味でも、問題や事例を考えていくのは難しいと思いますよ。

あと教材の開発やビデオの問題も含めて、Y先生、N先生どうですか？何か希望とか要求とかございますか？

Y：うちで課題になっているのは、先生が言っておられたコミュニティワークというかその辺の演習をどのようにやっていくのかというのが課題なんですね。調査を含めて。ほとんどが直接援助系の教員が多くてその辺をどう埋めていくのかが課題で、それを埋めていける教材なんかがあればというのが切実な願いですね。

T：そうですよね。コミュニティワークの事例集だとかビデオだとかというものを集中的に。僕はこれ作っていけると思うんですよね。

M：あとこんな試みをしているというところはありませんでしょうか。演習というのは少人数ですけど、座学ですよね。1つの演習という一環で、コミュニティに関心があるんだったら、直接コミュニティに出向いていって自分達で1年間地域住民と接触しながら、いわば地域福祉活動計画を立ち上げてごらんというそういうものも演習の枠組みに入るんでしょうかね。あるいは他大学でやってる情報はないですか？

T：いわゆる僕は援助技術演習ではなくて演習の中で、学生を地域福祉活動計画の中に来させたり、実習の中である町の地域福祉活動計画に参加させたりというケースはあるんですがね。でもうまく地域福祉活動計画を作っている場面にないですからね。

Y：先生がおっしゃったようなことが理想かもしれませんが、直接援助もグループワークも教えないといけないじゃないですか。コミュニティワークって実際時間がかかってしまうんですよね。そうするとコミュニティワークに半期ぐらいとられてしまって、他の部分を教えられないというジレンマがあってですね。どうしたらいいのかなという思いが実際ありますね。

T：僕が思うのは地域福祉計画を作る上での地区座談会等に参加させて、問題を抽出させてきて、処方箋を考えていくというプログラムだったらできるんじゃないかなと思うんですよ。

K：それは2～300名の学生だったら全員てことになるんですかね。

T：それは難しいかもしれませんね。まあでも100人会とか色んな座談会形式のものが多くありますから、かなりこなせるとは思うんで

すけどね。

M：さっきも言いましたように、映像で視覚的に学生に訴えていくことでかなり授業の進行させることができるのですね、要所、要所ずいぶん助かるなという部分が出てきますね。また、事例もより深みのある少し長めの事例があればと思います。今の時点では、自分自身の持っている事例でやっていくしかないんですよね。テキストもできれば問題編と解答編の2分刷あたりで出していただくと利用しやすいんですがね。

K：あと意見が出ているのが教員教本があるといいなという話も出ています。

N：そうですね。現実問題として個別、グループ、地域ぐらいは何とか大丈夫なんですけども、先日の社養協からのアンケートを見て困ってるんですよね。あのなかのどれだけを教員として知ってないといけないんだろうという話が教員の中でも出てきまして、そういったものについてもビデオなりテキストなりでもう少し詳しく「ここまでは」という視点を出していただければと思うんですよね。

Y：それは教材の問題だけではなくてですね、何を教えたらいいのか、例えばライフモデルを教えればいいのかとか、その辺の共通の認識が出来てないとですね、それぞれの好みで教えてしまうということがあるんですよね。

K：そういった意味で、今回のヒアリングから共通点を出していきながら演習、実習、教員としての介養協と同じ方向性の講座を開いていっていければいいなということなんですよね。

M：介養協の方も大変ですよ。具体的に問い合わせてみたら、具体的な中身の詰めが行われてなくて、だから方向としてはとにかく全員受けてくださいというものなんですよね。何か基準と目安を作った方がいいように思うんですがね。忙しい教員は出れないですよね。

K：演習と実習の中で課題になっていますのが、他の短大、専門学校との演習の形式での折り合い、どの程度の共通項目で、どの程度のレベルを教えていくのかということなんですよね。

M：養成研修に関しても、1つは自分の不足分を補える研修が立ち上がっていくのが理想ですよね。

K：あと今年度から実施することになった「ソーシャルワーク実践教育研修講座」なんですが、これに高校部会が入ってることに議論があるんですが、これをそういった形の、色んな先生方のニーズを補える研修講座に移していくと同時に、各ブロックごとに研修講座を

開いていただけるような方向性でもっていき、さらにそれが認定制度のようなものにもっていってブロックごとに教員を養成しようという方向にしたいという構想ではあるんですけど。

M：そうなってくると、厚労省が認めている養成学校と大学というものは別になっているんじゃないですかね。

K：共に社養協入っていれば登録はされているものですから、そこでの格差といいますか。

T：２重構造にする方がかえって問題になるように感じがしますね。

N：やはりここまで教えるというソーシャルワーク水準をはっきり示していただくといいと思うんですがね。

K：社養協と福祉士会の関係性に関してなんですが。

T：うちは現場から来ていただく先生方は福祉士会の方がほとんどで、そういう繋がりはあるんですよね。でそこでは学生メリットがありますよね。

M：福祉士会にも地域差がありますよね。ある意味職能集団ですよね。もっと県や国に問題を提起していくべきじゃないかと、冗談で言ったこともありますよね。

T：援助技術に関する研究するという側面の鼓舞とか刺激とかいう活動はないんですかね。自分達で見つけてくるみたいな。援助技術だって時代と共に変わってくるのであって、新しい技術を考案したり考えたりしなきゃなんないんじゃないかなって思うんですよね。どこのフレームで考えるんじゃなくてね。

N：話は変わりますけど、実習に関して学生自身の自己覚知をどこまで深めていけばいいのかというのも考えていただければいいかなと思います。

K：自己覚知を含めて、どこまで達成したという評価基準で、どういうとこまでが演習の評価の基準なのかというのも欲しいという声があがっていますね。

N：非常に教員の間で差があって、うちでも問題にあがっていますね。

M：今後、厚労省の指定科目の範囲の中でどこまで学生を育てていけばいいのかということが問題になってくると思いますよね。その目安ですよね。また、現場が求めている人材とこちらが理想とするものとの格差があるようにも感じますね。

T：ある意味で園長、理事長が求めている人材と利用者が求めている人材は違ってくる場合もありますからね。

「社会福祉援助技術演習に関するヒアリング」を通しての私見

熊本学園大学　宮崎俊策

社会福祉援助技術演習（以下、演習）に関しては、利用者支援をになう専門職養成の中で、短期的には現場実習に繋がるものとして、長期的には福祉現場に専門職として就職したときに即戦力として専門能力が発揮できることを期待した科目として理解できる。しかし福祉教育現場では、その教育方法としては暗中模索の段階にある。

例えば、演習を実務者能力を一気に高める科目として位置づけ、利用者支援の事例分析を中心とした授業を展開しようとしても、その専門的な事例の分析のためには老人・障害・児童などの個別専門分野の根拠法も含めた潤沢な基礎知識や、社会福祉援助技術論の受講を通してのソーシャルワーク基礎理論などの理解が前提条件としてあってこそ、事例の専門的分析が検証できるものである。しかし、他の授業におけるこれらの学習内容が知的に累積されておらず、いきなり事例の専門的な分析に入っても的確な分析ができない。そのためにこの方式の演習では、講義形式で（他の授業ですでに学んだ内容の）基本的知識の確認を繰り返し行わなければならない時間のロスがかなりある。

他大学においては、最初の１年間は演習において対人コミュニケーションの基礎学習（援助技術論でできなかった部分を）を、ロールプレイなどを通して徹底し、途中の実習終了後は、現場実習体験を教材にして、コミュニケーション問題を少人数教育の教材としている所もある。また、バイステックの７原則の翻訳物を輪読して、通常講義で消化できなかった専門職の資質問題を深める学習をしている所もある。

社会福祉士の国家試験受験賢格に関する指定科目の変更が行われて以降、援助技術分野は、講義形式の時間が削減され、演習方式が強化された。しかし旧指定科目の時ですらソーシャルワークの全景を詳細に論じて行くには、時間不足が生じていたが、新指定科目では講義時間はさらに減少し基礎講義に支障が生じている。後に続く演習は、通常の講義で消化できなかった内容で重要な部分を、少人数化された特性を生かして強化（本の拾読により、ワーカーが持たなければならない基本的資質の確認。ロールプレイにより面接技法の受肉化を図る、など）する方式の授業展開が一般になされているようだ。

会合に参加した宮崎の場合は、３年次演習１（通年）では、面接事例を呈示してワーカー・クライエント関係でクライエントが変化していく過程の分析を、講義形式で詳細に論じ、その中で事例に関係する法制度の確認や、多様な面接技法の紹介をも入れていく。その後、他の「面接の逐語記録」・「生活保

護事例」・「利用者支援でたらい回しが生じクライエントが希死念慮を持ち始めた事例」をだし、小グループで討議・発表して、問題部分を最後に担当者が口述するなどの授業を進めている。演習１では、講義形式６～７，演習形式４～３の割合になる。

４年次生の演習２（通年）では、前半は各種著書の中に掲載されている、在宅寝たきり老人、施設入所老人、児童虐待を受けた施設入所児童などの多様な事例を抽出し、既存の事例に頼りながら、利用者の状況分析と自立・問題解決支援のあり方、ワーカーの留意事項を分析させ、全体発表と討議の後、教員のコメントを入れた学習を行い、専門職としての資質向上の基本思考を形成させる。後半は、受講生自らが地域内の特定の福祉利用者に複数回接触し、利用者の人生史に謙虚に耳を傾けながら、受講生自身が小グループの単位で事例を作成し、発表・質疑応答を通して、利用者支援のあり方を検証する。後半の課題は、特に受講者の力量が問われる。利用者を開拓し、承諾を経て聞き取りをするときの言葉かけのあり方（学んだ面接技法の具体的活用）、収集された育成史等の情報から利用者ニーズ等を掘り起こしていく感受性、事例として文章化していく能力、法の範囲の中で支援を組み立てていくときの法制度に関する基礎知識、などが必要。４年次の演習２に関しては講義形式３，学習の主導権を学生に渡す演習形式は７の割合になる予定。この指針に関しては、新指定科目の授業では初めての試み（今度の４年生が新カリの対象に初めてなる）だが、旧指定科目時の演習で実施していたものであり、すでに実績あり。過去の経験からかなりの学習効果が期待できるが、本学でも複数の演習が同時開設されていくので、選択肢が広がり、困難なものは学生が敬遠する可能性もある。

また会議では、演習に絡む現場教育や事前指導の教材として、厚労省が実習先と認めた、各種施設の中でモデル的な場を全て抽出して、施設などにおける利用者支援の一日の流れ、職員の役割分担、事例検討会議などを組み込んだ、ビデオの教材が開発できないかとの意見も出た。実習の前や、演習の授業で福祉現場を語っても、体験のないところに関しては、学生の実感が伴わない。さりとて多様な施設を全体で見学して回るゆとりはない。現場に絡む福祉教育を充実させる補助教材を、今後検討する必要がある。

資料３　「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発要望（ニーズ）調査　自由記述一覧

〈「７節　希望する教材」自由記入欄　回答一覧〉

授業を進めるに当り、現在求めている教材についてツールおよびそれらの具体的な内容について記述を求めた。記述された教材を援助技術項目別にまとめると、次の８点に大別される。

各項目における全回答は以下の通りである。

１　直接援助技術に関する教材

(1) ケースワーク・グループワークに関する教材

＊ケースワーク、グループワークをドラマ風にストーリーをもたせ、今、何が技法としてつかわれているかテロップが入ったビデオ（30 分程度）

＊ケースワークをトレーニングするためのワークブック（一連のつながりがあるもの）

＊ケースワークの具体的展開が理解できる視聴覚教材(5 件)

＊ケースワークの原則の活用について実践場面つきビデオ

＊グループワークの具体的展開が理解できる視聴覚教材(9 件)

・特に児童に関するもの
・治療的プロセスが理解できるもの
・具体的な技法を学ぶためのもの
・グループワークの原則の活用について実践場面

＊グループワークの事例集

＊グループワークをトレーニングするためのワークブック(2 件)

(2) 面接に関する教材

＊面接技術のビデオ(50 件)

・インテーク場面
・面接の基本に関するもの
・初心者でも理解できるソーシャルワーカーのための面接技術
・ケアマネージャーの面接場面
・児童（児童虐待に関するものも含む）、成人、高齢者、障害者、その関係者、対象別の面接技術
・コミュニケーション障害のあるもの
・医療福祉関係、グループワークにおける面接技術

・マイクロ・カウンセリングを使用した面接場面
・危機対応場面
・痴呆面接同行法
・訪問面接場面
・生活場面面接
・模擬面接をすすめるビデオ（実際に利用者（クライエント）と接しているようなアングルでワーカーの対応が入っておらず、学生のトレーニング用に使えるもの。また、それに対するワーカーのモデル対応が言語・非言語的に学習できるもの。）
・client を理解する方法、アセスメントのための情報収集の方法等の場面
・カウンセリングの基本的技法＝逐語録「グロリアと３人のセラピスト」等
・ロールプレイに有効な面接技術のビデオ（良い面接例と悪い面接例）
・オーソドックスな場面で－20 分程のもの（40 分だと長すぎる。ビデオ視聴後の話し合い、フォローができにくい）
・30～60 分程度のもの

＊面接室以外の生活場面における面接の様子を詳しく描いたビデオ等の教材
＊面接技術のビデオは学校でも購入して活用している
＊面接技法をロールプレイする為の事例集
＊児童、老人、障害者など分野別の面接ないしは援助のビデオ。基本的な技法のマニュアルは必要。
＊披虐待児童に対する面接技法(2 件)
＊学習障害や ADHD に対する面接技法
＊面接技術・技法のトレーニングをするためのワークブック(2 件)
＊面接技法の具体的に使えるもの

(3)アセスメントに関する教材

＊アセスメント方法をトレーニングするための段階的ワークブック(24 件)
・対象者別、課題別、場面別のワークブック
＊アセスメントツール仕様のワークブック(2 件)
＊困難事例別のアセスメントビデオ
＊アセスメント→プランニング→実施→評価など。ソーシャルワーク一連のプロセスの解説ビデオなど（各分野別）
＊実際に使われているアセスメントシートやケアプランなど
＊アセスメント方法の整理と技法のわかり易い解説
＊精神分析論を使ったアセスメントと援助過程の事例（心理社会療法）
＊各施設種別の代表的なアセスメント表を用いた事例検討

(4) 記録に関する教材

＊エコマップの書き方マニュアル(21 件)

＊実践に即したしかも学生が感受しやすい素材を用いた一連の演習プログラム。たとえばエコマップを実際にこのように用いて援助を実施したなど、理論と実践がふりかえられる教材。

＊実習体験を文章化し、記録する方法のマニュアル（レパートリーの列挙ではなく、観察のポイント、表現方法、考察の仕方など）

＊書き方のマニュアル（ジェノグラム、エコマップ、バイオグラフ）

＊記録技法のトレーニング教材(ワークブック等)と活用方法(4 件)

＊マッピング技法の書き方マニュアル(2 件)

＊記録法のビデオ

(5) その他

＊インテーク→プランニング→インターベンション→モニタリングエバリュエーションのプロセスが理解（具体的に）できるビデオ

＊難事例別の支援計画方法、難事例別の介入方法などのビデオ

＊ジェネリックとスペシフィックの具体的例示ビデオなど

＊ミクロレベルとメゾ、マクロレベルがリンクした教材

＊評価ポイントを考察できるマニュアル(3 件)

・評価の視点とマニュアル（ビデオ）

・援助における判断ができるような能力がみにつくもの。

＊アサーティブ・トレーニング

＊プラクティショナル・トレーニング・メソッド

＊問４（「社会福祉援助技術演習」展開項目）の技法やテーマにそった実践的ワークブックの数が少ないことが今後の課題と思う。

＊生育歴 etc 聞き取りのワークブックあるいはマニュアル

＊さまざまなテーマ、課題、技法を１冊にまとめたワークブックのようなものがあるとよい。それぞれのテーマ等について、各自が自分の習得度を評定でき、全体として自分の弱点分野が把握できるような構成があればなおよいと思う。

＊援助の対象者が援助を受ける際にもつ不安や援助者に対して持つ気持ち、感情についての理解を助ける教材（ぜひとも）

2　間接援助技術に関する教材

＊コミュニティ・ワークの実際ができるようなコミュニティワーカー（ソーシャルワーカー）の実態を提示したビデオ

＊コミュニティ・ワークに関するビデオ（5件）

・援助技術

・具体的事例

・コミュニティ・ワークとは何か

・コミュニティ・ワークをドラマ風にストーリーをもたせ、今、何が技法としてつかわれているかテロップが入ったビデオ（30分程度）

＊コミュニティ・ワークのロールプレイに役立つビデオ教材

＊地域福祉実践方法・技術に関するマニュアル

＊地域福祉を中心とする演習の教材について具体的に何がと考えると、その事自体がイメージを限定することにつながりかねません。学生の体験、見聞をなるべく引き出し「住民主体の」の必要性への確認とその実現への討議を深めることに気配りしたいと考えています。そのための教材の必要性というより学生のもちよる話題が教材になるものと考えています。そして「実習」そのものが最高の教材となります。

＊コミュニティ・ワーク方法とトレーニングするワークブック(2件)

＊コミュニティ・ワーク事例活用と演習授業の展開に関する研修

＊分担で社会福祉調査、社会福祉計画法、社会福祉運営管理を担当しているが、関連諸学科から採用しているのが現実です。「ソーシャルワーク」が見える教材が必要です。

＊地域援助や間接援助技術を演習の中でどのように理解させ、経験させるかに翻弄する。適切な事例やビデオも不足している。

＊ソーシャル・アドミニストレーション、運営管理等の具体的なビデオ

＊プランニングを学生に分かりやすく教えられる教材(ワークブックと指導書)

＊プランニングのワークブック

＊プランニング演習方法に関するもの

＊社会福祉調査法を習得するような教材

＊住民福祉教育のための実践プログラム企画・立案のためのテキスト

＊ソーシャルアクション

＊ソーシャルアクションやアドミストレーションなどに適した具体的なモデルとなる事例（地域、地図、人口密度などの「コミュニティ」タイプ）

＊ネットワーキング（多様な分野において）のビデオ

＊間接援助技術演習のトレーニングをするためのワークブック

＊間接援助技術の実際を示したビデオ、あるいはテキストブック

3　社会福祉技術演習の捉え方と方法に関する教材

(1)事例に関する教材

＊事例集（課題別の編集）（19 件）

・課題別の編集
（現代的な事例、児童虐待・知的障害者、精神障害者それぞれの生活支援）

・そこから先を考えるきっかけになるような事例

・十分な情報が記述されているもの

・ソーシャルワークの失敗事例

・インシデント形式のもの

・ワークブック形式：現在多く出版されている事例紹介→考察という形ではなく、援助過程に沿い学生が演習しやすくまとめられたもの

＊長期間援助をしていた事例を演習として使用する際に、学生へのアプローチ方法を記したテキスト

＊事例を通し、その時々のワーカーの判断を求めることができるワークブック

＊生のケース記録(2 件)

・整理されていない生のままの事例。事例集の多くは整理されていて、逆に学生の作業用には使いづらい。

＊教材として使用する事例のビデオ(14 件)

・高齢者、障害者、家族支援等への援助事例

・DV に対する介入の仕方

・失敗をどのように生かし、よい方向へもっていくかというような事例を現場のドキュメントタッチで描く 30 分程度のビデオ

・現場での「声かけ例」

・事例の展開過程のビデオ(3 件)

(2)事例研究に関する教材

＊事例研究の方法を示したマニュアルと事例集(5 件)

＊「事例研究」をしたあとの、学びを整理するためのワークブック(2 件)

・事例集とワンセットであればなお良い

(3)ロールプレイに関する教材

＊ロールプレイの問答集

＊ロールプレイの事例集・ワークブック(3 件)

＊ロールプレイの適切な教材（シナリオ）（3 件）

＊ロールプレイングのビデオ（面接場面など）兼マニュアル(5 件)

＊ロールプレイの実際とそれを活用した授業のビデオ

＊ロールプレイや実習報告会
＊ロールプレイングの模擬授業などの研修会

(4)その他
＊演習テーマに沿ったプレゼンテーションのビデオ
＊ディベートのビデオ
＊ビデオ教材を活用した演習(7件)
・ソルーション、フォーカスト・アプローチなど新しいアプローチについて→基礎的なものも重要だが、教師として新しいものをどんどん吸収していくことも必要だと思う
・基本的技法・演習教材使用方法のビデオ（ロールプレイのやり方、ポイントなど）
＊ケースへの対応の方針をシュミレーションできるCD－R
＊ビネット教材（実際にあった事例を素材にしたビネット）
＊初心者にあわせた習得目標と目標達成にむけたプログラムを提示した教材（分野別に片寄りのないもの）
＊小人数、5～10人で行わなければならないという規定
＊援助技術演習の位置づけがそもそも不明確なことである。基本には、講義、演習、実習という枠組みで考えているが、実習先の決定（領域）と演習のつながりをどのように考えるかが大きな問題である。演習はもともとソーシャルワークの内容を具体的に少人数でロールプレイなどを使って実践的に理解させていくことであろう。しかし、これを各個別の実習領域にどのような形でリンクあるいは橋渡しをしていくかというつながりの明確化の検討が必要。また、現場経験があれば演習ができるという発想にも問題がある。
＊机上で行うことが多い為、楽しく授業が行える教材が必要であると思います。
＊学生にとって学びやすく、教員にとっても教えやすいものが求められていると考えています。

4　社会福祉援助技術演習の構成要素に関する教材
＊いろいろな価値観や考え方を提供できるビデオ
＊人権擁護の思想に基づいたケース対応の事例集（アセスメントから援助方針の確立までがわかるもの）
＊学生が専門的価値と倫理にそって気付くことができる教材（ワークブックと指導書）(3件)
＊社会資源を説明するビデオ
＊社会資源や制度について視覚に訴えるようなビデオ

＊制度や社会資源を活用することを課題としたビネット集
＊「援助する」とはそもそもどういうことをすることなのかを考えるための教材が必要に思う。「援助する」とか「教育する」ということを教える者も学生も「分かっているもの」「共通に正しく認識しているもの」という前提のもとにテキストは書かれていると思う。あるいは援助は「技術」でおこなうものであるという暗黙の前庭があるから「援助技術」という科目名がでてきてしまう。技術も必要だが、それ以前に人間論、人間観が基になると思う。

5　人間関係に関する教材
＊自己知覚のためのワークブック又はアセスメント表
＊心理学に連携して、自己覚知のためのテキスト
＊コミュニケーションパターン・方法に関するビデオ(4 件)
＊コミュニケーション技法に関するテキスト(3 件)

6　関連援助技術に関する教材
(1)実践現場に関する教材
＊社会福祉分野別の機関・施設の業務を「援助技術」という観点から紹介された VTR
＊日本のワーカー、社会福祉士、MSW、生活相談員などの具体的な業務内容が分かるビデオ(2 件)
＊福祉現場における各種の援助場面を詳細に検討するためのロールプレイビデオ(2 件)
・分野別（高齢者施設、障害者施設等）の実習に生かせる技術演習
＊連携（他職種）の実際のビデオ（各職場における）
＊実習先施設現場（現場で学生が行っている実習場面）のビデオ(10 件)
・現場のありのままを理解する助けとなる視覚教材
・クライエントが具体的にイメージできるようなビデオ
・施設内の様子が良く分かるビデオ
・できるだけドキュメント、臨場感のある事例、又は、事実、実際の現場を見せたこと（見学）の方が、学生たちにとっては興味が増すようなので、意図的に作成された教材は使用いたしておりません。
＊現場実習指導と一体となった援助技術方法
＊実習の現場に入り学生と一緒に課題・問題を具体的に解決する方法
＊ソーシャルワーカーが利用者の生活を把握するための具体的な方法を教授できるワークブック、ツール等
＊ソーシャルワーカーの気持ちの動きも含めた事例集。事例だけの記述は、学

生には受け入れにくい。
＊施設に訪問して現場で演習テーマ（面接、グループワーク等）が実施できたらいいと思います。実習とは違ってテーマがしぼられるので理解しやすいと思うので。
＊実習中につまずく初歩的なトピックへのアドバイス集
＊実際の対人関係を経験できるフィールド(2 件)
・演習の授業の一部として（実習先）施設など現場に行き、クライエントに会ってヒアリング、レクレーションなど実践してみること。(教室での演習と現場での演習、更にこれを実習につなげていく試み)
＊現場における問題事例集
＊理想的でない（課題の多い）施設現場でのインシデントを映像としたビデオ or DVD
＊現場にでて使える技術をより具体的レベルで学べるワークブック
＊各種の体験的学習の実施マニュアル(2 件)

(2)ケアマネジメントに関する教材
＊ケアマネジメントの必要な在宅家族のビデオ
＊ケアマネジメント技術に関するビデオ→事例の視覚教材(3 件)
＊ケアマネジメントの技法を学生が学ぶためのワークブック
＊セルフ（ストレス）・マネージメント

(3)ケースカンファレンスに関する教材
＊ケースカンファレンスの方法のビデオ(3 件)
＊他職種との連携、ケースカンファレンスの進め方に関するマニュアルなど
＊ケース会議（介護、障害者 etc）
＊事例をもとにしたチームカンファレンス記録

(4)その他
＊スーパビジョンを行うための視聴覚教材
＊スパービション指導マニュアル
＊カウンセリング技法のビデオ
＊心理療法を応用した福祉カウンセリングのビデオ(米国版の焼き直しでない、日本の現状に即したもの)
＊ケアワークに関する教材(4 件)
・介護福祉士養成過程における演習に対する教材がほしい
・演習の範囲、内容、方法、介護場面での用い方等の指導マニュアル

・演習の範囲、内容、方法、介護場面での用い方等の指導ビデオ。
・介助の実際のビデオ
＊ソーシャルケア学習

7　教授法に関する教材
＊授業の進め方マニュアルみたいなもの
＊教授法のマニュアル
＊教援法のワークブック
＊演習の総括的な指導書
＊教員自身の身体性、精神性とその表現機勢が機能しているか否かが大前提(それ自体が教材である)。教員自身のトレーナー／トレーニー体験、スーパーヴァイザー・ヴァイジー体験がどの程度内化＝自己理論化されているかが重要
＊新しい援助技法を研修、トレーニングしてほしい。個々に探しては研修に参加しているが、情報（研修）がほしい。
＊ソーシャルワークの実践場面を具体的に示し、それを教室内で模擬体験できるような場面設定の方法を詳しく説明した指導書的な文献
＊演習の教材とその使い方マニュアル
＊グループワークを学生に教えるための教師用テキスト
＊他大学の演習授業のビデオ
＊社会福祉専門職を体系的に紹介した書物（資格要件、種類、職務内容、倫理綱領等を含む)
＊教材作成の手順及び留意事項（ワークシート作成含む)

8　その他
＊メディア教材(4件)
・演習の授業を e－Learning（コンピュータで学習することです）メディアなどにして、標準的な演習を多くの教員が共通に理解できるようにしてみてはどうでしょうか。最近の e－Learning ではビデオ等からの動画を扱い、双方向のやりとりなどもでき、また生の教員による話とうまく組み合わせることによって、教員の資質に大きくは左右されにくい演習ができるように思います。
・e－Learning として利用可能なもの。データベース化されたもの。内容としては、多いにこしたことはない。＊演習の各分野の入門的なビデオ
・新しい教材の開発（既存のものではなく）→現在コンピュータ活用による教育支援ツールを開発中。多様な方法の開発が必要
・視聴覚教材、アセスメントやプランニング、介入をテーマに演習を進めよ

うとすると事例が必要であるが、文章で書かれたものだけでは学生が利用者をイメージできない。そのため、利用者のことが具体的にイメージできるようなビデオＣＤ－ＲＯＭ等を媒体とした教材があればよいと感じている。例えば、内容的には面接場面や施設での生活の様子が映像で見ることができるもので、付属教材として映像としてはでてこない情報（ｅｘ．利用者の健康状態、生活歴等の情報）がついていればなおよい。演習の素材となるようなもので、講師がでてきて解説する部分のないものがよい。

＊ハードウエア(5件)

・教材に当てはまるかどうか分からないのですがロールプレイを行い、撮影するビデオカメラ、ビデオデッキ、専用のブース（学生がグループに分かれて自身の演技を視聴しフィードバックする)、カンファレンスするスペース、椅子が固定式でない等ハード面の整備が必要と思います

・マジックミラーのついた模擬面接室(2件)

・ビデオカメラやテレビ、録音機器

・ＯＨＰ

＊いろいろなツールを一冊にまとめ、そこからコピー、印刷して使えるようになっているもの

＊学生の課題を与えるようなワークドリル(5件)

・テーマにそって学生の気付きを促すようなワーク集

＊演習の進度に合わせ、段階的に学ぶことができるワークブック(4件)

・ケースをとらえるための視点が段階的に把握できるようなもの

・学生の学びにあわせた教材。テーマ別ではなく、STEP UP 型のもの。演習の時間が増えた分、じっくりと取り組めるようなもの

・基本文献集（初級・中級・上級）というようなグレード別なもの（福祉の文献にとどまらない小説、エッセイ、映画 etc)

＊変容点をピンポイントし、その変容法を明示し効果のエビデンスを証明できる実践的理論と技法を説明する教科書が必要。

＊援助技術の各技法を総合的に学べるワークブック(7件)

・各アプローチ（モデル）に沿った事例教科書（演習教本)

・各種の技法をトレーニングするためのワークブック

＊情報提供(2件)

・教材にどんなものがあるか、どのように活用したら良いか悩みながら授業しています。こうしたものに対する情報やマニュアルなどがあるとうれしいです。

・海外の Therapist などによるワークショップなどのまとまった情報提供

＊必要を感じてない（４件)

・あまりマニュアル的なものを必要としない、現場・臨床体験のあるものは理論化をしつつ教える能力が大事。
・なし。授業に費用なものは自分で作成するのが教員の責任と考える。
・ 自己開発するので、特に必要を感じていない。

〈「今回のアンケートに対するご意見・ご感想等」自由記述欄〉87 件

本調査では、「今回のアンケートに対するご意見・ご感想等」を記述する問いを設けた。回答者の４分の１以上(87 件)に何らかの記述がみられた。回答には「社会福祉援助技術演習担当者の資質」や「援助技術教育に関する問題意識あるいは今後の課題」等に関する積極的なものなども多くみられた。

自由記述の内容は以下の通りである。

＊わが国のソーシャルワーク専門職の必要性とその専門性について検討するべきではないでしょうか。大量生産？されるソーシャルワーカーへの社会ニーズは、いかがなものなのでしょうか。日々自分の専門性に疑問を突き付けながら悩んでおります。

＊講師６ヶ月目なので、評価はできていないとつけました。人数が２５名ほどに講習を行うので、少人数でできればと思うことがあります。

＊学部レベルで演習を効果的にするには、３～４年生でないとできないと思うが、本学では２～３年生で開講される。学習のことも考慮すれば仕方ないが、修士以上での教育か、学部でも演習を増やさないとすべてのメニューはできない。

＊「社会福祉援助技術演習」は、今年度後期初めて担当しているため、問４は回答できませんでした。よろしくお取り計らい下さい。

＊調査結果についてご報告いただけるようですので内容を拝見できるのを期待しております。

＊自分の授業の進め方で良いものか試行錯誤している。模擬授業の参観や受講の機会があると有り難いと思う。

＊１クラス人数を１０数名にしたい。それでかなりの部分が解消されると思う。

＊調査機関の関係上、私の方で代表して回答いたしました。通信過程ゆえ系統的な授業展開ができず単発になってしまうため今回の回答は参考にならないと思います。通信過程のための演習方法（対面式でないレポート式の）を考える必要があると思っています。このような内容で申し訳ありませんが、よろしくお願いします。

＊アンケートの項目が抽象的すぎる。技法や課題、テーマ、人によっては受け止め方がまったく違うと思います。このようなアンケートでは、学者さんにしか伝わりません！！

＊学内だけではなく、担当者同士が集まれる場があればと思います。来年のソーシャルワーク教育研修講座は、そういう意味で楽しみにしています。

＊まだまだ自己研鑽しなければと思っています。良い情報があったら教えて下さい。
＊結果を是非早くお知らせ下さい。
＊本調査における「現場経験」の意味がよくわかりません。たぶん、実践・臨床現場での勤務経験を指しているのだと思いますが、私は、職員研修やＳＶの経験として書かせていただきました。
＊①問４（「社会福祉援助技術演習」展開項目の教授内容達成度）などのスケールで○をつける場所がわかりづらい。数字をふって○を付ける方が良い。迷った時中間に○をつけてしまいそうになる。
②設問の内容、特に質問文に重複が多い様に感じた。（例えばテキストと教材の違いがよくわからないなど）違いを明らかにしてほしい。
＊学生の質も様々（社会福祉への思い）で伝えることの難しさを感じます。演習担当の教員同士が思いを交換できるような場があればと思います。
＊間接援助技術に関する研修について企画があればと思う。
＊社会福祉士教育課程の改正移行中です。社会福祉援助技術演習を工夫したいと思っています。
＊学生は小学校１年から現在まで席に座って黙って聞くことを授業と思い、自ら考えディスカッションする機会を奪われている。教員も静かに黙って聞く学生を喜び、一方的に講義するだけである。あまりにも教えたがりすぎる。だから、ある外国人が日本の某大学で講義したら質問するのは中国人とコリアの人だけだったとの新聞記事（毎日１０月２９日付）があった。日本の学生は「勉強とは先生の話を聞いて教わるもの」という勉強観、学習観を身にしっかりとつけてしまっている。だから「質問ありませんか？」と聞いても無反応は当然と思う。まず教員自身が既成のテキストに疑問を持ち、それを学生になげかけなければならない。「福祉手当を支給することが援助なのだろうか？」「児童福祉施設の長に懲戒権を与えているが、懲戒と子供の福祉は矛盾しないのか」などなど。
＊このようなアンケート調査を実施されることに感謝いたします。私自身教員としてまだまだスキルアップしていかなければならないので講座への参加とあわせていろいろと教えていただきたいです。社会福祉Ｉの実習は、その達成目標が介護福祉士等と比べて曖昧で、実習生も一体何の実習に行っているのだか・・・という状況が多く見受けられると聞きます。どうにか演習で学ぶことと実習でやれることが一致するようにならないかと日頃から考えております。以上、乱筆ですが意見を述べさせていただきます。
＊研修会の日程、内容等が早く分かるとよい。このようなアンケート調査により、演習教育の実態、課題等が明らかにされるのは有意義。

＊本調査の回答のばらつきと、その信頼性がどの程度であったかについて結果のフィードバックを期待します。特に問４（「社会福祉援助技術演習」展開項目の教授内容達成度）は主観的判断に大きく依存する問いの設定ですし、問６（困っていること）、問７（援助技術・技法の研修内容）、問８（教授法の研修内容）については社会福祉における領域概念や上・下位概念についての判断を披調査者がどう考えているかによって回答が偏ります。

＊社会付記し援助技術演習は、担当教員のこれまでの経歴、専門科目、専攻等により、色々な教授方法があり各々のやり方で対応している。しかし、教える傍らこれでよいのかとの疑問もあり、貴会などが当該科目の教授方法に関する研修機会を提供されんことを期待します。但し「社会福祉士のみ」というような排除条件のないようにお願いいたします。

＊演習は講師の裁量で自由にできる分、ユニークな授業もできますが、ネタが切れると苦しいです。系統的にまとまったテキスト、ビデオ教材があればいいのですが・・・。

＊本学での援助技術の演習は福祉の様々な領域ごとにそれぞれ特化して実施されています。今回のアンケート調査の内容を見るとフィールドとしては、行政関連分野に関する職域、例えば児相や福祉事務所といった機関での援助ぐらいしか想定できません。

援助技術の幅が広いということもあるでしょうが、現実的に学生が様々な福祉のフィールドに進んでいく中で概論的というか観念的なとらえ方に終始しているのでは、実践の場で困ることになると考えられます。プラグマチックという批判はあるかと思いますが、現実的な卒後の職務内容に関連して演習は考えていくべきではないかと考えます。

＊十分な回答ができなくて申し訳ありません。現実的には演習そのものに参加できる基礎学力等が不足した学生を多くかかえ、ストレスフルな授業となっています。

＊現場経験だけで教授できる教員に、援助技術の本質を伝えることのできる研修を期待します。

＊アンケートに答えると改めてふだん自分が演習に関っている中身をふり返ることができました。ありがとうございました。

＊アンケートの結果をできたら見せて下さい。例）基本集計、クロス集計等。ニュースレターに入れて頂いたら良いと思います。

＊協会の研修、研究のプロジェクト（企画。実施への参画）に広く教員の参加を要請されたい。

＊同じ養成校でも、担当者によって内容が異なるのが実状だと思います。また、２年次に渡っている場合などは、１年次目と２年次目で内容や担当者が異な

るため、アンケート用紙を数部配布するなどの工夫が必要かと思います。有意義な研修を期待しています。

＊「演習」の授業単位を少人数化するためには、より多くの教員に分担してもらう必要がある。しかし、教員の中で「ソーシャルワークの演習を行う」ということが技量的に可能な人は必ずしも多くないため演習の内容にかなりのバラツキが生じるという問題が生じる。社会福祉士養成を行う大学・学校には、演習教育ができる人材を一定の割合で必ず配置するような制度の確立に本調査がつながることを期待する。(今のところ大学・短大に対しては、教員配置の基準や規定がない状態である。)

新設校なので、まだ、授業実績のない部分もありましたので、調査データとして不十分な結果（回答）になったことをご了承下さい。

＊現在、県社会福祉士会の常任理事・教育研修部会長をしており、社会福祉士の研修が社会福祉援助技術演習に活かせる内容も多くあり活用しています。（ジェネリック・ソーシャルワークの研修も最近多く行っていますので、そのまま活用できるものもあります。）

今年度も社会福祉士制度成立１５周年の記念講演会で「ソーシャルワークの価値」をテーマにしましたが、ゼミの学生を出席させました。(会員以外も自由参加、無料という形でしたので)。

福祉教育のテキストの中にも活用できるものが多くあります。(例：相川書房「福祉教育の理論と実践」)

現在現場も持っており、現場での毎日のソーシャルワーク実践が、そのまま教育素材として活用できています。昨日あった事例が、翌日の演習で素材として活用できるので実践の学としての取り組みが可能となっています。現場の空気をそのまま教室で再現できていると思います。

できる限り実際の事例を使ってエコシステム思考・社会構成主義（ナラティヴ・モデル）で教えさせる内容にしています。ロールプレイもいいですが社会構成主義から考えると限界があると思います。ロールプレイに頼りすぎるのも考えものだと感じます。

＊特にありません。援助技術演習を担当する一教員として、日夜努力を惜しまないつもりです。原点に立ち戻ることができて、有効なアンケートだったと思います。

＊現在、専任校と非常勤校と２校の学生にたいして演習を実施しています。私が児童福祉施設で４０年間にわたって勤務していたので、事例を中心に講義をすすめています。学生に実習、ボランティアの体験から発表してもらうこともしています。学生にとって演習で学んだ習待度を知る方法を学びたい。

＊社会福祉学科の教員は忙しすぎる。研修にでることは私には必要だと思いま

すが、現実には時間がありません。

＊担当者同士の研修会は、ぜひ実現させていただきたいと思います。

＊社会福祉士養成とソーシャルワーカー養成、福祉専門職養成等の共通部分と相違点を整理した上で、養成教育の内容・方法を考える必要性を強く感じた。技術演習担当の専任・非常勤を含めて定期的に情報交換の場を本学内で持っているが様々なジレンマを抱えている。

技術演習担当者の専門分野、アイデンティティも含めた教員の資質をめぐる最低基準を社養協が作るべきではないかと思う。その上で、継続的、段階的な研修の場が必須であり、学校、連盟との役割・機能分担も含めて教員が真剣に取り組む時に来ていると思う。

今回のアンケートにより問題点がより明確となった。このような調査は、大変意義があると考える。結果を楽しみにしていると共に、積極的に考え、解決に取り組んでいきたい。

＊本学は、実習先の領域別に援助技術演習をセットに行っており、また、実習指導を援助技術演習の時間に設定しているため、どうしても緊急の実習先との調整などを優先してしまう傾向になる。また、実習期間も一定の時期に絞っているわけではないので、実習に行っている学生が随時抜けることになる。そのため、学年はじめに設定した援助技術演習の内容を充分にこなせない状態になっている。

→次年度からカリキュラム改革で実習指導を分けるので、少しはねらい通りできるようになるかもしれないが、教員の負担は増えることになる。

＊現在担当のクラスは平均２５名←人数の多さがグループワークなど演習内容において学生とのコミュニケーション等（ふりかえりの時間）不足がちである。大きなグループ、大人数での演習は、本来の演習の目的から離れてしまうため少人数クラスで２時間続きの授業をしたいと思うが、大学の人手不足（経費削減）の中でできない矛盾があります。今回の調査結果がそのような側面について外部評価可能なものとなればと思います

＊教員の資質向上、ならびに学生の意欲向上のため、このようなアンケートを有効に活用いただきますようお願い致します。

＊問１７の「資格」のところに医療職関連が必要なのではないでしょうか。

Ｎｓ、ＯＴ、ＰＴ，ＳＴなどの教員が社会福祉分野に多いのではないですか？

＊援助技術教育に関する問題意識と今後の課題について一言記入します。

①「社会福祉援助技術の技術の中身がまだまだアイマイであること（私の理解では)」

②「現場でソーシャルワークが正しく理解されていないこと」を全も問題に思う。介護＝ソーシャルワークだと思っている現場の方が案外多い。そ

うした個人的な思い込み、理解を実習に来た学生に教えている実態がある。学生は、大学で習っていることは理想だったのか？と悩んでしまう。このままでは、いくら大学で援助技術教育を充実させても、現場にでるとソーシャルワークと非なるものまで身につけてしまうことを繰り返すのでは？戦後50年”日本にソーシャルワーク実践があったのか？”と大橋先生が指摘される現状は、このままでは変わっていかないのではないかと思ってしまいます。

③職名をソーシャルワーカーに統一し、ソーシャルワークを行う業務である（業務指針を示す）ことを、法的にも明確にし、全国一挙にソーシャルワークを展開し、クライエントをサポートできるシステムに一刻も早くすべきだと思う。Ｐ協会、Ｍ協会、社会福祉士会の各団体の一本化も望みます。

（手に障害有、乱筆お許し下さい）結果楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

＊バランスのとれた演習の構成が大切だと考えている。教材はいろいろあってよいと思うので、選択して使えるような教材集があってもよいと思う。

＊私の担当は、一回生の社会福祉援助技術演習ＩとⅡです。より専門的な指導にまで踏み込んでおりません。そのため回答出来ない項目があります。その点質問の内容を検討される必要があると思います。

＊現場経験のない学生あがりの私のようなものが語る、現場のない福祉実践はあり得ないので、果たして本当に資格があるのかと思うことがあるが、経験がないからこそ感覚的に学生に近いし、たくさんのことに興味や感心も新鮮な気持ちで取り組めると思っている。

＊現況が全体的にどうなっているかが見えてくるので良い

＊現況がどうなっているかが比較できて面白いと思う

＊現況調査が全体にどうなっているかに興味、関心がある

＊このほかにも教員用の研修、施設職員への研修など必修化しようとしている動きがあると聞くが、個人的には内容的に誰かに教えてもらう必要など感じていない。それよりも、教員が納得できる質の教育が出来るよう条件整備をして欲しい。技術演習のクラスの適性数は１２～１５名だと思うが、ひどいところでは、２０～３０名以上でおこなっているところもあると聞いている。又、演習・実習に関っている教員は忙しすぎて皆バーンアウト状態である。大変な労力なので、できるだけ授業を簡単に済まそうという教員が増えている。これ以上負担が増えるようならば、私自身も、社会福祉の教員をやめるつもりでいる。

＊社養協としては、どのような教員を「よい」教員と考えるのか。（どのような教員像をもって研修企画されるのか）

＊問４のチェックで自己（点検）評価が厳しいのに自分でびっくりした。最近学生から授業の一部の評価を５段階で受け、予想に反して低く（３が多い）ショックを受けたが、自らも技法はとくに３が多く納得した。アセスメントを実際にする道具を明確に提示してくりかえしアセスメントをさせて学生からの手ごたえを感じている。これは、短大の制約もあり自律して考えられるＳＷｅｒの基盤作りと考えている。問４のテーマにこのことが反映されている。

＊演習のみならず、理論学習・実習との連動を視野にいれてトータルに考えることが必要であると思う。

＊私の読み方が良くないのかもしれませんが、問６から問７への移行が急激で問７をはじめ読んでもよく理解できませんでした。問４は、演習では学生主体なのでこたえにくく学生はすべて「よく出来ている」と思うので、このような回答となりました。偏っていたら申し訳ありません。なお、11/12 にこのアンケートを受け取りましたので、返信が遅れました。

＊演習について、社会福祉関係の専門学校や短大、大学等で集い、研究会（研修会）の機会ができることを希望致します。（演習や実習指導についてＨ12度（又はＨ13 度）に西日本短大で研究会がありました。その時は大変役に立ちました。）研修会等へ是非参加したいと思っております。

＊この際、プランニングや社会福祉のコミュニティ・ワークのありようについても、ソーシャルワークの視点からどのような援助技術演習での展開が具体的に考えられるかを考えて欲しいと思う。

＊社会福祉援助技術演習は、今後特に重点が置かれる教科であると思いますが、演習にぴったりはまるテキストやマニュアルは見当たりません。やはり統一した時間配分も考えた、わかりやすい指導書の必要性を感じます。早急にお願いいたします。

＊ＳＷ調査を担当しているが、大学とは異なり限られた時間の中で、「演習」することは非常に難しいと感じています。他校ではどのように授業を進めておられるのか、研修などで交流できればと思いました。

＊ぜひ、アンケート結果をフィードバックして下さい。エコマップの表記方法等についてコンセンサスがないので、ある程度統一してほしい。そのための研究会のたちあげが必要ではないかと考える。

＊（社）日本介護福祉士養成施設協会が主催する研修に数度参加し、私自身も講師として依頼に応えましたが、介護福祉士と違い社会福祉士はあまり良く分からないというのが本音です。「問４」をみて、社会福祉士の専門性の広さに驚いています。研修講師には、真に社会福祉士の鏡といえる方もしくは社会福祉士養成に情熱をもたれている方がなることが大事と考えます。

＊返信遅くなってしまい申し訳ありません。
＊問４「ケースワークの技法」「グループワークの技法」「コミュニティ・ワークの技法」と大きくのべているが具体的なワーク内容にふれて聞いていただけないと各カテゴリーの実施の為にどのような内容の訓練をしているかがわかるし参考になると思います。問１８の科目の関連についても聞かれると良いと思います。
＊私は通信教育の講師として役を任っています。社会人が学生のため現に福祉現場での超ベテランの方々が多く授業の内容と現場、現実の真実の間で・・・自分の言っている授業内容に空しい気持ちが起こることがありますね!!学生達もよく知っているのかなー。
＊お世話になりました。援助技術演習を担当する方によって内容等は様々だと思います。ただ、卒業後即しようできる技術だけは整理し伝える必要性があるのをしみじみ思います。医学生の様に現場でのインターン期間などが実習以外に作れるとしたら、この教科なのかなと思います。
＊この調査で、実習や演習にかかわる教員を対象にしているが、現場経験があることの意味について、もっと吟味する項目があっても良いと思う。その理由は、現場経験が単に「経験」というレベルで経験領域以外のことは全く知らない、学ぼうとしない人がいかに多いことか。大学の教員として経験と教育は異なることをこの人に知らせる必要がある。ましてや、理論的研究をなおざりにし、自分の「つたない」経験にしがみつき、時代の変化を理解しようとしない人々の存在は、福祉の教育レベルの低下に大きな悪影響を与えている。また、実習訪問や実習指導のいいかげんさが、現場での実習レベルの低下につながっているように思う。この点での調査や基本方針が必要。
＊問をどのように理解するのか難しい。問１７は社会福祉任用資格より保育士の資格の方が、演習の専門性に影響があると考える根拠がよくわからない。
＊集めた意見、感想を今後に生かして下さい。
＊ゴクローさまです
＊社団法人化した社会福祉士養成校協会の役員、スタッフの皆さんのご努力に感謝します。日頃悩みながら授業をすすめています。非常勤のため情報が入りにくいですが、機会があれば研修等へも参加できるとうれしく思います。（その際、派遣で行くことへの可能性を追求する為にも機関を通じてのご案内がいただけたらうれしいです。）
＊福祉士は国家資格であり、ある程度の水準（一定）が求められることは分かる。が、どのようなソーシャルワーカーを育てるかどうかは受験資格をとるかどうかに関係なく、各養成校の方針やカリキュラム、担当者により独自性が尊重されるべきであると思う。協会として様々な情報を発信することは歓

迎したいが、おしなべて必須研修体制などをくむべきではないと思う。福祉士実習の 180 時間は導入、基礎実習として考えざるを得ず、卒業の follow のしくみを大切にすること各校における卒者への対応支援をすることも視野に入れて欲しい。

＊授業の展開内容については第一学年が対象なので、項目にあるような細かなところまでは至っておりません。

＊教員としての達成度認識＝学生の理解度、達成度とはならないので判断に迷いました。今回は、あくまで教員中心に判断しましたが、これではあまり参考にならないように思います。

＊締め切りを遅れまして大変失礼致しました。宜しくお願い申し上げます。

＊実習、演習、いずれも「体験学習」がベースになると思うのですが、体験的に学ぶということの意味を理解されている教員は少ない様に思います。魚を与えるのではなく魚のつり方をきっちりと教える（＝体験から学ぶ）ことによって、実習の場面でおこったことからもっと多くのことが学べるようになると思います。

＊①短期大学では、実習との関連で教科がどのように実施され、それがどの程度理解されているかが、直接現場実習に反映されるため、４年生大学と比較して２年間で理解させることが非常に困難である。

②実習指導を実践的に行うための教科マニアル(評価点検)が欠かせないが、余り見当たらない。

＊ソーシャルワーク実践現場における質が決して向上しているとはいえない。大学等の教育では資格取得化しており、本来の援助技術演習で取り組まれなければいけない実践的な基礎能力を習得するに至っていない。専門性を備えた教員の不足とシラバスの標準化が実現困難なことが原因としてあり、各大学間等の格差が大きすぎる。ソーシャルワーク実践能力の基礎的な習得を可能とする援助技法の教育の改善が必須と考える。

＊このアンケートにかかれている「研修」の意味が、授業の質に関する最低保証の意味なのか授業内容の標準化なのかよくわからない。もし、後者の意味であればこのような動向について強く反対であることを表明させていただきたいと思います。もし前者の意味であれば、このようなアンケートではなく援助者の人間観（価値観）と援助方法との関連を問うことの方がより重要と考えるのですがいかがでしょうか。

＊技術演習は手探りですすめているものの、新たな教育上の工夫を行うことができるなど興味を持っている。私自身は、援助技術系の教員ではないが、福祉系教員が少ないところで、福祉教育にとりくんでいるので技術演習を担当せざるを得ない。講義においても学生の実習指導が土台となっている面もあ

りすべての福祉系教員が分業せず実習指導にかかわる良さを実感している。専門教育として最低限の教育のポイント標準があってもよいがどこの教育機関でも同じ内容で演習が行われているといった状況になることは避けたいと思っている。

＊社会福祉援助技術担当教員雇用の条件がどのようになっているのかについても機会があれば調査してくだされば と思います。現場経験が絶対必要であるとは言い切れませんが、ソーシャルワークについてほとんど理解のない教員が、その方の専門分野の業績のみの評価で雇用され、ついでに援助技術演習や実習、実習指導を担当しているという例も少なくない様に思います。このようなスタッフのそろえ方が、日本の社会福祉教育あるいは社会福祉士養成教育に与える影響も大きいと思います。

＊新設の学科で現在は１年生のみ入学しています。援助技術演習は来年度から始まりますので充分には書けません。今後研修等期待しております。

＊演習について、授業を円滑にすすめるためのハード面の整備について、貴協会として各大学にはたらきかけていただければ有り難いです。一定の施設基準などを設けるなどしていただければ助かります。

＊提出が遅くなり誠に申し訳ございませんでした。

＊私は福祉（医療福祉）関係ですので、この背景で答えました。学生を指導していて、学生の理解度、技術修得度などが評価できる何らかの基準があるといいのですが。・・

＊教授法や教材の選定など、担当教員の裁量に委ねられる部分もたしかにあると思いますが、社会福祉士養成教育の一環である以上、養成校によって、あるいは担当教員によって大きく格差のある科目であってよいはずもないと思います。最低限の標準的な習得するべき技術は誰が（すくなくとも社会福祉学専攻教員であるべき）担当しても一定の教育水準は、確保できるような標準的なテキストを望みます。(介護支援専門員向けの「標準テキスト」のような)

＊質問によっては複数回答が必要な設問がありました。遅くなりましたが提出致します。

＊演習及び実習指導担当教員を対象にしたワークショップを継続的に行っていただきたいと思います。

＊社会福祉援助技術演習に関連するアンケートは、非常にタイムリーだと思います。是非この結果を知りたいと同時、教材としてのビデオ、テキスト、その他の情報を知りたいと思います。回答が遅れましてまことに申し訳ありませんでした。

＊将来的に社会福祉士養成とは何を目指そうとしているのかを目標（目的）を

明らかにしてもらいたい。養成をとおして社会にどのような変化をもたらそうとしているのか。教授内容を含め各地域（ブロック）毎での養成校と実習受け入れ機関等との研修の場が必要である。どの水準まで教授すれば学部学生が達成する水準になるのか。

資料４　「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発要望(ニーズ)調査票

社会福祉士養成校　「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発要望（ニーズ）調査

＜ご記入にあたって（お願い）＞
本調査票への回答は、社会福祉士養成指定科目である「社会福祉援助技術演習」に該当する科目担当者が直接ご記入・ご返送ください。お忙しいとは思いますが締切（１１月１０日）までに投函していただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

■貴校の「社会福祉援助技術演習」開講形式についてお尋ねします。

問-１　貴校の平成１４年度「社会福祉援助技術演習」の開講学年について教えてください。
（該当するものすべてに○）
(1) １年次　(2) ２年次　(3) ３年次　(4) ４年次

問-２　演習の１クラスの学生数（一人の教員が担当する学生の平均数）（１つに○）
(1) １０人未満　(2) １０～１９人　(3) ２０～２９人　(4) ３０～３９人　(5) ４０人以上

問-３　演習の担当方法は、下記のうちどれですか。一つ選んでください。（１つに○）
(1) 演習テーマごとに教員が交代する
(2) 一人の教員が全ての演習テーマについて教授する
(3) 教員が特定の演習テーマ（援助技術）を提示し、学生個人が関心あるテーマのクラスを選択する
(4) 演習と実習を関連させ、対象分野別に担当している
(5) その他（具体的に記入してください）

■次に「社会福祉援助技術演習」の授業についてお尋ねします。

問-４「社会福祉援助技術演習」で展開する次の項目について、貴方の教授内容の達成度（貴方が教授できていると感じている程度）について当てはまるものを一つ選んでください。（１つに○）

〈技　法〉	良く出来ている	出来ている	あまり出来ていない	出来ていない	分担に入っていない
(1) 自己理解・自己覚知					
(2) 他者理解					
(3) コミュニケーション技法					
(4) 面接技法					
(5) 記録技法					
(6) 評価の技法					
(7) プレゼンテーション技法					
(8) ケースカンファレンス					

	良く出来ている	出来ている	あまり出来ていない	出来ていない	分担に入っていない
(9)ネットワーキング					
(10)ケースワークの技法					
(11)グループワークの技法					
(12)コミュニティワークの技法					
(13)社会福祉調査法					
(14)社会福祉運営管理法					
(15)ｿｰｼｬﾙ･ｱｸｼｮﾝの技法					
(16)ｿｰｼｬﾙ･ﾌﾟﾗﾝﾆﾝｸﾞの技法					

〈課題・テーマ〉

	良く出来ている	出来ている	あまり出来ていない	出来ていない	分担に入っていない
(1)専門的価値					
(2)専門職倫理					
(3)人権尊重					
(4)権利擁護					
(5)自立支援					
(6)在宅生活支援					
(7)社会資源					
(8)危機管理（対応）					

問-5　貴方が演習を展開する上で、実践・臨床（社会福祉・医療等）現場経験を活かしているところがあると思いますか。（１つに○）

(1)　は　い　・　(2)　いいえ→問６へ

↓

「はい」と答えた方のみに伺います。活かしていると思う内容について、下記の中で当てはまるものを全て○をつけてください。（いくつでも）

(1)現場における自己の経験から学んだことを語ることができる
(2)演習に現場実践家を講師として招く場合のネットワークを活用できる
(3)基本的人権に基づいた事例を提示できる
(4)臨場感（リアリティ）をともなった事例を提示することができる
(5)ロールプレイの状況設定を具体的に工夫し、展開することができる
(6)その他（　　）

問-6　貴方が「社会福祉援助技術演習」を展開する上で困っていることがあれば、下記の中から当てはまるもの全て○をつけてください。（いくつでも）

(1)演習のテーマとして取り上げるべきか内容が分からない
(2)学生の援助技術習得度が分らない
(3)ロールプレイの進め方が分からない
(4)演習の展開に適切なテキスト（教科書）がない
(5)演習の展開に適切な教材の選び方が分からない
(6)演習の展開に適切な視聴覚教材（ビデオ等）がない
(7)演習の展開に適切な事例集がない
(8)適切な事例の使い方が分からない
(9)学生の実習等体験をどのように活用するか分からない
(10)学生に対して教育目標を理解させる方法が分からない
(11)学生の準備状況(他の科目の学習内容・進捗状況)が分からない
(12)国家試験をどのように演習内容に反映すべきか分からない
(13)学生の評価基準が分からない
(14)演習担当者間の進捗状況等の連絡調整が出来にくい
(15)その他（　　）

問-7　援助技術・技法の研修内容として貴方が望まれるものは何ですか。下記の中で当てはまるもの全て○をつけてください。（いくつでも）

(1)アセスメント方法
(2)プランニング方法
(3)インターベンション方法
(4)効果測定法
(5)ＳＳＴ（社会生活技能訓練）
(6)面接技法
(7)ケースカンファレンス
(8)スーパービジョン
(9)ケアマネジメント
(10)コミュニケーション技法
(11)カウンセリング技法
(12)家族療法
(13)行動療法
(14)記録技法
(15)プレゼンテーション技法
(16)社会福祉運営管理法
(17)心理検査法
(18)ｿｰｼｬﾙ･ｱｸｼｮﾝの技法
(19)社会福祉調査法
(20)その他（　　）

問-8　教授法の研修内容として貴方が望まれるものは何ですか。下記の中で当てはまるもの全て○をつけてください。（いくつでも）

(1)演習において教授する範囲
(2)演習テーマに沿って教える内容
(3)演習テーマに沿った教材の選び方
(4)教材の使い方（教員用指導書）
(5)使える教材の情報
(6)授業案のたて方
(7)学生の理解度の評価方法
(8)学生の技術習得度の評価方法
(9)スーパービジョンを受ける機会
(10)演習担当教員同士で「演習について語り合う場（＝共通理解）」を得る機会
(11)模擬授業を参観する機会
(12)模擬授業を受講する機会
(13)特定の援助技術習得のためのワークショップへ参加する機会
（下記にワークショップで受けたい研修内容の番号を上位３つまで記入してください）
【問７の選択肢番号⇒１（　　）　２（　　）　３（　　）】
(14)その他（　　）

問-9　「社会福祉援助技術演習」の授業を進めていくにあたって、どのような教材が必要だと思いますか。具体的にお書きください。(自由に・箇条書きで結構です。)

例えば)①面接技術のビデオ(児童虐待に関するもの)
②アセスメント方法をトレーニングするためのワークブック
③エコマップの書き方のマニュアル　etc.

■貴方ご自身のことについてお尋ねします。

問-10　年齢(平成14年10月1日現在の年齢をお書きください。)
(　　)歳

問-11　性別　(1)女性　(2)男性

問-12　貴方の実践・臨床(社会福祉・医療等)現場経験の通算年数を教えてください。
(平成14年10月1日現在)注-1)教員職の経験年数を除く　注-2)常勤・非常勤は問いません

(1)1～2年　(2)3～5年　(3)6～10年　(4)11年以上　(5)な　し→問14へ

問-13　貴方の実践・臨床(社会福祉又は、医療機関等)経験をなさった職場を教えてください。当てはまるもの全てで○をつけてください。
注-1)常勤・非常勤は問いません　注-2)その他の場合は具体的にお書きください

(1)社会福祉施設　(2)社会福祉協議会　(3)医療機関　(4)公立機関(市役所・児童相談所等)
(5)その他(　　)　(6)経験なし(教員職がはじめて)

問-14　貴方の社会福祉分野教育の経験通算年数(1つに○)(平成14年10月1日現在)

(1)1～2年　(2)3～5年　(3)6～10年　(4)11年以上

問-15　貴方が「社会福祉援助技術演習」を担当した年数を通算でお答えください。
(該当するもの1つに○)(平成14年10月1日現在)
(1)1～2年　(2)3～5年　(3)6～10年　(4)11年以上

問-16　貴方が学部または大学院で専攻した専門分野を一つ選んでください。(1つに○)

(1)社会福祉学　(2)社会学　(3)教育学　(4)政治・経済学　(5)心理学　(6)文学・哲学
(7)法律学　(8)医学・薬学　(9)看護学・保健学　(10)理学・工学
(11)その他(　　)

問-17　貴方は社会福祉関連の下記の「資格」をお持ちですか。該当するものを全て○をつけてください。

(1)社会福祉士　(2)介護福祉士　(3)精神保健福祉士　(4)保育士
(5)介護支援専門員(ケアマネージャー)　(6)該当するものが無い

問-18　貴方の現在の勤務先における担当科目を選んでください。(該当するものすべてに○)
(社会福祉士指定科目のみ)

(1)社会福祉原論
(2)老人福祉論
(3)障害者福祉論
(4)児童福祉論
(5)社会保障論
(6)公的扶助論
(7)地域福祉論
(8)社会福祉援助技術論
(9)社会福祉援助技術演習
(10)社会福祉援助技術現場実習指導
(11)社会福祉援助技術現場実習
(12)心理学
(13)社会学
(14)法学
(15)医学一般
(16)介護概論

問-19　最後に、今回のアンケートに対してご意見・ご感想等がございましたら、下記の欄に自由にお書きください。今後の研修・企画・調査等の参考にさせていただきたいと思います。

○ご協力、大変ありがとうございました。
なお、今回の結果等に関しては、報告書もしくは社会福祉士校養成校協会のニュースレター等を通じてフィードバックさせて頂く予定です。
今後の研修会等への参加の程もよろしくお願い申し上げます。

研修委員会開催経過

	日時	場所
第1回	平成 14 年 4 月 13 日	日本社会福祉士養成校協会事務局
第 2 回	平成 14 年 5 月 7 日	日本社会福祉士養成校協会事務局
第 3 回	平成 14 年 6 月 10 日	大正大学
第4回	平成 14 年 7 月 22 日	上智福祉専門学校
第5回	平成 14 年 9 月 11 日	東海大学校友会館
第6回	平成 14 年 9 月 12 日	東海大学校友会館
第7回	平成 14 年 9 月 14 日	東京都立大学
第8回	平成 14 年 9 月 30 日	日本社会福祉士養成校協会事務局
第9回	平成 14 年 10 月 12 日	龍谷大学
第 10 回	平成 14 年 10 月 26 日	日本社会事業大学
第 11 回	平成 14 年 11 月 11 日	大正大学
第 12 回	平成 14 年 12 月 14 日	日本社会福祉士養成校協会事務局
第 13 回	平成 15 年 1 月 5 日	安田生命アカデミア
第 14 回	平成 15 年 1 月 25 日	東京都立大学
第 15 回	平成 15 年 2 月 18 日	東京都立大学
第 16 回	平成 15 年 3 月 1 日	大正大学
第 17 回	平成 15 年 3 月 15 日	日本社会福祉士養成校協会事務局

研修委員会委員名簿

研修委員

副田あけみ（東京都立大学）（委員長）
船水浩行　（東海大学）
石川久展（ルーテル学院大学）
結城俊哉（聖学院大学）
蔵野ともみ（大妻女子大学）
小嶋章吾（大正大学）

ブロック研修委員

北海道ブロック
　西田充潔（北星学園大学）
東北ブロック
　田中尚（岩手県立大学）2002年12月まで
　大坂純（仙台白百合大学）2003年1月より
関東信越ブロック
　谷川和昭（宇都宮短期大学）
東海北陸ブロック
　梅崎薫（金城大学）
近畿ブロック
　山辺朗子（龍谷大学）
中四国ブロック
　金子努（県立広島女子大学）
九州ブロック
　宮崎俊策（熊本学園大学）

執筆分担

1章　副田あけみ
2章　船水浩行
3章　石川久展
4章　結城俊哉、蔵野ともみ
5章　小嶋章吾、蔵野
6章　小嶋

資料1	船水
資料2	
関東信越ブロック	石川、谷川和昭
東海北陸ブロック	梅崎薫
近畿ブロック	石川
中四国ブロック	金子努
九州ブロック	宮崎俊策
私見	宮崎
資料3	蔵野、結城